

魔王の玩具

ひーまじん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

基本的にどこにでもいる大学生を自負している九条景虎は、同じ大出で出会った女性――雪ノ下陽乃によって、安寧とは程遠い日常を送る事になる。

魔王に見出された景虎を待つ運命はいかに。

初作品ですので、至らぬ点が多々あると思いますが、よろしく願います。

目次

九条景虎は当然のように振り回されている。	1
偶然にも雪ノ下陽乃は姉の恋人と出会う。	15
別荘においても雪ノ下陽乃は通常運転で過ごす。	28
宴に誘われるように魔王は来訪する	44
結局のところ、文実は荒れていく。	60
今まさに総武高校は最高にフェスティバっている。	72
そうして二人の距離は徐々に近づいていく。	99
言うまでもなく、問題はそこにある。	119
気を許すと、互いに見えてくるものがある。	136
雪合戦も立派な戦争である	152
年が変わっても、九条景虎の扱いは変わらない。	165
唐突に雪ノ下陽乃は自覚する。	180
変化に気づかず、彼は少なからず戸惑いを見せる。	198
村人は真のラスボスと邂逅する。	214
類は友を呼ぶのは当然の事である	230
必ずしもボスが立ち塞がるとは限らない	245
ようやく二人は本物になる	260
エピローグ	274
魔王の玩具く高校編く	
番外編：ズレた俺とおかしなアイツ（陽乃同級生ver）	301
ちよこつとIF編	
番外編：今日もうちの後輩は性格が悪い（陽乃年下ver）	

だから私の先輩は優しくない

九条景虎は当然のように振り回されている。

古今東西、人間には様々な属性がある。

天然、ツンデレ、兄貴肌、姉御肌、オカン、真面目、ヤンキー、妹、
e t c . . .

これらの属性とは、誰しもが一つは必然的にもち、属性を持たない人間はいないと言ってもいい。

そしてそれらの要素は何れにしる、どこかの誰かには需要があり、ギャルゲーや乙女ゲーにおいては萌え要素と呼べるものだ。因みに俺はクーデレ派。ギャップ萌えが堪らん。

まあ、それはともかくとして、萌え要素を秘めるこれらの属性だが、俺は大学に入って初めて、新属性というか、誰も萌えない、誰も必要としない属性を発見した。してしまった。

それ即ちクーデレ魔王属性である。

傍若無人、自由奔放、八方美人を絵に描いたような人間であるのだが、前者二つを帳消しにしてしまえるほどの優秀さと圧倒的なカリスマと扇動力。世が世なら天下統一でもなし得た……というか徳川家康辺りの生まれ変わりなのではないかと言うほどにそいつは『人の上に立つ』という観点において、トップクラスの人間だった。それはもう、総理大臣にでもなれよと思う程に。

強い光の下に虫は集るが、そいつの周囲の人間こそ、まさにそれだった。

容姿に惹かれたもの、口車に乗せられたもの、利用されるだけのもの……と碌な奴はいない。そして俺は最後の項目に該当する。事実、本人からはそう告げられた。

俺としては割とどちらでも良かったし、何なら関わってくれなくて結構なのだが、そこは流石の魔王様。下々の声が届くはずもなく、今日も今日とて、気分次第で振り回されるのが常なのである。これが魔王が魔王たる所以であり、目下、俺の頭を悩ませている問題だ。

そしてその栄えある魔王の名を、人はこう呼ぶ。

雪ノ下陽乃と。

くく♪

着信メロディーにより、俺の日曜日の安眠は妨害されていた。

時計を見れば、時刻は九時半。日曜日なら十一時までは睡眠時間だろうが、誰だ俺の安眠を害するイカれた野郎は。

と、普通なら思うところであるが、着信メロディーが『ダースベイダーのテーマ』の時点でスマホの画面を見るまでもなかった。

「……おかけになった番号は現在使われておりません」

『おはよー、五分後に駅前集合。じゃあ、また後でね』

ガチャツ。プー、プー。

俺の言葉などそっちのけ。突っ込みもせず、非難もせず、ただ要件だけを述べて一方的に切られた。俺の家は駅から歩いて三分ではあるが、何の準備もしていないどころか、そも今起きたところである。つまりは無理ゲー。眠いしもう一度寝る……という選択肢は残念ながらない。取る事も可能だが、そうした場合、俺は俺の通う大学の男共に物理的に、女共に精神的に殺され、今こうしている間にも増え続けている死亡者の中に名を連ねる事になる。そして言われもない俺の不評ばかりが世間に流れ、最早死んでも当然の人間扱いになるところまで見えた。やめろ、俺のことはいいが、俺の父ちゃんと母ちゃんまで非難するな。

そういうわけで、俺の人生は疎か、俺の家族全ての人生を背負っている以上、無視することは許されないし、そもそも魔王様がそういう気分になった時点で、それ以外の選択肢など存在しない。何時だって、魔王様は魔王様の世界で回っているのだから。

「……はあ。着替えるか」

微睡みを振り払い、俺は死地へと赴く兵士のように覚悟を決めた瞳でベッドから這い出た。

……やべえ、行きたくねえよ。

そこそこ急いで準備をして、駆け足で駅前に着いた時は既に時計の長針は9の所に差し掛かり、およそ十分の遅刻となっていた。

とはいえ、元々間に合う時間を要求してきてないし、そもそもあちらは俺が慌てふためいて寝起き丸出しで来ることを望んでいるため、そちらに細心の注意を払って出てきた。

「もう、遅いよ。十分の遅刻だゾ☆」

語尾に星がつきそうだな。どこのメンタルアウトさんですか。いや、ある意味じゃ他人のメンタルをアウトどころか、ブレイクしちゃうけどね、あなた。

キラツとか言いそうなウインクと猫撫で声全開+『男が萌える怒り方その1：怒ってますポーズ』を取っているのは、現代に生きる第六天魔王、RPGの世界ならレベル1の勇者を自ら潰しに行き、かつその血を根絶やし、そして王国を蹂躪して、ゲーム開始前に世界が終わるという最早ゲーム要素など全くない展開に持って行きそうな人間、雪ノ下陽乃だ。

こうして見れば、外面は完璧で通りかかる男に俺が非難の目を浴びせられるのだが、これはもう慣れた。

「彼女とのデートに寝坊してくる彼氏さんは、お仕置きしちゃうゾ☆」
「お仕置き？せめて、楽に死ぬるのにしてくれよ」

「嫌だゾ☆」

嫌なのかよ。ていうか、冗談で言ったのに殺されちゃうのかよ。

「……何奢ればいい?」

「お任せにするんだゾ☆」

くっ……また面倒な事を。

「何がいい?」という問いに対して「何でもいい」って答えるやつ何なんだよ。何がいいか聞いているんだから何がいいで答えろよ。後、何でもいいって言うっておいて文句言うなよ。じゃあ、お前が決めるよ。

「その話し方、鬱陶しいからやめろ」

「えーっ、こういうのが好きなんでしょ? 九条くんは」

このこの、とばかりに肘で腹を突いてくる。う、うぜえ……。

「それは可愛いから許されるものだ。断じて、お前みたいな可愛くはないやつに似合う言葉遣いじゃない」

「へえ。可愛く『は』ないなら、綺麗ではあるのかな?」

しまった。墓穴を掘ったか。

「……ああ、そうだな。見てくれはいいよな、お前」

「女の子に対して『見てくれはいい』は失礼じゃないかな。しかも彼女に」

「はいはい。ごめんなさい、お姫様。で、今日は何をご所望ございますか?」

半ば投げやり気味に問いかけると、魔王様は意外な単語を口にした。

「今日はちらぽーとかな」

「は? ちらぽ? なんぞ?」

「なんでって……定番でしょ?」

その言葉が一番似つかわしくない人間が使ってるから聞いたんですけどね。

ちらぽーとは様々なショップが入っており、映画館もあればイベントスペースもある県下最大のレジャースポットで、千葉の高校生辺りはデートスポットによく使う……とテレビでやっていた。

暇をしない事にはしないが、この魔王様がお求めなのは一般的な娯

楽じゃない。確かに何人も引き連れて遊ぶのなら、『表面上は』楽しく振る舞うだろう。だが、そうでないのなら、そんな場所に向かう必要性はこいつにはない。

とはいえ、それが俺の思い過ごしで、実は本気で普通のデートとやらを味わいたいというのなら、その限りではないが。

何せ、俺達は少々特殊な関係だからだ。

「なんだから、今日はららぽーと辺りで面白いものが見れそうな気がして」

「あー、はいはい。納得したわ。一瞬でも普通の女の子かとも思った俺が馬鹿だった」

前言撤回。思い過ごしじゃなく、ビンゴだった。

「というわけでっ、ららぽーとにレッツゴー！」

最早、何がというわけでなのか皆目検討もつかないのだが、歩みを進めた魔王様を止める術はない。ただ、本能的に察知した何かめがけて突っ走るその横をとぼとぼ歩く事だけだ。

俺が魔王こと雪ノ下陽乃と出会ったのは大学に入学して間もない頃だった。

『超美人でスタイル抜群、おまけに性格も良い男の夢みたいな子がいる』。

入学してすぐに噂になったそれを耳にしたのは、高校からの友達の口からだった。

そんな阿呆な、と思っていたが、雪ノ下陽乃と初めて出会った時は不覚にもそれが真実であると錯覚しそうになった。

コミュニケーション能力の圧倒的な高さ。どんな人間に対しても、満遍なく、親しく会話をし、かつ決して嫌そうな顔をしない。裏では……なんてことはなく、女子にもかなり好かれていた。

まさに人気者という言葉が相応しい雪ノ下陽乃に誰もが好意や羨望を向ける中、俺は特にそういうこともなかった。

別に雪ノ下陽乃の本質を見抜いていた、などというかつこい理由ではなく、ただ単に雪ノ下陽乃とは住む世界が違い、言うなれば対岸の火事のように、俺とは全く関係のないことだと考えていたからである。

そんな人間には期待も希望も抱かず、だからこそ、絶望も失望もしない。

だから俺はごく普通に、同じキャンパス内にいる友達とゲーセンに行ったり、カラオケ行ったりしていた。ただそれだけの事。

しかしながら、何故か雪ノ下陽乃に目をつけられ、呼び出された。そして何事かと思えば開口一番に――

『九条景虎くん。私と付き合ってみる気はある？』

なんのこっちゃ。

それが俺の感想である。

是非、よろしくお願いします。だなんて言葉は出てこなかった。寧ろ、ドツキリでもしようとしてんのか、思ったよりも性格悪いなこの女くらいにしか考えてなかった。

まあ、結論から言えば、それは当然のことながら雪ノ下陽乃の本意ではなかった。

本人曰く、最近はそろそろ告白とナンパが鬱陶しくなってきたらしく、彼氏役が欲しい。けれど、今いる友人達では、本気にしてしまいかねない奴等ばかり。なので、都合の良いときだけ彼氏面をしてくれる人間が欲しいとのこと。

この時、初めて雪ノ下陽乃の暗黒面を見た気がした。それと同時に言い得ぬ悪寒が走ったのだが、それは生存本能が告げていたに違いない。

もちろん、すぐさま拒否したのだが……魔王様は逃してはくれず、

結局は大学内において『九条景虎との雪ノ下陽乃は付き合っている』という認識は浸透し、要らぬ怨みを買うようになった。一体俺は男達の脳内で何度八つ裂きにされたのか。

そうして都合の良い彼氏になった俺はその名目から、今日のように事あるごとに振り回されることになった。魔王様はそれがお気に召したらしく、さらに振り回す。当日にいきなり俺の予定をぶつ潰してデート(名前だけ)に連れ回すなどザラである。最早彼氏役ではなく、玩具役だと突っ込みたい。

「不満タラタラって顔してるよー、どうしたの?」

ららぽーとに着いて、間もなく魔王は俺の表情を見てそう告げた。不満がないとでも思っているのか、この女は。

「訊くまでもない事を訊くな。そういうのは嫌いなんだろう」

「そうだね。でも、君を遊ぶ時は良いかも。ね、か・げ・と・ら?」

きゃぴっ、という擬音がどこからともなく聞こえるような物言いだ。だが、残念ながらそれを魔王がしているのだから、萌える要素は一つもなかった。それにこれは『名前で呼べ』という合図である。

「なんで『俺と』じゃないのかは聞くまでもないが、今日は何するんだ?ハル」

因みにどうでも良いことだが、俺はこいつのことを「ハル」と呼ぶようにしている。別に電人ではないが、それに近いし、何より普通に呼ぶと負けた気がするから。

「んー、景虎は何かしたい事はある?」

「取り敢えず、飯食いたい」

「そっかー、じゃあ服でも見に行こっか」

「おい、俺に意見を求めた意味は?」

「私は「したいことある?」とは聞いたけど、それにすると一言も言っていないけど?」

ですよね。したい事を答えたら、寧ろそれだけは何がなんでもしようとしないのがお前だもんな。

そこから俺と雪ノ下陽乃との間に会話はなかった。

単に話す必要もなければ、俺から話しかけて事故る必要もない。い

かにして被害を少なくするかの皮算用をしているのに、被害を甚大にするのは愚の骨頂だ。

しかし……黙ってれば普通に美人で通りそうなんだけどな、こいつ。

いや、喋つたらもつと評価は上がるのか。外面の完成度の高さは尋常ではない。おそらく、それを初見で気づける人間がいるのだとすれば、そいつは余程人間観察に優れた人間か、人間を信じる事の出来無くなつた猜疑心に溢れた人間かのどちらかだ。どちらにしたって、そいつは雪ノ下陽乃に目をつけられるのは確定だが。

知り合つてまだ二ヶ月弱なのだが、雪ノ下陽乃は面白い人間を見つけると必要以上に構う。そして壊す。本人の話から推測してみたが、おそらくは間違つてはいないだろう。だが、つまらない人間もその限りではないらしい。事実、俺はそういう人間を二、三人見てきたが、見るに耐えなかつたので不評を覚悟で彼女をその場から引き離したぐらいだ。

以上の事から考えて、俺も警戒しておく必要はあるのだが、果たして俺はどちら側の人間に該当するのだろうか。わからないが、どちらにしても明日は我が身。単に興味を失くされるのはありがたいが、叩き潰されるのだけはごめん。

と、いよいよ目的地に着いたのか、不意に歩みが止ま………？
つて、ここランジェリーショップじゃねえか!?

何考えてるんだ、こいつは!?!俺をこんなところに引きずり込んで、社会的に抹殺したいのか!?

はっ!しまった。こんな露骨に嫌がつてるとこいつは……。

「あはは、どうしたのかなー? 景虎?」

「な、何がだよ? 何もねえよ」

「声が引きつってるよ? 隠すならもう少し平常心を保たないと♪」
超嬉しそうだこの野郎!

明らかに俺がテンパってるのを見て楽しんでやがる……!

「決めた。さっ、行こっか」

「そうか。じゃあ一人で行つて……痛い痛い痛い! 無言で関節決めん

な！」

ひ、肘が碎ける！側から見れば腕組んでるようにしか見えなけれど、肘がミシミシいつてるんですけど！

そうして引きずり込まれたランジェリーショップはまさに地獄だった。

当然だ。いくら彼女がいるとはいえ、男が入ってきたら白い目で見られるのが当然である。

出て行きたいのは山々だが、それを雪ノ下陽乃は許さない。

拘束自体は解かれているが、それだけはわかる。

「ねえねえ。こんなのどう？」

「さあな。良いんじゃないの？」

「えーっ。なんかテキトー。やっぱり試着してるの見る？」

「ばっ?!阿呆か！」

「ふふっ、景虎慌てすぎ。そんな事するわけないでしょ？恋人じゃあるまいし」

面白そうに雪ノ下陽乃は言う。じゃあ、とつとと解放してくれませんかね。

「あっ、こういうの景虎好きそうじゃない？」

見せてきたのはやたら布面積の少ない下着。まあ、こういうのが好きなものもあるだろうな。俺はどうでも良いが。

「別に。興味ねえ」

「ふーん。じゃあ、こっちなんだ？」

次は黒のレースの入ったもの。こいつに似合っているといえれば似合っているだろうか。一瞬だけ下着姿を想像しかけた。

「はあ……だから興味ねえって言ってるだろ」

「へえ……じゃあ、これにする」

やたら意味深な笑みを浮かべて、雪ノ下陽乃はそう言った。

「買って来るから、ちよつと待っててね」

「いや、俺がここで待つ必要「待っててね」……了解」

有無を言わず、待てというのはさながら飼い主とペットの関係を彷彿とさせる。いや、実際問題そんな関係なのかもしれない。まあ、

それよりもなお酷い可能性の方が高いが。

ていうか、視線が痛いんですが。

彼女の付き添いという側面から見ても微妙に辛かったのに、さらに男一人ポツンといるとなるとより一層視線が痛い。

さっさと帰ってこいよ。これ以上ここにいたら俺の胃に穴が開くっつーの。

そんな事を思いながら、放置されること十分弱。

待てど暮らせど雪ノ下陽乃は帰ってくる素振りを見せず、スマホをいじって突っ立っていると不意に声をかけられた。

「あのー……」

「はい?」

声をかけてきたのは店員さんだった。流石に男一人は不審がられるか?

「いや、これは彼女の付き添いで……」

「彼女さんなら少し前に出て行かれたのですが……」

「……………は?」

「え。あの、はい?」

「ですから。彼女さんならほんの十分前ほどに出て行かれました」

ゆ、雪ノ下ああああああ!

俺は無言でランジエリーショップを出て、何処ぞに行ってしまった雪ノ下陽乃を追いかけた。

あの馬鹿野郎!俺を社会的に抹殺したいのか!?!あのままだと確実に男一人でランジエリーショップに入ってくる変態になって、完全にアウトなやつじゃねえか!?

探し始めて五分。

雪ノ下陽乃の背中を見つけた。通りのど真ん中で誰かと話をしてるみたいだが、遠巻きには誰かわからないし、俺には割と知ったことではない。

「何やってんですかあー?雪ノ下陽乃さん?」

苛立ちを滲ませながら話しかけるも華麗に雪ノ下陽乃はスルーする。何こいつ?人を放っついておいて、神対応過ぎるだろ。一瞬人違

いかと思っちゃっただろ。

と、その時。何故か雪ノ下陽乃ではなく、二人いた男女のうち、話していたツインテールの女の子が俺に視線を送る。

「その人。あなたの知り合いでしょう？無視するのはどうかと思うのだけど」

「大丈夫大丈夫。雪乃ちゃんのお話が終わるまで待たせとくから」

「おい。それは本人がいるのに言って良い言葉じゃねえよ。つか、この子達誰？ハルの知り合いか？」

「見ればわかるでしょー？」

「いや。これっぽっちもわからん」

「しーまーいーだーよっ」と

……………なに？こいつと今話してる子が姉妹？

チラリと視線を送ってみれば、ツインテールの女の子は否定もせず溜息を吐くだけ。となると、雪ノ下陽乃の発言は嘘ではなく、そういえば本人も可愛い妹がいると言っていたのを不意に思い出した。

「え？姉妹？全然似てねえな」

「まったまたあ！小さい時から瓜二つって言われて育った私達が似てないわけないでしょ？大丈夫？目が腐ってるんじゃないの？ね？比企谷くん？」

「いや、それを俺に振られても困るんですけど……………」

振られた男の方は心底面倒くさそうにそう答えた……………うん？

雪ノ下陽乃を相手にして、照れるでもなく、見惚れるでもなく、ただ面倒くさそうにしている人間が……………いる？

「っていうか、そっちの人は彼氏さんじゃないんですか？デート中に妹に構ってたら愛想つかされますよ」

明らかに陽乃の意識を俺へと向ける比企谷と呼ばれた男の子の発言。

残念だが、その発言は特に意味をなさないのである。

「さっきも言ったじゃん。大丈夫。景虎はそういうのに文句は言わないから」

「ああ。寧ろ、デートというものの自体に文句があるからな。なんなら

今すぐ帰りたいたいぐらいだ」

「それはダメ」

笑顔で拒否された。まあ、そうですね。あの程度じゃ終わりませんよね。

そんな俺達のやり取りに妹ちゃんはどうと……何故か驚いているように見えた。何故？カップルっぽくないからか？まあ、仮面だからな、所詮は。

「あ、そうだ。比企谷くんは雪乃ちゃん。よかつたらダブルデートしない？お姉ちゃんとしては雪乃ちゃんの彼氏に相応しいか、よく知っておかないといけないのです」

むん、と胸を張るような姿勢をとって、雪ノ下陽乃は軽くウインクをした。

大体の人間はこれで魅了されるものだが……比企谷くんとやらは訝しむような視線を送るだけだった。

これは決定的だな。完全ではないにしろ、直感的にしろ、この比企谷くんは雪ノ下陽乃の内側にそれとなく気づいている。どういう理屈か、理由かは知らないが、このごく自然に繰り出される可愛いらしさは全て上っ面のものだと気付いているのだ。

「……しつこい。姉さんは知らないけれど、私達はただの同級生よ」

そして妹ちゃんはどうと、さながらブリザードのように冷たく苛烈で刺々しい声で雪ノ下陽乃の冗談を一蹴する拒絶を示した。確執がある……というよりも妹ちゃんの方が一方的に嫌っていると見たほうが良い。

だが、そんなことなど御構い無しに雪ノ下陽乃はにやつと笑ってそれを跳ね除けた。

「だって、雪乃ちゃんが誰かとお出かけするのなんて初めて見たんだもん。そしたら彼氏だって思うじゃない？それが嬉しくて。せつかの青春、楽しまなきゃねー」

「その瞬間だけ同意を求めるのはやめろ」

まるでお前と同じ人間と思われるだろ。そんな器用な人間じゃないぞ、俺は。

「一人暮らしのことだって、お母さんまだ怒ってるんだから」
普通の、ごく何気ないフレーズ。

その「お母さん」という単語が出た瞬間に、妹ちゃんの身体が強張った。

いや、より正確に言うなら、雪ノ下陽乃の声音にさえ、ほんの僅かに妙な緊張感があった。それは本当に雪ノ下陽乃に振り回されていなければわからないような微かなもの。

だが、確実にその「お母さん」とやらはこの姉妹にとって、強大な存在らしい。

……は？この魔王様を超越する存在ってなに？裏ボス？永遠の闇とかそういうの？

「……別に、姉さんには関係のないことよ」

強気に否定するつもりだったのだろうが、確かめるようにぬいぐるみを抱いて言う様はとても弱々しいものだった。それを見て、ますます似てないなこの姉妹と思ったのは言うまでもない。

かたや男性の理想全てを兼ね備えた女神の皮を被った悪魔の姉。かたや冷血さを感じさせてはいるがその実芯は弱そうな妹。

そもランクが違う。全てにおいて妹ちゃんは雪ノ下陽乃に勝てる要素が見当たらなかった。

この短時間でなにがわかるのかと聞かれれば、それまでだがそんな気がした。

「ハル。もう良いだろ。妹ちゃんがちゃんと考えてそうしてるなら、余計なお世話だ。シスコンもわかるが、深く突っ込みすぎると嫌われるぞ」

「……ん。そうだね。余計なお世話だったかな、ごめんごめん。じゃ、またね」

へへつと誤魔化すような笑みを浮かべてから雪ノ下陽乃は比企谷くんに華やぐような笑みを浮かべて、ばいばいと胸の前で小さく手を振り、とてとてと去っていった……って、おい。

「なんで俺置いていくかね……まあいいか。こつちのほうが都合がいい……えーと、比企谷くんだったっけ？」

「……そうですけど……なんですか？」

「はい」

俺が手渡したのは一枚の紙切れ。それを見た比企谷くんは眉を顰めた。

「俺のメールと電話番号。ハル関連で何かあつたら連絡してきな。強制退場はさせられ無いが、被害を最小限には抑えられる」

「……言ってる意味がよくわからないんですけど」

「端的に言くと、君はハルの妹ちゃんと一緒に出かけられるくらいには信頼関係が出来ている人間だ。なら、これからも絡まれるだろうし、何よりハルが君に目をつけた。なら、被害を被るのは当然の結果だよ」

寧ろ、雪ノ下陽乃に目をつけられた人間で良い方向に転んだ人間などいるのだろうか。いや、おそらく無いだろう。現在進行形でそれを俺が味わっているのだから。

「じゃあね。この調子だとまた近いうちに会うと思うからそのつもりで」

そう言つて、俺はその場を後にし、雪ノ下陽乃を追いかけた。

偶然にも雪ノ下雪乃は姉の恋人と出会う。

七月の半ば。

そろそろテストの文字が見え始める今日この頃。

俺は真面目に講義を受けながら、至って真面目にゲームのイベントをこなしていた。

え？真面目じゃない？何言ってるんだ。言われた事はノートに書いて、プリントもやって、話も一応聞く。その傍らでゲームをしているだけだ。誰にも迷惑はかけてない。

寧ろ、俺よりもはた迷惑な人物が一人いるではないか。

そう、例えば自分は時間が空いてるからって、人の講義中に呼び出してくる自分勝手な魔王様とかな。

『今、大学のカフェテラスにいるから』

これである。

知った事か。今講義中だと返してやりたいところであるが、ここはあえて無視。

何時もは文句を言って、結局は行く羽目になるが「ごつめーん☆講義中で気づかなかったー♪」という戦法は取った事がなかった。

なので物は試し。早速……

『気付かないフリしたら、景虎にレイプされたって言いふらすから』
「先生ー、ちょっと腹痛いんでトイレ行ってきまーす」

開始三秒で叩き潰された。この女、なんて恐ろしい事を言うんだ。メールの文面見られただけでもアウトな気がする上に、実際にやりそうで怖い。

結局は言われるがままにカフェテラスへと呼び出される羽目に……いつもと同じ展開かよ。

幸いというか、知っているからか、カフェテラスは今の講義場所は近く、徒歩で大体二、三分ほどで着く。

つまり、たった三分で俺は地獄へと赴けるわけだ……なんでやねん。

カフェテラスに着くと、そこには笑顔でこちらに手を振る魔王ー

雪ノ下陽乃の姿があった。

それは一見すると待ち合わせのカップルのように見えなくもない。だがその実態はそんな生易しいものではないと知っているのが俺だけだというのがなんとも言えない。

「……取り巻きはどうした」

何故か雪ノ下陽乃一人だけだったので、問いかけると魔王様はジト目で否定する。

「取り巻きじゃないよ」

「ああ、奴隷または手駒だったな、悪い」

「それ謝ってるつもり？……当たらずも遠からずだからなんとも言えないけど」

皆さん、聞きましたか？当たらずも遠からずって言ったぞ、この女。やっぱり魔王だ。誰だ千年に一度の美少女とか天使とか言った奴は。脳みそ解剖してもらってこい。

「で、何の用だ」

「暇潰し」

……またか。

雪ノ下陽乃は退屈というものを酷く嫌う傾向がある。

それは彼女に限った話ではないが、それを抜きにしても彼女の退屈嫌いはかなりのものだ。

だからこそ、講義中はともかく、常に周囲には人がいるし、会話は大体雪ノ下陽乃を中心に展開されている。それでも退屈凌ぎにしては下の下だろう。

それ故に俺がいる。

退屈凌ぎに遊び転がせ、自分のご都合で強制的に相手にできる人間。

それが九条景虎の、雪ノ下陽乃から見た評価だろう。

しかし、それは雪ノ下陽乃の都合であって、俺の都合は全く考えられてない。

こいつからしてみれば、玩具に都合の良し悪しが存在するはずがないと言いつつ切ってしまうのだろうが、それでも、俺にだって都合の悪い

時はある。例えば今さっきの講義のように。

「あのな、お前が暇だつて理由で講義抜けさせるのやめろ。授業点は減るし、テストだつて近いんだぞ。落としたらどうすんだ」

「その時は笑つてあげる」

「そうだな。お前に罪悪感とか倫理観を持つてつて言いたかつた俺がバカだつた」

助けるでもなく、慰めるでもなく、ただ嘲笑する。

流石の魔王クオリティーだつた。

「俺はお前みたいなんだでも出来る天才肌じゃないんだよ。そこそこ勉強してここに入ったんだぞ」

「大変だね。凡人に生まれると」

「うるせえ。嫌味か」

「嫌味じゃないよ、本音。でも、単位くらいなら私がどうにかしてあげる。私の彼氏であるうちはね」

いや、それ暗に彼氏（仮）じゃ無くなつたらアフターケアしてくれないつて言つてるようなものじゃねえか。そんな危なげないアフターケアするなら、普通に講義受けさせろよ。

「そういや、お前の親父さん県議会議員かなんかだつたな」

「ついでに建設会社の社長ね」

「使えるものはなんでも使うつてか。怖えな」

「大丈夫。今の所は君には向かないから」

だから、一々そういう遠回しな威嚇発言をするな。反射的に謝りそうになつただろ、何も悪いことしてないのに。

「で？今日は何する気だ」

「悪巧みを考えてるみたいない言ひ方は好きじゃ無いな。私はいつも楽しい事しか考えてないのに」

「俺は楽しくねえよ。楽しいのはお前と、その取り巻きだけだ」

「それはきつと君が普通じゃ無いからだよ。私達は別におかしく無いよ」

否定したいところだが、成る程これが民主主義というものか、数の暴力には勝てない。どれだけ真つ当な正義を語るにしても、一人では

意味がなく、悪が正義を主張し、正義を悪だと非難すれば、白は黒に、黒は白になる。

「話が逸れたけど、今日は……じゃじゃーん！」

雪ノ下陽乃が取り出したのは半分に折りたたまれている小さなボード。

「なんだ？オセロでもするのか？」

「惜しいなー。白と黒っていうのは合ってるんだけど」

オセロ以外で白と黒でボードゲームっていえば……。

「チェスか」

「正解。それじゃあ始めよっか……あ、ルールはわかる？」

「ゲームじゃ何度かやった」

リアルでやるのは初めてだが、こう見えてゲームと名のつくものには自信がある。苦手なものはゲーセンにあるレーシングゲームくらいだ。コントローラーなら出来るんだが、実際にやるとコーナーも碌に曲がれん。

「じゃ、負けた景虎は罰ゲームね」

「おい、まだ始めても無いのに俺が負ける事前提で話を進めるな」

「え？勝てると思ってるの？」

素で聞かれた。

こ、この女……マジで自分が負けるはずが無いと確信してやがる……良い度胸だ。表面上の恋人となってから約三ヶ月。今こそ引導を渡してやるぜ。

「いいぜ。なら、お前が負けたらどうする？」

「負けたら……うーん、ちよつと想像出来ないから、景虎が考えておいて」

「言ったな。後悔するなよ？」

これはまぎれも無いチャンスだ。この関係で初めて俺に主導権が渡るときが来た。

……と思っていた時期が俺にもありました。

「景虎弱ーい」

「お前強すぎだろ……」

結果は雪ノ下陽乃の圧勝。

特に際どい闘いになるでもなく、殆ど一方的な展開だった。

「あんなに勝てるみたいな事言ってたから、少しは期待してたんだけどなー」

ぐっ……俺もまさか雪ノ下陽乃がここまで強いとは思ってなかった。いや、ひよつとしたら本当に俺が弱すぎるだけなのかもしれないが、そうなる俺がプレイしたゲームの方もかなり弱いということになる。

「さてさて、景虎には何をしてもらおうかなー？」

くすくすと笑う雪ノ下陽乃は本当に楽しそうだ。大体は外面だけのこいつだが、こういう瞬間だけは心の底から楽しんでいるような節がある……俺は全然笑えねえけど。

「そうだ。景虎のお父さんとお母さんはどんな人？」

「それが命令か？」

「うん。但し、全部教えてね。私が聞いたらどんな事でも」

何気にえげつない事言ってくるな、こいつ。もし、家族関係に闇を抱えてる人間だったら、逃げ出してるどころだぞ。

「はあ……まあいいけどな。別にうちの親父は県議会議員でもない社会人。お袋も大体は親父をサポートしてる。ごくありふれた一般家庭さ。強いて言うなら親父がどうしようもない馬鹿って事だけか。会社じゃ超優秀で厳格な人間らしいけどな」

「ふーん、お母さんの方は？」

「親父とは正反対。愛想も良いし、人当たりも良い……と見せかけて、お前みたいに裏じゃえげつない事考えてたけどな」

転んでもただでは起きないし、ギブアンドテイクがしつかりして
る。流石に雪ノ下陽乃のように道楽で人を遊ぶような事はしないも
の、人を弄る事は好きだと言っていた。

「まあ、今は家出してるからどうなってるのかはさっぱりだ。特に何
も言ってこないから、自由だし気は楽だよ。お前のところとは正反対
だよ」

何気なくそう言ったつもりだったが、どうやら最後のは余計だった
らしい。雪ノ下陽乃はわざとらしく首をかしげて問いかけてくる。

「どうしてそう思ったの？」

「……前にお前が妹ちゃんと話してた時に言ってたろ。『ひとり暮ら
しのこと、まだお母さん怒ってるから』ってな。よっぽど支配欲が強
いか、それとも過保護か……いや、過保護なら怒らねえか。まあ、お
前のお母さんは自分のものは思い通りに動かせないと嫌なタチって
いうのはなんとなくわかった」

何故なら過保護な親というのは怒るを通り越して泣き落としに来
るから。べ、別に経験談じゃないんだからねっ！

「……たまーにだけど、君は鋭いところがあるよね。初めて会った時
も私と距離を置いてたし」

「アレは……本能か何かだろ。そのせいで目をつけられたけどな」

こんなことなら取り巻きたち同様に信者にでもなつとくべきだっ
た。そしたら、こんなにも振り回されることはなかっただろうに。

「君の言ってることは概ね合ってる。母はなんでも決めて従わせよう
とする人だから、こつちが折り合いをつけるしかないの。雪乃ちゃん
はそういうのへたつぴだから」

俺からはなんとも言えないが、確かに少しキツそうではあった。

姉が相手だから、という風にも見えなかったし、大体の人間にはあ
あ言った態度なのだろう。母だからといって、へこへこしてそうな感
じでもなさそうだし。

「で、母が強い分、父はそれをフォローする役回り。私も雪乃ちゃんも
それをわかってるから、予定調和だったんだけど……」

「一人暮らしをするって言い出した時に一悶着あったと」

「そうそう。そういう我儘を言う子じゃなかったから。その代わり、父が喜んじやってマンションあげたの」

世の父親というのはやはり娘には甘いのだろうか。俺は一人っ子だから、よくわからん。

「母は最後まで反対してたし、今も認めてないと思うよ。機を見ては連れ戻そうとしてるんじゃないかな」

『子どもは親の物』ってか。いつの時代だよ。

「お前がここに来てるのも、お母様の命令ってやつか」

「まあね。本当はもうちよつと上に行きたかったんだけど……でも、これはこれで悪くないよ。たまに雪乃ちゃんと会えるし、面白い子とも会えたから」

「それは比企谷くんの事を言ってるのか？」

「今日は本当に鋭いね。どうしたの？」

「別にわかりきってることしか言ってるじゃない」

「それもそっか」

被害者第二号……いや、三号か？妹ちゃんが一号として。

「あの子凄いやねー。景虎と一緒にだった分もあるけど……私、初対面であんな対応されたの初めて」

「貴重な体験だな。良かったじゃねえか」

「あれ？もしかして嫉妬してる？可愛いところあるなー、このこのー」
「馬鹿言うな。比企谷くんが心配なだけだ」

何せ目をつけられちゃいけない人間に目をつけられてるんだからな。彼の人生がどんなものかは知らないが、これからは荒れること間違いないだ。雪ノ下陽乃が関わる限り。

と、その時、ちょうどチャイムが鳴った。

思ったよりも結構話し込んでいたらしい。いつもと違って、大した事をせずにこいつといる時間が過ぎるのは珍しい。

「あちやー、もうこんな時間か。この後講義は？」

「いや、今日はもうねえから、帰りにゲーセンには……寄らせてくれねえよな」

わかっていることだ。どうせ、こいつは待っておけとでも言うに違

いない。

「そ。じゃ、バイバイ」

「と思っていたのだが、どういう風の吹き回しか。雪ノ下陽乃はあっさり別れの言葉を告げた。」

「お、おう。じゃあな」

これは流石の俺も想定外だが、返してくれるというのであれば願ったり叶ったりだ。気が変わらないうちにとっと立ち去ろう。魔王は気まぐれなことでも有名だしな。

「いやあく、いいな！実がいい！友達と遊ぶつてのは素晴らしい事だな」

「なんでそんなにテンション高いんだよ、九条」

「何言っつてんだ、いつもこんな感じだぜ！」

「それはない。確かにゲームが絡むとテンションは上がってる気もするけど……ひよつとして雪ノ下さん関連で良いことでもあったのか？」

「そうといえはそうだし、そうでもないといえはそうでもない」

「はあ？」

雪ノ下陽乃から解放された俺は同じ大学の友人――椎名哲平と共にららぼーとのゲーセンに足を運んでいた。

因みに何故ここなのかというと、雪ノ下陽乃とぼったり出くわす事もなければ、近くのゲーセンは大体制覇したから。後、ここにしか

いものを以前雪ノ下陽乃に連れてこられた時にちらつと見かけたから。付け加えると哲平の欲しいものがここにあるとか。連れ添いか、気が向かないとこういう場所は基本来ないしな。

「で、どうなんだ？ 実際？」

「どうって何が？」

「雪ノ下さんの事だよ」

野次馬根性丸出しの表情で哲平が聞いてくる。こういう場合の問いかけは決まって規制が入りそう方の話だ。

「別に。何もしてねえけど」

なんならまだ手も繋いでないし、繋ぐ気もない。少なくとも俺からは。

「はあ!? お前、付き合い始めて三ヶ月ぐらい経つのにまだキスもしてないのかよ!？」

やっぱりおかしいよな。普通に付き合い合ってると思ってる奴らからしてみれば。

「そこは……ほら、あれだ。ああ見えてハルはピュアなんだよ」

「ふーん、人は見かけによらないもんだな」

いや、全く。ただ、真っ黒って意味だけだな。

「しかし、わからないよな。お前と雪ノ下さん。何の接点もないのにいきなり付き合い始めて。知ってるか？ 裏じゃ、雪ノ下さんのファンクラブがお前を暗殺する計画を立ててるらしいぞ」

「何でだよ……」

逆怨みだ。というか、変わってやれるなら今すぐ変わってやるよ。

「まあ、自然の摂理だ。身にあまる幸運は身を滅ぼすのさ」

これが幸運だというのなら、俺は神様を呪う。

「俺、これから予約したやつ受け取りに行くけど、お前どうする？」

「ゲーセンで待っとく」

「OK。俺も受け取ったら行くわ」

一旦、哲平と分かれて、俺は一人ゲーセンへと向かう。

哲平の予約したものは例に漏れずゲーム。それもギャルゲーだ。

曰く「ギャルゲーの主人公目指せば俺もモテ男になれるんじゃない

か？」だそうだ。お前は中学生か。

そんなわけであいつは根っからのギャルゲーマー。その割には理由が理由なだけに二次元には溺れてはいないのが救いか。手段と目的を履き違えていない。

俺はドラゴンボー○かストリー○ファイターでもするかな。時々ヤンキーや不良とかやつてるから怖いけど、ガ○ダムよりはマシだ。動物園に行く趣味はない。

さてと、今日はどっちをしようか……な？

「ん？あれは……」

ふとゲームセンターで見た事のあるような気がする後ろ姿を見つけた。

そいつはUFOキャッチャーの筐体に食い入るように張り付き、何かを必死に取ろうとしている。

ああ、いるよな。ああいうやつ。そして何千円も吸われるまでがセオリー。俺は友達が三千円吸われるのを見てから、絶対にしないと誓った。

おまけにパンダのパンさんかよ……よくまあ、こんな可愛げもないものを取る気が起きるな。

眺めている間にも、そいつは何度もチャレンジして惨敗していく。

「なあ、いい加減諦めねえの？」

流石に千円くらい吸われた辺りで声をかけた。

俺が通りかかる前にも吸われていたという事はもっと吸われているはずだ。こういうものは誰かに止めてもらわないと止められないだろうし、知り合いならこれ以上消費していく様を見ていられない。「いきなり何？どうしようとするの勝手……」

ぱつと振り返ったそいつは何故か驚いた顔を……そういえば、この子あれだ。

「えーと、いきなり話しかけてごめん。雪ノ下の妹ちゃん」

どこかで見たと思えば、雪ノ下の妹ちゃんだった。見るのは二度目だが、見た目はなんとなく似てなくもない気がしてきた。

「……何かしら？人をジロジロ見て。不快なだけだ」

「あ、ああ、ごめん。よく見たらあいつと似てると思って」

「当然でしょう。姉妹なのだから」

何を言ってるんだとばかりに妹ちゃんはこちらをジト目で睨んできた。

やっぱり似てるのは見た目だけか。

「それで？何の用かしら？今は忙しいのだけれど」

「いや、妹ちゃんが歯止めの効かないところまで来てるみたいだったから、止めてあげたほうがいいかと思って」

「余計なお世話よ。私は私の意思でしているのだから」

「……………好きなの？パンダのパンさん」

もしやと思つて聞いてみたら、びくつと一瞬だけ体を震わせた。

「別にそういうわけではないわ。ただ以前苦い経験をしたからそれを克服するためにたまたま挑んだ筐体がこれだっただけの話よそれ以上それ以下でもないわ下手な勘ぐりはやめてくれるかしら？」

あー、この子本当に雪ノ下とは似てないわー。嘘つくの超苦手な子じゃん。ラスボスの妹ちゃんは勇者ばりの正直者だよ。

はあ……………せめこの子の正直さが二割でも雪ノ下になればなあ……………もうちよつとマシなんだが。

「ところであなた。姉の恋人、ということの間違いはないのよね？」

「一応」

恋している人という意味で聞かれると百パーセント違うと言いつけるが。

「……………見た所、あまり特別な風には思えないけれど」

「まあ、普通の大学生だし。君のお姉さんに比べたらはるかに……………つて、比べる方が間違いか。凄いいもんね、君のお姉さん」

「ええ。容姿端麗、成績最高、文武両道、多芸多才、その上温厚篤実。およそ人間としてあれほど完璧な存在もないでしょう」

「ああ、確かに。ただ、最後の温厚篤実はない。その代わりに馬耳東風、自由奔放、傍若無人を付け足す事をお勧めする」

「……………」

「妹ちゃんは知ってるんだろ？アレの中身。外面は良いから騙されて

たけどな。ありやねえわ。どういう育ち方したのかは知らねえけど、アレと結婚出来る奴がいたら拍手喝采を送るわ」

『アレ』とやらと付き合っているのはあなただと思っただけ……」

あ、やべ。ついうっかり本音が漏れ出てしまった。

いや、だつてしようがないじゃん。あの雪ノ下を指して温厚篤実？はっ！アレが温厚篤実なら、俺は聖人君子だ。

「まあいいわ。どんな理由であれ、あなたは恋人であると否定しなかったという事はそういう事なのよね。姉さんが恋人を作っている事も驚きだけれど、本性を知つてなお、その姿勢でいられる人間は初めて見たわ。世の中には珍しい人間何人もいるものね」

珍獣扱いされた……って。

「帰るの？」

「ええ。用は済んだし、人の善意を無碍にするわけにもいかないもの。それにあなたがいると姉さんと会う確率が上がるでしょう」

まだあいつは大学で講義を受けてる途中と思うが……なんとも言えないな。適当な事言つて抜け出してくる可能性も否定できない。

「じゃあ、バイバイ」

「ええ、さようなら」

踵を返して、妹ちゃんは去っていく……が、その時、不意に足を止めた。

「ひとつ言い忘れていたわ。私の名前は雪ノ下雪乃よ。次からは名前と呼びなさい。いいわね」

そうだけというと今度こそ、妹ちゃんもとい雪ノ下雪乃ちゃんは去つていった。

ああ、性格も一つだけ共通点を見つけた。

言葉の使い方はともかく、発言が上から目線というか命令口調だ。なんか嫌な共通点を見つけたけど、それを差し引いても雪乃ちゃんの方が好きだな、俺は。

さてと、俺も本命のゲームを……あだっ!?

いきなり後ろから叩かれた。

叩いてきた人物を見ると……哲平だった。

「何すんだよ!」

「お前、雪ノ下さんというものがありながら、他の女の子を口説くって
どういう神経してるんだ!」

「はあ!?ちげえよ!あれはハルの妹で……」

「ちよつと似てたからって見苦しい言い訳はやめろ!こうなったら、
俺がお前の性根を叩き直してやる!」

「人の話聞けよ!」

この後、互いにヒートアップした結果、ゲーセンで五時間もいる羽
目になり、その間に來ていた雪ノ下陽乃のメールをスルーしていたせ
いで、さらなる負債を背負う事になってしまった………なんでやね
ん。

別荘においても雪ノ下陽乃は通常運転で過ごす。

八月の始め。

高校生ならそろそろ夏休みが折り返し地点を迎え、「学校とかまじだりい」とか「やつべ！宿題全然手つけてないんだけど！」とか「でもまだまだあるし」とか言っている今日この頃。

大学生である俺はとても快適な日々を過ごしていた。

というのも、大学生は基本的に八月の一週或は二週から夏休みに突入し、そして九月の終わり頃までである。どちらかといえば夏秋休みのな感じだ。シルバーウィークがただの祝日という悲しい事態ではあるが、それらを差し引いても、やはり高校よりも長い休みというのは素晴らしい。大学の数少ない利点の一つだ。

出された課題なんかは機を見て適当にやっているので、三割近く終わっている。このペースなら九月中旬には全部終わってウハウハ状態だ。宿題つてのは早めに終わらせておくに限るよな。うん。

そう、このままいけば。

ダーダーダーダーダーンダーダーン……。

そしてこのまま行くはずがないのだ。何せ、魔王がいるのだから。

「……もしもし。今忙しいんだが？」

主にゲームで。そろそろボスと戦えそうなところなのに。

『へえー。暇そうで何より。流星は彼氏。彼女の為に何時もフリーなんて』

「耳がイかれてるんじゃないか？第一バイトもしてるつっ一の」

そして徐々に三連休だ。なんとしても死守しなければ。

『知ってるよー。でね、今回の三連休の事なんだけどね』

知ってるって、そこまで知ってるのかーい！

何故だ……情報漏洩はしなかった。バイト先には同じ大学の奴もいない。一体どこから漏洩したんだ!?

『別荘に行こうと思ってるんだよねー。少し山の方にある涼しいところで』

「そうか。じゃあな」

そう言つて一方的に電話を切つて、電源も切つた。家の電話のコードも抜いて、後は鍵を「ねえ、景虎」。いきなり電話切れたんだけど、どうしたのー？」げっ。

「な、なんで……」

「君の考えてることなんてお見通し。引きこもつて有耶無耶にしようとしてたでしょー？」

「なんのことだか、さっぱり……」

じいつと見つめられて、思わず目を逸らした。

すると、雪ノ下陽乃は数秒こちらを覗き込むように見つめた後、にやりと笑う。

「そう。私の思い違いならいいけど。五分で支度してね。下で待つてるから」

お、終わった……俺の徹夜ゲームの日々が一瞬で終わりを迎えた。

いや、待て。家庭用はともかく、携帯ゲームなら……。

「あ、そうそう。ゲームは持って来ちゃダメだからね。見つけたらデータ全消去するから」

忘れていたとばかりに雪ノ下陽乃はそれだけ言つて出て行つた。

お、鬼かあいつは……いや、魔王だった。データ全消去とかゲームーに一番やつちやいけない事だぞ。血と汗と涙の結晶なんだぞ。

しかして、俺に対抗するすべはなく、やはり言いなりになるほかなかった。

魔王の命令通り、きつかり五分で準備をし、高級感溢れるハイヤー

に促されて乗る。

流石は県議会議員の娘、金持ちを前面に押し出している。運転手の人は特に何も話さないし、こちらを一瞥する事もなく、ただ無言で運転していた。

おかげで車の中は静寂に包まれ、車に程よく伝わる振動と相まって睡魔が……。

「可愛い彼女が隣にいるのに寝るとは感心しませんな」

指で俺の頬を突つくというか、指を押し込んでくる雪ノ下陽乃のせいで迫っていた睡魔はあっさり霧散した。

「いや、だって暇だし。ゲームないし」

「もー。暇なら私がいるでしょー？」

「やだよ。お前と話すときは二人きりでないと」

下手に弱みも握らせたくないし、ボロを出した時に第三者に聞かれるだけは避けたい。

「おやおやー？大胆発言だね」

「あ？何処が？」

茶化すように言ってくるが、残念ながららどの辺が大胆発言だったのか全くわからん。

「へえ……景虎にしてはなかなかいいパンチ打ってくるね」

雪ノ下陽乃も、俺がしらばっくれているのではなく、本当にわからないと悟ったらしい。

だが、いいパンチも何も俺は何もしてないんだが。ついでに言うパンチなんて雪ノ下陽乃に打ったら、何されるか分かったモンじゃない。

「ところで雪ノ下の別荘に行くって言ってたけど、何すんの？」

「んー、大体の事はできるよ。高校の時も何回か友達誘ったりして遊んだから」

「……そうか」

「？どうしたの？……あ、もしかして嫉妬ー？だーいじょうぶ。皆、女友達だから♪」

そんな事わかってるよ。いくらなんでも別荘にお泊まりで遊ぶ事

も考えたら、どう考えたって男を連れて行くのはまずいだろ。世間体的に。

「違う。意外だな、って思ったただけだ」

「そう?」

「ああ」

てつきり、俺みたいな例外はともかく、雪ノ下陽乃は友達関係をもっとドライに考えていると思っていた。だから、外では遊ぶし、誘われても遊ぶ。だが、自分から別荘とはいえ家に招く事はしないだろうと。

それは雪ノ下陽乃の人物像もさる事ながら、雪ノ下陽乃の母親のことを考えても、やはり意外だ。

「そういえば、女子のお泊まり会ってどんな感じなんだ? やっぱコイバナとかで盛り上がるわけ?」

「まあね。でも、景虎が想像してるような良いものじゃないよ。女の子のコイバナって基本的にお互いに対する牽制だから」

「えっ? マジで?」

「うん。見てて楽しかったよー。お互いに気づかれないように釘を刺そうとしてるの」

うわあ……聞きたくなかった。そんな殺伐としたコイバナ事情。こいつの場合は好きな人間とかいなさそうだから、さぞその状況は楽しかったに違いない。

「お前はその時どうしてんの? 人気者なんだから、聞かれないって事はねえだろ」

「私? 私は私を楽しませてくれる人なら誰でも良いよー?」

まったく、実に雪ノ下陽乃らしい答えだ。

おまけにこれなら誰からも責められないし、茶化されもしない。それどころか、掘り下げる事すら不可能。相手に攻めてを与えないあたりがこいつらしいところだ。

「景虎の方はどうなの? 男の子もコイバナはするんでしょ?」

「しなくはねえよ。基本的にゲームでオールしたりすんのが妥当かどうかだ」

それに男の場合はコイバナというよりかは寧ろ……いや、これ以上は言うまい。

「ただ、女子みたいに牽制するためとかじゃねえよ。男の場合、同じ相手を好きになるのは珍しい事じゃないしな。その時はその時だ」

多少なり関係は変わるかもしれないが、そこからいじめに発展なんて事はない。少なくとも、俺の周りでそんな事はなかった。

「まあ、高校の時にお前がいたなら話は別だったかもしれないけどな」
具体的には男子の目の色が変わる。色んな行事の度に男子が雪ノ下陽乃に振り向いてもらおうと無駄な努力をして、そしてあえなく玉砕するビジョンまでは見えた。

「そう？今とあんまり変わらないと思うけどな」

「はあ？いや、変わるだろ」

「変わらないよ。だって、高校でも大学でも、私は景虎に出会ってたら、景虎と付き合ってたと思うから」

窓の外を見て、雪ノ下陽乃はそう嘯く。

シチュエーションはともかく、雪ノ下陽乃ほどの人間にこんな事を言われて喜ばない人間が果たして何人いるだろうか。少なくとも真意を汲み取れない人間は喜ぶ事は確かではある。

しかしながら、俺はわかってしまう。

雪ノ下陽乃は別に運命だとかそういう事を言っているのではなく、至極単純に雪ノ下陽乃は仮に高校で九条景虎と出会っていても今と同じように遊んでいたと言っているだけだ。

そうなる嬉しさも萌えも何もあつたものじゃない。寧ろ、高校で会わなくてよかったとホツとするところだ。

「……それはありがたい事だな」

「そうやって悟りきつてるどころ、私は好きだよ？」

「そりやどうもありがとさん」

俺の方はそうやってなんでも見透かしているようなお前の余裕そんな態度が嫌いだよ、とは言えなかった。

着いたところは雪ノ下陽乃の宣言通り、山の中にある立派な木造建築の建物だった。

運転手さんは俺と雪ノ下陽乃の荷物を降ろして、何度か雪ノ下陽乃とやり取りをした後、そのまま帰って行つた。ご苦労な事だ。片道二時間弱。割と遠かつた。

「さて、と。景虎、ジャージ持つてきてる？」

「ああ。山の中つて聞いてたしな。そういうのしか持つてきてねえ」

だって、何させられるかわからないし。一応普通の服も持つてきてはいるが、最悪、野生の動物捕まえてこいとか言われる可能性も覚悟していたし、多分着そうにない。

「じゃ、それに着替えて」

「何させるつもりだ？ ツチノコ探しか？」

「それはそれで面白そうだけどハズレ。答えは……これ！」

雪ノ下陽乃が見せてきたのはテニスボール。成る程、という事はつまり……。

「今からそれを投げるから拾ってこいと。頼むから取れるところに投げてくださいよ？」

「なんでそうなるかなー？ 普通の用途じゃないでしょ、それ」

「持つてるのがお前の時点で、普通の用途じゃない可能性の方が遥かに高いんだよ。日頃の行い考えてみる」

俺だってテニスボールを見て最初にテニスを連想できるような生き方がしたいに決まってるだろ。何が悲しくて、常に最悪の事態を連想しなきゃならないのか。

「普通にテニスするだけだよ」

「俺、テニスやった事ないんだけど……」

体育でもテニスは選択項目になかったしな。バドミントンはした事あるが。

「やり方は教えたい。で、慣れてきたら試合ね。負けたらいつも通り。OK?」

「おい、待て。それ俺が不利なんてもんじゃないぞ」

「そうだよ?それが?」

「それが?じゃねえよ……」

なんでそんな「何がおかしいのかわからない」って顔が出来るんだよ。しかも素じゃねえか。

「さ。着替えて着替えて。泊まりがけになるけど、時間は限られてるんだから」

楽しそうなおこった。今頃、雪ノ下陽乃の脳内では俺に対する罰ゲームを皮算用しているに違いない。

あちらも遊ぶ気満々で来るだろうが、言い出した本人は確実にルールを知ってるだけの素人じゃなく、スクールに通っていたガチ勢とかだろう。覚えてたての素人では勝ち目なんてないし、かといってバックれて機嫌をそこねてもここから無事に帰れない事が始まるという、完全に魔王の思惑通り。なら、本人のお望み通り華麗に散ってやろう。がくりと肩を落として、俺は雪ノ下陽乃に教えられた部屋へと向かう。

今日から二日半程度、俺が使用する部屋は、俺が普段いる部屋よりも少し大きく、よく手入れが行き届いている。埃や塵なんて殆ど見当たらない。俺の部屋とは正反対だな。ゲームの山が作られてるから。

一人用のベッドが一つしかないあたり、その辺の事は雪ノ下陽乃も弁えているという事だろう。いくら悪戯でも限度はあるらしい。嫌がらせに際限はないが。

「しかし、まあ。こんな魅力も期待も全くないお泊りイベントなんて。ギャルゲーならクソゲーだぞ、これ」

哲平が聞いたらぶち切れそうな設定だ。こんなギャルゲーあつてたまるかと。

ぱはつと着替えて、雪ノ下陽乃の待つテニスコートへと向かう。

「おっそーい」

非難するようにそう言ってくるのは当然雪ノ下陽乃なのだが……。自前のテニスウェアを着ていた。どこのものは詳しくないのでわからないが、こいつに限って安物はないだろう。自分はしつかり用意してるあたりは流石は雪ノ下陽乃だ。見た目も元が良いだけになかなか様になっている。

「あれれー?どこ見てるのかなー?景虎ー?」

「いや、本当にテニスコートがあるんだなーって思ってたただけだけど?」

「ふーん、その割にはさつきからやらしい視線を感じるんだけどー?」

「さあな。幽霊でもいるんじゃないか?」

くっ……最初からそれが狙いか……!俺だって男なんだから、いくらこいつでも反応するときは反応するんだよ!

「その反応が見れただけでも良しとしようかな。さ、始めよっか」

にやにやしながら、雪ノ下陽乃は言う。これから当分これで弄られるのだろうか。勘弁してくれ……。

「はい、おしまーい」

雪ノ下陽乃の軽い口調とは裏腹に鋭い一撃がコートの隅、ギリギリに打ち込まれる。

「も、もう無理……」

がくりと膝をつき、項垂れる。

戦績は今も含めて五連敗。しかも

こんな運動をしたのはいつぶりだろうか。それぐらい前の話になる。

体力にはそれなりに自信はあるが、それなりでは話にならなかったらしい。立てないとまでは言わないが、スタミナの方は使い果たした。

「もー、だらしがないな。それでも男の子？」

「さ、さつき、覚えたばっかの素人相手に、ギリギリ攻めるやつがあるか……！」

おまけにギリギリというのはコートの隅ではなく、俺が届くギリギリ。諦める事さえも許さないえげつない攻撃だった。

「試合に素人も玄人もないよ。ほら、偉い人も言ってたでしょ？勝てば官軍、負ければ賊軍って」

「俺はその賊軍かよ……」

この場合はどう考えても賊軍は雪ノ下陽乃の方だとは思いますが、そうは言ってもこいつは聞く耳を持たないだろう。そんな耳があるなら、俺もここまで苦労していない。

「で、罰ゲームはなんでしょうか。お姫様」

半ば諦め気味に問いかけると、珍しく雪ノ下陽乃は思案するような素振りを見せる。

「んー、それがね。どれも途中で飽きちやいそうで面白くなさそうだから、次に持ち越す事にしたの」

……一体何個思いついたんだ、この女。しかも罰ゲームの途中で飽きるとかどんな規模の罰ゲームを設定するつもりだったんだ。

と、その時。

俺の鼻腔を良い香りが刺激する。

「お昼も出来たみたいだから、一先ずお昼にしよっか」
「できたって……ここ俺達以外にいたのか？」

人の気配が全くしなかった……いや、そもそも年齢を考えると二人きりになんて危なっかしくて無理か。

「残念でしたー。私と景虎がここに来る前に使用人が二人ここに来て

ました。思春期の男女が同じ屋根の下で寝食を共にするのは流石にマズイでしょ？もしかして期待してた？」

「してねえよ。寧ろ安心した」

これなら飯に何か混ぜられるような事はないだろう。雪ノ下陽乃の作った飯なんて何が入ってるかわかったもんじやないから満足に食事も取れない。

とりあえず、適当に汗流してから飯食うか。いくら涼しいって言っても夏だし、雪ノ下陽乃と違って、俺はかなり動いた。冬でも汗だくになっていただろう。

「シャワーって何処にある？」

「シャワーだけなら部屋に備え付けてあるよ」

なんかドアあるなと思ったらそういう事か。別荘にすら備え付けのシャワーがあるとか流石は金持ち。金をかけるところは何処までもかけるな。

一旦、雪ノ下陽乃と別れ、俺は部屋にあったシャワーで汗を流す。汗を流すためだけにシャワーを浴びるっていうのも随分と久しぶりだ。中学以来だな。

あまり時間をかけるとまた雪ノ下陽乃に文句を言われるので、さっさと流してからすぐに着替え、髪も適当に拭いてから、リビングへと向かう。

リビングに着くと、まだ雪ノ下陽乃はおらず、使用人の人が昼食の準備をまだしていた。

使用人の人はこちらを見て、一礼するとすぐに準備を終えて、静かに部屋を出て行った。なんというか、ドラマとかで見るのと違うな。仕え従っている人にはともかくとして、俺みたいな一般人には結構くだけているのかと思っていたが、扱的に俺は雪ノ下陽乃の次くらいには高いらしい。

する事もないし、スマホのアプリをしていると、雪ノ下陽乃が来て、俺のスマホの画面を覗き込む。

「何やってるの？」

「ファ○ナルファン○ジーのリメイク版。うちには昔のゲーム機器が

ないから、携帯でやるしかねえんだ。あ、言つとくがこれはアプリだからな。お前の言うゲームのカウント外だ」

「必死だね。そんなに大事？」

「俺の命の次の次の次くらいには」

「そつか……あれ？それって大事な部類に入るの？」

「大事大事超大事。なんていっても五本の指の中に入ってるからな」

人生で大事なものの中の五つに入ってるってめっちゃくちゃ大事だよ？え？計算が合わない？そりやそうだ。俺の命は二番目だからな。

何時もなら飯食べながらゲームがセオリーなのだが、流石に一人ではないし、相手が雪ノ下陽乃なので下手をすると携帯を叩き壊されるかもしれない……言い過ぎかもしれないが、こいつなら『データ初期化して買い直してあげるから』って笑顔で言っけきそうなんだよな。初期化したら意味ねえよ。

「次は何しよつか？」

昼食を食べ終えて早々に雪ノ下陽乃はそう告げる。

「何するつっても限られてるだろ。それに勝てる勝負が思いつかねえよ」

そもそも勝てるものが存在するのかどうかというところだが、そんな事は雪ノ下陽乃には関係がない。こいつの脳内では『遊ぶものを決める↓勝つ↓罰ゲームをさせる↓愉しむ』がループしているのだ。そ

もそも外面を飾っている状態ではない今の状況で、相手が愉しむという選択肢は残念ながらこいつの脳内には一切存在していない。否、相手が苦しむというのは入っているかもしれない。

まあ、早い話が俺はこの別荘には罰ゲームをさせられるために連れてこられ、そして一時でも雪ノ下陽乃の退屈を凌ぐために存在している。それ以上それ以下の理由なんてないし、ともすれば退屈凌ぎにすら無くなれば置いていかれる可能性もある。やだ、怖い。

……ふう。仕方がない。こんなことはしたくなかったし、リスクが高いから避けたかったが、雪ノ下陽乃の退屈が今の状況では一番怖いのも確か。背に腹は変えられない。

「ハル。ゲームは好きか？」

「んー、景虎の言うゲームはあまりやった事ないかも。でも、興味はあるかな。どうしたの、急に？」

「ちよっと待ってる」

俺は部屋に向かい、バッグの中を漁る。

こんなときのために俺のバッグは俺の手によって特殊な構造になっている。雪ノ下陽乃と出会って間もなく、こうなる事を悟って作った俺自身を褒めてやりたい。

バッグの中からP○Pを引つ掴んでリビングへと戻る。

「ほらよ」

俺は右手に持っていたP○Pを雪ノ下陽乃へと差し出すと、雪ノ下陽乃は目を瞬かせる。まあ、あんなにゲームが大事って言ってたやつが、データ消されるリスクを背負ってなお持つてくるのはともかく、わざわざ目の前に晒すというのは考えられない行為だ。

「言つとくが、それはお前用だ。そんでもって、これからするのはゲームでの対戦。あんまりやった事ねえんだろ？なら、暇潰しにはなるし、さつきはお前のフィールドでしてやったんだ。次は俺のフィールドでやってもらうぜ」

「……ふーん、そう来たの。景虎にしては考えたね」

そう言つて雪ノ下陽乃はP○Pを俺から受け取る。

「やり方は教えてくれるんでしょ？」

「当たり前だ」

いくら相手が雪ノ下陽乃で、今こそ逆転のチャンスと言えど、やり方は教えるし、訊かれたことなら全部答える。それでも俺の方が有利なことに変わりはないが、今まで散々不利な条件でやらされては罰ゲームの刑に処されてきたのだから、これぐらいは大目に見て欲しい。

「いいのー？私に勝つチャンスなのにー？」

どうやら俺が考えている事は雪ノ下陽乃にはお見通しらしい。まあ、わかつてはいたことだし、結構露骨だしな。

とはいえだ。俺は腐ってもゲーマーだ。

どんな手を使ってでも勝ちたいとは思わないし、雪ノ下陽乃に勝てる可能性を減らす事になっても、やはり一番正攻法に近い形で倒したい。

それにー。

「お前がどう思おうと勝手だけどな。勝ち負け以前に俺はゲームを楽しみたいんだよ。お前に罰ゲームをさせられるのはそれはそれで面白そうだけどな」

ついでに言うとそのあとはかなり怖そうだし。もうこの際負けなければいいかなって思ってます。

俺がそう言うと、意外だったのか、はたまた予想通りの回答だったのか、雪ノ下陽乃はつまらなさそうに返事をするだけだった。

因みに俺が対戦するのに選んだのは伝説の傭兵とか出てくる某ゲーム。

出たのは少し前になるが、最近またもう一周している。特に深い意味はないが、なんとなーくやりたくなっただけだ。そしたらこれである。タイミング的には都合が良かったといえれば良かったか。このゲームには対戦機能もあるし、格ゲーよりも飽きは早くない。格ゲー系統は人によるが飽きが早いしな。

やり方を教えると流星は雪ノ下陽乃こと魔王様はスムーズどころか、寧ろ怖いくらいに覚えが良く、やりながら教えてもいないことを勝手にしていく。

慣れるまで適当に援護しつつサイド系統をこなしていたのだが、気づけば普通のプレイヤーと変わらないレベルで技術を習得していた。

「ん。もう大丈夫だよ。覚えたから」

「よし。じゃあやるか」

対戦モードに切り替え、装備を選択。

まあ、最初は様子見……と見せかけて、俺流初心者殺し装備を選択！

邪道？はっ！必要最低限の義務はすべて果たした！よって俺は卑怯じゃない！

マップはランダムで決まった障害物は少し多めのマップ。

初っ端から入り組んだところではなくて良かった。先にそつちが出てくると慣れられるからな。

お互いに正反対の位置からのスタート。

俺は一目散に段ボールの散らばる場所へ。そしてすぐさまそのなかの一つにC4爆弾を設置。

後は装備をハンドガンに替えて進んでいくと、雪ノ下陽乃の動かす敵が前方を通過したのを確認して引き返し、曲がり角のところにクレイモアを設置してから、敵の視界に映るように移動する。

すると、雪ノ下陽乃は驚くべき速さで俺目掛けて発砲する。連射速度と威力からしてアサルトライフルだろうが、それ以上に雪ノ下陽乃の驚異的な攻撃速度には舌を巻く。

障害物に身を隠すと、絶妙の角度で手榴弾が放り込まれ、緊急回避する事で最低限のダメージに抑えるも、すぐにまた連射が俺を襲う。

からがら逃げ出し、安全な場所に逃げ込んだ時には体力はほぼゼロで一発とて喰らえない状態だった。

今の状況、どちらが初心者か分かったものではない。雪ノ下陽乃は一方的に俺を攻撃し、後一步のところまで追い詰めた。勝ちほぼ確定。悠然とした足取りでこちらへと向かってくる様は魔王そのものだ。

だが、それがどうしたというのだろうか。

ゲームにおいてほぼ確定というのは、一番用心しなければならない

言葉。そして初心者が勝ちという美酒に酔い、最初に足元をすくわれる言葉だ。

敵に狙われないギリギリの角度から自分の仕掛けたクレイモアを撃ち抜き、破壊する。

これ自体には何の意味もない。無意味な爆破であるし、雪ノ下陽乃もおそらく俺が狙いを外したのだと思っただろう。事実、クレイモアが当たるか否かのギリギリまで引きつけて撃ったのだから。

敵は進路をより俺の死角側に移動し、さっきのような事がないように警戒度を上げて接近してくる。

そして段ボールの散らばる場所に接近した時、絶妙にC4爆弾の射程外で足を止め、段ボールめがけて乱射する。

すると、俺の仕掛けていたC4爆弾が撃ち抜かれて爆発する。

雪ノ下陽乃の方を見ると、まるで「その程度の罠とは片腹痛い」とでも言わんばかりにドヤ顔でこつちを見ていた。ウゼエ。

そんなことはわかってる。わかっただけじゃないと、お前にはその位置で、何も盾に出来ないその位置から動かないようになってもらわなければならなかったんだから。

ハンドガンから切り替えたのはロケットランチャー。このゲーム中一番のホーミング機能を持ち、プレイヤーの体力なら余裕で飛ばせる優れもの。

C4爆弾が爆発したと同時に既にロケットオンしていた敵めがけてぶっ放す。

発射音は爆音にかき消され、黒煙がロケットの存在を有耶無耶にする。

それゆえに雪ノ下陽乃は気づかない。直撃したその瞬間まで。

着弾音と共に俺のP○Pから勝利を告げる音声が届いてくる。

ふっふっふ。ざっとこんなもんだ。

このロケットオン式のロケットランチャーは一発しか弾がないが、その代わり障害物が近くにない限り、プレイヤーを絶対に殺す。おまけに撃ちさえしなければ、壁の一つ向こうくらいの場所なら居場所を教えにくる優れものだ。

つまり、このロケランこそが始めから本命で、後の二つはただのブラフなのさ。

さて、雪ノ下陽乃は今どんな顔してるか……な……？
ちらつと横目で表情を見たら、画面を見たまま固まっていた。

何が怖いってそれが笑顔だ。だが、笑顔なものにもすごく冷たい。

「……景虎」

「な、なんだ？」

「もう一回やろ」

「お、おう」

それはそこはかとなく提案ではなく、命令であるような声のトーンだった。しないと殺す、と暗に言っているような気がした。

なんだろう……勝つには勝ったのに負けた時よりも酷い状況なんです、これは。

こうなったら次はわざと負けてー。

「景虎。手を抜いたら……わかってるよね？」

「当たり前だ。俺はゲームにだけは手を抜かねえ」

無理無理。これ全力で勝ち続けるしかないやつだ。それでもって、いずれ来るであろう雪ノ下陽乃の勝利までゲームしなくちゃいけない系のやつだ。

そうして、俺提案のゲーム対戦はその日から帰る日まで時間を見つけてはする事になり、はからずも俺の求めたゲーム三昧の時間を過ごす事になったのだが、人生で初めて恐怖と戦いながらゲームをするという異様な状況のまま、最後の最後に雪ノ下陽乃の勝利となり、これを機に雪ノ下陽乃はゲームも強くなる決心をしたそうだ。

……俺は人生で初めて知人にゲームを薦めた事を後悔した。

宴に誘われるように魔王は来訪する

季節はいよいよ秋に入り、暑さもゆるやかにを潜め始めているこの頃。

二泊三日のお泊まり会以降、どうい風吹き回しか、俺が雪ノ下陽乃に呼び出されることはなかった。

そのおかげでゲームとバイト時々友達と遊ぶという実に快適な生活を通じていたのだが、これがきつと嵐の前の静けさというやつなのだろうとどことなく感じていた。

というのも、十月に入れば大体の高校は文化祭という学校生活における一大イベントを開催する。

俺の母校も当然ながら雪ノ下陽乃の母校である総武高校もその限りではなく、十月には文化祭をするらしい事をバイト先の総武高校に通う子から聞いた。

祭りとか超やばい。絶対に雪ノ下陽乃がそれを聞いて何もしようとなしはずはない。おそらく、勝手にOGとして乱入して「地域との親交を」と的なる事を適当にのたまいながら、説得もとい洗脳し、そして気がつけば雪ノ下陽乃の為の文化祭と化しているに違いない。何より可哀想なのは、それを最高の文化祭として完結させたと勘違いさせられた子達だ。憐れにも程がある。

憐れにも程があるといえば、それは妹ちゃんもだ。

どこの高校に進んでいるのかは知らないが、あの子のいるところにも雪ノ下陽乃の魔の手は進む……というか、ハイパーシスコンであると自負しているであろう雪ノ下陽乃が妹ちゃんのいるところに行かないわけがない。何よりも優先して向かいそうなほどだ。

そしてそこには比企谷くんもいる。

どんな関係であれ、一緒に外出していたということは同じ高校に通ってはいるということだろう。そうなれば、妹ちゃんの次に目をつけられるのは彼と見た。否、目をつけられないはずがない。

しかし、連絡先を渡してかれこれ三ヶ月。何の連絡もないのは比企谷くんが俺や雪ノ下陽乃が思っていたよりも曲者だったのか、はたまた

た既に雪ノ下陽乃に丸め込まれたのかわからない。もしかしたら、雪ノ下陽乃にしては珍しく限度のある行動をー。

プルルルルルル……。

その時、スマホが鳴った。

ダースベイダーではないのでまず雪ノ下陽乃ではない。雪ノ下陽乃はメールも電話もダースベイダーにしてるからな。一発でわかる。

送られてきたメールを確認すると、俺は思わず溜息を吐いた。

『比企谷です。』

雪ノ下さんが来ました。一悶着ありそうなのでよろしくお願いします。千葉県立総武高校の会議室です』

短く綴られた文章は、およそその状況を察するのに申し分のないものだった。

しかもこの文章。どうかしてくれとは書かれていないところを見ると、比企谷くんは俺が雪ノ下陽乃をどうこうできる人間ではないと理解しているらしい。やはり思った以上に聡明だ……いや、わかりやすいか。雪ノ下陽乃の本質を知っているのなら、彼女をどうこうできてしまう人間はそれこそ人ならざる何かなのではないかと思ってしまうところだ。

ここから総武高校は……徒歩で三十分か、遠いしバイクで行くか。大学が休みになってから乗る機会が無かったが、これを機にまた乗っておかないと。

手早く準備を済ませ、俺は魔王の待つ総武高校へと足を向けた。

意外にも総武高校にはすんなり入れた。

特別な行事でもないし、ぶつちやけ入るのに一苦労するかと思つていたのだが、雪ノ下陽乃の関係者である旨を伝えると「有志の方ですか」とかなんとかいって余裕でいけた。それどころか、最初に言った比企谷くんの名前を出したら「え？誰ですか、それ」って顔をされた。目立たないタイプだとは思うが、そこまで地味でもなかった気がする。

受付を済ませて来賓用のバッジをつけ、校内見取り図を見て会議室へと向かう。

向かっている途中で見かける教室ではやはりというべきか、文化祭へ向けて色々と準備をしていた。おかげで俺を見ても、あまり訝しむような生徒はいないし、有志の人間と勘違いしているのだろう。別に悪いことをしに来たわけじゃないんだが、騙しているような気がして少し気がひける。

歩くこと三分。

会議室に着きはしたのだが、思いの外静かだ。

雪ノ下陽乃がいる以上、もつとこう……どんちゃん騒ぎしてるかと思つていた。

もしかしてもうやらかしたのか？いや、雪ノ下陽乃のやらかしたはこんな露骨なものじゃない。もつと後になって、そして雪ノ下陽乃に一切の非はない形で発覚するはずだ。本人の性格から考えて、今すぐわかるような事はないだろう。

ということは入れ違いになったのか。はたまた会議中なのか、どちらにしても入り辛いことこの上ない。

どうしたものかと悩んでいると、不意に隣から声をかけられた。

「あの……何かご用ですか？」

「ん？」

声をかけてきたのはピアスをした赤い髪の女子生徒。

見た感じ、『最近の女子高生その一』感を醸し出しているその子は怪訝そうな表情で俺を見る。

「実は知り合いに呼ばれたんだ。で、ここには来たものの、中が静かに入っていいかどうか悩んでたんだ」

「あ、それじゃあ、私が確認しますね」

事の顛末を説明すると女子生徒は自らその行為を買って出てくれた。いや、ありがたいけど、この子も俺の事を有志の人間と勘違いしてるんだろうな。そうじゃないとわかったら面倒くさそうだ。

「ごめんなさーい、クラスの方に顔出してたら遅れちゃいましたー」

謝ってる割には全然悪びれる様子のない声音で言う女子生徒は中の様子を見ると「入ってきていいですよ」と中から告げる。ほっ、会議中じゃなかったか。

「失礼します。こつちに雪ノ下ー」

「あ、やつほー。景虎」

「……やつぱりいたか」

俺が言い切るまでもなく、雪ノ下陽乃は目の前にいた。一人私服で明らかにこの中では異端の存在でありながら、雪ノ下陽乃はさも当然と言わんばかりに空気に溶け込んでいた。というよりも空気を自分に合わせたと言った方が正しいかもしれない。あ、比企谷くんと妹ちゃんも。

「はるさんのお友達ですか？」

何処かほんわかした空気を醸し出す、おでこがつると光る女子生徒は雪ノ下陽乃に問いかける。

「違うよ。彼氏」

その瞬間、空気が凍った。

事実を知っている比企谷くんと妹ちゃんはともかく、他の生徒の表情は全員驚きに満ちていた。まあ、思っていることはわからないでもないけどな。

「それで？なんで景虎がここにいるの？」

「あ？超能力だけど？」

流石に比企谷くんの名前を出すわけにはいかないのだが、これはいくらなんでも嘘が過ぎるか。

「五点。景虎にそんな能力があるなら、私でも勝てないよ」

いや、超能力あってもお前には勝てる気がしないんだけど。

「ま。なんでもいつか。どちらにしても景虎には来てもらおうつもり

だったし」

「……もしかして有志か？」

なんとなく、想像出来たので訊くと雪ノ下陽乃は笑顔で肯定した。ここまで来るとそれぐらいしかかないし、そもそも雪ノ下陽乃はそれを目的の一つとしてここに訪れたはずだ。ならば、この状況でその言葉が出るのは何もおかしいことではない。

「いいぞ。やってやる」

「へ？嫌じゃないの？」

意外そうな表情で雪ノ下陽乃は言う。

嫌に決まってるだろ。でも、断ったところで意味もないしな。なら初めから肯定するだけだ。

「たまにはそういうのもありだと思ったただけだ。それで？誰に頼めばいいんだ？」

会議室内の全員に問いかけると、全員の視線がさっきの赤い髪の子生徒に移る。

「あ……相模南、です」

相模と名乗った女子生徒の声は萎んでいく。

それも仕方のない事だ。何故なら雪ノ下陽乃が見ているのだから。それも商品を値踏みするかのように。価値を推し量り、どれだけ利用できるか、どれだけ遊べるかを知る為。その時の雪ノ下陽乃はあの意味では一番外面が消えている状態とも言え、ぶっちゃけ温度差が凄すぎて怖い。嫌いではないが。

「ふうん……」

雪ノ下陽乃は小さい息を吐いて一步詰め寄る。

「文化祭実行委員が遅刻？それも、クラスに顔を出していて？へえ……」

さつき相模ちゃんが言っていた事を復唱する声音は低く威圧的だ。先程まで明るく振舞っていただけに凍てついた表情からは怖さが際立っている。従順であるなら友好的に、刃向かうなら徹底的に。それが雪ノ下陽乃だ。

それでもって、その為にここに俺がいるわけだ。

「はい、ストップ。後輩を威圧するな」

二人の間に割って入り、雪ノ下陽乃の方を見る。

これ以上は少し可哀想だ。雪ノ下陽乃の機嫌を多少損ねるだろうが、年下の子が目の前で嬲られているのを見る趣味はない。

俺の仲裁に、一瞬雪ノ下陽乃はムツとした表情を見せたが、すぐに笑顔になる。

「威圧なんて酷いなー。私は『文化祭を最大限楽しめる者こそ委員長に相応しい資質！』って言いたかっただけなのに。えーと、その委員長ちゃんに」

名前ぐらい覚えてやれよ。と思ったが、寧ろそれは安心できる要素だ。

雪ノ下陽乃に名前を覚えられていないということは遊ばれる事はまずない。利用価値も限りなく低いだろう。それぐらい雪ノ下陽乃は価値の無いものに興味を持たないし、関わらない。

しかし、そうした意図が汲み取れるのはごく僅かの人間で、相模ちゃんはそれを自己に対する肯定と受け取ったらしい。嬉しそうに頬を赤らめている。あー、これはもう駄目みたいですわね。

「で、委員長ちゃんにお願いなんだけど、私達有志団体で出たいんだよね。で、雪乃ちゃんに相談してみたんだけど、渋られちゃって。私、あんまり好かれてないから……」

くすんとしおらしい態度を取ってみせる。その態度は俺以外にもわかるくらいわざとらしくあるが、あざといし可愛らしいせいで誰も責める気が起きないらしい。

「……いいですよ。有志団体足りないし、OGの方が出たりすれば、その、地域との繋がりがり?とかアピールできるし」

……あ、この子ちよろいな。もう雪ノ下陽乃に籠絡されていた。

こうなると最早俺が出る幕は無い。何せ、トップが即座に陥落した上、俺と雪ノ下陽乃。競い合うには些か以上にコミュニケーション能力の差が開きすぎている。

……仕方ない。アフターケアの方に回るか。

「や、久しぶり」

俺が声をかけると、依頼主的なポジションである比企谷くんは頭を下げるだけだった。人見知りなのだろうか、はたまた俺が嫌われてるのか。

「悪いね。折角来ておいて、何も出来なくてさ」

「……彼氏さんでも、雪ノ下さんは手に余るんですね」

「俺でも？ ははっ、誰でもだよ」

今も相模ちゃんやおでこちゃん達と楽しそうに話している雪ノ下陽乃を眺めながら言う。

「それはそれとして、意外だね。比企谷くんの事はよく知らないけど、こういうのはやらない子だと思ってたよ」

なんていうか、比企谷くんからは『働きたく無いでござるー！』というオーラが全力で感じられる。

「はあ、俺もそう思ってたんですけどね」

この口ぶりだと適当に仕事を決めてもらったら、割と面倒な仕事につかされたやつか。

「あの……雪ノ下さんって、何考えてるんですかね」

「さあね。俺にもよくわからないけど、ハルは子どもだから」

「雪ノ下さんが……ですか？」

どこか納得のいかなさそうな表情で比企谷くんは言う。

「まあ、ハルの事は理解しようとしなくてもいいし、俺もするつもりはない」

そも、本人が理解されるつもりがない。

そういうところは妹ちゃんと同様に心の壁とやらを感じる。ただ、二人の違いは迎撃システムを搭載した薄い氷のような壁か、攻略不可能の迷路の奥にある分厚い鉄の壁かの差だ。雪ノ下陽乃と妹ちゃんの違いは少なからず他者に理解されることに対して拒絶してはいない。その分、雪ノ下陽乃よりも俺からしてみれば仲良くなれそうな気がする。

「皆さん、ちょっといいですかー？」

不意に相模ちゃんが一段と大きな声で全員に問いかける。

相模ちゃんは調子を整えるように軽く咳払いをすると、緊張気味に話し始める。

「少し、考えたんですけど……文実は、ちゃんと文化祭を楽しんでこそかなって。やっぱり自分たちが楽しまないと人を楽しませられないっていうか……」

彼女の口から出たのはつい先程雪ノ下陽乃が言ったそれとほぼ同じだった。比企谷くんを見ると、彼も同意見らしく、肩を竦めるだけだった。

「文化祭を最大限、楽しむためには、クラスの方も大事だと思います。予定も順調にクリアしてるし、少し仕事のペースを落とす、っていうのはどうですか？」

相模ちゃんの提案に皆が考えるように間をとった。

反応から察するに彼女の言う通り、進捗状況はまずまずといったところか。

しかし、その案に妹ちゃんが異を唱えた。

「相模さん、それは少し考え違いだわ。バッファを持たせるための前倒し進行で……」

「いやー、いいこと言うねー。私の時も、クラスの方、みんな頑張ってたなあ〜」

「ほら、前例もあるし。それに……その時って凄い盛り上がりだったんでしょ?」

相模ちゃんは確認するように妹ちゃんに言うが、妹ちゃんは答ええない。

相模ちゃんは壮絶な勘違いをしている。確かに雪ノ下陽乃は「クラスの方、みんな頑張っていた」とは言ったが、文実とやらを蔑ろにして、とは言っていないし、雪ノ下陽乃が委員長か何かをしていたのなら、帳尻は合わせられていたはずだ。あいつほど人を動かすのに長けた人間が、自身への負担を大きくするはずがない。

「やっぱいいところは受け継いでいくべきだしー。先人の知恵に学ぶっていうかき。私情を挟まないでみんなのことを考えようよ」

「あ、ちよつといいかな?」

あちらに雪ノ下陽乃がついたのなら、俺は妹ちゃんの方につきよう。これ以上、被害の拡大は避けたい。

俺が挙手すると、全員の視線が俺に集まる。無論、雪ノ下陽乃も。「部外者の俺がどうこう言っていないことじゃないとは思うけど、妹ちゃん……じゃないな。雪乃ちゃんが言ったように今ある余裕はバッファを持たせるための前倒し進行から生まれてるものであって、決して予定より順調に進んでいるわけじゃないって事は覚えておいて欲しい。実際、負担が集中している子もいるはずだから。そういう子へのサポートもしてあげてほしいかな」

まあ、結局俺が何を言いたいのかというところ「クラス云々よりも自分の与えられた仕事を全うしろ」である。我ながらオブラートに包んでかつ、遠回しな表現になったが、これでどつちに転ぶにしても多少なり意識改革があるはずだ。

そして俺の意図が多少なり伝わったのか、相模ちゃんの意見に同調しかかっていた空気の流れが止まったものの、彼等のうち何人かは自分のクラスへと帰って行く。

わかっている。この案の可決は阻止できなかった。

それは誰でもない。雪ノ下陽乃の望んだ結果だ。

何を企んでいるのかはわからない。ただ、こうしようと望んだのは雪ノ下陽乃であり、それに相模ちゃんは体良く利用された。本人が気づく事はまずないだろうが。

元より、阻止できるなど思い上がってはいない。俺が出来ることなど留める事か、或いは逸らす事だけだ。

そしてそのどちらも成功はした。実際、雪ノ下陽乃の視線は今現在俺へと向けられたまま……というか、こっちきた。やだ、怖いよ、目が笑ってないよ！

「へえー、景虎はそっちにつくんんだ？」

「こっちもそっちもどつちもねえよ。俺もお前も、事実を言ってるだけだ」

雪ノ下陽乃は経験論を、俺は現実論を唱えているだけだ。

両者に嘘はないし、理想論だって述べていない。

ただ視点が違うだけだ。俺が凡人目線で語るなら、雪ノ下陽乃は終始自分の目線で語っている。それ故に意識は同じでも結果に誤差が生まれる。相模ちゃんが雪ノ下陽乃と同じ行為をすれば、待つのは破滅だけだ。

「俺達はあくまでも部外者だ。自分の勝手にどうこうしちゃいけねえんだよ」

卒業生だろうがなんだろうがこのイベントには参加させてもらっている側なんだ。そうした観点でいえば、俺も雪ノ下陽乃の立ち位置はそうは変わらない。あるのは意識の差だけだ。

「そ。私は別にどうでもいいけどね。敵もいた方が面白いし」
「だからそういうんじゃない……人の話聞けよ。つたく」

雪ノ下陽乃の思惑に介入した事で、雪ノ下陽乃に敵対行為と取られたらしい。妨害したのだからそれも仕方がない事なのだが、これはこれで面倒な事になったな。

俺と雪ノ下陽乃が会議室に顔を出すようになってから数日、やはりというべきか、委員会を休む或いは遅れる生徒がちらほらと見え始めていた。

とはいえ、それらは殆ど支障をきたさない。休んでいる者は本当にごくわずかな上に、遅れたりしても事前にその旨を伝えられている。

しかし、有志団体の増加やそれに伴う宣伝広報への協力場所の増加、予算関連の再算出とへビーな仕事が出てきて、仕事量の偏りも見え始めた。

仕事をする期間が文化祭当日の者はまだ良いとしても、有志、宣伝、会計の人員不足は手痛く、そうした部分は執行部に属する人間が力

バーしているらしい。そしてそこでの主戦力となるのは生徒会役員と妹ちゃんだ。

これが雪ノ下陽乃の狙いだったのだろうか。

客観的に見ても、妹ちゃんの介入は大きかった。それでも徐々に仕事は積もりつつあるし、処理しきれないのは誰の目にも明らかだった。

そして終いには全く関係のない役割の人間にも仕事がちよくちよく回っている。完全に相模ちゃんのそれは裏目に出ている事に気付いているのははたして何人いる事やら。

何故部外者と称したはずの俺がこんなにも現状を把握しているのかという、それは今もお、この会議室には出入りしている……否、雪ノ下陽乃の付き添いでさせられているからだ。

雪ノ下陽乃の言葉で有志として参加する羽目になり、休日をその練習やりに割かれるようになったまでは良い。だが、雪ノ下陽乃は暇つぶし目的で会議室を訪れている。そうなる俺も行かないわけにはいかず、否応なく足を運ぶ事になっていた。

相変わらず、雪ノ下陽乃はおでこちゃんこと城廻めぐりちゃんと昔の話で楽しそうに話している。ここ数日、わかったことだが、どうもあのめぐりちゃんに関しては普通に年下の友達らしい。彼女の人畜無害そうな雰囲気雪ノ下陽乃にも通用するのだろうか。だとしたら強いな。

「文化祭はみんなでやるものだから！仕事ってそういうものだから！助け合わないと！」

なんか生徒の一人が比企谷くんに向けてものすごい勢いで力説していた。ああ、ああいう奴っているよな。助け合うとか言って一方的に頼むだけで自分はいそがしいからまた今度ねって言って永遠にまたが来ないやつ。あ、今度はお茶汲みまで頼まれてる。これは酷い。

しかし、残念ながら俺は比企谷くんを助ける事は出来ない。別に面倒だとか、そういうのじゃなく、単純に……。

「手が止まっているわよ。目だけではなく、手も動かさない！」

絶賛、妹ちゃんにこき使われているからである。

先程も言ったが、妹ちゃんは優秀だ。

雪ノ下陽乃ほどではないにしろ、凡俗の俺からしてみれば天才の部類である事は確かだ。俺なら既にパンクしているところだ。

だが、これは今現在雪ノ下陽乃基準とした例で進められようとしている。ならば、これをしているのは雪ノ下陽乃でなくてはどうにもならない。

だから滞った。流石にこれを放置するわけにはいかず、なんとか言いくるめてから軽く手伝うことにしたのだが、軽くて済まなくなつた。

最初は何が何でも手助けをされるつもりはないと言わんばかりだったのに、手伝いを始めた途端にこれだ。あれか？俺は雪ノ下姉妹にこき扱われる宿命でも背負っているのだろうか？

まあ、雪ノ下陽乃に比べれば遥かにマシだ。あいつはこき扱うのではなく、振り回すの間違いだからな。後搾取するとか。どちらにしたってろくな事じゃない。

「よくここまで手伝うわね」

不意に妹ちゃんがそう口にした。相変わらず、目も意識も仕事へ向けているのだから、ひよつとすると独り言だったのかもしれないが、聞こえた以上、返しておいた。

「こつちが蒔いた種だ。傍観者に徹するのは良くないと思つてな。ほら、こつちの書類は終わった」

委員長や副委員長に確認を取らなくていい比較的優先順位は低いものではあるが、書類は全て処理し、妹ちゃんへと渡す。

妹ちゃんは何も言わずに書類を受け取り、一通り目を通した後、書類の束を他の執行部の人に渡した。

「あなた、優秀ではないけれど、要領はいいのね」

「よく言われる。ま、要領が良くないと出来ない事もあるんでな」
ゲームとかゲームとかゲームとか！

「そう……じゃあ、次はあそこにいる下っ端の手伝いでもしてもらえるかしら」

妹ちゃんの指差した方向にいるのは、なんというか、予想通りに比

企谷くんだった。今の一言であの時二人の外出は確実にデートではなかった事が確定した上にこれでははたして友人なのかすらもわからなくなった。

「こっちの方がどう考えても忙しそうに見えるけど、それでいいのかわ？」

「構わないわ。部外者のあなたにできる事は限られているもの。それなら、使えるところで使うのが一番有効的よ」

そりやそうだ。

「それにあの男が手を抜かないように見張りもつける必要があるわ。人数が少ない現状でそんな事が出来るのはあなたぐらいよ」

うーん……別に手を抜くような人間には見えないんだけどな。

まあ、どちらにしても比企谷くんの机の上も酷い有様だ。

そう思つて席を立った時、三度のノックの後にガラガラと会議室の扉が開かれる。

「有志の申込書類、提出しに来ただけど……」

来たのは以前もいた爽やか系イケメンくん。モデルといつても遜色がない程に顔立ちが整っていて、おそらく雪ノ下陽乃の隣に立てば美男美女として誰もが持つて囃すカップルになっただろう。

聞かれた妹ちゃんは「申し込みは右奥へ」とだけ答える。接客業的には大いに問題があるものの、それはあのイケメンくんも知つていらしく、「ありがとう」と爽やかに答え、申し込みに向かった。

そしてその右奥の人物は今現在俺が担当しているところであった。

「書類の審査、お願いします」

「OK。不備がないか確認しとくよ」

不備の確認やらは大体さーっと見ればわかるので、今まで通りやろうとしたのだが……。

「……何かな？」

ガン見されている気がしたので先程のイケメンくんに問いかけるとイケメンくんは咄嗟に否定する。

「いえ、これといった用事はないんです。ただ……」

「雪ノ下陽乃の彼氏にしてはいまいち冴えない奴だな。あんなに綺麗

な人なのに意外だ……みたいな感じか?」

「全然違います」

大学内では割りと思われてる事なのでわかりきったように聞いてみると、即座に否定された。これはまた。妹ちゃんの時みたいに珍しい反応だ。

「じゃあ、何?」

「陽乃さんの恋人がどんな人なのか、気になったんです。なんていうか……ああいう人ですから」

ああいう人……その言葉がイケメンくんの口から出た時、なんとなく察した。

彼も雪ノ下陽乃の知己であり、そして俺に等しい扱いを受けてきたのだらうと。てつきり俺は見るからに目立つ人気者オーラを放っている彼を見て、雪ノ下陽乃が何か余計な事をしようと画策していたのだと思っていた。

「で、その感想は?」

「俺はお似合いだと思いますよ。陽乃さんと付き合う人がいれば、同じような人か、或いは何処までもついていこうとする人間かのどちらかだと思います」

「そうかい。俺は君の方がよっぽど似合ってるとは思うけどね。君、スポーツはやってるか?」

「サッカー部です、一応主将もしてます」

「ほら。見た目はいいし、スポーツも出来る。これだけで普通の人間なら十分だ。これで勉強も出来れば素晴らしいだろうな」

「まあ、それなりに勉強も出来ますけど……でも、それだけです」

んん?それだけ?いや、一般的な女性が求めそうなものは学生時点で二つ持つてるのにそれだけ?おっかしいなあ……俺にはそれ以上が見当たらないんだが……

「それにあの人はそんな物に興味はありませんから」

確かに。言い得て妙だ。

さつき俺は普通の人間なら、と言ったが、そもそも雪ノ下陽乃を普通の人間として捉えるには些か以上に歪すぎる。それに以前、雪ノ下

陽乃は「面白い人間ならOK」と言った。雪ノ下陽乃にとっての面白い人間とははたして何なのか？皆目見当もつかないが、あの言葉通りならば、雪ノ下陽乃にとって経歴も見てくれも関係ない。

「はい。終わったよ。えーと……」

「葉山隼人です」

爽やかスマイルを浮かべて、軽く自己紹介をしてくるイケメンくんもとい隼人くん。やばいわー、これ俺が女子なら即落ちだわー。

「大変そうですね」

会議室内を一瞥して、隼人くんは言う。

「いや、そこまで大変じゃない。普通に回ってると思うよ」

強いて言うなら、普通に回っている事が問題か。

これでは余計に人が来なくなるだろう。自分が休んでも、有能な副委員長がなんとかしてくれるだろう、他の人間も休んでいるし自分だけが咎められはしないだろう、大体の人間がそう思う。

それは隼人くんも思っていたらしく、妹ちゃんの方を見る。

「でも、見る限りじゃ雪ノ下さんが殆どやってるように見えますけど」
しばし沈黙していた妹ちゃんだが、答えを待っているような隼人くんの視線に耐えかねて口を開く。

「……ええ、その方が効率がいいし」

「でも、そろそろ破綻する」

「それもそうだ。だから、まあ、原因の一端として俺が手伝ってるよ」

まあ、ごり押しもごり押しだったけど。

「俺も手伝うよ」

隼人くんがそう言った。しかし、なんというか……妙に引つかかる。裏を考えているとかそういうのではなく、かといって友達を手伝ったり、困ってる人を助けているといった感じでもない。

妹ちゃんは答ええない。俺の時もそうだったが、どうにも他者から手を借りるといふ事自体を避けようとしている節がある。何が何でも自分一人の力で解決しようとしているような……自惚れというよりもまるで『そうでなくてはならない』という強迫観念にでも駆られているような、そんな風に見える。

となると、ここは年長者として、助け舟を出すべきだろう。

「じゃあ、比企谷くんのところを手伝ってくれるか？俺が有志団体の全部取り持つから」

「……待ちなさい。あなたに任せているのは一部であって、全部は……」

「有志団体側の代表って事でやるよ。仕事が溜まってハルに手伝われるより、よっぽど良いだろ？」

俺の問いかけに妹ちゃんは一瞬迷いを見せたものの、雪ノ下陽乃に手伝われるのがよっぽど嫌なのか、肯定した。まあ、今の雪ノ下陽乃は俺がこちらについている限り、絶対に手伝う事はないだろうがな。

しかし十中八九、自業自得とはいえ、ちよつとだけ雪ノ下陽乃が可哀想な気がしてきた。嫌われすぎだろう。

はてさて、手伝いが一人増えたところでどれだけ持つだろうか。結局は破綻を先延ばしにしているだけのように見えなくもない……というか、多分そうだ。この先待っているのは悪化の一途だけ。それよりも先に文化祭が来るか、こちらが破綻するかのチキンレース。

結果は見えているが……やれる事はやってあげよう。

結局のところ、文実は荒れていく。

文化祭まで二週間を切った頃。

ついに予想していた出来事が起きた。

俺が会議室に向かった頃、いつも以上にてんやわんやの状態で対応に追われ、隼人くんもいつもの爽やかスマイルが引きつっていた。

ここ最近、この人数でも回せていたのに何事かと思えば、いつもと違うところに気がついた。

妹ちゃんがいないのだ。

接した機会は少なけれど、あの妹ちゃんがサボるわけもない。ともすれば、体調不良か何かだろう。

そう思っていると、俺が会議室に入った直後にまたも会議室の扉が開かれた。

入ってきたのはスーツの上から白衣を着た綺麗な女性。見た感じ、目付きの鋭さからキツそうな印象を感じさせるが、それも含めてかなりの美人だと思う。

「比企谷」

「はい？」

比企谷くんが返事をする、その人は近くまで行くと、神妙な面持ちで話し始めた。

「雪ノ下なんだが、今日は体調を崩して休みだ。一応学校には連絡があったんだが、文実の方に連絡は来てないんじゃないかと思ってな」

やはりというべきか、妹ちゃんは体調を崩しての欠席らしい。

と、そこでふと思った。

以前、雪ノ下陽乃は妹ちゃんは一人暮らしをしていると言っていた。

となると、看病する人間なんているはずもないし、仮に家でぶっ倒れてしまったら、誰も助けてはくれないだろう。

そしてそれは隼人くんも同じらしく、はっと気づいたように顔を上げると、

「雪ノ下さん、一人暮らしだから誰か様子見に行ったほうが」

「そうなんだ……。じゃあ誰か雪ノ下さんの様子、見に行つてあげてくれない？こつちは任せてくれて良いから」

めぐりちゃんが比企谷くんと隼人くんに言う。

「先輩達だけで大丈夫ですか？」

「うーん……。うん。私でわかる事なら対処出来ると思うし、はるさんの彼氏さんもいるから大丈夫、と思う」

口調こそ自信なさげではあるものの、妙に頼り甲斐のある微笑を見せる。それが俺に全幅の信頼を寄せてでなければ、特に問題はない。

まあ、妹ちゃんの事はあの二人のどちらかに任せてしまえばいいだろう。俺が言つたところで何ができるわけでもない上に、あちらも気を使うだろうし。

「会長っ！」

バンっ！と勢いよく会議室の扉が開かれ、生徒会役員がつかつかと入ってきた。

「どうしたの!？」

「実は、スローガンの事で問い合わせが来てまして……」

「うわあ！こんな時に！」

早速大きな問題が起きたらしい。しかもスローガンか、さては著作権にでも引つかかりそうなものでも引用したのか？

「さて、雪乃ちゃんの様子はどっちが見に行く？出来れば、片方は残つて手伝つて欲しいけど」

「俺は行つても構いませんよ」

「そっか。なら、比企谷くんはどうする？」

「……気が利く奴が行つたほうが良いんじゃないですかね。そつちの方が役に立つでしょうし」

成る程、そういう意見か。

「なら、比企谷くん。君が行くといい」

「そつすね……。はい？」

まさか自分が指名されると思つてなかつたらしく、比企谷くんは素っ頓狂な声をあげた。

「なんで俺が……」

「気が利く奴が良いと言うなら、そいつはここに残ったほうが良い。理由は……」

「気が利く人間には頼りやすい。人手が少ない状況ではより多く事態を捌ける人間がいた方が効率が良い、ですよね？」

そう言うとき隼人くんは同意を求めようと俺の方を見た。

まあ、その通りだな。見ていて思ったが、比企谷くんは仕事はできるが、それは頼られているというよりも押し付けられているといった感じだ。そしてそれでは違うところで仕事が滞っているだけで、何の解決にもなっていない。

だが、隼人くんなら本当の意味で頼られる。押し付けでも、委託でもない。皆から必要とされている存在だ。

「……わかりました。俺が行きます」

そして比企谷くんもそれに納得したようで頷いてからさっきの女性――女教師のところに向かった。

「……どう思いますか？」

「何が？」

「比企谷の事です」

あまりにも唐突に隼人くんは問うてきた。

質問の意味がいまいちわからないが、訊かれた以上答えるほかにいい。

「俺は彼の事をあまり知らないけどね。とりあえず、社畜っぽいって思った」

寧ろ、この文実とやらでは社畜を一人体現していた。他人に仕事を投げられ、嫌がりながらも淡々とこなし、こなせばこなした分だけ、また投げられる。彼ほど社畜を体現している人間はこの場にはいないだろう。

しかしながら、それを作り出したのは他でもない雪ノ下陽乃だ。そして遠因として俺も。それらを考慮して、彼には妹ちゃんのところに行って欲しかった。

「隼人くん。君はどう思うか？」

「優秀だと思います。しなくて良い事もして、雑務という名目で全て

の役職に触れてきた彼を役立たずなんて誰も言えないはずだ」

「優秀か。俺は君の方が有能だし、優秀だとは思う。皆からも信頼されているし」

「そう言われると悪い気はしませんよ……その言葉に裏がないのなら」

目を細めてそう言う隼人くんに俺はどこか納得してしまった。

ああ、やはりこいつも雪ノ下陽乃に影響を受けた人間なのだ。

隼人くんはさつき俺が褒めていない事を悟った。そう言う風に言ったつもりではあったが、こんなにもあつさりと悟られるとは思ってもみなかった。まあ、元々雪ノ下陽乃のように真意を隠して話すのは得意じゃないから、彼からしてみればかなり露骨だっただろうけど。

なら、隠す必要もないか。

「正直同情するよ。君みたいな人間ほど、世の中つてのは生き辛いもんだ。羨ましいだろう？比企谷くんみたいな人間は」

俺が問いかけても、隼人くんは苦笑するだけで答えない。

これが彼の生き方ということか。誰からも頼りにされ、必要とされ、それに応じ、いつしか常態化されてしまう。そしていずれば末端の人間にまで手を差し伸べ、最後には一番大事なものを選ぶ権利さえも奪われ、全てを掬えと強要される。取り零しなど許さないと。果たしてこれほど残酷な生き方などあるのだろうか。何かを捨てなければ、何かを得ることのできないのが人間で、彼は今現在自己というものを捨てているのではないだろうか、誰もが求める存在であるが為に。

「悪い。踏み込み過ぎた。妹ちゃんが来る前にちやちやつと片付けようか」

「そうしましょう」

これ以上は気まづくなるだけだと思い、話はそこで終わらせる。彼としても都合が良いだろう。今の彼の仮面を壊す事は誰も求めていない……ただ一人を除いては。

そしてそれをすべきは俺じゃない。それは彼自身の役目なんだか

ら。

翌日、妹ちゃんは無事文実の方に顔を出すようになった。

本当にただの体調不良だったらしく、次の日からはまたいつものように顔を出し、黙々と仕事をしていた。

そして今は昨日問題となったスローガンについてだが……

『面白い！面白すぎる！』潮風の音が聞こえます。総武高校文化祭
』

誰だ、こんなの採用したやつ。埼玉じゃん。饅頭じゃん。まんま流用じゃん。

そんなわけで今日はオブザーバーとして俺も出席。そして隼人くと魔王も。

ここまで俺がいるからという理由で何もしてこなかった魔王、雪ノ下陽乃だが、今日はめぐりちゃんからのお願いで参加するらしい。因みに俺がお願いするには土下座してでない駄目なんだと。誰がするか。

しかしながら、これ自体が文実としての秩序が失われていることの何よりの証であると言える。

実際、人は集まったもののら会議は一向に始まる気配を見せず、挙げ句の果て、取り仕切るはずの相模ちゃんは書記の子とくつつちやべつている。

やる気あんのかと言いたいところだったが、その前に見かねためぐりちゃんが声をかけた。

「相模さん、雪ノ下さん。みんな揃ったけど」

言われて相模ちゃんはお喋りを中断し、妹ちゃんを見た。

すると、必然的に全員の視線が妹ちゃんに集まるのだが、それでも妹ちゃんの視線は議事録をぼーっと見つめたままだった。

「雪ノ下さん？」

相模ちゃんに声をかけられて、ようやく妹ちゃんのははつと顔を上げる。

「……それでは委員会を始めます。本日の議題ですが、城廻会長から連絡があつた通り、文化祭のスローガンについてです」

気を張つた様子の妹ちゃんが整然と議事進行を始める。

まずは挙手でアイデアを求めるものの、積極性のない集団ではそれも大した意味を持たない。誰もやる気などないのだから、真剣な会議もお喋りのネタ程度だ。

すると、比企谷くんの隣に座っていた隼人くんが挙手をする。

「いきなり発表っていうのも難しいだろうし、紙に書いてもらつたら？説明は後でもらうとしてね」

「そうね……少し時間をとります」

俺と隼人くん、そして雪ノ下陽乃を除く各自に白紙が回される。ちゃんと行き渡つてはいるが、書いているのは数えるほどで、ネタを書いてもそれは本当にネタで真剣なものじゃない上に提出もしない。ようは戦力外だ。

しかし、弛緩しきつた集団でも表には出さない真面目な子もいる。人前には出たくないが、頼まれればするし、意見を求められれば発表でさえなければする。そういう子もいるのだ。

回収された紙のうち、スローガンが記入されているものはホワイトボードに板書される。

『友情・努力・勝利』

んん？ジャンプの鉄板ですか？俺はマガジン派です。

『八紘一宇』

いや、言いたい事はわかるし、大体そんな感じだろうけど、堅すぎるなあ……多分妹ちゃん辺りだな。

『ONE FOR ALL』

「お、ああいうの、ちょっと良いよな」

どうやら隼人くんはお気に召したらしい。ああ、隼人くんみたいなタイプは好きそうだし、横文字だと高校生は受けるよな。

しかしながら、この状態の文実を皮肉つてるとしか思えないような内容だな。

「一人はみんなの為に。結構好きなんだ、ああいうの」

「なんだ、そんなことか。簡単だろ」

「え？」

「一人に傷を負わせてそいつを排除する……一人はみんなの為に。よくやってることだろ」

わーお、凄い感性の持ちだった、比企谷くんは。

これには俺も目から鱗だった。そういつた立場になったことのない人間にはわからず、行き着けない答えだ。

少しの間、比企谷くんと隼人くんは睨み合うかのように互いを見つめるが、すぐに比企谷くんの方が視線を逸らした。

というのも、次は相模ちゃんの番であるからだ。

「じゃあ、最後。うちの方から『絆く共に助け合う文化祭く』っていうのを……」

どのツラ下げてそんな事を言ってるんだ、てめえ。

相模ちゃんのスローガンを見た瞬間、反射的に言いかけたが言葉を飲み込む。

人は怒りが大きすぎると呆れてものも言えなくなるが、それを超えるとやはり怒りが来るらしい。

「うわあ……」

そして比企谷くんもまた彼女の口から発せられたそれに「何言ってるんだ、こいつ」となったらしく、その反応に周囲がざわついた。

「……何かな？なんか変だった？」

頬を引きつらせながら、相模ちゃんは元凶である比企谷くんに問いかける。

「いや、別に……」

彼は悟っている。言うだけ無駄だし、本人に自覚がないなら怒りを

煽るだけだ。話にもならない。

だからこそ、比企谷くんは会話以外の意思疎通の方法をとった。言いかけてやめるとするのは、とても気になる行為だ。

どんなにくだらないことでも、それがどうかをわからなければ、好奇心が煽られる。

「何か言いたいことあるんじゃないの？」

「いや、まあ別に」

「ふーん、そう。嫌なら何か案出してね」

不機嫌そうに相模ちゃんが言うと、待つてましたと言わんばかりに比企谷くんは提出した。

彼は一体どんなスローガンを出してくるのか、そう期待していたら……

『「人々よく見たら片方楽してる文化祭」とか』

度肝を抜かれた。

世界が凍った。

先程の『ONE FOR ALL』の比ではない。あれ以上の皮肉をわかりやすい形でぶっこんできた。

だ、だめだ……が、我慢しないと……。

「あっははははっ！バカだ、バカがいる！もう最っ高！ひ、ひい、あー。ダメだお腹痛い」

静寂を打ち破ったのは雪ノ下陽乃の大爆笑だった。ば、馬鹿野郎……！

「は、ははははっ！てめえ、ハル！笑ってんじやねえよ！我慢できねえだろうが！げほげほっ！はははは！」

「だってしょうがないじゃん！あははっ！あんなの、あんなの笑うしかないよ！」

雪ノ下陽乃の大爆笑で俺の方も決壊した。

だって無理だろう。あんなネタをぶっこんできたら、笑うしかない。

雪ノ下陽乃と違って空気が凍ってるのを理解しているのに笑いが我慢できない。

「陽乃。笑いすぎだ。陽乃の連れ合いもだ」

「んんっ！すみません」

いかん。流石に笑いすぎた。

「あははは、は。……ん、んんっ」

雪ノ下陽乃もまた咳払いをして笑いを納めた。

「いやあ、私はなかなか良いと思うけどね、うん。面白ければOK」

「文化祭的にはダメだと思うけど、一周回って有りかもな。一発ネタにしてはかなり笑える」

「比企谷……、説明を」

「いや、人という字は人と人が支えあつてとか言ってますけど、片方寄りかかってんじゃないっすか。誰か犠牲になる事を容認してるのが『人』って概念だと思うんですよ。だから、この文化祭に、文実に、相応しいんじゃないかと」

呆れて問いかけた女教師も、その一言で全てを察したような表情になつた。

全くその通りだ、としか言いようがなかった。

もし、この文化祭に相応しいスローガンを決めるとなれば、今の比企谷くん以上に良い答えを出せる人間なんて、一人もいない。文実というものに参加した人間の殆どが誰かの犠牲を容認し、そして自らを肯定しているのだから。

「犠牲というのは具体的に何を指す」

「俺とか超犠牲でしょ。アホみたいに仕事させられてるし、ていうか人の仕事押し付けられてるし。それともこれが委員長言うところの『共に助け合う』って事なんですかね。助け合った事がないのでよく知らないんですけど」

駄目押しとばかりに付け足された言葉によって、全員の視線が相模ちゃんに集中する。

わなわなと震える相模ちゃんを確認して、それぞれ今度は横を向き、ざわつきが駆け巡る。

隣から隣へと、小さな声が伝播し、寄せては返す波のように中央へと帰って、そして断絶した。

中央にいるのは今までその実力を遺憾なく発揮し、専制政治を貫いてきた雪ノ下雪乃の姿。

一体、比企谷くんの話した真実戯言にどんな罰を下すのか、期待を込めた視線が雪乃ちゃんに集まった。

彼女が比企谷くんのスローガンを断ずれば、彼らは比企谷くんを悪として自らを正当化できる。

しかしながら、その期待はお門違いだろう。

普通に考えれば、彼女はそれを肯定し、比企谷くんの言う寄りかかっている存在達を断ずる。殆ど話した事もないが、雪乃ちゃんはどこまでも真つ直ぐだ。その場の空気に合わせて、なんて事はしないだろう。

だが、雪乃ちゃんは俺の想像でもなく、皆の期待に応えるでもなく、すすすつと議事録を上にあげて顔を隠し、机に突つ伏すように背中を丸めて、肩を上下に震わせていた。

わ、笑ってるのか……？あの堅物の妹ちゃんが？

ひとしきり奇異な光景を見守る時間が過ぎ、ふつと短い吐息の後に、雪乃ちゃんは顔をあげた。

「比企谷くん」

名前を呼び、比企谷くんを真つ直ぐに見つめると、雪乃ちゃんは、それはもう晴れがましく、花が咲き誇るような笑顔で告げた。

「却下」

そう言って、雪乃ちゃんは真顔に戻ると、すつと背筋を伸ばし、咳払いを一つした。

「相模さん。今日は解散にしましょう。どの道碌な案が出そうにないもの」

「え、でも……」

「これで一日消費するのは愚かな選択よ。実行委員全員各自で考え、明日決めましょう。以降の作業については全員全日参加にすれば、この遅れも十分取り返せる……異議はありませんね」

有無を言わせない迫力に、誰も異論を唱えない。いや、唱えたとしても、それが不可能である事を悟っている。

「そう、だね。じゃあ、みんな明日からまたお願いします。お疲れ様でした」

不満そうな相模ちゃんの手令のもと、三々五々がめいめいに立つ。誰もが比企谷くんの近くを通る時に睨むようにしてその背中を一瞥していく。民主主義のこの世の中では、きつと比企谷くんが悪で、凶星を突かれて何も言えないだけの彼等が正義なのだろう。実にくだらない。

「残念だな……。真面目な子だと思ってたよ……」

そして、おでこちゃんさえも、いつものほんわかした笑顔を潜め、悲しそうに呟くだけだった。

対して彼も弁明はしない。まるでその通りだと言わんばかりだ。

「比企谷くん」

溜息を吐いて立ち上がる彼を俺は呼び止める。

「そのやり方、嫌いじゃないんだけどな。いつか痛い目みるぞ」

「はあ……ご忠告ありがとうございます」

理解したのか、していないのかわからない曖昧な返事をして、比企谷くんは去っていった。

そしてそれと入れ違いに雪ノ下陽乃がやって来る。

「いやあ、本っ当に面白いね、比企谷くん」

「あれには度肝を抜かれたけどな。彼、メンタル強すぎだろ」

普通の人間ならわかっていても、あんなスローガンぶっこめない。それが出来るとすれば、彼か、或いは目の前にいる魔王ぐらいだ。まあ、出した人間次第では賛否が分かれるが。

「ただ、お前が気に入った理由はわかった気がする。比企谷くんは想像以上に面白い人間だ」

「へえ、だからさつきあんな事言ったの？」

「余計な事するなって言いてえのか？」

「別にー。景虎の意見一つで変わるような子なら、私が興味持つわけないでしょ」

「ごもつともだ。」

忠告はしてみたものの、きつと比企谷くんには届いていないだろう

う。俺は所詮他人だ。よくて顔見知り程度の人間の忠告を馬鹿正直に聞いていたら、彼はこんなにも捻くれ者になっていないだろう。それが彼の持ち味だし、良いところといえればそうなんだが、誤解を受けやすい性格だ。

しかし、まあ。

理解してくれる人間がいるなら、それはそれでいいのかもしれないな。

入り口で話す比企谷くんと雪乃ちゃんを見て、なんとなくそう思った。

今まさに総武高校は最高にフェスティバっている。

とうとうやってきた文化祭二日目。

二日間ある総武高校の文化祭は一日目を総武高校の生徒のみとし、二日目からは一般公開という事で、ご近所やら他校のお友達、受験志望者やOBなどが訪れていた。

それにしても、やはり高校の文化祭は凄いな。俺のところも大体こんな感じだったけど、それよりも多い気がするし、何より催し物が自由だ。文化祭となると、はっちゃけたのに学校とか市が許可出さないうんてわけのわからないこと言っただけ出来なかったりするからな。

まあ、それはそれとしてだ。

「相変わらず、人の視線集めるの好きだよな、お前」

俺は隣で歩く雪ノ下陽乃に対して、半ば呆れたように言った。

「好きで視線を集めてるわけじゃないけどね。ほら、私綺麗だし」

あからさまな自慢ではあるものの、それを否定できないのが悲しいところだ。

しかも、今日は有志の事もあって、身体のラインを強調する細身の黒いロングドレスを着て、胸元と髪留めには黒い薔薇のコサージュがあしらわれている。一步步ぐと翻るスカートの裾がすれ違う人間全てを魅了していた。

ぶっちゃけ、現地集合の今日は死ぬ程声をかけたくなかった。ナンパ野郎と周りに思われるのも嫌だったし、例えば周りに人が大勢いた場合、それをかき分けていかなければならない。そんな事は酷く面倒だし、目立つのも嫌だ……雪ノ下陽乃が隣にいる時点で無理だけど。

こいつの隣にいるせいで「え？まさか彼氏じゃないよな？こんな奴が」って視線を年下から向けられるのが死ぬ程鬱陶しい。俺だって好きでこんな事やってるんじゃないだよ。やめられるならとつくにやめてるっつーの。

それもこれも全て雪ノ下陽乃が原因だが、今日は大目に見てやろう。こいつもこいつなりに文化祭は楽しみにしていたみたいだし、何より楽しむ事で俺への負担が軽減されるわけだから。寧ろ、存分に楽

しんでくれて結構だ。被害が減るから。

「で、最初はどこに行くんだ？」

「隼人がミュージカルやるって言ってたから、観に行つてあげようかと思つて」

観に行つてあげるのか。安定の上から目線。隼くんもありがた迷惑だろう。

「つーか、劇じゃなくてミュージカルなのな。高校なら、普通に演劇とかやりそうなのに」

「さてね。その辺はどうでもいいかな」

「それもそうか」

今回は俺も同意する。大方、目立つ事をやりたい輩が演劇じゃなく、ミュージカルをやるって言い出しただけだろう。こういうのに限つて、大体小難しそうなものを選ぶつて相場も決まつてる。

「あ、たこ焼きあるよ、たこ焼き」

「ああ、そうだな」

華麗にスルー……しようとしたら、雪ノ下陽乃は俺の前にまわつて、こちらに振り向いた。

「景虎」

「……寄り道してたらミュージカルに間に合わないぞ」

「席は私が取つとくから。頑張つてね♪」

きやびつ、とでも言わんばかりの猫撫で声でそう言うと、有無を言わせず、雪ノ下陽乃は先に行つてしまった。相変わらず人の話聞かない奴だな。

とはいえ、無視もできないのが現実で、仕方なく列に並ぶ。

隼くんがミュージカルに出るからなのか、お客さんはあまりいい気がするし、いても男が多い。マジでアイドルだな、彼。

しかし、いくら並んでいないと言つても作つているのは学生で、ともすれば経験者はほばいないのが当たり前の上に一人が複数人分買つて行つたりするため、思ったよりも待つことになりそうだ。

「何処かで見たとせば、陽乃の連れ合いじゃないか」

「はい？」

雪ノ下陽乃の連れ合いと呼ぶ声が聞こえたため、思わず反応すると、そこにはいつぞやの女教師がいた。

「えーと……」

「平塚静だ。ここの教師で、一応あいつのクラスの担任を請け負った事もある……が、感覚で言う友人といったほうが正しいな」

先生が友達って……普通に聞いたらぼっちの可哀想な子にしか聞こえないが、雪ノ下陽乃の、と聞くとあら不思議。凄さしか感じません。

「陽乃はどうした？」

「たこ焼き買ってからミュージカルに来いとお達しで。うちの姫様は気まぐれなんですよ」

「はあ……いつも通りというわけか」

「ええ、まあ」

いつも通り、俺が貧乏くじを引かされてますよ。

と、そこで違和感を感じた。

この女教師は雪ノ下陽乃の行動を「いつも通り」と称した。

ならば、彼女は雪ノ下陽乃のその行動を当たり前と知り、雪ノ下陽乃の気まぐれ加減も把握しているというわけだ。

そういえば、この人は雪ノ下陽乃の事を普通に名前で呼ぶ。

雪ノ下陽乃は基本的にさん付けか、名字呼びばかりで、呼び捨てにするものは少なくとも俺が知る限り、この人ぐらいだ。俺はもちろん例外。

「ふむ。いきなりで悪いが、君と陽乃はどういう関係だ？」

「彼氏……ですかね、一応」

断言しないのは、後で雪ノ下陽乃に知られた時に茶化しそうだな。

「ぐはっ!？」

何故かダメージを受けていた……はい？

「な、何故、陽乃に彼氏が……そんな……そんな馬鹿な事が……」

「あ、あの、だ、大丈夫ですか？」

「いや、陽乃が彼氏なんて作るわけがない……何かの間違いだ。うん、

「そうに違いない」

何か一人でぶつぶつと言っている。こ、この人本当に大丈夫か？

「よし。すまない。あまりにも衝撃的すぎて取り乱してしまった」

「あ、いや、気にしてませんけど……」

とりあえず、この人も何か普通じゃないのは理解した。結婚の話とかNGな感じの人なんだな。

「まさかあの陽乃が彼氏を作るとはな。それが普通なら泣……もとい、友人として祝福するところだが……君はどうにもそういう風には見えないな」

さつきとは打って変わって、平塚さんは鋭い視線で問いかけてきた。

「いやはや、全くごもつともでございませう。」

と、言えたらどれだけ楽だろうか。少なくとも、ここまで苦労はしていないかった。

「残念ながら彼氏ですよ。まあ、飽きられたら何時でも捨てられる、とつきますけど」

「そういう事か」

納得されてしまった。

別に悲しくもなんともないし、分かりきっていた反応だ。特に思うところはない。

「そうか……陽乃は、私が思っていたよりずっと普通だったんだな」
どこか意外そうに平塚さんは呟いた。

「あいつが……ですか？」

「ん？納得がいらないか？」

「……いや、別に」

納得いくわけがない。アレのどこに普通な要素があるのか。異常な要素しか見当たらないだろうに。

「君には雪ノ下陽乃はどう映る？」

「完全無欠の完璧超人。なお性格に難ありすぎ……みたいだな」

「ふむ。言い得て妙だ」

ちよつとふざけてみたが、平塚さんはそれに納得するように頷い

た。

「それで？その陽乃と付き合っている君は？」

「偶々、姫のお眼鏡にかなった哀れな市民。逆シンデレラみたいな感じですかね」

色々と足りないものはあるが、例えるなら足フェチ王子様は面白い事のみを追求する雪ノ下陽乃、それに見初められてしまったのはやる気のないシンデレラこと俺。魔法の解ける時間は雪ノ下陽乃の飽きた時間を指し、意地悪な姉は哲平辺りで、執事みたいなのがさしずめ陽乃の取り巻きといったところか。執事多いな。

「とても彼女にしている人間に言うセリフではないが……陽乃が気に入るわけだ。君は陽乃の求める人種に比較的近い存在だな」

「あいつの求める人間……？従順な犬ですか？」

「それもあるだろう。自らの欲求の為に文句も言わず、報酬も求めず、さながら奴隷のように従順に従う犬。陽乃が求める人種の一つだが、君はこれに当てはまっている自覚があるのか？」

「いや、全く」

「そうだろう。私も、君はそれと正反対に位置する人間だと思ってるよ。決して懐かず、一定の距離を置いて反発しながら、それでも要求には応える。まあ、ツンデレに近いな」

「……まさかとは思いますが、それが俺と？」

だとしたら心外だ。俺だって好き好んで雪ノ下陽乃の言葉を鵜呑みにして実行しているわけではない。

しかし、俺の問いかけに平塚さんは肩を竦めるだけだった。

「それは陽乃の口から聞くといい。私は見回りに戻らなければいけないので、ここで失礼する」

また気になるような物言いを……こういうのって後々気になって眠れなくなるやつだから嫌なんだよなあ。

追求しようとしたものの、既にたこ焼きの方が準備出来たらしい。話しながらだったので全く気付いてなかった。

本当ならこのまま追求するが、遅れると雪ノ下陽乃に何を言われるかわからない。あの魔王は人の事は幾らでも待たせるが自分が待つ

のを極度に嫌う。自己中心的なのではなく、心の底から世界は自分を中心にして回さなければ気が済まない。他人の時間を喰うのは良くても、喰らわれるのは嫌なんだ、あいつは。

「九条景虎です」

「ん？」

「俺の名前ですよ。知らないと言っただけじゃないでしょう。ほら、ハルと話すときとか」

「それもそうだが、気遣いは不要だ。君の名は陽乃の口から聞いていたからな……恋人とは知らなかったけど」

何故か自虐的な笑みを浮かべて、平塚さんは遠い目で空の彼方を見た。

あ、あれ？自己紹介しただけなのに。この人さぞモテるだろうに、そういう浮いた話はないのだろうか？

訊こうかと思ったが。それを訊くと後戻りできないような気がして、たこ焼きを買って、そそくさとその場を離れることにした。触らぬ神に祟りなしということだ。

……あれ？隼人くんのクラスってどこ？

軽く探し回ること数分。

文実の腕章をした生徒に案内してもらい、始まって少し経った後に着いた。

だが、もう入場は締め切られているらしく、扉には机が置かれていて、空気を入れ替えるためにほんの少しだけ扉が開いている程度だ。

……と、よく見れば、入り口には見知った顔があった。

「ところで、ありや何だ？」

舞台の上を指差して雪ノ下陽乃に問う。

次はスーツを着た男子が何か数字をぶつぶつ言っでは、自分は物語の重要な人間だと宣っている。その姿が既にモブとかそういう役柄だ。

『星の王子さま』を全年齢対象にしたらしいよ……原型ないけどね」
雪ノ下陽乃にしては珍しく呆れているような声音だ。ともすれば、これは原型ないどころか別作品レベルなのかもしれない。俺は原作知らないから何とも言えないが……。

「なんかさつきから出演してる男子の台詞が意味深に聞こえるんだが……」

「多分そうだろうね。なんていうの、BLってやつ」

やっぱりか。どうりでさつきから台詞が際どいというか、変な意味に聞こえると思った……まあ、そういうのがわかる人間でないと理解出来ない……ん？ということは。

「ハル。お前、BLとか好きな人？」

「理解はあるよ。あまり好まないけど……あ、今度友達に書いてもらおうか？景虎がやられるの」

「マジでやめろ。洒落になってねえから」

「冗談冗談。それにそんな友達いないし」

そういう話している内にも物語は進んでいく。

「王子さま……。僕は君の笑う声が、好きだ……」

主役であろう隼人くんの一言に女性たちが色めき立つ。その反応から、やはり彼はさぞモテるんだろうという事がわかる。

「僕達はずっと一緒だ……」

これまた隼人くんの台詞に満足したよつにため息が観客席に充満する。うーん、これ販売したらかなり儲けられそうな気がするな。

しかし……相手の子は男に見えないな。

いや、流利的に考えると男のはずなんだが……あまりにも見た目が可愛いもんだから、男に見えない。これが世に言う男の娘だとも言えるのだろうか。

そしてそのまま物語は進み、さっきの男の娘のモノローグでラストシーンが締めくくられる。

すると、客席からは万雷の拍手が鳴り響く。一応俺も拍手を送ったが……。

「これ、ミュージカルじゃなくね？」

「いいんじゃない？誰も気にしてないから」

色々なところに立ち寄った後、予定の時間が近づいてきたこともあり、体育館に向かっていると『ペットどころ、うーニャン うーワン』と書かれた看板のある教室に目が止まった。

「どうやら、この生徒がそれぞれ家庭のペットを連れてきている場所らしい。」

さながらホストクラブのようにペットの写真が壁に掲示されている。看板の名前的には犬か猫しかいなさそうなのに、兎やハムスター、フェレット、おこじよ、イタチにヘビに亀と色んなものがある。「どうしたの？景虎。もしかして好きなの？」

「いや、お前に似合うと思っただけ。ほら、ヘビとか」

「女の子に対してヘビが似合うっていうのはどうかと思うなあ」

「じゃあ……イタチか？」

「なんで妥協してる割にはイタチなの？ラグドールとかマンチカンもいるのに」

ジト目でこちらを見てくる雪ノ下陽乃。これは別にワザではないらしく、素で非難してきていた。

「ていつてもなあ……こいつが猫とか持っていると、完全に趣味の悪い金持ちにしか見えないんだ。ならやっぱり狡猾なヘビとか辺りがベストだ。何故イタチかって訊かれると、ガ○バの冒険のイタチ見て」

こいと答える。あれ、やばいぞ。

「じゃあ、こいつ」

俺が指さしたのは豆柴。特に深い意味はない。俺が好きただけだ。

「時間まだあんだろ。行くぞ」

「わお、景虎にしては珍しく強引」

そう言つて、半ばペットショップっぽい感じになっている教室に入る。

すると、一斉に犬が簡易式の柵に寄りかかって、吠え始める。別に威嚇されてるわけじゃない、その逆だ。

「おうおう。お前ら元気だな」

ダックスフンドを抱き上げると振りちぎらんばかりに尻尾を振っていた。

「良かったね。犬には好かれてるみたいで」

「暗に犬にしか好かれてないみたい言い方はやめろ。人間以外の動物には好かれてんだよ」

「自分で言つて虚しくない?」

「虚しくはねえよ。哀しいだけだ」

本当、なんで人間には好かれないんだろうな……いや、理由はわかってるけどさ。

ダックスフンドを下ろし、次はお目当の豆柴を探してみる。

あ、もう他の奴がもふってるな。先を越されたか。

「ハル。有志まで後どれくらいだ?」

「十三分。時間は割と余裕あるけど、私はともかく景虎は最終準備とか欲しいでしょ?」

「まあな。天才と違って、凡人はぶっつけ本番なんてリスクなことしたくないしな」

いや、本当。かつこよくぶっつけ本番でも余裕とか言っていてえけど、現実には甘くない。こいつなら余裕だろうが、俺たちみたいなのはちゃんと準備してからでないか。

豆柴が駄目ならフェレットで我慢するか。あいつも可愛いし、もふれる。

二匹いるうちの二匹は寝ていたものの、もう片方の白いフェレットは起きていて、誰ももふってなかったので、俺はそのフェレットをひよいつと持ち上げる。

いやあ、このもふもふが堪りませんなあ。噛み付いてこないあたり、飼ってる人の躰が行き届いてるのか、それとも人間慣れしてるのか、どちらにしてもそれさえなければ後はひたすらもふるだけだ。

よしよしよしよし。

もふるもふるもふるもふるもふるもふるもふるもふるもふるもふるもふる……ふう。

「あー、癒されるわあ」

「何かシニールだね。大の男が愛玩動物に頬緩ませるって」

「大の男だろうが、小の女だろうが同じ人間だろ。癒されるものは癒されんだよ。ほら、お前も癒されてみる」

「私はいいよ。フェレットって臭いが凄いし、服についちやうとね」

「野生の奴でも捕まえねえ限り、普通に飼われてるやつは臭腺は手術で取り除いてるから、そこまで凄くねえよ」

「毛とかついちやったら嫌だし……」

「俺が抱いてるから問題ねえ。第一、こんなところに来てる時点で臭いとか気にしても意味ねえだろ」

「でも、やつぱり……」

雪ノ下陽乃にしては珍しく否定的だ。てか、さっき俺がもふってる間、普通にプードル触ってたし。臭いも毛気にしてないだろ絶対。理由も取って付けたようなこいつにしてはちぐはぐな返事……ん？もしかして……。

「お前、フェレット苦手なのか？」

「私が？なんで？」

純粹に問いかけてくる雪ノ下陽乃……だが、それはいつもの外面だ。問いかけたほんの一瞬だけ、眉がピクリと動いたのを俺は見逃さなかった。

「あのな……別に俺はお前の敵じゃねえんだ、苦手ならそう言え。名前だけの張りぼてでも彼氏だぞ、一応」

俺だって別にこいつの苦手なものを知ったからといって、それを使って反撃しようだなんて露ほども思っちゃいない。だって後が怖いし。そもそもフェレットに人間を襲わせるような躰なんてできないし。

「……………それもそつか。うん、わかった」

数拍おいた後、雪ノ下陽乃は頷く。

「昔ね、小学校に近所で飼ってる人のフェレットが迷い込んできた時があつて、その時に真つ先に捕まえようとしてたの。そしたら手痛い反撃を受けちゃって」

「それで苦手になつたど？」

「まさか。噛まれたぐらいじゃ苦手にはならないよ。問題はその後。私がフェレットのせいで怪我したつて、お母さんにバレて、フェレットごと近所の人はいなくなつちやつた」

「お、おう……………」

こ、怖え……………権力マジで怖え……………。

しかし、これが本当なら雪ノ下陽乃がフェレットを苦手になる道理はないはずだ。寧ろフェレットを飼い主の方が苦手になつてそうなんだが。

「最初は別に苦手じゃなかったんだけどね。フェレットを見ると、その時のことを思い出しちゃつて、気づいたら苦手になつちやつた」

思い出した。そういえば、雪ノ下陽乃の母がどんな人間であるのかを。

雪ノ下陽乃の母がどういう人間なのかを考慮すれば、その後一体フェレットとその飼い主がどうなったのかは想像に難くない。例えば低学年の頃の雪ノ下陽乃に理解ができなくとも、高学年になれば理解できてしまうだろう。

だから、雪ノ下陽乃はフェレットが苦手なのではなく、フェレットを通じて思い出してしまう『過去』が嫌なんだ。人間、子どもの頃のトラウマや思い出は早々忘れられないものだし、今なら平気な事も昔にされたのがきっかけで無理なんてことはよくある。雪ノ下陽乃も、

おそろくそれに近い。

「なら、今克服するか」

「え？」

「こんな可愛いやつをもふれないなんて人生一割くらい損してるだろ。今の内に克服しといて損はねえよ」

ずいっとフェレットを近づけると、雪ノ下陽乃は僅かに身体を後ろに引いた。反射的に行われたその所作を見るに、苦手というのは本当らしいが、この様子だと噛まれた事もひよつとすると関係しているのかもしれない。本人がそうは思っていないだけで。

「噛まねえから。触ってみろ」

おそろおそろといった感じに、白く細い指がフェレットお腹に触れる。

二度三度、軽くお腹をつついた後、雪ノ下陽乃は本格的にフェレットをもふり始めた。

普段の様子とは打って変わって、もふもふしている時の雪ノ下陽乃はどこか真剣な面持ちで、不意に頬を緩ませた。

ついでに俺は手を滑らせた。

「わわっ、景虎。何してるの」

「っ。ああ、悪い。手が滑ってな」

フェレットは俺の手から離れた直後に雪ノ下陽乃の手にキャッチされていた。

「手が滑るって……このもふもふで？」

「まあな。そういう時もあんだよ」

「ふーん」

どこか納得いかなさそうな表情で雪ノ下陽乃は言う。

「つーか、手が滑ったのは比喩みたいなものだけどな。理由は別にある。」

「一瞬、可愛いくて見惚れた……なんてのは絶対にこいつには言えねえよな。」

「あゝ、疲れた」

「お疲れ様、景虎。短期間で仕込んだにしてはなかなか上手だったよ」
有志のオーケストラをやりきった後、俺はコーヒーを片手に項垂れていた。

普通にオーケストラ……のはずだったんだが、機嫌がいいのか、雪ノ下陽乃がアドリブで色々つぶっ混んでくる。観客すらも巻き込んだアドリブは大盛況ではあったが、演奏団のメンツは大体が死屍累々と言わんばかりに疲れ切っていた。

俺が項垂れている横では隼人くんとその友人達がバンドでもするのか、各々に緊張したり、イメトレしたりしていて、その周囲で女の子二人がマネージャーの真似事をしていた。

「今年は成り行きでやってやったけど、来年はぜってーやらねえからな」

「うんうん。そういつて、私がやるって言ったらやってくれるんだよね。ツンデレさんだなあ、景虎は」
「うるせえ」

俺だつて好きでやってるわけじゃねえんだよ。やらざるをえないだけで。

と、雪ノ下陽乃と話していたら、何やら周囲が慌ただしい。

「なんかあったのか？」

「さあ？でも、私達には関係ないんじゃない？」

「……珍しいな。お前の事だから、気になって首つつこむと思ったんだが」

「私だつて時と場合くらい考えるよ」

……解せん。一体時と場合を考えたことがいつあっただろうか。

何よりさっきの突き放した物言い。こういう事に対して、全く雪

ノ下陽乃が興味を示さなかったのは珍しい。大体は関係もないのに首を突っ込んでいくというのに。

その時、校内アナウンスがかかる。

その内容は相模ちゃん呼び出し。内容を察するに委員長の相模ちゃんが来なくて、最後の挨拶やらができないといったところだ。

このタイミングでの行方不明は、どう考えてもマズい。

理由はわからないが、立派なボイコットだ。こんな事をすれば、今まで一応うまくいっていた文化祭も土壇場で悪い形で終わってしまう。

俺が歯噛みしている横でも、雪ノ下陽乃は特に気にした素振りも見せず、いつも通り余裕そのものだった。否いつも通りというよりも、どこか楽しそうだ。

なんで、と口から出かけて、はっとした。

もしかしたら、これは雪ノ下陽乃が狙っていた状況なのではないかと。

最初は、本気で文化祭を自分の考える面白おかしい方向に持って行くこうとしているのだと、俺はそう思っていた。

しかし、今のこの状況は誰にとっても良い形とは言えないし、そもそも雪ノ下陽乃が相模ちゃんを潰そうとする理由が見当たらない。名前も覚えられていないほどだ。

ともすれば、目的は別にあるのかもしれない。そして結果として相模ちゃんが失踪してしまった。

「ハル。こうなる事がわかってやったのか？」

「んん？私は景虎の言ってる事がよくわからないよ？」

問いかけてみても、雪ノ下陽乃は首をかしげるだけだ。

「なら言い方を変える。なんでこうなるように仕向けた。お前だつて、文化祭がコケるのは嫌なんじゃないのか？」

「嫌だよ。折角、私が作り上げてきた舞台なのに、あんな子の所為で壊されるのは」

あつけらかんと雪ノ下陽乃は言つてのけた。

やはり、こいつは初めから相模ちゃんの事など眼中にない。おそら

く、顔すらも覚えていないだろう。いや、そもそも女子であった事くらいしか覚えていないかもしれない。相模ちゃんの器も能力も、全て見抜いた上で雪ノ下陽乃は彼女を立てるように見せかけて、雪乃ちゃんの引き立て役にあてがった。そのせいで雪乃ちゃんには多大な負担がかかったものの、結果として、文化祭は雪乃ちゃんのお蔭で周り、その反面委員長は無能っぷりが露見した。比企谷くんのスローガンの時が良い例だ。

「これから隼人のステージ。稼げて十分くらいかな？さて問題です。それまでにあの子は帰ってくるでしょうか？」

「無理」

「大正解。じゃあ、その為に雪乃ちゃん達が取る行動はなんでしよう？」

「そりゃ、代役立てるのが妥当だろ。賞の結果とかは後日に回すか適当にでっち上げて」

普通に考えれば、この状況で探しに行くという選択肢を選ぶのは間違いだ。効率が悪すぎる上に時間がなさすぎる。それなら十分のうちに適当に打ち合わせをして、委員長は体調不良という事にし、副委員長の雪乃ちゃんにやらせれば問題はない。

だが、雪ノ下陽乃は首を横に振った。

「ぶつぶー。答えは……」

「姉さん」

雪ノ下陽乃の言葉を遮るように雪乃ちゃんが呼んだ。

「時間がないから単刀直入に言うわ。手伝って」

あまりにも直截な物言いだ、雪ノ下陽乃の目の色が変わった。黙ったまま、冷たい眼差しで雪乃ちゃんを見下ろしている。

それでも雪乃ちゃんは視線を逸らさず、より強い意志を持って睨み返していた。

ていうか、この姉妹怖すぎ……真ん中にいたら視線で身体に穴が空きそうだ。

「いいよ。雪乃ちゃんが私にちゃんとお願いするなんて初めてだし、今回はそのお願いを聞いてあげる」

はあ……なんで妹相手にこんなに上から目線なんだ、こいつは。もうちと姉らしく……つて言いたいが、ことここに至ってこいつが姉のように振舞っていたら、それはそれで怖いのでこれで良いのかもしれない。

だが、雪乃ちゃんはふつと笑って首をかしげる。

「……お願い？勘違いしてもらっては困るわ。これは実行委員としての命令よ。組織図を見なかったの？指示系統上、この場では私の方が上の立場であることを認識なさい。有志代表者の協力義務事項は例え校外の人間であつても適用されるわ」

「で、その義務に反した場合のペナルティーは何かあるの？別に強制力なんてないでしょう？出場取り消しなんて、もう私に関係ないし。どうする？先生に言いつけちゃう？」

雪乃ちゃんが正しさを振りかざし、その刃を持って迫れば、雪ノ下陽乃はそれを嘲笑うかのように現実を突きつける。

残念だが、雪ノ下陽乃の言う通りだ。今の状況で、雪ノ下陽乃はこの文化祭を手伝う道理などない。やる事はやったし、それ以上は求められていない。

これは分が悪い。そう思つて腰を上げたのと、雪乃ちゃんが何かを言おうとしている比企谷くんを手で制したのはほぼ同時だった。

「ペナルティーはないわ……でもメリットはある」

「どんな？」

「この私に、貸しを一つ作れる。これをどう捉えるかは、姉さん次第よ」

堂々と言い放つと雪ノ下陽乃は動きを止め、笑みをやめた。

「ふうん……雪乃ちゃん、成長したのね」

「いいえ。私は元々こういう人間よ。十七年一緒にいて見てこなかったの？」

「そう……」

目を細める雪ノ下陽乃の瞳からはどんな感情も読み取れない。だが、ほんの一瞬、勘違いなのだと思う。あの雪ノ下陽乃が悲哀とも嫉妬とも取れる表情を見せたのは。

「で、どうするつもりなの？」

「場をつなぐわ」

「だから、どうやって」

「私と姉さん……ついでに貴方も。後、二人いればなんとか。もう一人いればもう少し無理が利くわね」

雪乃ちゃんがちらつとステージ袖の楽器を見る。おいおい、マジか。

「おい、雪ノ下。本気か」

「はあん、楽しいこと考えちゃうねえ。曲はどうするつもりなの？」

「ぶつつけ本番で行くのだから、私たちができるものをやるしかないでしょう。昔、姉さんが文化祭でやった曲今もできる？」

雪乃ちゃんにそう問われると、雪ノ下陽乃は当時やった曲を鼻歌で歌ってみせる。鼻歌程度なのに聴き入るほどのメロディーは、やはり雪ノ下陽乃だと感心させられる。近くにいた明るい茶色に髪を染めた女の子が「ほあー、その曲かー」と反応していた。俺は普通のJ-POPには疎いが、その俺でも知っている。かなりメジャーなのだろう。

軽く歌い終えて、雪ノ下陽乃は勝気にニヤツと笑った。

「誰に物を言っているのかな？雪乃ちゃんこそ、できるの？」

「私は、姉さんが今までやってきたことなら大抵のことはできるのよ」

「そう、じゃあ……静ちゃん」

「……仕方ない。私がベースをやろう。陽乃とやった曲なら、まだ弾けると思う」

溜息を吐いて、近くにいた平塚さんはそう言った。

となると、昔に巻き込まれた人と見た。偏見になるかもしれないが、この人がベースをすると凄くかつこいい気がする。それでなんでモテないのか。

さらに雪ノ下陽乃は振り返っている。

「めぐり、サポートでキーボード、いけるね？」

「はい、任せてくださいー！」

むんつと両手で拳を作り、めぐりちゃんが元気に答える。後は

……。

「景虎」

「わかっているよ。ドラムやりやいいんだろ」

残されているのはドラムか、或いはヴォーカルだけだ。さっきの反応を見るにこの場にドラムができそうな人間はいないわけだし、かといって生徒の中から引つ張ってくるのは色々と問題がある。

「景虎って、ドラムできるんだ？」

これは雪ノ下陽乃も意外だったらしい。純粹な疑問を投げかけてきた。

「高校の時に。勝手に登録させられて、やらざるを得なかったんだよ」

高校三年の文化祭。たまたまドラムの音ゲーにハマっていた俺がそれを極めかかっていた時に勝手に友達が俺を巻き込んだ。生とゲームは全然違うつつたのにやらされて、練習させられる羽目になった。そのせいで俺の数少ない特技の一つとなってしまったが、まさかこんなところで活かされる時が来るとは。

「半年くらいやってねえから、上手くやれるかは知らねえけどな」

「大丈夫。景虎にはそこまで期待してないから♪」

「いや、わかっているから。言わなくていいから」

「冗談冗談。ちよつとだけ期待してるから。私の彼氏でしょ？景虎は」

「……そうだな。じゃあ、そのなけなしの期待とやらを裏切らないように努力するさ」

初めて、雪ノ下陽乃が俺に対して明確に見せた期待。口先だけでは無い、ほんのちつぽけなものではあるが、それでもあの雪ノ下陽乃に期待されていると考えるとそこまで悪くはないことだと思う俺がいる。

後はヴォーカルだけだが……それも決まったらしい。雪乃ちゃん茶髪の子にヴォーカルをして欲しいと頼んで、その子はとても嬉しそうに承諾していた。

そして、それを見届けるように比企谷くんがステージ裏から出て行

く姿が見えたので、声をかけようかと思ったのだが……。

「比企谷くん。よろしくね」

「ヒツキー、頑張ってる」

二人が声をかけたため、俺は黙る事にした。俺が彼にしてあげるべきは応援ではなく、文化祭を盛り上げ、そして時間を稼ぐ事だけだ。

「あ、あの、由比ヶ浜結衣です。よろしくお願いします」

「ん？ああ、俺は九条景虎。よろしく」

名前だけを伝え合うだけの自己紹介。今はそれ以上の必要性を感じない。

隼人くん達のバンドも含めて十分と少し。これがタイムリミットだ。それまでに見つかるか否か……いや、多分比企谷くんは見つけてくるのだろう。それがどんな方法なのかは俺にはわからない。彼は俺の予想を遥かに上回るニヒリストだから。

ふと、俺は楽器を見て、ある事を思った。

楽器、足りなくないか？

通常、バンドは五人編成までのものが多く、それ以上は滅多にない。当然、俺達が借りるものも五人編成用のものだ。対して参加者は六人。必然的に一人余るが、かといって誰かが欠けるのにも問題がある。俺以外は。

それに他のメンバーも気づいたらしい。顎に手を当てて、考えていると、雪ノ下陽乃がこんな提案をしてきた。

「それじゃあ、こうしよっか。演奏は私達がして、雪乃ちゃんとガハマちゃんのツインヴォーカル」

それに対して、平塚さんはうんうんと頷き、めぐりちゃんも手をポンと叩いて賛同する。

「陽乃にしてはこれ以上ない名案だな。それがいい」

「雪ノ下さんと由比ヶ浜さん、仲良さそうだし、私もそれに賛成」

しかし、当の雪乃ちゃんの方は渋そうな顔をしていた

「演奏なら、私も出来るのだけど……」

「だーめ。折角、ガハマちゃんに頼んだんだし、大事な友達なんですよ？こういう機会は滅多にないんだから、やっておいたほうが良いよ」

おおつ、雪ノ下陽乃にしては特に深い意味もない、ど真ん中を行く正論だった。

「でも……」

「それに、この後も実行委員として色々あるのに、雪乃ちゃん体力持つの？」

駄目押しと言わんばかりの雪ノ下陽乃の言葉に雪乃ちゃんが押し黙った。流石に言い過ぎだろ、と思ったが、雪乃ちゃんは致命的に体力がないらしい。

視線を虚空に彷徨させた後、雪乃ちゃんは諦めた様に溜息を吐いた。

「……わかったわ。由比ヶ浜さん、頑張りましょう」

「うん！一緒にゆきのんと歌うの久しぶりだね！」

「あの時は酷く疲れたけれど……今回は曲数も少ないから、なんとかなるわ」

「一緒に頑張ろうね、ゆきのん！」

「ええ」

由比ヶ浜ちゃん言葉に、雪乃ちゃんは頬を赤く染めて、微笑んだ。

隼人くん達の予定にはなかったアンコールとトークのお蔭で、予定よりも少しだけ時間を稼ぐことに成功していた。

だが、相変わらず相模ちゃんの姿は見えず、比企谷くんの連絡もない。

そしていよいよ俺達の番だ。どう転ぶかはやってみないとわからない。ない。

『ありがとうございました！以上、葉山隼人くん率いる2年F組の皆さんでしたー！』

実行委員のアナウンスに会場が拍手喝采に包まれる。凄まじい人氣っぷりに俺も羨ましく感じる。男からも女からも人気があるというのの良い事だ。

ステージから舞台袖へと引っ込んできたバンドの子達は口々に「マジ疲れたわー」とか「緊張パネエ」とかを言いあっているものの、その表情はやり切ったという顔で満足そうだった。

特に頑張っていた縦ロールの子は由比ヶ浜ちゃんから飲み物を受け取ると、近くにあった椅子にどかっとなり込んで座り込んだ。

「景虎さん」

「何？」

「後のこと、お願いします。俺も俺なりに相模さんの事を探してきましたから」

言うだけ言うと、隼人くんはステージ裏から出て行く。まあ、探す人間は多いに越した事はないだろう。それに彼の性格上、待つだけというのは合わないようだし。

『続きまして、トリを飾るのは先程結成されましたバンド！在校生に教員に大学生と多種多様な面々の即興バンドの皆さんです！』

実行委員のアナウンスと共に、俺達は舞台へと上がっていく。

各々が自分のやりやすい様に素早く微調整し、準備を整える。

後は歌うだけ……と言いたいが、稼げるならとことん時間を稼ぐ。それが俺達に与えられた役割なんだ。

「由比ヶ浜ちゃん。マイク貸して」

「ふえ？あ、ど、どうぞ」

由比ヶ浜ちゃんからマイクを受け取り、部隊の真ん中に立つ。

「初めまして。俺は九条景虎。この美女美少女揃いのバンドの中でイマイチ冴えないモブっぽいやつだ」

軽く自己紹介すると、客席からちらほらと笑い声が聞こえる。自分

で言ってる悲しいが、事実は事実。すべらなかつたし良しとしよう。「有って事で参加してるが、俺はこの卒業生でもないし、生まれも育ちも千葉じゃない。言ったら、ほぼこの学校とは無関係の人間だ」「けど、そんな無関係の人間でも、この文化祭は凄え楽しいって思える。生徒も先生も、一緒になって馬鹿みたいに楽しんでる。実際、立場が全然違うメンツで、しかも土壇場でやらせてくれて頼んだら通じたしな。こんな良い学校はなかなかねえからな。これが普通とか思うなよ。他校の文化祭行ったら凹むぞ」

「またもや笑い声が聞こえる。トークは上手い自信はないし、何なら今話してる事は全部思いつきで話してるから、一体自分が何を言ったのかも覚えていない。」

「それはともかくだ。ついさつき出来たばかりの即興バンドだから、合わない部分もあるだろうし、ミスもあるかもしれないねえ、具体的には俺とか。でも、そういうのは皆の気合いと声援、後熱意で埋めてくれ。最高の文化祭を、最高のカタチで終わらせるためにな」

一拍置いて、大きく深呼吸をする。

「総武高校文化祭！最後まで燃えあがって行こうぜ！」

『オー!!!』

良かった。ちゃんと振りに乗ってくれる子達で。

「ありがと、由比ヶ浜ちゃん」

由比ヶ浜ちゃんにマイクを渡して、ドラムの椅子に座る。

スティックを鳴らし、テンポを取る。そして俺が叩くと同時に平塚さんと雪ノ下陽乃、そしてめぐりちゃんが曲を奏で始めた。

二人が歌い始めるとともにその美声に観客は引き寄せられる様にステージへと集まってくる。

ははっ！こりゃ、凄えな。マジでライブだぜ。

どんどんと盛り上がるを見せる会場はサビに入ると更に熱を上げる。自然と俺の手にも力がこもり、ドラムを叩く力が強くなる。

二人の声がシンクロし、歌い上げられる歌詞は即席のものにしては凄まじいものだった。

サビが終わり、間奏に入ると同時に観客の腹の底にまで響く様な歓声。

たった半年のブランクとはいえ、凡人の俺には致命的だ。ましてやさして興味のない分野の曲において、さらに程度が低くなる。

それ故に必死こいて演奏しているわけだが、それでもわかる。観客から伝わる熱気が、歌声から感じる熱意が、それらが一体となって生まれる熱狂が。

二番に入って、多少なり余裕ができ、観客を見る余裕がある程度できたので視野を広げてみれば、そこは光の海だった。

サーチライトが踊り跳ね、吊るされたミラーボールが幾つもの光線を乱反射させる。

それ以外にも曲に合わせて様々な事を行っている人間がいる。終いには客席から客席へダイブし、胴上げされる奴まで。プロにはない。アマチュアならではの熱狂がそこにはあった。

ステージの袖に目をやれば、そこには相模ちゃんがいた。その隣には隼人くんと仲の良いメンバーが。どんな方法かは知らないが、連れて帰ってきてくれたようだ。

そうなると、きつと、この客席の何処かに比企谷くんもいるのだろう。

彼はこんな熱気の中でも変わらずに一人、光の渦の中心であるこの場をただ眺めているのだろう。

そういえば、彼は記録雑務だったか。

なら、彼にはとびきりの記録を残してもらおう。

忘れられないように。記憶から消えないように。

エンディングセレモニーはつつがなく行われていた。

相変わらず、相模ちゃんは終始散々な結果に終わっていた。内容が飛んだり発表漏れがあったりと。

盛り上がった反動か、生徒達から激励が飛び、ついには相模ちゃんの目からは涙が溢れていた。

感動の涙……だと良いんだがな。

それにしてもさつきから耳に入ってくる話の内容がこれまたなかなかひどい。

なんでも「文実の男子が相模ちゃんに罵声を浴びせた」「心ない言葉で傷つけた」となっているらしい。

その言葉から、比企谷くんのやった事は想像がついた。そしてそれは比企谷くんの思惑通りとなっただろう。

自分とはほぼ関係のない人間まで救ってしまうのか……凄いな、比企谷くんは。

あまり褒められた方法でもないけどな。

「不満そうだね、景虎？」

「うおっ?!いきなり出てくんな、寿命が縮むだろ」

ひよこつと顔出してきたのはつい先程まで姿を消していた雪ノ下陽乃。おおかた、雪乃ちゃんのところだとは思うが。

「文化祭は大いに盛り上がったと思うよ?景虎のアドリブも効果覲面だったし、バンドも上々。締めは良かったんじゃない?」

「……まあな。文化祭としてはな」

文化祭は良い感じに終わった。それはいい。

問題があるとすれば、それはその裏だ。

「非難されるべき人間が被害者になって、賛美される人間が詰られる事になった。これが良い文化祭って言えんのかね」

「そうだね。でも、真相は誰にもわからないし、この結末を望んだのは他でもない比企谷くん自身。なら、私達はこれを『良い文化祭だった』って言うしかないの。私達は部外者だよ?」

「……わかってんよ、んなこたあ。言ってみただけだ」

雪ノ下陽乃の言い分は正しい。今更ここで俺達部外者が掘り返す事ではないし、これは比企谷くんが望んだ結末だ。本人が意図してしたというのなら、俺達がどうのこうの言う権利はない。

「そ・れ・よ・り・も！私はほんの少しだけ、景虎を見直したよ」

「はあ？なんだよ、急に」

「ドラムの事もそうだけど、アドリブを入れてきたのは流石の私も予想外で驚かされたよ。目立つの嫌いとか言ってたから」

「嫌いだよ。ただ、今回は輝く人間が周りにたくさんいたからな。何を喚いても、俺の顔なんざ覚えてるやつはいねえよ」

「それもそうだね」

肯定するな。傷つくだろ。

「けど、私は今回ので景虎を彼氏役に選んで正解だったって思うよ。文句言っても言う事聞いてくれるし、対価を求めてこないし、私の予想を時々裏切ってくれるし」

「おい、最初の二つは完全に馬鹿にしてるだろ」

「だから当分はまだ景虎は私の『彼氏役』だから。私の期待を裏切らないように頑張ってるね♪」

人差し指を口に当て、微笑むように雪ノ下陽乃は言った。

当分はまだまだ彼氏役をするのか。

勘弁してくれ……と言いたいが、不思議と最初の頃よりも嫌じゃな気がした。これも雪ノ下陽乃に散々振り回された結果の賜物だろうか。因みに最初の頃よりっただけで普通に嫌なんですけどね。

「んじゃ、まあ。せいぜい雪ノ下陽乃に失望されるように努力するわ」

「それは簡単だよ。私に土下座して服従を誓えば」

「俺はプライドは捨てるが人権だけは捨てる気はねえ。っつーか、ぜってー、お前にだけは土下座しねえ」

これは俺の信念だ。雪ノ下陽乃には絶対に土下座しない。口先だけでの謝罪なら何度でもしてやるが、それ以上はない。寧ろ、謝って欲しいくらいだ。

「ふふっ、じゃあいつ景虎が私に土下座するか、愉しみにしておくね？」

「嫌な楽しみつくくんじやねえ。てか、さつさと帰るぞ」

これ以上いても邪魔だろう。大分部外者の人間も帰ったようだし、俺達も帰らなければ。

「あ、私静ちゃんのお迎えできたから。帰りは景虎が送ってよ」

「はあ……んなこったろうと思つたよ。ちゃんとヘルメット用意してやってるから着けるよ。サツに捕まるのはごめんだぞ」

「しようがないなあ。景虎がどうしてもつて言うならつけたげる」

「どうしてもつて…… ああ、もうそれでいいよ」

なんか一気に疲れた。

さつさと家に帰って寝よう。

「あ、今日静ちゃん和飲みに行くから。景虎もついてきてね」

そう心に誓うものの、一瞬のうちに砕かれる俺の安寧だった。

っーか、お前未成年だろうが。

そうして二人の距離は徐々に近づいていく。

文化祭が終わって間もなく、俺と雪ノ下陽乃は何故かお好み焼き屋にいた。

飲みに行く、なんていうもんだから、てっきり居酒屋なんだとばかり思っていたんだが……。

「つーか、よく考えりやお前と飯食いに来るの初めてだな」

「ん？あー、そうだね。基本的にご飯食べた後だもんね、デートするの」

俺は食えてないんですけどね、大体は。休みの日なんて大体アニメ見ながらゲーム消化してるせいで夜更かし上等だし、その日に限ってこいつはデートに誘ってくる。お蔭で身体が辛いなのなんの。

「そういや何で居酒屋じゃねえの？飲むんじやなかったのかよ」

「年齢のことはどうにかなるんだけどね。流石に私達以外の未成年の子も来るんじや、誤魔化すに誤魔化せないし、肩身が狭くなっちゃうでしょ？打ち上げていうからには皆はっちゃけな」と

「皆？平塚さん以外に誰かいるのか？」

「あれ？言ってなかったっけ」

「平塚さんに誘われて飲みに行くとしたか聞いてねえ」

それ以上聞くつもりもなければ、雪ノ下陽乃も俺に言うつもりもなかっただろう。聞いても聞かなくても、俺はここに来なければならぬ。雪ノ下陽乃の言うことは絶対だから。

「で、誰が来るんだよ」

「それはもちろん……あ、来たみたい」

雪ノ下陽乃が入り口の方に視線を向ける。

俺もつられてそちらを向くと……そこにはつい数時間前まで一緒にいたメンツがいた。

「はい、雪乃ちゃん」

「……なぜここに姉さんがいるのかしら？」

「静ちゃんにお呼ばれしちやった。えへへ」

「……………」

明るい表情の姉とは対照的に、凍てついた表情の妹。相変わらず凄まじい温度差だことで。

「そ、そんな嫌そうな顔しないで欲しいなあ。私でも傷つくよ？折角のお祭りなんだし、今日くらいは仲良し姉妹でいようよ、ね？」

「今日くらい、ね」

「ええ、今日くらい」

「……まあ、いいでしょう」

真つ向から雪ノ下陽乃を睨み据えていた雪乃ちゃんと微笑みながらも視線を全く逸らさない雪ノ下陽乃だったが、ぴりぴりとした雰囲気になってきたのを悟ったらしく、雪乃ちゃんの方が折れた。

取り敢えず雪乃ちゃんは納得したようでこちらへと向かってくる。

その後ろには由比ヶ浜ちゃんと平塚さん、ミュージカルに出ている可愛い子に比企谷くん。後、まだ寒いとは言い難いこの時期にフィンガーグローブつけてコートを来た子。そこはかたなく、痛いオーラを放っている。後、もう一人ちっこい女の子が。こっちはこっちでそこはかたなく雪ノ下陽乃と同じ匂いが……かなりマイルドだが。

「あ、陽乃さん……それに九条さんも」

「ガハマちゃん、やつはろー!」

「それどこの国の挨拶だよ。由比ヶ浜ちゃん、さつきぶり」

「や、やつはろーです」

「それ敬語のつもりなのか……」

「比企谷くんも、やつはろー」

「どーも」

雪ノ下陽乃の挨拶に、比企谷くんは軽い会釈で返す。すると比企谷を押しつけてちっちゃな子がひよこりと出てきた。

「ちゃんとお話するの初めてですね！兄がいつもお世話になってます。妹の小町です。こちらは戸塚さんと中二さんです」

「あらあらまあまあ、雪乃ちゃんがいつもお世話になってます。姉の陽乃です」

小町と自己紹介する女の子丁寧にお辞儀する雪ノ下陽乃。しかし、どっちが戸塚って子で中二って子か一発でわかるな。

……しかし、妹？

「君、誰の妹なわけ？」

「俺の妹です」

そういつて即座に手を挙げたのは比企谷くん。

「……似てない」

「ちよつ、どこ見てるんですか。どこからどう見ても俺の妹でしょ」

「いやさ……」

「言いたいことはわかるわ。この頭から足の先まで腐ったこの男には似ても似つかないわよね」

「おい、その比企谷くん死んでるだろ。ゾンビだろ」

「あら、自覚はあるのね」

そういつて微笑む雪乃ちゃん。なんか生き生きしてない？つーか、仲いいな。

「こ、こんにちは……」

「はい、こんにちは。雪乃ちゃんと仲よくしてあげてね」

緊張気味に挨拶する戸塚くん。雪ノ下陽乃は優しく声をかける。上っ面だけだが、この人畜無害そうな子なら大丈夫だと判断したんだろう。

一応俺も軽く会釈だけしておくか。

しかし、可愛い子だな。さぞモテるんだろう……男から。

「ぶるあ！お初にお目にかかるう！我が名は剣豪將軍、材木座義輝であるう！控えおろう！」

「……」

おおう……なかなか重度の患者だった。自分に通り名みたいなものをつけるなんて。

「あは、すごい個性的で面白いね♪話してて楽しそう」

……マジか。流石に今回ばかりは剥がれるかと思っただが、いつも通りの対応で乗り切りやがった。

「る、るふんるふん！よ、よろしお願いするであります！」

雪ノ下陽乃に無駄に敬礼する材木座くん。その後ダツシユで比企谷くんに駆け寄っていた。

「お前、よくアレに何時もの対応出来たな。ちよつと尊敬したわ」
「あははー、我ながら感心してるよ。ちよつと無理があつたけど」

雪ノ下陽乃がそう言つて自分の太腿を指差す。

……見えない角度で全力で抓っていた。

なるほど。痛みでねじ伏せた。それ程までに材木座くんは凄かつた。

「ハル。お前のその生き様に初めて敬意を表する気になつたわ」

マジで感服する。ぶっちゃけ、今のは引いても誰も怒らないし咎めないのに、それでも外面を維持できたのは雪ノ下陽乃の日頃の行いの賜物である。

そして材木座くんは比企谷くんは何を言われたのか、超冷静になっていた。流石だ。雪ノ下陽乃に洗脳された直後の人間なら、あつという間に元通りにしてしまうその手腕。こちらも感服する。

「それにしても、陽乃さん、雪乃さんのお姉さんだけあつて超美人ですわ……。っは！新たな嫁候補！やるなー、お兄ちゃん」

「何がだよ。つつーか、雪ノ下さんには彼氏いるぞ。見ればわかるだろ」

「へ？そうなの？」

こちらへ視線を向けて不思議そうな顔をする小町ちゃん。俺は無言で頷いた。

「そっかー。残念だなあ……。あ、でも他にいっぱいいるしいつか！」

一体何の話をしてるんだろうか。嫁候補つて何？気になるんだけど。

「おお、皆陽乃と九条とは挨拶を済ませたかな？今日は奥の座敷を使わせてもらえるように話をつけてきたから、存分に楽しむといい。まずは乾杯からかな。席につきたまえ」

全員が席に着くと、平塚さんはグラスを手にした。それを合図に皆もグラスを掲げる。

当然平塚さん以外はジュース……。といたいところだが、平塚さん同様に雪ノ下陽乃はハイボール、そして何故か俺はジントニック。俺はジュースでいいつて言ったのに。

「では、文化祭の成功を祝して」

『かんっぱーい!』

平塚さんの乾杯の音頭の後、めいめいに杯を乾す。

今日のメインは……というか、もんじゃオンリー。サブもあるけど。

もんじゃ焼きとかは値段が手頃で長い時間いられる上に多彩なトッピングを加えて自分の手で作り上げる楽しさまである。高校生なんかはよく集まっているだろう。俺も昔はよくやった。

「そろそろ良さそうだね」

「お、そうだな。では、いただくとしよう」

平塚さんに促され、ヘラを持ち、皆で食べ始める。

「なにこれ!? うまつ! なにこれっ! 見た目の割に超美味い!」

「おい、見た目とか言うな。まじまじ見ると食べる気なくしちゃうだろうが」

「景虎ー? あんまり食欲進んでないよ? お姉さんが食べさせてあげよっか?」

「俺はゆっくり食うタイプなんだよ。後、俺の方が誕生日的には先だろうが」

ゲームしながら飯が多いから、時間をかけてゆっくり食うのが俺のスタイルだ。早く食うと腹の調子が悪くなる。

「しかし、打ち上げてこれでいいのか? もんじゃ食ってるだけだっど」

ふと浮かんだであろう疑問を比企谷くんが皆に問いかける。

「え、ど、どうだろ……」

「具体的に何をすればいいのかしらね」

「後夜祭はなにやってたんだ?」

「えー? なんかね、ライブハウスやって……皆適当にノリノリでアゲアゲな感じ?」

「実質ノーヒントだったぞ、お前の説明」

「具体的要素がゼロだった。とりたいところだが、概ねそんな感じだろう。勢いとノリでその場を楽しむ感じ。」

「文化祭でライブをやっていた人達のステージがあったわね」

「後、DJやってる人もいたからダンスもあつたよ」

「ふうん、行かなくてよかった」

後夜祭の内容を聞いて、比企谷くんがそう呟いた。

内容を聞いて、雪ノ下陽乃は余裕を持って頷いた。

「うんうん、健全でよろしい。大人になると、打ち上げっていうとお酒の席になってきちゃうからね」

「何をわかりきったみたい……俺らはまだそういうのじゃねえだろ」

「そうでもないよ。大学生になると大体飲むよ」

「何それ。最近の大学生怖え……」

「そういつて平然と自分は飲んでるけど？」

「いやー、マジで怖え。俺なんて足下にも及ばねえわ……あ、ハイボール下きーい」

「あ、あれー？人の話聞いている？」

「聞いてんよ。あれだろ？最近の大学生はマジでやべえつて話だろ？」

「それ景虎が言ってるだけでしょ……」

「やれやれ。完全に酔っているな……」

酔ってねえ。ちよつと気分が良くて、身体が熱いくらいだ。

「だが、まあ。わかるぞ。陽乃の彼氏をしているんだ。飲まなければやってられないだろう。私もハイボールおかわりを」

そういつて平塚さんもハイボールを頼み、ぐびぐびと飲む。

「す、凄い勢いで飲んで……」

「完全に飲み会になつてないか……？」

戸塚くんが怯え、比企谷くんが半ば呆れていた。

「飲み会か……教師同士でやるときは大体生徒の愚痴話ばかりしているな」

「うわあ……聞きたくないこと聞いちゃった……」

「そうは言うがな、由比ヶ浜。最近生徒への体罰は疎か説教も許されなくなつてきているから調子に乗る生徒も多い。かといつて成績

を下げると親が殴り込みと来たものだ。愚痴の一つや二つ。許されてもいいだろう」

「いや、平塚先生はいつも俺殴ってるじゃないですか。あれはどうなんでしょうか？」

「君は言葉を弄しても無駄だろう。言葉より拳で語る方が早い」

「どこのヤンキー漫画ですか、それ。しかも殴られてるだけなんですけど。反撃する前に沈黙してるんですけどー」

「はははっ、よく言うじゃないか、比企谷くん。『……沈黙は肯定と捉えるぞ?』みたいな」

「強制沈黙はその中には入らないと思うんですけどね……」

「似たようなもんさ」

俺なんて常にそんな感じだから。主に俺の隣に座ってる方にさせられてるから。笑顔で。

そしてその会話を皮切りに平塚さんの愚痴が始まった。

やれ、ビンゴやプレゼント抽選会の受付とクロークは面倒だの、帰り客の荷物を捌いた後、タクシーを拾わされた挙句、二次会の会場を押さえに走り、果ては偉い人の帰りのタクシーを拾わされ、持ち主の現れない落し物を延々に預からなければならぬだの、終いには『上司や先輩に言われて嫌だった言葉ベスト3コーナー』を始めた辺りで、俺も話題のあまりの暗さに笑い飛ばすことができず、酔いが醒めてきた。

「はいはい、静ちゃん、ストップ。これ打ち上げ。暗い雰囲気はダメだから」

「そうですねー。じゃあ、こういうときはゲームでもして盛り上がりましょう!」

雪ノ下陽乃の言葉に同意し、この空気を打開すべく、小町ちゃんが提案する。

なんだろう、このコンビ。嫌な予感しかしねえんだけど。

「どういうゲームやるんだろうね」

「お、いい質問だねー」

「まあ、定番なのは王様ゲームだろうな」

王様ゲーム……だと!?

「ええ……おっさん臭い」

ガハマちゃんがんばそりと呟いた一言が平塚さんを沈黙させる。

「女子と王様ゲーム……。夢・シチュエーション!も、もももしや、楽しい時を創る企業、バンダイの提供でお送りしていますか!？」

「落ち着け、材木座。スポンサーはバンダイじゃないから」

「王様ゲーム……。王位を争うというなら負けるわけにはいかないわね。ルールを聞きましよう」

「ゆきのん!これ、そういうゲームじゃないから!」

確かに王位を争うゲームなんて、デスクゲーム感半端ないゲームを打ち上げでやるなんて正気の沙汰じゃない。そもそも一般人が何の王位を争うというのか。

「二応説明しよう。王様ゲームというのは、くじで王様を決め、その人が何でも命令できるというゲームだ。『王様だーれだ♪』の掛け声で一斉にくじを引く。いいか?『王様だーれだ♪』だぞ?」

「ノリノリすぎるでしょ、この人……」

「なんでも命令できる。素敵な響きです!」

「そだね。なんでも命令ができる。つまり、命令された側に拒否権はないから、どんな恥辱も甘んじて受けなければならぬって事だから」

そういつて雪ノ下陽乃がこちらへ向けて妖艶に笑った。

こ、怖え。あいつ始めから俺しか狙うつもりねえ……。ていうか、王様ゲームは断じてそういうゲームじゃ……。ないとは言いが、親交を深める意味合いの方が強い。ようは皆仲良くということだ。つまり……。

「上等だ、コラ。後悔すんじゃねえぞ、てめえ」

今日は雪ノ下陽乃と親睦を深めるために何時もとは反対の気分を味わってもらおう。別に嫌がらせがしたいわけじゃない。ただ、俺の気持ちも知ってもらいつつ、雪ノ下陽乃の気分を俺も味わうというナイスなアイデアだ。

「あはっ♪誰に向かって言ってるのかなー?酔って、気分がハイにな

るのはいいけど、喧嘩を売る相手は選んだ方がいいよ?」

「うるせえ。てめえもゲームと名のつく競技で俺に勝てるか思ってるんじゃないぞ。トータル勝敗は俺の方が上だかな」

「え、ええ……王様ゲームってこんなゲームだったっけ?」

「ちよつと怖い、かも……」

「あの二人が異常なだけだ。王様ゲームはもつと夢に溢れたゲームだ」

「したり。特に我らのようなモテない男子には夢のようなゲーム。どんな命令も合法的に許されるゆえなっ!」

「彼も彼なりに不満がたまっているという事だろう。陽乃にやり返すなら今ぐらいしかないわけだしな」

「私としては彼に勝ってほしくはあるけれど……玉砕する未来しか見えないわね」

「おおっ!これが俗に言う修羅場ってやつですね!」

視線を交わす俺と雪ノ下陽乃。周りが軽く引いてるような気がしなくもないが、そんな事は関係ない。やり返すなら今が好機!運ゲーにおいて、俺と雪ノ下陽乃は対等だ。おまけに例えどちらが引いても本人に命令できる確率は低い。つまり、俺が仮に攻撃に成功した場合、雪ノ下陽乃はピンポイントに俺を攻撃できないわけだ。俺も出来ないが、それはゲームの醍醐味。目を瞑ろう。

「仕方あるまい。陽乃はこうなると梃子でも動かんからな」

そういつて、平塚さんがテキパキと準備を進めていく。

「よし。準備は出来た。では行くぞ。せーのっ!」

『王様だーれだ!!』

全員の掛け声とともに一斉にひかれる。

俺のは……チツ、二番か。

じゃあ、王様は誰だ? もしや、いきなり雪ノ下陽乃ということは……。

「あ、ぼくみたい」

戸塚くんだった。

「えーと、こういうのって、なんて言えばいいの、かな?」

みだ。

「それじゃあね……」

ごくりと生唾を飲む音が聞こえる。いや、俺だけだ。多分他のメンツもそんな感じだ。一体この魔王がいかなる試練を与えてくるのか、皆一様に警戒していた。

「八番の人は三番の人に壁ドンしてください」

デデーン。九条アウトー！

なんでお前は俺を一発で当ててくるんだよ!? もつとこう、泳がせろや！

「ほらほら、八番の人と三番の人は名乗り出て♪」

ここ、この野郎。どこから来てんのか知らんが、確実にどっちかは俺だつて確信してやがる……いや、片方は見事に俺ですけども。

「俺だよ……」

「……私ね」

仕方なく、手を挙げた二人の声が重なった。前者は当然俺、後者は……雪乃ちゃん。

最悪の組み合わせだった。

「あはっ♪面白いね♪」

「面白いわけあるか！お前の妹だぞ!」

「わかってるよ。私が言いたいのは、それに狼狽してる景虎が、面白いの」

デスヨネー。良い趣味してるぜ。

雪ノ下陽乃の前で、その妹を、というだけでも嫌なのに、相手はあの雪乃ちゃんである。さぞかし嫌そうな顔をするに違いない。いや、俺も嫌だけだ。

「一つ聞いても良いかしら?」

特に嫌そうな顔をすることなく、雪乃ちゃんは手を挙げる。

『壁ドン』というのは何かしら? 姉さんが言っている時点で良い事ではないのはわかるのだけだ」

「……」

うえーい。マジですか。壁ドンを知らないときたか。

「雪ノ下。壁ドンっていうのはな……」

「はい、比企谷くんストップ。それ以上言うと面白くないから」

雪乃ちゃんに『壁ドン』とは何であるかを教えようとしていた比企谷くんだが、雪ノ下陽乃に止められていた。

「雪乃ちゃんはその辺に立ってて。『壁ドン』の事は景虎が教えてくれるから」

「?ここでもいいのかしら?」

雪ノ下陽乃に指定された場所に立つ雪乃ちゃん。そして雪ノ下陽乃が視線で俺に訴えかけてきた。

王様の命令は絶対。別にそんなに難しい事も要求されていないし、拒否すれば俺が反撃する時も拒否される可能性が生まれてしまう。

仕方ないので俺は立ち上がって、雪乃ちゃんと向かい合わせに立つ。

壁ドンを理解している皆はごくりと息を飲み、唯一、雪乃ちゃんだけが未だ首を傾げている。

俺は意を決した。

ドン、と勢いよく壁につき、雪乃ちゃんを見下ろすようにして言い放つ。

「俺の女になれよ」

辺りを嫌な静寂が包んだ。

何故このタイミングで静かになるんだと言いたい。これではまるで俺が彼女を口説いているようではないか。

雪乃ちゃんは特に何の反応も示さずに、顎に手を当て、数巡迷ったような素振りを見せた後……。

「ごめんなさい。それは無理」

断られた。

「あつはつはつは！振られてる！あんなにカツコつけて振られてるよ！」

雪ノ下陽乃は大爆笑してらっしやった。てめえがやれつつたんだろ。

「第一、恋人の妹にも言いよるといっなのは如何なものかしら？幾ら私

が可愛いとはいえ、節度は持った方が良いわよ」

そして雪乃ちゃんには怒られた。

「いや、今のが『壁ドン』なんだ」

「さっきの行動が？それともその節操のない態度の事かしら？」

「前者です」

後者は種まき鳥とか種馬とか言います。

「次やるぞ、次！次こそは俺が王様だ」

「それフラグだよ、景虎」

「うるせー」

否定はしたものの、そこから俺が一度も王様を引く事はなかった。

材木座くんがツンデレ幼馴染を要求して、戸塚くんがテンプレ発言をさせられていた。比企谷くんと材木座くんを除く全員が白い目で見ていた。

雪ノ下陽乃が引いた時は渾身の土下座をさせられた。俺の志が一日も経たずに砕かれた。

小町ちゃんが王様になった時はガハマちゃんが比企谷くんに「はい、あーん」をした。甘い空気が流れた。

また雪ノ下陽乃が引いた時は俺が三回回って「わん」と言わされた。俺の尊厳が砕かれた。

雪乃ちゃんが引いた時は比企谷くんが黒歴史を喋らされた。空気が重くなった。

またまた雪ノ下陽乃が引いた時は平塚さんの『衝撃のファーストブリッド』を受けた。俺の身体が折れた。

平塚さんが引いた時はどうしたら結婚出来るかを訊かれた。誰も答えられず、沈黙していた。

そしてまた雪ノ下陽乃が……って、おい！

「お前、さっきから王様になり過ぎだろ!？」

「あはは……だって王様だからね……」

ん？雪ノ下陽乃にしてはノリが悪い。というか、元気がない。

それに比企谷くんや雪乃ちゃんも気づいたらしい。顔を見合わせていたが、テーブルの上を見て、すぐに気づいた。

「頭は痛いかな？」

「……ん。ちよつとね。飲み過ぎたかも」

力なく答える雪ノ下陽乃。その手には空のジョッキが。テーブルにも凄い量のジョッキがあった。こいつ、さては面白がつてる内に飲みまくって限界点が来たらしい。意識が飛ぶより先に頭痛が来るのは俺も同じだ。二日酔いにはならないが、寝るまでが辛い。

はあ……こいつらしいっていえばらしいな。

「すみません。俺とハルはこの辺で帰ります。金はここに置いときますんで」

「そうしたほうが良いだろうな。明日は平日だ。大学もあるだろう」

「ちよつと……私、まだ遊びたいんだけど？」

「なら飲む量考えろ、馬鹿」

財布と携帯をポケットに突っ込み、雪ノ下陽乃のバッグを肩にかけ

「じゃあ、高校生諸君。夜遊びは程々にな」

ひよいつと雪ノ下陽乃抱き上げて、そのまま入り口に直行していく。

どう抱き上げてるかって？お姫様だっこしかないだろうに。

「景虎。私、まだ帰るって言ってないんだけど」

「俺の独断だ。止めたきや、王様命令使ってみろ」

「……5番の人。今すぐ引き返して」

「外れ。俺は6番だ」

とは言ったが、実は5番だったりする。

何こいつ。どんだけきつちり当ててきてるわけ？王様ゲーム強すぎだろ。

「これ恥ずかしいんだけど」

「俺も恥ずかしいからイーブンだ。タクシーあるところまで我慢しろ」

後、腕も辛い。体育会系じゃないから、いくら雪ノ下陽乃が軽いとはいえ、数十キロある人間を抱えるのはなかなか厳しい。

「……バイクはどうするの？」

「どうするも何も明日拾いに来る。ちと遠いけどな」

最初は俺はジュースを飲んで、雪ノ下陽乃を送って行くつもりだったのだが、飲まされたし、飲酒運転で捕まるのはごめんだし、雪ノ下陽乃も本意じゃないだろう。捕まらないように逃げろとか言い出しかねないというのものもある。

いう事がなくなったのか、雪ノ下陽乃は無言になり、俺も特に言う事はないので無言になる。

近場でタクシーを拾い、雪ノ下陽乃を先に乗り込ませてから俺も乗り込む。

タクシーの運転手に俺の住所を伝える。後は雪ノ下陽乃の実家の住所を……と思ったのだが。

横を見ると、さっきの今で雪ノ下陽乃は眠ってしまった。

……おいおい。寝るの早すぎだろ。会話を止めて大体二分ぐらいで寝ちゃったよ。

「どうします？」

タクシーの運転手に訊かれたものの、俺はこいつの実家の住所を知らないし、家の電話番号も知らない。

「……取り敢えず、さっき言った住所でお願いします」

残された選択肢は一つしかなかった。

十五分ほどで俺の家に着いたのだが、当然のように雪ノ下陽乃は眠っていた。それもそうだ。何せ、アルコールが入って寝ているのだ

から、ちよつとやさつとじゃ目を覚まさない。叩き起こすという選択肢はある事にはあるが、後でとんでもない報復を受ける事になる。代金を支払った後、俺は雪ノ下陽乃を抱きかかえてタクシーを降りる。

タクシーの運転手が妙に良い笑顔だったのは、なんか余計な事を察してだと思う。残念ながら、そんな事はありませんよ。

抱きかかえたまま、器用に鍵を差し込んで扉を開ける。

「たでーま」

一人暮らしなので当然返事は返ってこない。しかし、今回はこれ都合が良いともいえる。もし、親が家族が家に居れば家族会議に発展していたかもしれない。何せ、見てくれは良い。寝ているだけなら取り巻き共が女神扱いするのもわかる。内側は悪魔だけだな。

廊下の電気を点けて、寝室へと向かう。

寝室と言っても、休日は一日の大半を其処で過ごしているのでリビングのようなものだ。本来のリビングかなんて、テレビはないし、ソファと机があるだけ。後、大量の本。最早息してない。

寝室こと俺の聖地に帰ると、相変わらずゲームや漫画、ラノベの山が積まれていた。足の踏み場はある。必要最低限度ではあるが、動けるようにはしている。ほら、だって蹴飛ばしたり踏んだりするの嫌じゃん？

最低限度の足場を進んでいき、無事ベッドに到達。雪ノ下陽乃を寝かせる。

久しぶりの肉体労働だった。明日は筋肉痛か。

「……………本当に。黙ってりゃ、可愛いのによ」

寝ている雪ノ下陽乃を見て、無意識のうちにそう呟いてしまった。

いかん。俺も酔ってるな。こんなの本人に訊かれた日にはまた面倒な事になる。

「景虎……………」

部屋を後にしようとしていたその時、ふと名前が呼ばれた。

当然、呼ぶ人間は一人しかいない。

「起きてたのかよ」

振り向いてそう問いかけるも、反応はない。

近くに寄っていつて、おそるおそる頬をつついてみるもの、反応はない。何時もなら触る前か、その直後くらいに何か言ってきたようなものだが……寝言か？

驚いた……訊かれてんのかと思っただぜ。

「私の事……好き……？」

……は？

ま、また具体的な寝言を。

「てめー、本当に寝てんのかよ」

問いかけてみるも返答はない。狸寝入りじゃねえよな？雪ノ下陽乃が好き嫌いを訊いてくる事は今まで一度もなかった。

理由はない。ただ、俺達の関係にそんなものは必要はない。所詮は仮初めだ。体の良い男避け。都合の良い暇潰し。深い関係などない。それ以上でもそれ以下でもない。

別に俺自身、雪ノ下陽乃に対しては苦手意識なようなものはない。結局のところ、こいつが演じているように、俺も演じているだけに過ぎないのだろうか。

……馬鹿らしい。俺はいつだって俺だ。演じているつもりなんてない。合わせる事はあっても、噛み合わせるために演じるつもりなんて毛頭ない。

「嫌い……じゃねえかもな。割と好きだぜ」

完成された外面の内に見える無邪気な悪意も、その更に奥にある本心も。

雪ノ下陽乃と長く関われば、自ずと見えてくる。これがこいつなりのコミュニケーションだと。

「……阿呆らし。俺も寝るわ」

これ以上いると、とんでも無いことを口走りそうだ。

クローゼットから掛け布団を引っ張り出し、俺は息をしないリビングにあるソファアの上で寝ることにした。



「ん……………ううん」

目を覚ました時、私は見た事のない……………違う。見慣れない部屋にいた。

まだ覚醒しきっていない脳でも、この場所はわかる。私の仮初めの恋人、九条景虎の部屋だ。

所狭しと積まれたゲームや漫画を見て、すぐにわかった。以前来た時よりも更に部屋が狭くなっているような気がしたけど、今はそんな事はどうでも良い。

昨日、景虎にお姫様だっこをされたまま、話した後の記憶がない。あの後、お酒は飲んでいなかったから、飲み過ぎて記憶が飛んだわけではなく、寝てしまったということだろう。

「はあ……………やっちゃったなあ……………」

思わず、深い溜息を吐いてしまった。

でも、仕方ない。きつと家に帰ればお母さんにまたねちねちと説教されるし、携帯の着信履歴なんて凄いいことになってて見るのも煩わしい。

特に問題なのは、景虎の前で無防備に寝てしまったということ。

もし、恥ずかしい写真の一つでも取られていたら、下手をすると攻守交代をしてしまうかもしれない。もちろん、そうなった場合は景虎といえど、全力で叩き潰すけど、若い男女が同じ屋根の下で寝泊まりした挙句、朝帰りなんて写真を持って吹聴された日には消した後の事後処理が大変な事になる。

昨日は自分でもよくわからないけど機嫌が良かった。

今まで飲みに行くことはあったけど、あそこまで飲んだ事はなかったし、あんなに素直にされるがままだったこともなかった。

相手が景虎だからって、気を許し過ぎたのかもしれない。これからはもう少し気を引き締めていかないと。

「景虎の匂いがする……………なんちゃって」

微睡みを彼方へと追いやり、かろうじて存在する足場を通過して、玄関ではなく、リビングに向かう。

このまま帰っても構わないけど、一応ここまで連れてきてくれたお礼と、後何か良からぬことをしていた時の為の釘を刺しておかないといけない。

急いだところで、大学の講義の制限目は遅刻なわけだし、二限目から行けば良い。

リビングに着くと、案の定、景虎はソファの上で眠っていた。いつもはどこか不貞腐れたような顔をしている景虎は、寝ている時は寝ている時でどこかだらしない。

涎垂らして寝てるし。撮って後でからかおうつと。

携帯で景虎の寝顔を撮った後、ふとテーブルの上に目がいく。そこにあつたのはお皿の上に乗った数個のおにぎり。

景虎、自分の朝ご飯だけちやつかり用意してたんだ。

私もお腹減ってるのに。これはお仕置きだね……………？

テーブルの上にはおにぎり以外に一つの置き手紙があつた。宛名は一応『ハルへ』とだけ書かれていた。

多分、勝手に食べるなどか、そんな感じなんだろう。景虎の性格的に。

そう思つて、見てみると……………。

『一応、腹減ってるだろうと思うから、食いたきや食え。マズイとか、見た目が悪いとか、冷たいとか、中身が好きじゃないとか、聞かねえからな。以上』

「……………ふふっ、何これ」

思わず、笑みがこぼれた。

そういえば、景虎はこういう人間でもあつた。

いつも文句ばかり言う癖に、反発してくる癖に、何だかんだでいつも私のお願いを訊いてくれる。

変なところで気を使うし、思つてもないところで私の要求にこたえてくるし、時々予想を裏切る。

だから、私はそんな景虎が嫌いじゃない。

利用するだけの一方的な関係のつもりだったが、景虎なら……………。

「ううん。やっぱりダメ」

今の関係じゃないとダメ。私にとっても。景虎にとっても。今以上の関係を望んじやいけない。

「だから、ね。いっぱい私を楽しませてくれた景虎にはご褒美をあげます。ありがたく受け取るように……なんてね♪」

そう言つて、私は景虎の額に軽く触れる程度のキスをした。

今までのお返し。景虎は寝てるけど、景虎には不意打ちぐらいが丁度いい。

起きてるとまた「こんなのがご褒美なんて納得できるかー!」とか言いそうだし。こんな美人を捕まえて、よく言うよ、景虎は。

「ん。ちよつと気が変わったから、恋人の真似事でもしてみよっかな」腕まくりをして、キッチンへ向かう。

冷蔵庫の中身は……あら、意外とちゃんとしたものがある。てつきりインスタント食品ばかりだと思つてたけど。変なところでしつかりしてるなあ、景虎は。

「でも、買い物に行く手間が省けたし。これで朝御飯兼お昼御飯でも作ろっか」

何の見返りも無しに誰かの為に料理を作るなんて、とても私らしくはないけれど、それでも構わない。

いつだって気まぐれ。その日その時の気分によつて行動する。

なんて言つても、私は雪ノ下陽乃なんだから。

言うまでもなく、問題はそこにある。

「あく……眠い……」

大きくあくびをしてから、俺はそう呟く。

昨日新作のゲームが出たから、うっかり完徹してしまった。しかも二日連続だ。割と辛い。全講義寝倒そうかな……いや、待て。ただでさえ、雪ノ下陽乃のせいで講義を途中退席する事があるというのに、これで寝たら先生からの評価は最悪だ。単位落としてしまうかもしれない。

「だくれだ♪」

ふと視界が真っ暗になった。というか、された。

俺の視界を遮るように柔らかな質感の手が覆い、ついでに背中にはこれまた柔らかいものが当たっている。

「すみません。人違いじゃないですかね」

「残念でした。景虎みたいな人は早々間違えられません」

適当言つて乗り切ろうとしたら、俺が超個人的な人間もとい変人みたいな物言いをされた。失礼な雪ノ下陽乃だ。じゃなかった。失礼な奴だ。

「じゃあ、もう一回。だくれだ♪」

飛びつきの猫なで声で再度問いかけてくる。いや、俺に公衆の前でこんな事してくるのは一人しかいないんですけどね。

「……ハル。注目を集める行為はやめてもらおうか、俺がいつか刺される」

「だーいじょうぶ。刺されるのは私に捨てられてからだから」

「すまん。どの辺が大丈夫なのか、教えてくれるか？」

それだと解放された瞬間、人生エンドするじゃねえか。誰が人生のしがらみから解放されたのって言ったよ。

「今日はなんだ？つーか、これから講義あるんだけど」

「そうだね。で、その講義、私も同じなんだよね」

「……………なに？」

「やっぱり気づいてなかったんだ。景虎ってば、講義中大体寝てるか、

ゲームしてるかのどつちかだもんね。私がバレないように根回ししたのもあるけど、あんまり気付かないから、これ以上は面白くないなあって」

………なんと。この魔王と同じ講義とな？

つまり、俺の平和な時間が地獄の時間にクラスチェンジするわけですね。嘘だ!!!

「今日は景虎の横に座ってあげるから。今日も面白いの、期待してるよ?」

「なんでだよ。授業中だぞ、面白いも何もあるか」

「えー。他の男の子は頼んだら、必死に考えてつまらない事してくれるのに」

「なんだそりゃ。面白くねえじゃねえか」

「違うの。必死に考えてる様が面白いの。なんとかして、私の好感度上げようと躍起になってるところなんて、滑稽じゃない? 従順なだけの犬には興味ないの」

「朝から爆弾発言をどうも。つーか、いい加減離せ。何も見えねえっつの」

「さつきから当ててることについては何も言わないの?」

「あえて無視してんだよ」

こいつは魔王と言いつけ聞かせれば、自ずと煩惱は弱まる。いくら役得状況でも、反応したらその後地獄が待っているとしたら、全然耐えれ……っ!?

「無視とはいただけませんなあ。私程の美人を差し置いて」

雪ノ下陽乃はあろう事か、手を離れたと思うと、更に強く抱きついてきた。それと同時に飛んでくる嫉妬と殺意の入り混じった負の視線。そしてそれを上回る煩惱。押し付けられてわかる。こいつマジでスタイル良いのなっ!

「ほらほらあ、何か、言うこと、ないの?」

「は、離れろ……っ!」

「え〜?聞こえな〜い!」

「んなわけあるか!?!この距離でそりゃねえだろ!」

「私の場合、都合の悪い事は聴こえないようにしてるの。もう一回聞
くけどいい？何か言う事は？」

「……言わないとダメなのか？」

「もちろんっ！」

なんでそんなにイイ笑顔なんですかね……。公衆の面前でこうい
う事をするのはやめていただきたいんですけど。まあ、ゲーム中じや
ないだけマシといえばマシか。

「……………柔らかいです」

「んー？なあにいい？」

「何処とは言わねえけど、色々柔らかい。男としては超役得だと思
う。見てる奴らからの視線さえなければ。終わり」

包み隠さず、感想を述べた。二人きりの時にされたら、いくら俺で
も超動揺するし、何ならもう一人の僕が反応する。けれど、そうなら
ないのはやはりこの飛ばされる殺意と相手が雪ノ下陽乃だからに他
ならない。

「変態」

「何とでも言え。俺も男なんだよ」

「むう……………開き直った。面白くなーい」

そう言うのとパツと雪ノ下陽乃は離れた。どうやら俺の反応が
お気に召さなかったらしいが、俺だってそんなしよっちゅうこいつの思
い通りになってたまるか。

「阿呆な事言ってるんで、とつとと行くぞ」

時間がやばい。ちよつと余裕があったのに、こいつのせい
でかなりギリギリになってしまっていた。

「景虎が冷たーい。私悲しいなあ」

「そう言うのは俺に涙の一つでも見せてからにするんだな」

口先だけでどれ程悲しんでも、こいつのわざとらしい嘘泣きは
すぐ分かる。出会った当初ならまだしも、今更こいつの外面と本心を見
分けられないほど、鈍くないし、振り回されているわけでもない。

「やだよ。景虎の前で泣いたら負けな気がするし」

「どういふ勝敗基準だよ……………」

そもそも、こいつが泣くような事なんてあるのか？生まれた時から泣いてなかったんじゃないのかと思う程なのに。二次創作物の転生者みたいな奴だな。マジチート。

「はあ……今日はマジで疲れた……」

溜め息を吐きながら、俺はサイズで遅めの昼飯を食べていた。

今の今までどうやってあの通り過ぎるだけでも存在感を示す魔王が自分の存在を誤魔化してきたのかは知らないが、まさか今日の講義全部にあいつがいたとは……しかも全部隣に座ってきてちよっかい出してくるし。

昼飯を食おうとしたら家に財布忘れてたし、雪ノ下陽乃に金を借りたら返すまでの間に何を要求されるか分かったものじゃないから我慢した。お蔭で空腹がマツハだし、金を割と使うから飯を食いに行くのは避けているんだが、本能に抗えなかった。

案内された席にどかつと腰を下ろし、ミラノ風ドリアを注文してから、鞆から携帯ゲーム機を取り出す。

どれだけ腹が減っていようが、暇があればゲームをするのが俺の信条。なんなら、死ぬ間際までゲームをしていたい。オタクにとってクラナドが人生なら、俺のゲームもまた人生なのだ。

因みに今やっているのは俺にしては珍しくギャルゲーでかつ俺の所持品ではない。

付き合い始めてかれこれ半年以上が経過したが、当然の如く、雪ノ下陽乃と俺の関係に進展など存在しない。それは至極当然のことで、誰にも文句を言われる筋合いはないのだが、うちの友人ギャルゲームスターこと哲平くんは俺の『雪ノ下陽乃はピュア』という台詞を真に

受けたらしい。『女をリードするのがデキる男だぜ』とかちよつとプレイボーイな発言をして、自分のギャルゲーを押し付けてきた。いらなうと言ったのに。

しかし、経緯はどうであれ、ゲームを渡されたのなら、俺にクリアしないなんて選択肢は存在しないし、なんだかんだ言つて、哲平は他の連中とは違つて、俺と雪ノ下陽乃の交際を是としている数少ない人間の一人だ。一応俺達のためを思つて行動を起こした以上、蔑ろにするわけにはいかない。

そうしてピコピコしていると、注文していたミラノ風ドリアが運ばれてくる。

いつもならゲームをしながら食べるところだが、ここは一応人の目もあるし、何より今回ばかりは空腹の方が強く、とつと胃に飯を詰め込みたいので食を優先する事にした。

「じゃあ、いただき「あれれ？九条さんじゃないですか？」はい？」

ふと、名前を呼ばれた気がしたので振り返る。

辺りを見渡してみても、特に見知つた顔はないように思える。つーか、俺の事を苗字でさん付けとかする奴はほぼいないし……ん？

二、三度見回したあたりで気がついた。

ぴよんとはねた髪に幼い容姿。それでいて、どこか雪ノ下陽乃を彷彿とさせる雰囲気を纏つた少女。雪乃ちゃんとは別の意味で、雪ノ下陽乃の妹であると言われても遜色ない人間。

「えつと、約二ヶ月ぶりくらいかな？小町ちゃんであつてるか？」

「はい！以前は良いものを見せていただきました。不肖の兄、比企谷八幡の妹、比企谷小町です！」

不肖の兄つて……酷い言われようだ。後、良いものつてなんだ？「いやー、それにしても、ちようどいいところでした。今は色々な人の力を借りたところだったので。もし良ければ、九条さんもお力を貸していただきたいんです」

「俺の？まあ、別にいいけど」

知らない仲ではないし、打算的な所があるような気がしなくもないものの、この子はまだ雪ノ下陽乃程に酷い人間じゃない。

せいぜい入門したてと言ったところだ。しなくてもいいんですけどね。

しかし、俺の力が必要だと言われてもな。俺を通じて雪ノ下陽乃の力を当てにしているのなら、見当違いも甚だしいところだ。

「取り敢えずこちらに……あ、ドリア食べてからにします?」

「いや、そっちのテーブルにこれと会計の紙持っていけば大丈夫だと思おうよ」

やった事はないけど。あちらとしてもいないのにテーブルを占拠されているという状態よりはずっといいに決まっている。

小町ちゃんに言われるがまま、ついて行くとそこには比企谷くん、材木座くん、戸塚くん、そして見知らぬ二人の人物がいた。

「九条さんもいたから手伝う事にもらったよ!」

「お前な……この人に関しては何で関係ない人だぞ」

「いいじゃないじゃん。考える人が多いに越した事はないし」

「それはそうだけどな……」

そう言つて、比企谷くんは少し申し訳なさそうにこちらを見た。比企谷くんは口ではあーだこーだと言うが、なんだかんだで他人に貸しを作りたがらない。申し訳ないというのは多かれ少なかれあるかもしれないが、それ以前に他人に任せる事自体を是としていないのだろう。彼のライフスタイル的に。

「別にいいよ。比企谷くん達には迷惑もかけたし、頼られて悪い気はしない」

後、強いて言うならあの二人……雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんがいないのが気になる。話の内容に関係あるのかはわからないが、比企谷くんとあの二人は他の人間に比べて仲は良さげであったし、ある一定の信頼はあったと思っっている。その二人がいない、あるいは頼れない状況なら、事態はよほど切迫しているのだろう。

「あ、沙希さん、川崎くん。この人は九条さん。雪乃さんのお姉さんの彼氏さんです」

「よろしくお願ひします!川崎大志っす!こっちは姉の川崎沙希っす」

男の子が元気に挨拶をする傍ら、姉の方は無言で会釈するだけに留まる。この温度差は比企谷兄妹に通じるものがあるな。

「俺は九条景虎。一応大学生。よろしく」

「顔合わせも済みましたし……というわけで、雪乃さん結衣さん流出阻止だいきくせーん！」

こほんと咳払いをした小町ちゃんは先程の予測を吹き飛ばすかのように、答えをぶっ込んできた。

つつこむと話の腰を折りかねないので、そのまま質問はしないでおうと思っていたら、青みのかかった髪をポニーテールにしているやや目つきの悪い女の子が頬杖をつき、そっぽを向いて疑問を口にした。

「あたし、呼ばれた意味ある？」

「総武高校の事ですし、是非沙希さんのお力をお借りしたく♪」

「ふーん、でもあたし役に立たないと思うけど」

「それを言われると俺に立つ瀬が無くなるよ」

総武高校の人間でもない、ともすれば知人程度の人間だ。役に立たないどころの騒ぎじゃない。

「どっちにしても、お前にも、九条さんにも意見を聞かせて欲しい。役に立たないなら、初めから頼ったりはしねえよ」

「……………そ、そう。じゃあ、別に、いいけど」

うん？沙希と呼ばれた女の子の様子がおかしい。なんか顔が赤いし、ひよっとして照れてるのだろうか？

「悪いな」

「……………いいよ。あんたはあの部活でやってる方が……、合ってるし」

「はあ？なんで？」

「な、なんでもない。最近らしくなかったから思っただけ」

「そうそう。お兄ちゃんは捻くれてるから、やっぱり悪あがきしないとね」

話から察するに何やら一悶着あったらしい。そしてその問題に雪乃ちゃんや由比ヶ浜ちゃん達も関係しているようだ。

とはいえ、やはり憶測でモノを考えていても意味がないので、取り

敢えず話がある程度進むまで黙っておく事した。

その結果見えてきたのは、雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんが生徒会長になるうとしている事。元を辿れば、それは一色と呼ばれる少女の『惨めな思いをせずに生徒会長にならない』という依頼から始まった事。その他諸々の状況が折り重なった結果、三人は対立する道を選んだ。

「要するに最初のアプローチが間違ってるって事なんだろうな」

今まで、比企谷くんの中ではその一色ちゃんとやらが生徒会長にならないということをも優先事項としていた。

しかし、ここでのやり取りの結果、最優先事項を小町ちゃんの願いである雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんの残留になり、かつ誰もダメージを負わないという条件となった。

ならば、後は割と簡単かもしれない。

一色ちゃんを生徒会長にせず、かつ雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんも生徒会長にしない。さらに他の候補の擁立をする、というのは葉山くんのような人間がこの場にいれば可能なのかもしれないが、それはできないし、それでは傀儡政権に近いものがある。何の意味もないだろう。

「だから、そうなるか……」

「その一色ちゃんと交渉するしかないね。生徒会長になってもらうために」

「でも、一色さんて人は生徒会長になるのは嫌なんじゃないっすかね。依頼をしてくるくらいですし」

大志くんの意見に俺は頭を横に振る。

「俺にも詳しくはわからない。でも、話を聞いてるとその一色ちゃんは生徒会長自体になることは拒んでいないように聞こえた。なら、生徒会長になった時の利点さえ大きければ、案外承諾してくれる……と俺は思う」

比企谷くん目配せすると、比企谷くんもまた同じ事を思ってたらしく、頷いていた。

「ううむ……しかしな、八幡よ。相手は女子だぞ？話し合いができ

るのか?」

「一色さん次第だよ。どんな感じの子?」

戸塚くんが問うと比企谷くんは顎に手を当て、数瞬悩んだ後、ポンと手を叩いた。

「例えるなら、全然可愛くない可愛げもない小町。九条さんに分かりやすく言うならついに外側も可愛くなくなつて暴挙にしか出ない雪ノ下さん、みたいな」

「あ、それヤバいつすね」

「それヤバイわ。俺死ぬわ」

帳尻も取れなくなった雪ノ下陽乃なんてただの魔王だ。どちらにしても魔王であることに変わりはないが、可愛げがある方がいいに決まってる。

「お兄ちゃん、それどういう意味かな?」

「あれだな。小町は可愛いつてことだ」

「それで?話は通じんの?」

「多分大丈夫だ」

比企谷くんの妙に確信じみた肯定はなんとなくわかった。

小町ちゃんと雪ノ下陽乃。二人に通じるのはレベルの違いはあれど、キャラクターの計算高さだ。男の目から見て、可愛く見えるように計算し尽くされたキャラクターは男に夢を見せる。

しかしながら、その一色ちゃんとやらは致命的に可愛げがない。小町ちゃんや雪ノ下陽乃のように一部の人間にしか見抜けない人間と違って、その『演技』が大多数の人間にわかってしまう。狙っているのがバレバレということなのだろう。

だから、交渉次第ではそのキャラクター性に『生徒会長』を組み込む利点を見出せれば、なんとかなるのかもしれない。

「川崎、お前が生徒会長にいいかもって思う奴、名前あげてみてくれ」
「へ?ちよ、い、いきなり言われても……」

「ゆっくりでいい」

そう言われると沙希ちゃんは「そういうことなら」と少しずつ名前を挙げていく。

雪乃ちゃんや由比ヶ浜ちゃん。隼くんや意外にも相模ちゃん。何人か知らない人間が名ざしで否定されたものの、候補としては全員知ってる人間だ。そして……。

「あと、……あんたとか」

「ああ、そりや面白い。けど、三十人も推薦人集められねえんだ」
「知ってる。言ってみただけ」

まあ、確かに比企谷くんが生徒会長になるっていうのも面白そうではあるが、先の文化祭で見事悪役を演じ切った比企谷くんを支持する人間も、推薦する人間も、殆どいないだろう。面白そう、と思っってしまうあたり、俺もそろそろ雪ノ下陽乃の影響を受けてしまっているのだろうか。

そこからトントン拍子で話は進んでいく。

今挙げた人間の名を借り、当て馬とか噛ませ犬とし、推薦人を集める。おそらくはそれを一色ちゃんの推薦人とするために。さつき比企谷くんの言った通りなら、雪乃ちゃんや由比ヶ浜ちゃんの推薦人が三十人集められなければ、二人は生徒会選挙に出る資格さえもないのだから。

そしてそれをツイッターで行う。リアルに存在する架空の人物で応援アカウントを作り、ネット上で推薦人を集める。ルールのには無しだが、そもそも提出しないし、ネットだけの物としてありといえばありだ。

アカウント運用を材木座くんと行い、この三日間で出来るだけ名前を集める。

作戦としては申し分ないどころか、出だしをミスらなければまず勝てると思っただけいい。

ただ、ここで一つ気になることがある。

「なあ。一つ聞きたいんだけどな」

「はい」

「由比ヶ浜ちゃんは知らないが、雪乃ちゃんの方だ。あの子、生徒会長になる気はないのか？」

俺が疑問に思ったこと。

それは雪乃ちゃんが依頼の為に生徒会長になると受け入れたとしたこと。

そもそも雪乃ちゃん達の部活内容を知らないが、以前の文化祭で雪乃ちゃんは雪ノ下陽乃に対して「あなたの出来ることは大体出来る」と言っていた。

何気ない姉妹の会話に聞こえなくもないが、歴戦のゲーマーである俺にはわかる。ああいう事を言うキャラ程、優秀すぎる姉を意識し、姉を超えるために姉と同じ事をし続ける。得意分野も、得手不得手も、好き嫌いが違ったとしても、それらを無理矢理捻じ曲げて。

こういうものは決まって、最後にはそれらに気づき、自分の特徴を活かした事をするものだが、あの姉妹に限ってはタチが悪い。大体の事をなんでもできてしまう。

だから、もしそうだととして、雪乃ちゃんは、その周りの人間はそれに気づいているのだろうか。

「雪ノ下は一色を生徒会長にしないようにする為には自分が生徒会長になる方が良い、と言っていました。奉仕部自体は依頼人はあまり来ませんし、両立もやろうと思えば出来る……雪ノ下もそう言っていました。実際出来なくはないんです。ただ……」

「なら、君も由比ヶ浜ちゃんも、生徒会に入るってのはどうだ？放出を止めるんじゃないか、君ら奉仕部が放出に乗っかるのは？」

我ながら意地の悪い質問をしているとは思う。

だが、全ての問題がクリアされつつある今、原点の問題の裏側とも言える雪乃ちゃんの意図は知っておくべきだ。もし、仮に雪乃ちゃんの目的と手段が逆だったとしたなら……。

「……いや、悪い。さっきのは忘れてくれ」

違うな。ここで俺達がその答えを求めても意味がない。その答えを探すというのなら、ここに比企谷くんと雪乃ちゃんと、由比ヶ浜ちゃんの三人が揃うべきだ。今俺に求められていることはあくまでも第三者としての意見。それ以上は誰も求めていない。

「話は戻るがやり方自体は間違っていないと思う。そのやり方なら、犯人はわからないし、そもそも問題として露呈しない可能性が高い。

戦って勝てないなら、戦わずして勝つ。いいやり方だ」

冷めたドリアを一気に平らげ、会計の紙を持って席を立つ。

「俺はこの辺でお暇させてもらうよ。悪いね、最後の最後でわけわからないこと言っちゃって」

「……そんな事ありませんよ。こつちこそ関係ないのに手伝ってもらってすいません」

そう言って、比企谷くんは軽く頭をさげる。

関係ない……か。

案外、関係ないとは言い切れないかもしれないな。

言いかけた言葉を飲み込んで、俺はその場を去った。

……やっぱ、冷めたドリアは美味くねえな。

それから数日後。

比企谷くんから一通のメールが届いた。

それは先日決めた作戦が見事成功し、雪乃ちゃんでも由比ヶ浜ちゃんでもなく、一色ちゃんが生徒会長になったという事だ。

犯人もばれていないどころか、そもそもその事態すらも殆どの人間には知られていなかったそうさ。問題は問題と認識されない限り、問題とはならないというが、今回のそれはまさしくそうだった。

比企谷くんの取った手段は正道ではない。邪道だ。

けれど、そうでなければ二人には勝てなかっただろう。故に比企谷

くんにとつての邪道はある意味勝つ為の正道ではある。褒められた手段ではないが、勝てない相手に勝つにはそれしかないだろう。

雪乃ちゃん達も参加資格を失い、そもそも依頼自体が消失した事で手を引いたそうだ。参加する意味は一応なくなったわけだしな。

しかし、そうなると気になつてくるのは雪乃ちゃんの本心。

はたして、彼女が生徒会長になろうとしていたのは依頼だけの為だったのか。それとも、依頼なんてなくても彼女は……。

「へえ、雪乃ちゃん、やっぱり生徒会長にならなかったんだ」

「うおっ!？」

ひよこつと顔を出したのはいつの間にか近くにあった雪ノ下陽乃。

つい先程までは近くにいなかったのだが、どうやら俺がボーツと考えているうちに近づいてきたらしい。というか、ここ大学じゃなくカフェなのになんでこいつと出くわすんだ。ついてなさすぎる。

「人のメール覗くんじゃねえ」

「メール内容の抜き打ち検査も彼女の務めでーす。それ以前に景虎が私が近づいてくるのに気づかないくらい気になるメールなんて、私も気になるでしょ?」

「お前は単に気配消してただけだろ」

「それもあるけど、景虎なら気付くでしょ?」

「ごもつともで。こいつの接近なら気配を消していても生命の危機を感じてすぐに気づく。ここが戦場なら雪ノ下陽乃は暗殺部隊でありながら戦力はワンマンアーミー。背後を取られたら最後。無事に生還できるはずもない。」

「それで? やっぱりつてのはどういうことだ」

「景虎も薄々気づいてるんじゃない? 雪乃ちゃんの抱える問題」

「……なんとなくはな。お前の近くにいなきゃ、まず気がつかなかった」

そう。これは雪ノ下陽乃の近くにいたからこそ気づいた問題。雪ノ下陽乃の事を勘違いせず、その本性を垣間見ているからこそ、雪乃ちゃんの言動に違和感を覚えた。そうでなければ、ただ姉に対抗心を燃やしているだけの負けず嫌いの妹で終わったはずだ。

「……………雪乃ちゃんにはね、自分が無いの。雪ノ下の家の影響もあるのかもしれないけど、いつも雪乃ちゃんは自分で決めた道を歩いてこなかった。どんな小さな事でも、絶対に誰かの歩いてきた道を歩いてきた」

「で、今の雪乃ちゃんが歩いてるのがお前が通ってきた道だつて事か？」

「そ。そういう意味では雪乃ちゃんはお母さんにそっくり。誰かにやらせたり押し付けるの。自分じゃ何も選べないから。誰かにやらせて、押し付けて、先を歩かせて自分はその後を追いかける……こんな簡単な人生、他に無いと思わない？」

確かにそうだ。

二番煎じというのは批判的に見られる事が多く、劣化模造品とされるが、こと人生という点においては余程のことで無い限り、そこには確かな安全がある。

何せ、暗い夜道の歩くかのような手探りではなく、既に明かりの灯された道に沿って歩くだけだ。器用な人間なら、それこそ前人と同じように道を歩いていくだろう。

「ひよつとして、嫌いなのか？」

「雪乃ちゃんが？そんなわけないよ。妹の事が嫌いなお姉ちゃんはいません！」

と、雪ノ下陽乃は豪語する。シスコンですか。世の中には妹の事が嫌いな姉ちゃんはわりといると思うけどな。

「でも……」

「ん？」

「ああして、自分で何も選ぼうとしないところはすつごく嫌い。私とは違うのに、私と同じフリをしてるところも」

そう言う雪ノ下陽乃からは初めて嫌悪感が伝わってきた。

雪ノ下陽乃自身、本当に雪乃ちゃんの事は好きなんだと思う。時折してくるシスコン発言もそれは偽らざる本音といったところだろう。

しかし、そのシスコンを度外視して、雪乃ちゃんの生き方が許容できない。

妹は姉と比較されることを煩わしく感じるだろうが、それは姉も同じだ。同じ道を歩けばそれは尚更。より優秀な方が持ち上げられ、劣る方は貶される。世の中とはそう言うものだ。ソースはサブカルチャー全般。

まあ、それはそれとしてだ。

「意外。お前でも愚痴ったりするのな」

「私だって人間だもん。喜怒哀楽はあるよ?」

「俺まだその二つしか見たことねえんだけど」

「意図的に見せてないからね。それとも見たい?」

「お前が本気で怒ると世界が破滅しそうだからパス」

「それはどういう意味かな……」

だつて魔王が怒るんだよ?つまりは世界破滅。はつきりわかんかね。

さつきいったことではあるが、こいつにだつて喜怒哀楽があることぐらい俺にもわかる。雪ノ下陽乃が仮面を被り、意図的に負の感情を見せようとしていないことも。だからこそ、その内面を覗き込むと今まで見た事のない負の面が垣間見えるがゆえの恐怖もあつた。比企谷くんが雪ノ下陽乃を避けるのもそのギャップゆえだろう。初めから負の面全開なら、あそこまで避けないはずだ。

だからこそ、意外だつたのは愚痴るといふ負の面を見せる行為を雪ノ下陽乃が俺に対して行ったということ。そしてその意外な一面を見て、満更でもない俺がいるということだ。バレるとからかわれるので何も言わないが。

「そういや、お前つて生徒会長とかした事ねえの?」

「しないよ。私は私のためにしか動きたくないの。ましてや、面倒を自分から請け負うなんて馬鹿らしくてやってられないもの」

なんともまあ、こいつらしい事で。自分に正直すぎて尊敬するわ。

「景虎は……した事なさそうだね」

「人の上に立つのは嫌いじゃないが、面倒なのは嫌いなんだよ。お前と一緒に。第一、ゲーム出来ねえだろ。ゲームする時間を削つてまで他人のために働きたくねえ」

「景虎らしいね。でも、もし景虎が総武高校にいたら、私が生徒会長になつて景虎を副会長に指名してたよ」

「はあ？生徒会って立候補制だろ？生徒会長が指名できるのかよ」

「そこはほら。無能な人間に用はないから。私が直々に選ぶようにできるようにするから。役職をこなせる力のない人間に与える仕事はないよ」

成る程ね……。自分が頑張らないといけない状況にはしないわけですか。人を動かす事に長けた人間は違うね。どんな駒でも最上の方法で使うが、使える駒は有能な人間がいいわけだ。

「ん？なら、俺が副会長になったらマズいだろ。全然優秀じゃないぞ」
「いいのいいの。多少器用なら、後は私が面白い人間と思つたら即OKだから。それに副会長っていうからには私の思考を理解できる人間じゃないとね」

「……………そうかよ。まあ、仮に俺が総武高校に通つてて、お前に指名されても、生徒会には絶対に入らねえけどな」

「もし私が『生徒会に入つたらいつゲームしてもいい』ってルールを作つても？」

「はっはー。是非、副会長にならせていただくこうか。補佐だろうが、ピエロだろうが、なんだつてやってやるよ」

「現金だね。そういうところ、嫌いじゃないよ？」

「人生はギブアンドテイクだからな。正当な報酬が与えられるなら、仕事はこなすぞ」

俺からしてみれば、いつゲームをしてもいいというのは、まさしく天啓に等しい。特にうちの高校では漫画・ゲームは禁止だったから、隠れてやるのに苦労した。抜き打ち検査の日が来た時の対策に何度頭を悩ませたか。

しかし、さつきあは言ったが、生徒という立ち位置からは、雪ノ下陽乃政権の学校というのはそう悪いものではない。というか、寧ろ歓迎すべき事実だ。より自由に。ルールに縛られない学生生活を送れるだろう。苦労だつて、それが自分達に直接的に繋がる利益が存在するなら、誰だつて頑張る。俺も当然頑張る。

とはいえ、こいつと同じ高校か……。案外、悪くねえかもしれねえな。

楽しそうに話す雪ノ下陽乃を見て、なんとなくそんな事を思った。

気を許すと、互いに見えてくるものがある。

季節早く師走こと十二月。

寒さが十一月に比べると加速度的になり、そろそろ手袋でもしようかと考え始める頃。

「かーげーとーらっ♪」

「なんっ……あががががっ!？」

今日も今日とて、魔王様の気まぐれにより、俺は朝一番から訳のわからない声を出す羽目になった。

冬になると友人同士でよくやるアレである。背中に手を突っ込むやつ。

身長的には十数センチ俺の方が上なのだが、その程度では防げない。

雪ノ下陽乃はなんの躊躇いもなく、無慈悲に俺の体温で温められた空間に手を突っ込んできた。

「冷たっ！おい、ハル！手を抜け！冷てえだろうが！」

「はあく。やっぱり暖かいね。流石は景虎。私のために温めてくれてたんだね」

「どんな解釈だよ。っーか、人の話聞けや！」

「あと二分くらい」

「あと二分も待ってたら、普通におまえの手が温まるのを待つと同じだろうが！」

「寧ろそういう意味で言ってるんだけど？」

「だよな！」

朝っぱらからなんでこんなノリツツコミじみた事をせにやならんのだ。っーか、襟伸びるんですけど。突っ込む角度の問題的に。

「コーヒー買ってやるから。抜けよ」

「コーヒーより紅茶がいいな」

「なんでもいいっっーの」

そう言うとき雪ノ下陽乃はすつと手を抜いた。ぐく、寒かった。折角、俺の体温によって温められた服とそれから生み出される温もりも

根こそぎ奪われてしまった。これが男相手なら報復するところだが、雪ノ下陽乃相手では完全にセクハラであるし、もししたとして、後の報復に何をされるかわからん。

そしていざ自販機に行こうとした時、唐突に雪ノ下陽乃に手を掴まれる。

「……景虎の手も暖かいね」

「そう言うお前は冷た過ぎるだろ。氷の女王かよ」

「普通に冷え性なだけだもん。それに氷の女王なら、イメージ的には雪乃ちゃんでしょ？」

確かに。視線だけで凍りつきそうだもんね。雪ノ下陽乃の場合は炎の、ではなく太陽の女王を装った闇の女王かもしれない。近づきすぎたが最後飲み込まれてジエンド。なんというこじじいでしょう。

「それに手が冷たい人は心が暖かいっていうよ？」

「今世紀最大のジョークだな。ぶっ飛びすぎて笑えもしねえよ」

こいつの場合、心から凍ってるから、手は冷たいけど心は暖かいって理屈はないし、あれはそもそもその場の慰めみたいなものだ。そんなので人の温もりが伝わるなら、冷え性の人間は全員詐欺師にでもなればいい。心が暖かいって確証はあるんだから、疑われることはないはずだ。

「景虎の癖に生意気く。それが自分の彼女に言うセリフ？」

「そうやって怒ってるフリしてる時点であざとい。打算的」

ぷくつと頬を膨らませる雪ノ下陽乃の頬をつつく。

側から見れば、リア充オーラ全開に見えなくもないが、俺達は本当の恋人じゃないので、その辺はちゃんと覚えておくように。テストに出るから。

「えーと、確か紅茶がいいんだっただよな？」

「そうそう。……えいつ」

午後の紅茶とブラックコーヒーを買って……と思ったのだが、その前にブラックコーヒーを買う前に雪ノ下陽乃がであろう事かMAXコーヒーを押しやがった。

「おまつ、何してんだよ」

「前々から興味あったんだ。比企谷くん曰く「千葉のソウルドリンク」らしいから」

じゃあ、自分で買えよ。

そんな事を言ったところで馬の耳に念仏なのは百も承知。自肅と反省から縁遠い人間だ。

「つーか、これが千葉のソウルドリンク？ただの糖尿病生産機じゃねえの？」

何を隠そうこのMAXコーヒー。病的に甘すぎる。砂糖水を飲んでもんじゃないかと思える程だ。高校の時はよく罰ゲームで飲まされたことがある。謂わば罰ゲームアイテムの一つなのだ。好き好んで飲む人間なんていないとばかり思っていたのだが……世の中は広いな。知り合いだけだ。

などと考えているうちに雪ノ下陽乃は勝手にプルタブを開けて、MAXコーヒーを飲む。午後の紅茶を買ってやった意味はあるんだろうか。どうせ、後で飲むとか、手を温める用とか言い出すんだろうけど。

ごくつと一口飲んだ雪ノ下陽乃は少しだけ顔を顰める。その後、こっちにMAXコーヒーを差し出してきた。

「……甘過ぎ」

「だから言っただろ。糖尿病生産機だつて」

おまけにどうすんだ、これ。買った以上、飲まなきゃもつたいないし、罰ゲームアイテムをわざわざ買って自分で飲み干すなんて、っただけMなんだ。

勢いに任せて、ごくごくと飲むが、やはり甘い。超甘い。人間の飲み物じゃねえよ。

半分ほど飲んだ辺りで一旦止める。ブラックコーヒー買ってから、交互に飲むか……いや、それだと本末転倒な気がしなくもない。何と少しでもこれで乗り切らないと。

「景虎、気づいてる？」

「あ？何が？」

何故か愉快そうな笑みで問いかけてくる雪ノ下陽乃。なにか面白

い事でもあったのかと視線を彷徨わせてみるが、特に変わった事は無い。

「間接キスだよ?」

言われてみて、初めて気がついた。

そういえばこのMAXコーヒーは雪ノ下陽乃が先に飲み、後から俺が飲んだ。となると必然的に間接キスになり、雪ノ下陽乃はその事実を俺に突きつけて、照れる姿でも見たいんだろう。

「そーいやそーうだな。どうりで前より甘いと思った」

「?」

別に間接キスに照れることはない。直じゃないんだし。屁理屈をこねるなら、レストランなどで使うコップなんて洗ってはいるが結局間接キスマがいのことをしてるだろう。つーか、男子での回し飲みとかよくあったから、今更間接キスどうこう言ってるそりがない。

なので、今回は俺から仕掛けてみることにした。

「ハルの味がするわ」

……やつべ。我ながらかなりキモい事を言った気がする。

なんだよ「ハルの味がする」って意味わかんねえ。イチヤラブカツプル発言過ぎるだろ。こんなのリアルじゃ絶対にあり得ねえぞ。

慣れない攻撃に辟易しつつ、恐る恐る雪ノ下陽乃を見てみる。

いつもなら笑いながら「景虎気持ち悪い!」とか言ってるそりなものだが……。

だが、俺の予想とは裏腹に雪ノ下陽乃はポカンとしたまま、目を瞬かせていた。

あの雪ノ下陽乃が呆気にとられていた。一体俺はどれ程のキモい発言をかましてしまったのだろうか、少なくとも外面が消し飛ぶほどだったのかもしれない。

「お、おい。ハル?今のはだな……」

さっさと弁明しようとしたら、雪ノ下陽乃はハッと我に戻り、俺の手からMAXコーヒーをぶんどる。

そして俺同様一息にごくごくMAXコーヒーをあおった。

「ふう……景虎」

こいつにしてはめっちゃ真剣な表情。いつもおちやらけた表情ばかりしてるから、妙に迫力があるというか、なんというか。

「景虎の味がするね♪」

超良い笑顔で同じ言葉を返された。

成る程。攻撃するのはいいが、されるのは嫌いだから同じ手段で反撃してきたわけか。

だが、甘い。

日々幾度となく、度の過ぎた悪戯に晒され続けていた俺にこのような温い攻撃は通用せんのだあ！

「……お、おう。そうか……」

嘘でーす。すみませーん、全然温くありませんでしたー！

よくよく考えてみれば、こつちの方向性の攻撃は喰らったことありませんでした！普通に効果絶大です。

「はい、私の勝ちいー。景虎が私に挑むなんて百年早いよ」

「百年も経ってたら別人だつーの。まあ、その手の事で、お前に勝てる気はしねえけどよ」

挑んでみてわかったが、こういう手合いは一日の長どころか、数万歩雪ノ下陽乃が先に行く。無謀にも挑めばこのように返り討ちだ。最近は少しだけ外面よりも内面が押し出されてきたような気がしてきたんだが、気のせいだったのだろうか。

「……実はちよつと動揺したんだけどね」

「あ？なんか言ったか？」

「うんうん。なんでもー。景虎って、なんだかんだ言っただけなのに弱いのかって」

「男は大体弱えよ。比企谷くん辺りには効かなさそうだけどな」

彼の場合、例え本当の恋心を持って、同じ事をして右から左だろう。まずは疑いかかるべし。って感じだしな。

「へっくしー」

……それはそれとして寒いな。さつさと屋内に逃げ込むつもりが雪ノ下陽乃に止められてしまつて、長居する羽目になっていた。

「さつさと中に入ろうぜ。風邪引いちまう」

「えー、男の子なのにだらしないなあ。子どもは風の子でしょ〜」
「それだと男は関係ねえだろ。つーか、俺もそうだけだよ。俺が言ってるのはお前の事だ。いくらお前でも風邪ひかねえなんて事はねえだろ」

いくら完璧超人でも、人外染みていても、ここが異能やら異形が蠢く世界でもない限り、人の理を外れることなんてできない。雪ノ下陽乃といえど、条件さえ満たせば風邪くらいは引くだろう。

「……いや、寧ろこのままいたほうがいいかもしれないねえな。お前が風邪引いたらどうなのか、ちよつと見てみてえな」

そうしたらちつとは可愛げがあるかもしれない。こういう奴は弱ったほうがいつそ本心も見れて、いつもと違う可愛げが………やべえ。単に外面が外れただけで延々と毒を吐いているイメージしか湧かねえ。

「へえ……じゃあ、風邪引いてみよつか？」

「やっぱいいわ。碌な事なさそうだからな」

結果。

………俺が風邪ひきましたとき。

笑えねえ……風邪引いたら面白えとか考えてる本人が風邪引いて寝込むとか。

「あはは、本当に笑えないねえ」

ついでに笑えないのは、何故か分かりきったかのように雪ノ下陽乃が俺の家にいるということだ。

「……なんでここにいます。どうやって入ってきた？」

「またまたあー。前にも勝手に入ってきたでしょ」

勝手に入ってきたことは認めちゃうんだ。まあ、今更責めたってな

んの意味もない。

「ちつ。ちつと待ってろ」

痛む頭を押さえ、ベッドから立ち上がる。

確か、棚の中に最近バイト先の店長に貰った紅茶のティーパックがあつたはずだ。そこそこ値もするから、気が向いたら飲もうと置いておいて良かった。

「はい。景虎、ストップ」

「なに……ぐえっ」

服を引つ張られて、体勢を崩した俺は積んであつたラノベの山に突っ込んでいった。

「景虎は病人なんだから。寝てないと駄目だよ」

「寝るっつーのはベッドでか。それとも今この体勢のことを言ってるのか？」

「ベッドに決まってるでしょ。景虎が掃除してないから、こんな事になっちゃっただけだし」

「……否定はしねえ」

つーか、出来ねえ。確かに本の山に突っ込んだのは雪ノ下陽乃が服を引つ張ったせいであるものの、積みまくってなきやそこで尻もちをついていただけだ。

「で、なんだよ。今はなにもしてやれねえぞ」

「私だって今の景虎に求めてないよ」

なら何しに来たんだ。……っ。頭が痛くてよく回らない。いつもならもうちと頭が回るんだが。

「ほら、私って景虎の彼女じゃない？」

「ああ……それが？」

「あれれ。思ったよりも重症みたい」

「……そう思うんなら、今日だけはそつとしておいてくれ」

「んー。それは駄目。さっきも言ったけど、私は景虎の彼女。寝込んでる彼氏のところに介抱をしに行けば、恋人アピールにちょうどいいじゃん」

そういう事か。それならこいつがここに来た理由も納得できた。

「なら……」

「したフリをするのは無しね。ちゃんと公言しないとイケないし、何もしないのは暇だから絶対に嫌」

先に言おうとしていた言葉を言われた。

中途半端や妥協を許さない雪ノ下陽乃らしくはあるが、俺の介抱なんて酷く面倒なはずだ。面倒も嫌いな雪ノ下陽乃は暇と天秤にかけたに違いない。これだと途中で面白介抱に発展するかもしれないな。

「……………じゃあ、頼む」

「頼まれました。景虎はベッドで横になってね」

そう言うとき雪ノ下陽乃は部屋から出て行き、居間の方へと向かって行った。せめて手ぐらい貸して欲しかったが、貸しという響きが何故か雪ノ下陽乃に対して使っちゃいけない言葉のような気がしたので、呼び戻さず、よろめきながら立ち上がり、ベッドにもぐりこむ。

やべえ。死ぬ程怠い。

風邪を引くのなんてかれ一年半ぶりくらいか。いや、あの時は熱が出てなかったし、実質三年ぶりくらいか。割と熱も高かったし、久しぶりに来るとなかなか辛いものがあるな。雪ノ下陽乃がいるからというのもあるが。

「景虎持ってきたよ」

入ってきた雪ノ下陽乃が持っていたのは氷と水の入った洗面器とタオル。雪ノ下陽乃にしてはなんとも古典的と言わざるを得ない。

「なんでそれ？冷えピタとか熱さまシートがあんだろ」

「こういう方が景虎も嬉しいでしょ？」

「別にそんな事ねえけどな」

そりゃまあ、ギャルゲーやってりゃ冷えピタでも熱さまシートでもなく、濡れタオルだけでも。実用性とかその他もろもろを優先してみれば、どう考えたって冷えピタや熱さまシートの方がいいに決まっている。解熱剤は？と聞かないのは単に家になかった気がするから。

「ま、いいや。私に頼んだ以上、景虎がやり方に難癖つけられる権利は持っていないし」

「ごもつともです。いや、頼んでなくても大体はないんですけどね。」

あなたが相手だと。

雪ノ下陽乃は横になっっている俺の額に絞った濡れタオルをおいて、満足そうに頷く。

何故満足そうなのかは最早問うまい。

そしてそのまま俺の隣に座ってから二分くらい経過した頃。

なんだか、眠くなってきたなと思ったその時。

「景虎ー。暇だから何かしてー」

「……じゃあ、帰れよ」

何も望んでないじゃなかったんですかねえ……矛盾してるよ、この人。今に始まった事じゃないけども。

「やだー。せめてお昼まではいるから、それまで暇つぶしして」

「それまで我慢してくれよ。頼むから」

本気で身体を動かすのが煩わしい。面倒とかそう言うのじゃなくて、普通に怠いんだ。

「えー……あ、じゃあさ。景虎の事、話してよ。喋るくらいならできるでしょ?」

「出来なくはねえけど……」

寝かせてくれるっていう選択肢はないんですか。ないですね。あなたは魔王様ですもんね。下々の声は届きませんもんね。

「別に面白え事なんてねえぞ」

「いいのいいの。あんまり期待してないから」

「そうかよ」

まあ、下手に期待されるよりかはマシか。俺の事なんてさして面白くない事ばかりだしな。

「つっても、何を話せばいい?」

「景虎はなんで千葉に来たの?」

「なんで……まあ、端的に言えばな。親とソリが合わなかったんだよ。それで中学の時荒れててな。勢いあまって地元を半殺しにしちまった」

「ふーん……?え?景虎って実は喧嘩強いの?」

「当時はそれなりにな。成績は悪くなかったけど、頭はぶっ飛んでた

な。わざわざ喧嘩売るような真似してからもれなく半殺しだ。一期変な異名もつけられてた」

そして当時はそれを聞いて、カッコいいときえ思っていた。本当にぶっ飛んでる。冷静になるとすげえ恥ずかしいやつだし、そもそも悪質にも程がある。それ程までに当時の俺は荒れていた。理由はものすごくくだらない。中学生が反抗期を迎える理由なんて大抵くだらないが俺もご多分に漏れずくだらない理由で荒れまくっていた。

「ただ、まあ。半殺しにした奴等は俺よりも色々やらかしてたみたいだよ。ぶっ潰した時もうちの生徒をボコつてた時だったらしい。で、俺はそれを助けたヒーローなんだと。度が過ぎてるって説教食らったけどな」

偶然に偶然が重なって、俺の暴力は正当化された。でなければ、普通に高校に通うにしては経歴に問題がありすぎる。

「そうなんだ。てつきり『俺の地元がないゲームがあるから』とかそんな理由でだと思ってた」

「いくらなんでもそりゃねえよ」

確かにゲーマーではあったが、あの当時はゲームをしていたのは面白いと言うのもあったが、それよりも退屈を感じたくなかった。暇になり、一度思考してしまおうとどうしても考えてしまった。その度に自分の弱さを突きつけられ、どうしようもなく苛立ち、暴力に走った。「で、一度頭を冷やすって事で爺さんのいる千葉に来て、今に至るってわけだ」

親元から一時離れた俺は思いの外すぐに落ち着いた。

爺さんや婆さんが優しくかったこともある。いつも俺の気持ちを尊重して、過剰に世話を焼くこともなく、適度な距離感を持って接してくれた事もあった。だからこそ、俺はもうあの時代を黒歴史と認識しているし、正直言って地元には帰りたくないでござる。恥ずかしさで死にそうだから。

「まあ、こういう事もあってな。お前を尊敬してるところがある」

「景虎が？私を？なんで？」

「色々言っただけど、つまるところ俺は嫌な事から逃げた人間だからな。」

俺とは比べものにならない家庭環境で逃げないで闘ってるお前は強い。すげえ奴だっと思ってる」

純粹な感想だった。

雪ノ下陽乃をして、「自分より怖い」と評される雪ノ下母は俺の両親とは比べ物にはないだろう。つーか、俺の両親も、見た目だけならあまり怖くはない。ただ、それ以上に嫌だったただけだ。

だが、雪ノ下陽乃は俺とは違う。

逃げる事をせず、ただその状況に耐えられている。荒れる事なく、ただ確固たる意志を持って、雪ノ下陽乃は自分を見失わずにここにいる。

結局のところ、雪ノ下陽乃と雪ノ下雪乃の強さの違いはそこにあるんだろう。

以前の雪ノ下陽乃の言っている事が本当だったのなら、雪乃ちゃんもまた俺とは違うものの、限りなく近い人間だ。抗うこともなく逃げただけの。

だから、俺は雪ノ下陽乃には少なからず尊敬できる部分がある。

あまりにもくだらない理由で逃げ出した俺には少し眩しいくらいだ。そしてその勢いで雪ノ下陽乃の暗黒面には目を瞑っておこう。そこはあまり尊敬できない。どんな理由があってもだ。

「……………本当に」

「……………」

「景虎は私が強いって……………本当にそう思ってる？」

ぼうつとしていた俺の意識は雪ノ下陽乃のその一言で叩き起こされるように覚醒した。

責めるでもなく、貶すでもなく、否定するでもない。

諭すように問いかけてくる雪ノ下陽乃の言葉に俺は思わずベッドから身体を起こした。

「雪ノ下……………お前……………」

「ん？どうしたの、景虎。鳩が豆鉄砲を食ったような顔して」

きよとんとした表情でこちらを見てくる雪ノ下陽乃はいつも通りに見える。いつも通りに外面を全面に押し出し、男の理想を当然のよ

うに振舞っている。

だからこそだ。

雪ノ下陽乃の違和感をはつきりと知覚できた。

「ハル。さっきのは忘れる。熱で頭がどうかしてた」

失言だった。

雪ノ下陽乃ほどの人間なら勝手に俺の考えを押し付けていた。

それで昔痛い目を見たというのに。また自分の愚かしさを露見させてしまうところだった。

軽視されるのはいい。いつもの事だ。

馬鹿にされるのもいい。もう慣れた。

ただ、今の今までこいつと一緒にいて、ちっぽけでもようやく出来た信頼関係をこなくなくだらない事で終わらせたくは………ない？

ん？ちよつと待て。

なんで今そんな事を思った。

少し前まではあれ程終わらせたがっていた関係じゃないのか。

勝手な都合で振り回されて、うんざりしていたはずだ。

なのに。なのになんでそれを惜しいと感じる。

こんな関係望んじやいなかっただんじやないのか。

………くそ。やっぱりどうかしてる。風邪引いたせいでおかしい事を思いはじめた。

「本当にどうしたの、景虎。厨二病でも拗らせたの？」

「厨二病はそんな突発的なもんじやねえ。もっところ、土台があつてだな」

「じゃあ、再発？」

「おい、人を元厨二病患者扱いするのはやめろ」

ちよつとしか拗らせてないし！名前が珍しいから実は凄い奴の転生体ぐらいだと思つてなかつたし！男なら誰でも通る道だし！

「はあ……お前といるとやっぱり疲れるわ」

「そう？私は疲れないし、楽しいよ？」

「そりやな。楽しくない事を率先してやるような人間じやねえだろ」

雪ノ下陽乃に背を向けて、壁の方に顔を向けて横になる。

いつも通りのふざけたやり取り。

なんだかんだでこれがちょうどいいのかもしれない。

元々、俺達の関係もふざけた関係だ。おもちゃと子ども。一方的に遊ばれ、使われる関係だ。いくら仮面恋人だとしてもここまでふざけた関係もそうないだろう。

とはいえ、このふざけた関係が割と居心地がいい。

良い意味でも悪い意味でも退屈はしない。させてくれない。それが雪ノ下陽乃だ。

こいつは退屈を心底嫌う。暇という時間が大嫌いだ。嫌悪していると云っても良い。

その認識は間違いではない。

ただ、それが雪ノ下陽乃が愉快犯じみた性格をしているからとか、そういうわけじゃない。

考える時間を過ごしたくない。抗えない現実を受け入れたくない。だから他の何かで塗り潰す。考えられないように。それが一時的なものだとしても。

そんな憶測じみた考えから、ふと思ってしまう。

雪ノ下陽乃は昔の俺と何処か似ているのかもしれない、と。

馬鹿馬鹿しい考えだ。雪ノ下陽乃は昔の俺ほど愚かしい人間ではない。

俺は俺ほど愚かしい人間を知らない。自分だからそう思ってしまうだけかもしれないが、それでも雪ノ下陽乃がそれ以下のはずがない。

だが、それでも。

雪ノ下陽乃が思ったよりも近くにいるような気がして、なんとなく嬉しかった。



「景虎ー？」

会話が無くなってから十分ほど。

名前を呼んでみても返事がなく、聞こえるのは小さな呼吸音だけ。そーっと覗き込んでみれば、景虎は寝息を立てて、眠っていた。頬をつついてみても、耳に息を吹きかけてみても反応はない。完全に寝ている。

「折角、タオル用意したんだし、ちゃんと乗せてないと」
壁に向いていた身体を仰向けにして、一度タオルを冷やしてから、また景虎の額に乗せる。

身体を触ってみたけれど、熱はかなり高いのか、結構熱かった。これでも、私と普通に会話を続けてくれたものだ。私でも風邪のときくらいは話す事を煩わしく感じてしまうというのに。

景虎は前に私が風邪を引いてるのを見てみたいなんて冗談を言っていた。

私が挑発するまでもなく、すぐに撤回したけれど、私だって風邪を引いてる姿は他の人には見せたくない。

私だって人間だ。人の力で抗えないものには勝てないし、予防はできても対策はできない。

熱も三十九度を越えれば頭がぼーつとするし、そうなるといつもの『これ』も維持するのにもものすごく神経を使う。その時にわかる。自分が息を吐くようにしている『これ』も結局負担になっている事に。

私は私の内側を見せたくない。見抜かれるのなら良い。それは私に落ち度はない。ただ、相手が優れていただけ。

見せてしまうのは自分に落ち度がある。どんな状況でも、私は自分からミスを曝け出したくない。

だから、さっきのは私の落ち度だ。
景虎が私を強いと言った時。

何故だか、少しだけショックを受けた。

勘違いしてる。私はそんなに強い人間じゃない。
突発的にそう言いかけた。

すぐにいつも通りに振る舞ったけど、景虎は気づいていた。私が本心を隠した事に。だからすぐに否定した。

景虎は想像以上に鋭い。

どういふ人生経験をしてきたのかはわからない。少なくとも比企谷くんのように他人の悪意に敏感というわけではない。親の仕事の関係上、他者の心を把握する必要性があった私に近いものを感じる。けれど、私と違って景虎は心を隠していない。常に自分をさらけ出している。

私と話している時も、ゲームをしている時も、こうして風邪を引いて弱っている時も、さしたる差はないように感じる。強いて言うなら対応が雑になるだけ。

文字通り、景虎が私を強いと言ったのは景虎自身も失言だと理解していた。

けれど、それは私があんな事を言ってしまったから。

いつものように適当に流してしまっていれば、景虎は気がつかなかったかもしれない。いくら景虎が想像以上に鋭くても、他の人間よりは素直に接しているとしても、私に分からない私が他の人間にわかるわけなんてない。

ただ、なんとなく。

私は景虎には勘違いしてほしくなかった気がした。

理想の人間ではない。雪ノ下陽乃については誤解をしてほしくなかった。

……私はきつとどうかしてる。

今の今まで。誰にも理解されたくない。私が一方的に理解さえしていればそれで良いと思っていた。利用する側に立つのは良い。される側に立ちたくなかったから。

人間関係はギブアンドテイクだ。だから私は与える側の人間にはなりたくない。社会はそれを聞いて、心の豊かな人間だと言うかもしれないけど、私から言わせればそれは負け犬の発想だ。そうして自分に言い聞かせることで慰めとされているだけだ。私はそんな事を肯定したくない。

相手に何も知られなければ利用もされない。誤った情報を与えれば、そのうち相手が勝手に尻尾を出す。それを私は利用する。心酔してくる人間も、敵対してくる人間も、中立を気取る人間も、何時だっ

てそうだった。

景虎を除いては。

一方的に利用するだけのいつも通りの関係だったのに。

気がつけば、景虎には見せたくないところを見せてしまっていた。景虎は興味がない癖に自然とこちらの領域に踏み込んでくる。興味がないから、その気がないから、こっちも対応するのはいつも気づいてからだ。敵意もなければ構えもない攻撃はいくら達人でも躲せないのと同じ。だって、相手にも意識なんてないから。

そんなだから私はー。

ううん。やっぱり駄目。私は所詮雪ノ下の人間だもん。自由なんてない。

私が雪ノ下の長女である限り、母がいる限り、行動選択に余地はない。

この仮面もそのために作ったものだ。自分を守るために必要な自衛の手段。

自分を自分で守るためには必要だった。他人に理解されないようにするために、本心を気付けさせないようにするために必要なものだった。

けれど、今はそれが少し煩わしく感じてしまう。

ー初めて人に自分を理解して欲しいと思ってしまうから。

雪合戦も立派な戦争である

冬休み。

本年度も残すところ後数日。

押入れの中から炬燵を引っ張りだし、ぬくぬくとしながらゲームをする。炬燵のダメダメオーラを抗うことなく受け入れ、俺はダメ人間街道まっしぐらな冬休みを過ごしている。

普段は息をしていない居間も炬燵の出る今の時期だけは食う寝る遊ぶの全ての時間において利用されている。きっと居間が擬人化したならさぞご満悦な表情をしているに違いない。

冬休み中はひたすらゲーム三昧だった。なんならバイトと飯の買い出し以外は家から出てないほどだ。実に有意義な時間を過ごしている。高校時代の生活に見事返り咲いた。

しかし……思ったよりも遥かに暇だった。

いや、ゲーム三昧だったので暇だったというのは少々語弊があるかもしれないものの、クリスマスなどのイベントにおいても、俺は普通に家に居た。

どうせ、雪ノ下陽乃に呼ばれるんだろうとタカを括っていた俺は少し拍子抜けだった。別に期待していたわけじゃない。なんなら全身全霊で警戒していた。

だが、雪ノ下陽乃からの反応はなく、この冬休み中は何事もなく、普通に家で過ごしていた。寧ろ、何の反応も見せていないことが気がかりではある。

あいつの事だ。俺を遊ぶよりも面白いイベントにでも参加したに違いない。面白さを求めるという点において、雪ノ下陽乃は他の人間の追隨を許さないからな。

ともかく、このまま何事もなく、平和に新年を迎えたいものだ。そしてお願いしよう。雪ノ下陽乃が少しは大人しくなりますようにと。そう思っていた矢先、携帯が鳴った。

最近を着信メモロディをダースベイダーから、FFVのボス戦の音楽に変えてみた。ボスと今から戦う感が溢れている音楽なので、俺自身

は結構気に入っている。

しかし、音楽は気に入っていても、掛けてきた本人は気に入ってないので、ちよつと嬉しくない。というか、この音楽が嫌いになりそう。「もしもし」

『ひゃっはろー。久しぶり、景虎』

ひゃっはろー。世紀末ですか、今は。またよくわからない挨拶をしやがって。

「何の用だ。まあ、ろくな事じゃないと思うけど」

『失礼な。もしかしたら、景虎とお話ししたいだけかもしれないじゃない』

「そうか。なら、今の時点でその線はねえな」

元々、その線だけはない。雪ノ下陽乃が俺と話をするためだけに電話をかけるなんて、俺が正気を疑うし、なんなら心配する。

『むく、可愛くないなあ、景虎は。もしかしてクリスマスの時、一緒にいれなかったから、ヤキモチ妬いてるの?』

「はあ?そんなわけねえだろ。ただ、お前を警戒しすぎて、一人踊らされた事にはムカついている」

『それ自業自得だよ』

そんな事はない。いつもの行動のせいで俺の心に警戒しなければいけない可能性を作ってしまった雪ノ下陽乃が悪い。普段から大人しくしてれば、俺はもつと優雅にかつ落ち着いて過ごしていた。

「で、もう一度聞くが何の用だ」

『景虎。今暇?』

「あ?暇……だな。これが思ったよりも」

そろそろ新しいゲームでも買おうかと考えていたくらいだ。何の襲撃もなかったが、襲撃に備えてめっちゃゲームしまくったから、冬休みゲーム計画が予定よりも遥かに早く完遂してしまっていた。

いや、それよりもだ。

「お前なんかあったのか?」

『んー?何がー?』

「いつもならこつちの都合なんて考えてなかったろ」

雪ノ下陽乃は相手の事を全く考えていない事に定評がある。それ故の魔王属性だ。

なのに今日に限ってはどういう意図かこちらの都合を聞いてきた。どういう風の吹き回しか。

『うーん。なんでだろうね。私にもよくわかんない』

雪ノ下陽乃のその言葉が嘘か真か。その辺はよくわからない。今目の前にいたら、なんとなくわからなくもないが、電話越しなら全くわからないので、それ以上言及はしなかった。

『でねー。もし暇なら大学に来て。面白い事するから♪』

それであちらも察したのか、すぐに話題を切り替えて本命を話す。

「はあ……その面白い事とやらはもしかして外でするのか？」

『まあね〜♪』

何故わかったのか。それは実にシンプル。

カーテンを開ければ、辺りは一面雪景色。

そう。昨日はここ十年の内、一番の豪雪だった。ありとあらゆる交通機関は停止し、こうして終わった後も雪がかなり積って交通機関に影響を与えている。

そんなレベルの雪が降ったとなれば、それなりにニュースにもなり、子どもなんかは大はしゃぎしてる頃だろう。雪合戦とか雪だるまとか、後は……カマクラとか。

そして俺の予想だと雪ノ下陽乃も考えついたのだろう。このクソ寒い中、よくもまあ外で遊ぼうなんて考えついたもんだ。大体の人間は家で引きこもっていたいと思うんだが。取り巻きの奴らは雪ノ下陽乃からの召集だから、よほどの事がない限り、絶対に行くだろう。

「俺以外の人間は？」

『いるよ。三十人くらいかな』

三十人。よくもまあ、集まったもんだ。ある意味尊敬する。

「わかった。直ぐに行く」

『あれ？景虎こそどうしたの？いつもならもっと嫌がるのに』

「嫌がったところで何も変わらん。学習しただけだ」

駄々をこねる程度で取り下げられるなら、とつくの昔に駄々をこね

まくっている。いや、駄々をこねまくっていたけど、何も変わらなかったから、もうしないだけだ。

「それじゃ、切るぞ」

そう言っただけで電話を切り、外の景色を眺める。

見渡す限りの雪化粧と窓越しにも伝わる冷気が外の世界の過酷さを俺に教えてくれる。

……外に出たくねえなあ……炬燵そのまま持っていけたりしねえかな。

クソ寒い中、バイクが使えないので歩く事二十分。

大学に着くと、入り口には数十人の大学生が集まって喋っていた。数を数えると、雪ノ下陽乃の宣言通り三十人。雪ノ下陽乃を含めて三十一人か。当然ながら俺が最後のはずなので後から誰か来るなんてことはないだろうし、あいつが誰かを待つなんてする事をしたがらないはずだ。

「景虎、おっそーい！」

取り巻きの人間と話していた雪ノ下陽乃は俺が来たのを確認すると、そう言っただけでこちらに歩いてきた。ちよつ、そういうのやめてもらっていいですかね。嫉妬の視線がやばいんですが。

「バイクが使えなかったんだよ。歩いてくればこんなもんだろ」

「走ってきてよ。寒いし、これからする事にはちようどいいよ」

これからする事って……体動かすのかよ。割とハードなやつを。

「なんだよ。クロスカントリーでもするの？」

「そんな死ぬ程面白くない競技を、私が人数集めてすると思う?」
「ねえな」

クロカンなんてひたすら走るだけの競技、雪ノ下陽乃がするわけがない。そして俺達もしたくない。疲れるだけだ。その点においてはこの場にいる全員一致しているはずだ。

「景虎。ここに雪があります。さて、この雪を使って何をするでしょう?」

「雪合戦」

「せいかりっ♪今回は変な答えを出してこなかったね」

「俺とお前の二人じゃないしな。ハルがいて、この人数でするならそれしかないだろ」

まあ、この人数だと本当に合戦になりそうだけど……いや、俺しか狙ってこない可能性が高いから合戦じゃなく、ただの処刑かもしれない。或いはリンチ。

「皆ー!じゃあ、今からバトルロイヤル式雪合戦を始めます!」

雪ノ下陽乃の宣言と共にどよめきが……起る事はなく、何故か皆テンションが高い。流石は人の上に立つために生まれてきた女。カリスマ性が違うらしい。

「ルールは簡単。最後の一人になるまで雪合戦をして、最後に残った人が勝者。一発当たったら即脱落ね。当たったのに当たってないって言う人は私許さないからね?優勝者には豪華景品が待ってます!」

雪ノ下陽乃の最後の一言に大きな歓声が沸き立つ。豪華景品で……普通ならタカが知れてそうだが、こいつが言うとなんか凄そうなものがある。それじゃあ、よい……スタート!」

雪ノ下陽乃の掛け声と共に俺と雪ノ下陽乃以外の人間全員が一斉に散っていく。この流れの速さをもつても、雪ノ下陽乃信者の飲み込みの早さには目を見張るものがある。というか、ほぼ脊髄反射の領域じゃないだろうか。

「景虎は行かなくていいの?一応私も参加者だよ?」

「開催者も参加者かよ。そんな事だろうとは思ってたけどな」

一つ息を吐いて、一足遅れで俺もその場から離れる。

ある程度離れたところで、人の視線がない事を確認する。

雪ノ下陽乃はバトルロイヤル式とは言ったものの、これまでの事を考えて俺が集中攻撃を受ける事は火を見るよりも明らか。そして雪ノ下陽乃もそれをわかってそうしただろう。普通に戦って勝ち目はない。

なら、普通に戦わなければいい。待ち伏せであれ、なんであれ、最終的に勝てば良い。雪ノ下陽乃の言う、勝てば官軍負ければ賊軍というやつだ。勝者こそがルール。

「よっ、と」

でかい木に登り、その木に隣接している校舎の屋根の上に登る。屋根の上といっても、実際のところは出っ張っている部分だ。そこまで高くはない。久々で出来るかどうかは不安だったが、存外やれるものだ。

そうして一分が経過し、上から軽く覗いてみると、早くも合戦が勃発していた。

いくら俺を優先してたたき潰したくても、他のやつを見つければ叩きたくなるのは必至。チーム戦が許されていない以上、俺を潰した瞬間に後ろから狙われる可能性もあるわけだしな。

存分に潰しあってくれ。俺はその間に玉を充填していくから。

合戦を尻目に死角でせつせと玉を作っていく。当然、これはここから撃ち下ろすためのもの。流星に持っておりる事はできない。こっそり暗殺じみた方法で倒すスタイルだ。一人にしか通用しないが。

十個ほど作ったところで、もう一度下を見る。

すると、ちやうど俺のすぐ近くで一人、辺りを見渡して警戒している人間が一人いた。

それじゃあ、まずは一人目。

雪玉を投げると見事に肩にヒット。当てられた本人は驚いて辺りを見て、そしてようやくやく上にいる俺の存在に気がついた。

「いたぞー！九条はここだー！」

やられた奴は俺に反撃する事ができないものの、その代わりと言わんばかりに大声でそう叫んだ。

まあ、それはルール外だからアリだよな。始めからわかってた事だ。

急いでその場から退却。数の暴力には勝てん。

逃げている最中にたまたま出会ったやつを倒すと、またさつきと同じように大声を発する。そしてまた逃亡。

これが四、五回続いたあたりでなんだかそういうゲームをしている気になってきた。いるよな、倒されると仲間を呼んで数の暴力で主人公を倒すタイプの雑魚キャラ。序盤に出てくるとマジでうざい。

倒しては逃げ。倒しては逃げ。その繰り返し。

合戦というよりはやはりリンチに近い。なんとか多対一にならないように走り回っていると、不意に俺の鼻先を白い物体が通過した。追撃を避けるため、転がるようにその場を離れると立っていたところに二、三個ほど雪玉が投げ込まれる。

すぐさま投げ込まれてきた方角を向くと、そこにいたのはやはりとつか、なんとつか、雪ノ下陽乃であった。

「真打ち登場……ってところか？随分早い登場だな」

「そうでもないよ。残ってるのは私と景虎だけだもん」

そんな馬鹿な、と言いたかったが、俺が倒したのが七人。仮に俺が隠れたりしている間に雪ノ下陽乃がその倍近くを倒したと考えて十九人。潰しあったら残りの人数が潰し合いで負けた人間と考えれば、開始時間から十分強経っていることも鑑みれば、そこまで非現実的でもないかもしれない。

「それで不意打ちが失敗したがどうする？言っておくが、俺は信者みたいにお前だけは狙わない事はないぞ」

「わかってるよ。だから、景虎だけは正攻法で倒してあげる！」

「その言葉はお前に一番似合わねえっての！」

お互いに助走をつけて、相手めがけて思いっきり投げようとする。

正面からやり合えば、投球速度は言わずもがな俺の方が上。先に当たれば、後から当たった玉は無効になる。

踏み込んで投げ……ようもしたその時、足が滑って体勢が僅かに崩れた。

そしてその隙に雪ノ下陽乃がこちらめがけて投げる。

このままだと負ける？馬鹿な、そんな事はさせるかあああああ！
体勢を崩しながらも思いつきり投げる。

お互いに投げた雪玉は吸い込まれるように……互いの顔面にク
リーンヒットした。

「あ痛っ」

「ぐへっ」

硬っ！あいつの投げた玉硬っ！ゴンって言ったんだけど！一瞬目の前に星が飛びそうだったんだけど！なんてももの作ってたんだあの馬鹿！

文句の一つでも言ってやろうと雪ノ下陽乃の方を向いた時。何故か雪玉がまたもや俺の顔面をとらえた。

「……おい、ハル。てめえ、何してやがる」

「それはこっちの台詞かなあ……さつき景虎は誰の顔に何を当てたんだっけ？」

「あん？バトルロイヤルやってんだから、誰のどこを狙っても関係ねえだろ。それよりも俺が言いてえのは勝負がついてんのに何で投げてきたのかっつー事だ」

「それこそ関係ないよ。バトルロイヤルに引き分けは許されない。ここからは第二ラウンド。片方が降参するまで試合は終わらないよ」

「……………面白え。上等じゃねえか！」

かくして誘ってきた人間そっちのけで約三十分間に及ぶ俺と雪ノ下陽乃の全力雪合戦が幕を開けることになった。

それを見届けた元参加者もとい雪ノ下陽乃信者は言う。

『まさしく鬼神同士の戦いだっ』と。

そしてその時の反動か、信者が俺に対して企てていた報復計画は中断されたそう。

再び場所は変わって俺の家。

バトルロイヤル式雪合戦が終わった後、久々にはっちゃけてしまった事に俺は後悔していた。懺悔と言ってもいい。雪ノ下陽乃と雪合戦という名の試合をしていた時は完全にスイッチが入っていた。口調も中学時代に逆戻り。ガラの悪いヤンキーだ。

そのことに後悔していたわけだが、何も後悔していたのは俺だけじゃないらしい。

「……………」

俺の隣では雪ノ下陽乃もまた、凄くやっちゃった感を醸し出していたのだから。

事実、雪ノ下陽乃も俺と同様、半分くらい外面が外れていた。鬼気迫る表情で、というわけではないが、笑顔で俺を罵倒していたのだから。取り巻きもとい信者も唾然としていた。こいつもこいつで完全にスイッチが入っていた。

そして二人揃ってでかした俺達は完全に葬式ムードだった。

「……………どうしよう」

「…………俺が聞きたい。普通、雪合戦程度で我忘れるか？」

「そんなの知らない」

実際のところ、あれは雪合戦と呼んでいいものだったのかさえ甚だ疑問だ。ただの喧嘩と大差ないと思う。

今は解散して俺と雪ノ下陽乃しかいないものの、信者共は面白い映画を観た後のように「凄かった」なんて言いながら、帰って行った。確かにさぞかし凄いかもしれない。

わざとらしくしか怒ったことがない雪ノ下陽乃が普通に顔に雪玉を当てられた事に対し、怒りを見せていたのだから。

いや、俺も正直悪いと思っっている。

顔立ちの整った相手に、しかも女性の顔面にものをぶつけるなんてなかなか鬼畜なやつだ。

しかし、あの時は足を滑らせて変な姿勢で投げてしまったし、俺も額に普通に硬い雪玉を当てられたのでノーカンにしてほしい。出来ないけど。

「それにしても、まさかお前まで普通に怒るなんてな。想定外だ」

「……………普通怒るよ。女の子は顔と髪が命なんだよ。景虎がゲームのデータ消されて怒るのと同じだよ」

「……………ああ、マジで悪い。そりゃ殺したくなるわ」

雪ノ下陽乃に言われて、事の重大さを改めて理解する。成る程、なかなかえげつない事を俺はしでかしてしまったらしい。今回は俺の方が珍しく非が大きそうだ。

「つーか、俺が言いたいのはそうじゃなくなてな。何時もならあんな素直に怒らないだろ。朝も普通に予定聞いてきたし。マジでどうした？」

いつもの雪ノ下陽乃ならば、あれだけ露骨に怒ったりしない。もつとわざとらしく、あざとく怒るだろう。

なのに雪ノ下陽乃は普通に感情を露わにしていた。内側に秘めているとかそういうのではなく、外側に普通に漏れ出していた。

「……………わかんない。最近、ちよつと調子狂っちゃうの」

「はあ？そりやまた、なんかあったのか？」

「さあ？それがわかれば苦労しないんだけど」

まったくだ。だが、雪ノ下陽乃をしてわからない問題があるのかと思うと、それはもう俺達凡人では到底理解できない壮大な悩みなのかもしれない……………いや、違うな。それは決めつけだ。もしかしたら、意外と簡単な問題で雪ノ下陽乃だからこそ、答えが見つからないものかもしれない。

どうにも前のことが引つかかる。いつもなら、勝手に雪ノ下陽乃という人間を別次元の人間に置き換えて、勝手に高尚な存在として、初めから理解できないものとして考える事をしなかった。

あの日、雪ノ下陽乃が俺に漏らした言葉は確かに本心だったと思

う。あれも外面だというのなら、俺は実にあっさり騙されてる事になるが、あれが本心だとしたなら、雪ノ下陽乃は今、確実に迷走している。

それが一体なんなのかわからない。わかるには俺はあまりにも雪ノ下陽乃を知らなさ過ぎる。数ヶ月の間、雪ノ下陽乃を見てきて、他の人間よりは知ったつもりでも、それはまだほんの一部だ。理解したとするにはまだ知らない事が多すぎる。

だからー。

「まあ……あれだ。何か悩みがあれば相談しろよ。俺じゃ力不足かもしれないから、意味ねえかもしれないけど」

「それだと私話し損じじゃない？言う意味あるの？」

「ある。話せば楽になることもあるんだよ。それでもって、そういうのは親友か恋人の役目だろ。なら、俺しかいねえじゃん」

「私に親友がない事前提？」

「世間一般で言う親友はいないだろ。お前外面被ってんだから。まあ、強いて言うなら……それも俺だろ」

仮初めの恋人でも、それは俺だ。本物がない以上、偽物しかない。世間一般の親友の定義でいくというのなら、こいつに親友なんてものはないかもしれない。ただ、血の繋がっていない人間で他の誰よりも知っているというのなら、微々たる差で俺だと言える。全て俺主観になるが。

「っーわけだ。こう見えても一時はダメ人間街道を歩いていた人間だ。そういうのには一日の長がある。問題を解決できなくても、解消は出来る……はずだ」

尻すぼみに俺がそう言うと、雪ノ下陽乃はくすりと笑った。

「何それ。そこは言い切らないとダメでしょ」

「無責任な事は言わないようにしてるんだ。特にお前相手だと尚更な」

今はそうでもないが、少し前まではそれで墓穴を掘るなんて事はよくあった。

「一つだけ。聞きたい事があるんだけどいい？」

「おう。どんと来い」

「本物ってき……なんだと思う？」

雪ノ下陽乃の口から出てきた言葉は実に抽象的で曖昧で不確定な言葉だった。俺もそういうのは想定していなかったので、思わず首をかき上げてしまった。

「本物って……何に對してかにもよるだろうな」

「私達の関係の正反対を言うんじゃない？心と心を通わせたラブラブなカップル」

「そりゃ……まあ、本物だな。けどな、強ち俺達が偽物ってわけでもないだろ」

「なんで？別に私達好き合ってるわけじゃないよ？」

「世の中には好き合ってなくても付き合ってる奴らもいるだろ。それこそ仮面夫婦なんて言葉があるぐらいだからな。後、玉の輿とか。あれも偽物かもしれねえけど、見る奴には本物に見える。ちやうど今の俺達みたいにな」

確かに俺達の関係は俺達からしてみれば偽物だ。片方の利のためだけに作った打算的なカップル。

しかし、第三者から見れば、俺達は普通に恋人なんだろう。だって疑われた事なんて一度もない。

なら本物とは何か。それはつまるところ見る人間次第の結果だ。決まったものは存在しない。

「なら、景虎にとって本物って何？」

「俺？俺は……あれだな。唯一無二の存在とか」

『重っ！私に言ってた事と比べると重いよ！』ぐらいを言われると思っていたら、雪ノ下陽乃は俺との距離を詰めて、耳元で囁く。

「じゃあ、景虎は私にとって本物だね」

耳元で囁かれた言葉に俺はドキリとした。

完全に不意打ちを食らった。まさか雪ノ下陽乃がそんな事を言うてくるなど露ほども思っていなかった。

「なあ、ハルロー」

「なーんちやって。本気にした？」

何か言わねば。

気まずい空気を打開しようとしていたら、けろつとした表情で雪ノ下陽乃が言った。

「はあ……悪いな。今回は完全に騙された。本気にしちまったよ」

「あはは、景虎つてば、ちよつと真剣な話が混じるとすぐに騙されるんだから。まだまだだね」

「うるせー。騙す方が悪いんだよ」

騙される方が悪いなんていう奴もいるが、それは悪事の正当化だ。騙す方が悪いに決まってる。騙された人間は少し間抜けなだけで、寧ろ騙されるくらいだからかなり善人だと言える。

「頼むからこういふときくらいは真面目に話してくれよ……つっても無理か」

「無理。私の性分だからね」

そういう雪ノ下陽乃の微笑みはやはり作り物の笑みだ。相手を魅了し、唆し、惑わせる。世が世なら美人暗殺者とかスパイになっていたかもしれない。表面上だけでいえば、雪ノ下陽乃は完璧な人間だ。その微笑みだけを見れば、何も疑いようなんてない。

だからだろうか。

それに僅かに見える綻び。

恐らくは殆どの人間が気がつかないほんの小さな誤差。

そこから見える内面との誤差に気づいてしまう。そしてその作られた微笑みさえも、全く別のものに見せてしまう。

これ程までに雪ノ下陽乃の微笑みが儂く、脆そうなものであるなど一体誰が気づけるといふのだろうか。

自分が雪ノ下陽乃の数少ない理解者である事に少しばかりの優越感を感じながらも、秘められた哀愁に胸を痛めずにはいられなかった。

年が変わっても、九条景虎の扱いは変わらない。

最近の私は少しおかしい。

長年培ってきた仮面。理想像という名の仮面を被っていた雪ノ下陽乃が、最近はよく外れそうになる。

今まではそういう事はなかった。意図的に外した事はあつたけれど、意図せず、自然と外れそうになった事はこの仮面を被り始めた最初頃ぐらいしかなかった。

あの時はまだ未熟だったで説明がつく。今のように女性ではなく、幼い女の子だったから。

でも、今は違う。

年を重ねるたび、成長するたびに色々な経験をして、どんどん完成されてきていた。

なのに、今になってからその完成された仮面が外れそうになる。

原因は……なんとなくわかつている。

九条景虎。

私の偽りの恋人。言い寄ってくる男を体良くあしらう為の道具。その程度の利用し、利用されるだけの関係のはずだった。

それなのに最近景虎の事を無意識のうちに考えてしまうことがよくある。

そしてその度に疑問に思う。なんで景虎の事を考えているんだろうと。

最近の私がおかしいのは景虎のせい。でも、その理由がいまいちよくわからない。

今だってそう。

一月一日。

世間一般で元旦と呼ばれる今日のこの日。

「うわっ、初詣に久しぶりに来るけどすげえ人いるのな」

私は本来家族と行かなければならないイベント全てをほっぽり出して、景虎と一緒に初詣に来てしまっていた。

誘ったのは当然私。景虎は大晦日に行っているテレビ番組を観た後、

朝まで録画していた裏番組を観ていたらしく、私が電話をした時、今から寝るなんて言っていた。

そこからはいつも通り、私が呼んで、渋々ついてきた感じ。

最初は眠たいとか寒いとか文句を言っていた景虎も、人混みを見るとついそんな事を口にしていた。口ぶりからして、最近は何事にも来ていないらしい。

「それで。まさかこれを突っ切って行くのか？」

辟易した様子で景虎が訊いてくる。

いくらなんでもこの人混みの中を突っ切ったりはしない。私もルールやマナーは大事にするタイプだから。

「このまま流れに乗るよ。まずお参りして、その次におみくじ買って、美味しいもの食べるの」

「あー、まあだいたいそんな感じだよな」

と景虎は言うけど、実際のところ、私は三ヶ日の全てを雪ノ下の長女として過ごすのでそれが当たり前のことなのか、よくわからない。友達が話しているのを聞いて、言ってみただけ。

人の流れに乗って、ゆっくりと歩みを進めていく。

歩いている最中、私達に会話はない。

そこでふと思う。私達は本当に無意味な話をした事はないような気がする。

無言の空間に耐えかねて話すなんて事はなく、いつも私が話させるか、景虎が気になった事を聞いてくるか、それともその逆かのいずれか。

そう考えるとやはり私達の関係は普通じゃない。

普通じゃないけれど、その分居心地がいい。気を遣わずにいられるから。

こんな事が出来る相手は景虎か静ちゃんくらい。雪乃ちゃんだと黙ってるなんて私が絶対無理だから。比企谷くんは……どうだろう。どっちかといえば遊んでしまうかもしれない。

と、その時。

ドンと私に誰かの肩がぶつかる。

完全に気を抜いていたところに受けたのですぐに体勢を立て直すけれど、さつきとは違い、境内に向かう方ではなく、その逆方向の流れのある人波に捕まってしまった。

こうなったらもうどうしようもない。一度流れに乗って、外に出てもう一度行くしかないだろう。

そう思い、景虎に声をかけようとした時、ぐいっと手が誰かにひかれた。

「何やってんだ。そっち逆だろ」

私の手を引いていたのは景虎だった。一步後ろを歩いていたから気づかないと思っていたけれど、景虎は私がいなくなった事にすぐに気づいたらしい。怪訝そうな表情でそう言った。

「さつき他の人とぶつかっちゃって……もう少して外に連れてかれそうになったよ」

「そうか。気をつけろよ」

そう言ったまま、景虎はまた前を向いて歩き出した。私の手を握ったままで。

……やっぱり景虎の手は温かい。さつきまではポケットに手を突っ込んでいたその手は元旦の寒空の下でもとても温かかった。それこそ、本人の心を示すように。

それにしても、景虎は今のこの状況をどう思っているだろう。多分、はぐれないようにとかその辺りだと思う。しかも、待つのが面倒とかそういうの。別に私が心配なわけじゃない。だからドキドキもしないし、やっぱり景虎だなあ、なんて思っ、ちよつと残念だった。

石段を上って境内に來ると、人混みも少なからず緩和される。

手をつないだまま、流れに乗って社の前までやってきて、私達は手を離す。

「景虎は何お願いするの?」

「俺?今年こそ平和な大学生活が過ごせますように、だな」

「それだと去年は平和じゃなかったみたいだね」

「平和なわけあるか。つーか、原因お前だぞ」

心底うんざりした様子で景虎は言う。

確かに去年は景虎にとって波乱も波乱の一年だったかもしれない。おおよそ普通の学生生活と称するにはあまりにも自由がなかっただろう。思い返すと、ちよつと悪い事しちゃったかなあと思う。

けれど景虎はその後にニツと笑ってこう言った。

「けど、まあ。楽しかったよ。暇じゃねえってところは良かったんじゃないの」

「…………じゃあ、景虎も私と同じだね」

「そりや違う。暇しないのは結構だけだよ。今年は精神的に疲れないのがいい」

「うーん。どうしよっかな」

私だって何も際限なく、自分の為だけに他人を振り回しているわけじゃない。それこそ使い勝手のない人間と敵対してくる人間はその限りでは無いけれど、景虎はそのどちらでもない。ただ、一緒にいると楽しいから加減を忘れてしまうだけで。

「一応考えておいてあげる」

「そいつはありがたいが、期待しないで待つとく」

そこで会話を切って、二人揃ってお参りする。

別に初詣のお参りはお願ひするものじゃないけれど、私も景虎に倣って、お願いをしてみる。

今までしたいと思った事はしてきたし、欲しいものも手に入れてきたから、神頼みなんてした事もない。それは心の弱さだと思っってしまったていたから。自分の力だけで叶えられないことを神なんて抽象的な存在に頼って、叶えようなんてどうかしてる。

だから今、私がこうして神頼みをしているのは心が弱くなってしまった証左かもしれない。

でも、たまにはこう言うのもいいだろう。少しは弱い女の子というのもステータスになる。弱みさえも武器にできるのは女の特権だ。

もしも、本当に神様なんているのなら――

「…………よし。次行こっか」

「ああ。そういや、随分長かったみたいだが、何のお願いしたんだ？」

「ん。なーいしょっ♪」

「だよな。俺が教えたからって教えてくれるような奴じゃねえもんな」

始めから私が答える気がないことを景虎も理解していたようで、それ以上問い詰めてくる事はしなかった。

いつもなら教えてあげてもよかったけど……今回はやめておく事にした。今回だけは景虎に聞かれるのは少し恥ずかしかったから。

――来年も一緒に初詣に来れますように。

参拝が終わって人の流れから解放されると、次に私達が向かったのはおみくじを売っているところだった。

「……今年最初の運試しか。大吉っていききたいところだが、凶しか出る気がしねえ」

「なんで?」

「さあな。自分の胸に手を当てて考えてみる」

それは私のせいと言いたいのだろうか。

頬を膨らませて抗議の視線を送ると、景虎は「あざとい」と言っって苦笑した。大体の男の子はこれでイチコロだけど、景虎にはあまり効いた試しはない。

六角形の木箱をがらりと振って、出てきた棒の番号を巫女さんに伝え、貰ったおみくじを開いた。

「あ、大吉」

「俺もだ。大吉」

二人揃って出たのは大吉だった。

折角、景虎をからかおうと思っていたのに二人とも大吉だと意味がない。ある事にはあるけど、からかえないのが残念。

「大吉が出たっつー事は今年なんかい事あるかもな」

「新年早々、私とデートできた事は？」

「ははは、何の冗談だ」

目が笑ってなかった。私も時々「目が笑ってねえから怖いんだよ」と景虎に言われるけど、目が笑ってないってこんなに異様だとは思わなかった。怖いというか変な感じだ。

私としては、今の状況は良いことだと思っただけど、大吉というからにはもう少し面白い事を……ん？

「景虎、こっち来て」

「は？いや、おい、引つ張るな！」

景虎の手を引き、私は足早に目標へと歩いていく。

まだあつちは気づいていない。気づいたとしても逃さないけど。

「ひゃっはろー。雪乃ちゃん」

「……姉さん」

私が見つけたのは雪乃ちゃん。でも、雪乃ちゃんだけじゃない。ガハマちゃんに比企谷くん、それに小町ちゃんもいる。

四人で初詣か……仲が良い事で何より。と言いたところだけ……。

「雪乃ちゃん。お家に帰ってなかったんだー？」

「見ればわかるでしょう。それに私は別にいてもいなくても関係ないもの」

確かに雪乃ちゃんの言う通り。雪乃ちゃんはいてもいなくても、特に問題はない。

問題はないけど、それが逃げていい道理にはならない事に未だに気づいていないのだろうか。

「第一、姉さんも帰っていないじゃない」

「私は彼氏がいるから。雪乃ちゃんとは事情が違うもん」

そう。雪乃ちゃんとは事情が違う。

彼氏がいたところで、母の都合には何一つ関係ないし、そもそも景虎が仮に本物の彼氏だと仮定しても、結婚出来るわけがない。それこそ、母のお眼鏡に叶う人間か、母を圧倒できる人間でもない限り。

だから、私は何も言わず、音信不通状態でこうして初詣デートを楽

しんでいる。

「新年早々、変なちよっかい出すな」

「ちよっかいじゃないよ。スキンシップスキンシップ♪」

「相手が嫌がつてるならそりやちよっかいだ。あ、四人共、あけましておめでとう」

「……あけましておめでとうございます」

「……あけましておめでとう」

「去年はお世話になりましたっ！今年もよろしくお願いしますっ！」

「あけましてやっはろーです！」

各々が景虎の挨拶に返していく。結衣ちゃんは相変わらず個人的だなあ。

「四人で初詣？仲良いな」

「はいっ。雪乃さんも結衣さんも小町のお友達ですからっ！」

「あー、比企谷くんがプラスαってこと」

「……まあ、そんな感じですね」

景虎の言葉に比企谷くんは肯定する。

「お二人も仲良いですねー」

「え、ああ……まあね」

「なんでそういう曖昧な反応かなー？そこは頷くところでしょー」

「頷いただろ……一応」

ふいっと視線を逸らして、景虎はぼそりと呟いた。

相変わらず景虎はぶれない。少しぐらいはデレても良いと思うけど、この関係を始めた頃から一貫して、景虎は彼氏を装う姿勢は貫いているものの、私を相手にデレる事がほぼない。

比企谷くんの事を理性の化け物といった事があつたけど、景虎はそれとは違う。理性や自意識が高いというよりも本能的に避けている。危機察知能力が高いというところかな。

「今はそれは置いておくとして……四人は初詣を兼ねて小町ちゃんの合格祈願に来たってところ？」

「ええ、まあ。神頼みっていうのも違う気がしますけど、頼めるもんに

は頼んでおいて損はないかと思ひまして。つーか、こういう時くらい働いてくれないと神とかいる意味ないでしょ。小町の為に働かない神なんてこの世界に必要なない」

「あはは、相変わらずのシスコンっぷりだね。私も小町ちゃんの合格祈願しておこうかな〜♪」

「お前が言うとなんだか神頼みつーか、権力行使しようとしてるようにしか聞こえないんだから、凄いやな」

「景虎はいつもそうやって私を悪者扱いするよね」

使える物はなんでも使うだけなのに、何がダメなんだろう。

景虎に言ったら、きつとそれがダメなんだって言うのだろう。

でも、ここで納得するわけにもいかないのが、私が私である所以。

そーつと手を伸ばして……えいつ。

「はうあつ!?!」

脇腹を指で思いつきり突くと、景虎は変な声をあげて仰け反った。

「は、ハル、てめえ……」

「ぶつ、あつはつはつは!は、は、はうあつだつて!か、景虎可笑しすぎ!」

「脇腹突かれたら誰だつてそうなるんだよ……」

睨んでくる景虎を尻目に私は笑う。

今までもこういう事をしたときに変な声を上げる人はいたけど、それにしても景虎の悲鳴はおかしかった。

「つーか、笑い過ぎだコラ。お前もこうしてやるっ」

景虎がこちらに手を伸ばすのを見て、私はすぐに脇腹を守る。

本当なら投げ飛ばしても良いけど、人が大勢いるところですからわけにはいかないし……あれ?

景虎の伸ばした手は脇腹に来ることはなく、そのまま私の頬を摘んでいた。

「はひほへ?」

「甘いな、ハル。俺がそんな馬鹿正直な反撃に出るとは思わなかっただろ」

私からしてみれば、そもそも景虎が反撃してくることも意外だった

けど、さらにこんな衆人環視で恥ずかしげもなく、こんな事をしていると思っていないかった。

そう言う意味では私の見立ては甘かったと言わざるをえない。

「ははひへ」

「嫌だね。えーと、比企谷くん。この顔写メって俺の携帯に送ってくれ」

「はあ……俺を巻き込まんでください。後で何されるか、わかったもんじゃないんで」

「確かに……じゃあ、雪乃ちゃん。俺の右ポケットに携帯あるから。それで写真撮って」

「……命令されるのは癪だけれど……そうね。姉さんの醜態を残しておくのも悪くないかもしれないわね」

そう言つて雪乃ちゃんが景虎のポケットに手を入れる。

今のこの顔を記録媒体に残すわけにはいかない。

私はいつも完璧で完全な人間を演じてきたのだから。おふぎけであつたとしても、こんな状態の写真を残されると困る。そんな事をしってしまったら、私の演じる私に傷がつく。

ーあれ？そもそも私ってなんだっけ？

パシヤツ。

抵抗を試みようとした時に私の中に生まれた疑問は思考をフリーズさせ、敢え無く景虎によって生み出された間抜け面を景虎の携帯に残す形となつてしまった。

side out

「いやー、今日はそれなりに楽しかったな。面白いものも撮れたしな」
雪乃ちゃんに撮ってもらった雪ノ下陽乃の写真を見て、俺はそう呟いた。

おそらくはかなりレアな写真だろう。どれだけ友人と戯れようと、どれだけ理想の人間を演じようと、雪ノ下陽乃はわざとでも醜態を晒す事はしなかったのだから。これは当分イジるのに使えそうだ。

比企谷くん達と別れた後、近くにあった屋台で甘酒を買い、ちびちびと飲みながら、来たとき同様に流れに任せて神社の外めがけ歩いていた。

しかし、来たときと同じという点で言えば、俺と雪ノ下陽乃の間に会話がないことだ。

そして違う点があるといえ、どこか雪ノ下陽乃がむすつとした表情でいることだ。

さっきのやり取りはお互い様。いつもの軽口から、オールした結果の謎テンションによる反撃と続いただけだ。それ以上それ以下でもないわけだが、このお姫様は飼い犬に手を噛まれたようでお気に召さなかったらしい。甘酒を渡したときも俺を一瞥して小さく「……ありがと」としか言わなかった。

とはいえ、これはこれで新鮮だ。

怒ると言っても、どちらかといえば拗ねているのに近い雪ノ下陽乃は普通に女の子をしている気がする。大学生を捕まえて、女の子というのは些かおかしい気もするが、雪ノ下陽乃はその内面性を考慮して、やっぱり女の子の方が表現としては正しいだろう。

「そろそろ機嫌直せよ。いつまで拗ねてんだ」

「……拗ねてないもん。いつも通りだし」

そう言ってる割には不機嫌そうですが。

「ああ、わかったわかった。今回は俺が悪かったよ」

お手上げのポーズを取って、素直に頭をさげる。今回ばかりは仕方がない。雪ノ下陽乃が攻められる行為を好んでいないことを知りながらもやってしまった行為だ。俺に非があるかと問われれば、こと今

回に限ってはあるのが現状。雪ノ下陽乃からしてみれば、自分がした行為は柵に上げているのでそれを問うたところで無駄だ。

「……本当に悪いと思ってる?」

「思ってるよ。なんでもしてやるから、機嫌直せ」

「本当になんでもする?」

「ああ、なんでも……あ、いや、ちよつと待ー」

ものすごく嫌な予感がして訂正しようとしたものの、時すでに遅し。顔を上げてみれば、いつも通りの雪ノ下陽乃の顔がそこにはあった。

「じゃあ、何をしてもらおっかなー?なんでもするって言ってくれたしなー?」

「お、おい。なんでもするって言っても限度が……」

「んー?景虎、もしかして『なんでもする』って言ったのに、私のお願いに文句言うの?」

「……………いえ、言いません」

つーか、言えません。また不機嫌になるし。

しかし、不思議な事に今回は雪ノ下陽乃から圧力を感じないような気がする。

……もしかや、こいつ。怒ったフリをしていただけなのではなからうか。

この機嫌の直る早さや拗ねていたところを鑑みるにその可能性はなくも無い。寧ろ、それしかない。つまり、雪ノ下陽乃は俺の反撃に対して更に反撃を重ねてくるという所業に出たわけだ。やられたらやり返す。そしてやり返されたら叩き潰すが、雪ノ下陽乃クオリティ。これは酷い。

さつきとは打って変わって鼻歌まじりに歩く雪ノ下陽乃と肩を落として歩く俺。

早く神社から出てお開きにしたところだが、人の流れはそこまで早いものでも無いし、そもそもその程度で雪ノ下陽乃が見逃してくれるはずも無い。大人しく、雪ノ下陽乃が少しでもマシなお願いをしてくる事に賭けるか。

そうして甘酒を飲み干した時、神社から出た。

殆どそれと同時だった。

「うん。決まった」

「ほーん。何に？」

最早抵抗は無意味。さつさと聞いて、さつさと終わらせよう。

「この三ヶ日の間……私、景虎のお家にお泊まりするね♪」

「そうかそうか。………はい？」

雪ノ下陽乃のお願いの結果。

こいつは俺の家に泊まる事になった。

さしもの俺もそれだけはマズイと説得を試みたのだが、口論において、俺が雪ノ下陽乃に勝てた試しなんて一度も無い。当然のように負けてしまい、今現在雪ノ下陽乃は俺の家に行った。

「あれ？前とちよつと変わってるね」

「ん？まあな。俺の部屋はエアコンあるけど炬燵を置くスペースがないしな。ちよつと前からベースキャンプを変えてみた」

「だから机の上がゲームだらけなんだ……景虎って本当にゲーム好きだよな」

半ば呆れた様子で雪ノ下陽乃は苦笑するものの、机の上にあったゲームを物色し始めた。

「面白そうなのがあったら、借りてもいい？」

「おう。そこにあるのは大体クリアしたからな。どれでも貸してや

る」

こうして雪ノ下陽乃が普通にゲームを物色しているのも、実は以前の俺との闘いに負けたことがきっかけというのが、なんとも雪ノ下陽乃らしい理由だ。ただ、理由はどうであれ、サブカルチャーの普及に努めることができたことに俺は喜びを隠せない。

それに雪ノ下陽乃には内緒だが、週一でこっそりテニスの練習をしていたりする。

仮にまたゲームで勝った時、テニスでその腹いせとばかりにボコボコにされないために練習しているわけだ。

もちろん、ちよつと練習する程度で勝てる相手ではないことは重々承知の上だが、それでも何もせず惨敗というのは俺としても腹がたつ。

だから、なんやかんやで俺はゲームを、雪ノ下陽乃はテニスを相手に教えることで共有できる趣味を生み出したことになった。

こうなると恋人関係(仮)も殆ど死角がなくなってきた。あるとすれば、お互いのボディコンタクトぐらいで今回のお泊まりが終われば、ほぼ疑いの余地はなくなるだろう。

しかし、まさかここまでやる事になるとは。この関係が始まった頃は露ほどにも思っていなかった。

どうせ、すぐに終わると思っていたら、別荘に行ったり、母校の文化祭に行ったり、その打ち上げに参加したり、看病されたり、初詣に行ったりだ。普通にカップルとして成立している。

これが吉と捉えるべきか、凶と捉えるべきなのか、なんとも微妙なところである。

ただ、俺もあいつも苦労とか負担という部分を見れば、愉しいと思える時間を共有しているのも事実。あまり悲観的になることもない。そう、マイナスに目を瞑れば。

「そーいや、俺の家に泊まるのはいいんだが、着替えとかどうするんだ？」

突発的に決めた事だろうから、着替えなんてないはずだ。そう思つて聞いてみたのだが……。

「えーと……確かこの辺りに……あった」

雪ノ下陽乃は箆笥の一番下を漁ると……その手には女性物の下着が……はあ!?

「おいおい、なんで俺の家の箆笥にそんなものが……」

「景虎の看病に来た時にこっそり入れておいたの。打ち上げの時みに景虎のお家で寝ても、次の日シャワーを浴びれるようにね」

なんと用意周到なことか。雪ノ下陽乃をして、もう一度酔い潰れるなどというへマをするとは思えないものの、もしものために備えておくのはなんともこいつらしい。

しかしだ。こいつは一つ見落としている点がある。

「備えあれば憂いなし。それはわかる。けどな、もし俺の家に友達が来て、かつ何かの間違いでそれが見つかった時、俺はなんて言い訳すればいい?」

「んー、趣味?」

「お前は俺を女装野郎にしたいのか?」

「冗談冗談。偶にお泊まりしてるでいいんじゃない?」

適当だな、おい。そしてそれはそれで問題がある事に気付け。

「下着があるのはわかったが、着替えは?」

「そこはほら。景虎ってジャージ結構持つてるでしょ」

「まあな……ん?お前まさか……」

「そ。景虎のジャージ着て過ごすから」
「やっぱりか……!」

いや、確かジャージは十着ぐらいある。高校の頃は基本的に動きやすさを重視していたから、とにかくジャージを着ていた。今となつてはほぼ部屋着としてしか使う事はほぼ無い。

だが、ちよつと待ってほしい。

雪ノ下陽乃は女性にしては背が高い。

中肉中背くらいの男子ならば、少しサイズが大きいくらいだろう。普通に着ても何の問題もない。

しかしながら、俺は中肉中背というわけではない。

多少なり筋肉質だし、背も百八十一センチと高めだ。雪ノ下陽乃と

は十数センチの差がある。

高校の時のものは少しぐらいは小さいから着れなくはないと思うが……。

「かなりデカいからすぐに脱げるぞ」

「こういう時は着てる服が大きい方が男の子は萌えるんでしょ？裸ワイシャツだっけ？してあげよつか？」

「結構だ」

いくら雪ノ下陽乃相手とはいえ、襲わないでも溜まるものはある。この三日間、耐えきるためにも何としてでも性欲を刺激してくる行為だけは阻止しなければ……！

かくして、雪ノ下陽乃との（ある意味いろんなものを賭けた）三日間の同棲生活が始まることとなった。

唐突に雪ノ下陽乃は自覚する。

「ねー、景虎。何するー?」

「何するって言ってもな……」

雪ノ下陽乃が俺の家に泊まると言い出してから一時間。

俺達は正月の定番料理ことお雑煮を食べながら、そんな話をしていった。

正月といえば、やはり炬燵に入ってお雑煮を食べる。これにちゃんちゃんこ?みたいなものでも着れば、死角はないが、残念ながら家にそんなものはないし、そもそもエアコンという素晴らしい文明の利器がある。

因みにお雑煮を作ったのは俺である。俺の家に泊まると言い出した魔王雪ノ下陽乃は「お腹減ったー、お雑煮食べたいー」と実に身勝手なことをおっしゃった挙句、家主に作らせるといつ暴拳に出たわけだ。そこは泊まらせてくれるからとか言って作ってくれよと思った。しかし、雪ノ下陽乃にそんな事を言っても無駄。例年通りにお雑煮を作り、今に至る。

珍しい事に雪ノ下陽乃は「普通に美味しい」とあまり皮肉めいた事を言っただけだった。普段なら「普通すぎてつまらない」くらいは言いそうなのに。一応泊めてもらっているという自覚を持っているのだろうか。その割には無茶振りはやめないみたいだが。

「景虎はいつもお正月は何してるの?」

「テレビ見て、ゲームして、飯食って寝る」

「……駄目人間だね」

「うるせー」

俺にとってそれだけ素晴らしい日々はないのだよ。朝から晩まで好き放題ゴロゴロできるんだぞ。しなきや損に決まってるだろ。

「そういうお前は何やってるんだよ」

「懇意にしたり、してもらってるところに挨拶回りとか、色んなイベント出て、後は雪乃ちゃんの誕生日会かな。もちろん、普通のじゃないけど」

「あー……マジで怠いやつじゃねえか、それ」

「そ。だから、今年はすつぽかしてきちやったゾ☆」

キラツとばかりに良い笑顔で言い放つ雪ノ下陽乃。

いや、すつぽかしてきちやったって……そう簡単にドタキャンしていいモンでもないだろうに。

「携帯の電源は切ってるし、行き先もデタラメ言ったから音信不通。今頃、お母さん達は血眼になって探してるかもね」

あははー、と笑う雪ノ下陽乃だが、その実多分ただ事じゃないだろう。

束縛性の高い雪ノ下家の母が自分の娘が音信不通状態で是とするはずがない。本格的に血眼になって探している可能性も僅かに存在する。

しかし、だ。

「まあ、いいんじゃないの。別に『彼氏』の家に泊まってるだけだしな。世間的には何一つ問題ないだろう」

「てつきり景虎の事だから、この話に食いつくと思っただけど、意外だね。私がここにいる事に肯定的だなんて」

「肯定的ってわけじゃねえ。ただ、会ったことはねえけど、おまえのお袋さんには否定的っつーだけだ」

「なんで？」

「お前の話を聞く限り、碌な人間じゃねえって思っただけだ。勝手な思い込みかもしれんが」

少なくとも、自分の勝手で子どもの将来を決めようとしてる親が良い人間なわけがない。そんな人間を俺は好きになれない。

「ふーん……じゃあ、私は？」

「お前？面倒くさい、厄介、疲れる……別の意味で碌な人間じゃない」「あはは、景虎は少し歯に衣着せた方がいいよ？」

「俺が歯に衣着せないような人間だから付き合ってるんだらうが」

「そう言われると、ちよつと言い返せないかも」

むむむ、と雪ノ下陽乃は言い淀んだ。

当たり前だ。そういう人間だからこそ、雪ノ下陽乃に目をつけられ

たのだから。

気を使うような人間なら、雪ノ下陽乃の周りには腐るほどいる。俺のような人間には目もくれなかっただろう。

「そういうことだ。気を利かせろっていうなら諦めろ。俺はお前にだけは媚びへつらうつもりはない」

「それは結構。あ、ところでさ、する事ないなら外に遊びに行かない？」

「え、嫌だよ。寒いだろうが」

「そんな心の底から嫌がらなくても……じゃあ、ゲームする？」

雪ノ下陽乃にしては珍しい譲歩。

ようは暇つぶしさえできれば、なんでもいいという事だろう。

「二人でやるならいいやつがあるぞ……これとか」

俺が手にしたパツケージは某ゾンビゲーム。

最初のCMがトラウマだとか、軍隊無能すぎ、主人公強すぎとか言われてるあのゲームだ。ああ、後グラサンかけえみたいな。

初めはソロプレイしか出来なかったこのゲームも家庭用ゲーム機が進化する中で協力プレイする事も可能となった。科学の進化って凄い。

「三つストーリーがあつて、一つのストーリークリアで三時間か四時間くらいは潰せる」

「新年早々、ゲーム三昧かあ……うん、なんだか駄目人間になったよ
うな気もするけど、これはこれで新鮮かも」

だから駄目人間とかいうな。休みの日くらいはゲームしかしない時間があつてもいいだろう。休んでるんだから。

「よし、今日は一日ゲームするぞー！」

「おー！」

二人揃って拳を突き上げ、高らかに宣言すると、俺達はゲームに臨んだ。

ゲームが全ストーリーをSランククリアし終えたのは、既に時計の針が本日二度目の数字の6を指した頃だった。

あまりにも本気になりすぎて、昼飯はすつ飛ばし、あまつさえ晩飯の用意も買わず、ひたすらゲームに熱中していた。これはあれですね、やっぱり駄目人間ですね。

「景虎ー、お腹減ったー」

「うるせえ、俺も腹は減ってんだよ」

そしてこれである。

俺は執事じゃねえつつの。腹減ったと連呼されたところで「かしこまりました、すぐに用意します」なんて言わないし、そんな人間うちにはいない。

「何か作ってー」

「生憎だったな。今現在、うちの冷蔵庫の中には調味料とプリンとアイスしかない」

「じゃあ、プリン食べながら待ってるから、適当に材料買ってきて作って」

「お前舐めてんのか」

「うん」

口元をひくつかせながら聞くと、即答された。ですよね、お前が俺のことを舐めてたのは知ってました。ええ、それはもう。むかつくが事実だ。

「お前も行くぞ」

「えー、寒いからやだー。ここから動きたくない」

「動きたくない、じゃねえよ。お前も食べるんだから動け」

一度ならず二度までもタダ飯を食らわせてなるものか。金はともかく、労働はしてもらおう。

「ぶー、景虎ってば本当に頑固なんだから。私を動かした罪は重いよ？」

「なんでお前を動かすと犯罪みたいになってんの？」

寧ろ、働かない事が罪だと思っんですが。

そんな常識も雪ノ下陽乃には通じるわけもないのは百も承知だが、そう思わずにはいられなかった。

駄々をこねまくっていた雪ノ下陽乃をなんとか説得して、近くのスーパーに連れてくる事に成功したのはさらに三十分が経った頃だった。

バイクを走らせて、デパートに行けなくもないが、スーパーの方が安い。近い。運が良ければ値引きがある。一人暮らしにとっても強い味方なのである。そう、俺のようにゲームに金を使い込んでいるような人間には特に。

「さて……と。何にする?」

「何でもいいよ。景虎が作るものはなんでも甘んじて食べるよ」

「甘んじてで食うなよ。後、なんでもは止めろ」

「んー、じゃあ、手間のかからないもの!」

「手間のかからないものって……」

本当に適当だな……自分も食うって事をわかってんのか? 嫌いなものとかねえのかよ。

まあ、手間のかからないものっていうのは俺も同意だ。腹減るし、時間がかかるものなんて作ってられない。待ってるだけの人間なら……雪ノ下陽乃は文句言いきまくるだろう。そしてストレスがたまると腹が減るし、ストレスは溜まる。そんな踏んだり蹴ったりはごめん

だ。

「じゃあ……………鍋にでもするか」

「あ、いいね。ついでにお酒も飲もうよ」

「おい、未成年だろうが」

「今更そんな事気にしちゃう？」

「全然」

というよりも、雪ノ下陽乃が提案した時点でお察しである。それにこういうスーパードカじゃ、結構年齢確認なんてものは曖昧で適当な部分もあるので、買おうと思えば買える。というか、俺も買った事があるから、余裕だ。

「何鍋にするよ？ 闇鍋以外の」

「キムチチゲか寄せ鍋か……………あ、おでんっていうのもあるよ」

「おでんはダメだ。俺大根の芯まで汁に漬かってないと嫌だから時間がかかる」

おでんにおける大根はそれこそ至高だ。ちよつとだけしか染まってるない、芯の方は普通に白い大根なんてただの大根だ！ おでん大根じゃねえ！ 心の中で持論を展開しているが、多分大体の人はそうに違いない。

「じゃあ、キムチチゲにするか。久々に辛いやつが食いてえし」

「私はどっちでもいいから、それにしよ。具は適当に決めておいて、私お酒持ってくるから」

「適当って……………お前苦手なやつは……………ねえか。天下の雪ノ下陽乃だもんな」

苦手とか弱点とか、そういうのには無縁の人間だ。以前の文化祭じゃ、雪ノ下陽乃の数少ない苦手を見つけたものの、あれだってなかなか見つけれられないようなものだ。食べものなんて露骨過ぎるものなら大体のものは克服しているだろう。それこそ、アレルギーみたいに克服以前の問題でもない限り。

「豆腐、白菜、豚肉、にら、もやし、きくらげ……………は俺が嫌いだから無しにして、代わりにしいたけでもぶち込むか。あ、後鍋の素買わないと」

鍋つてのは男料理の集大成だと俺は思う。

適当に切って、適当にぶち込んで、いい感じにできたら完成。

手抜き感はいくらでも多ければあまり感じないし、パーティーも出来る。今日は雪ノ下陽乃と二人だけだが、四人から七人ぐらいで鍋パをすると酒も入って超盛り上がる。闇鍋だと盛り上がるが、事と次第によつては後処理が大変な事になるので注意しよう。鍋パがゲロパにシフトチェンジするから。

「締めはうどんにするとして……ハルのやつ戻ってくるの遅くないか？」

二人しか飲まないし、あくまで飯食べるだけなんだからそこまで買う必要は……。

「景虎ー、持ってきたよ」

向こうから歩いてきた雪ノ下陽乃の左腕にはさつきまでなかった籠が。

そして中を見なくてもわかるほどに雪ノ下陽乃は酒を買っていた。何故なら缶の頭がはみ出しちゃってますから。

適当に入れたとしても十は超えてる。綺麗に並べて入れたなら二十ぐらいあるかもしれない。

結論。馬鹿かこいつは。

「おい、まさかとは思いますが、それ全部買うつもりか？」

「うん。余るのはともかく、足りないのは嫌じゃない？それに好き嫌いもあるだろうし」

「……一応聞くが、それは誰が買うんだ？」

「え？私が買うよ、それが？」

「だろうな……は、え？今なんて……」

ダメ元で聞いてみたら、まさかまさかの自分で出すとか言い出した。一瞬、俺の耳がぶっ壊れたのかと思った。

「流石に何から何まで景虎にしてもらうのはね。貸しを作ったって思われるのは癪じゃない？」

「あー、オーケーオーケー。実にお前らしい理由で何よりだ」

理由を聞いたなら納得した。今更その程度で貸しを作ったとは思わないが、そういう事にしておこう。ここで変に口を出すと俺が買わな

きやならん羽目になる。別に買ってもいいのだが、一人暮らしをして
いる以上、無駄な金は払いたくないし。

……あ、でもウ○ンの力は買っておこうかな。二日酔い待った無し
な未来があるから。

「かんぱーい」

場所はまた変わって我が家。

帰ってくるともう二人とも空腹の極地だったので、ただ無言でテキ
パキと飯の準備をした。

買い物やら準備でかかった時間を含め、約一時間半後のことだっ
た。なかなか早いと思う。

まあ、生物の三大欲求には誰も勝てないということだ。腹が減って
は戦はできぬ、なんてよく言ったもんだ。

「しかし、晩飯の挨拶が「乾杯」じゃ、完全に宅飲みだな」

「あはは、机の上にこれだけお酒があればね。新年から、こんなにお酒
を飲むのなんて初めてだよ」

「全くだ。元旦に酒を飲むなんて、実家にいた時くらいだな」

「景虎のお家は屠蘇散してたんだ？」

「そういうのを気にする親父だったからな。絶対にやってたよ」

子どもとしちゃ、酒なんてものは上手くもなんともないから勘弁し
て欲しいもんだったが、これが意外と後々になって良かったらしい。
身体は大分丈夫に育ったもんだ。前はうっかり風邪を引いたものの、
それぐらいだろう。

「お前のところはやってなかったのか？」

「そうだね。そういうのはしなかったけど、飲まされることはあったよ。高校の頃からだけど、何かその場の空気みたいなものでね。例えるなら、酒豪の社長同伴の新入社員歓迎会みたいな」

「相手の顔を立てるため……か。まあ、わからなくはないな。それにお前は断れないもんな」

「まあね。私だから」

会話をしているうちにも箸はどんどん進む。

何せ、昼飯を食っていなかったから、胃にはどんどん入る。熱いから冷まさないといけないが、多少の熱さはなんのその。旨いし、腹は減ってるし、飲んで食うの繰り返し。

いつの間にやら中身をペロリと平らげ、その締めうどんすらもあつという間に食いつくしたというのに、俺達はまだ酒を飲んでいった。

正月にテレビ番組を見ながら酒なんて、最早独身貴族のやりそうな残念すぎる過ごし方だが、これがまたお互いによく喋るもんだから、ただの宅飲みになる事はない。

雪ノ下陽乃も、本人に自覚があるのかどうかは知らないが、かなり鬱憤が溜まっているのだろう。息を吐くように愚痴を語りだし、俺もそれに同調したり、或いは俺の愚痴を話したりと愚痴祭りと化している。テレビ番組も見ているというよりはBGMに近い。

と、愚痴祭りの最中、雪ノ下陽乃が思い出したように言う。

「そういえばさ。景虎って、どんな子が好みなの？」

「唐突だな」

「だって、私や雪乃ちゃんを見て、素で普通にしてる人間なんて今まで見たことないよ。それこそ男の人が好きなのかと思った」

「心外っつーか、とんでもない誹謗中傷だな。別に何も思わなかったわけじゃねえよ。ただ、天使とか神様相手に恋したり、好意をもつ奴はいねえだろ？ 信仰心はともかくとしてな」

「つまり、私は景虎にとっての天使や神様ってわけ？ きゃー、景虎ってば大胆」

「そういう意味じゃねえ。住む次元が違うって事だ」

「じゃあ、結局どんな子がいいの？」

「そりゃあ……」

そう言われて見て、俺は思った。

そういえば、好みのタイプなんて今まで考えた事がなかった。

確かにモテたいとは思いうし、リア充になりたいと思う。

だが、それを行動で示した事はないし、好きな子がいた試しはない。じゃあ、好みのタイプはいないのかと聞かれて、はいと答えるわけにもいかない。普通に女性が好きかわけだし、考えてみればどれか一つくらいは大事にした事が……あつた。とても簡単なものが。

「……あれだ。心が綺麗な子」

「えーっ、そんな子いるー？」

「知らん。あくまで好み。理想みたいなもんだ。大体理想つてのはありえないことの方が多いいもんだ。俺の友達なんて『オタク文化に理解のあるカツコいい年上の女性』だぞ。そんなピンポイントに攻めて当てはまる人間がいるわけ……」

「いるよ。その人」

けろっとした表情で、雪ノ下陽乃は言つてのけた。

おいおい、マジか。絶対にそんな人間が身近にいるわけねえって、哲平の奴に言つたのは記憶に新しい。

「誰だよ、それ」

「静ちゃん。あ、景虎には平塚つて言つた方が伝わるかな」

「……あのなんでモテないかわからない先生の事か？」

「多分それ」

あのオタクだったんだ……見た感じ、オタク文化だけは理解できんとか言いそうな見た目してるのに。人は見かけによらないという事か。

しかし……そうか。あいつの理想は夢じゃなく現実に存在したのか。

「なら、俺も現実にいる可能性は」

「ないよ。いるわけないじゃん。大きくなると皆綺麗なままじゃ生きていけないんだから」

「ぐっ……何も言い返せねえし、妙に説得力あるな……！」

「経験者は語るっていうしね。伊達に色んな人見てきてないよ」

そう言つて、雪ノ下陽乃は視線を俺から外す。

ふと思う。その色んな人の中に、俺も入っているのだろうか、と。

俺は自分が綺麗な人間だなんて思つちやいないし、それこそその辺にいる社会で生きていくために汚れざるをえなかった人間のその一ではない。多分、雪ノ下陽乃が一番目にしてきた人間だ。本当に取るに足らない。

だから気になることもある。未だに雪ノ下陽乃が俺といふ事が。

退屈させないから、という点なら正直比企谷くんもいるし、俺以外にもいるのではないだろうか。俺は出来た人間じゃないから、そう思つてしまう。

「……じゃあ、お前の好みのタイプってなんだよ」

「うん？面白い人」

すぐに返つてきた答えは以前雪ノ下陽乃が言つた言葉だ。面白ければ万事OK。ようは暇でさえなければいい。

一見、酷く低いハードルのように思えるが、その実雪ノ下陽乃が求める面白い人間というのは『3K』にアイドル並みのイケメンさに更に聖人君子ばりの人間の良さがないとダメなくらい難しい。

こいつの面白いは普通の人間とは違う。大衆が面白いと感じても、こいつだけは面白くないと吐き捨てる事も多々あるだろうし、ぶつちやけた話。雪ノ下陽乃のこれも理想ではない。

「さっきの言葉、そのまま返してやる。お前を永遠に楽しませられる人間なんて、世の中に一人もいねえよ」

「だよね」

さっきのお返しとばかりに言つてみたが、雪ノ下陽乃はそれを当然とあつさり認めてしまった。

そういえば、こいつが現実主義であることを思い出す。自分の言っている事が理想であり、夢である事を本人が誰よりも理解しているのだ。

しくじつた、と俺がまた酒を飲む。

その後雪ノ下陽乃は「けど」と続ける。

「長く楽しませてくれそうな人はいるよ。私の理想に一番近い人が」

「誰だよ、そいつ」

「今、私の目の前にいる人」

「……」

酒を一気に飲み、ふうと息を吐く。

ほうほう、雪ノ下陽乃にとって理想に近い人間はいたのか。それは良いことだ。

で、それが今日の前にいる人間？ 凄いな、結構身近にいるじゃないか。

………って、はあああああああつ?!?!?

「顔真つ赤だよ、景虎♪どうしたの？もしかして照れてる？」

「う、うるせえ！照れてねえ！」

照れるわけがない。落ち着け俺。よく考えろ、俺。

雪ノ下陽乃のこれはいつものことじゃないか。俺をからかうための嘘だ。そうに決まっている。そうやってこいつは俺の慌てふためく姿を見て、愉しむつもりなんだ。その手には乗らねえぞ！

「因みに今言ったことは本当の話。全然嘘じゃないから」

いつものようなからかう様子ではなく、雪ノ下陽乃にしてはらしくないような真面目すぎる答えに俺はもういろいろ限界だった。

手元にあった缶のお酒ではなく、瓶に入ったものを手に取り、羞恥心を隠すようにがぶ飲みする。

そこから、俺の記憶はなかった。

side out

「おい……雪ノ下……。てめーには言いたい事が山ほどある」

瓶に入ったアルコール度数の高いお酒をがぶ飲みした後、さつきまでの照れが嘘のように景虎は据わった目でこちらを見てそう言う。

一見してみるととても怒っているように見えるけれど、手の中にある酒瓶と真っ赤になった顔から見て、完全に酔いで意識が飛んでいる事がわかる。

そうになると、今から景虎が言うのは私に対する愚痴とか文句だろうか。日頃溜まっている鬱憤を吐き出すのだろうから、きつと……。

「ずっと前から密かに思ってたんだよ……おまえ、めちやくちやかわいいいな」

「……はい？」

一瞬、我が耳を疑ってしまった。

あの景虎が。

いつも私を褒める時は皮肉を込めてくる景虎が、私の事を素直にほめた。

「前は綺麗な方だった……言ってたけどよ。よくよく考えたら、おまえ凄えかわいいいな」

ずずいっと私の顔を覗き込み、真剣（目は据わってる）な表情で言うてくる景虎。

これはチャーンス！後で遊ぶためにもっと喋らせよう。

……と、いつもの私なら思っていたはずだった。

けれど、何故か景虎のその言葉が脳内で反復して……顔が異常に熱くなるのを感じた。

「あ？顔赤いぞ、陽乃。もう酔っちゃまったのか？」

「よ、酔ってるのは景虎でしょ……？……え、今名前で……」

「何かおかしかったか？」

「おかし……くはないけど」

景虎の役回りに名前を呼ぶことはおかしくない。

ただ、名前で呼ばれるのは今回が初めてで、今まで頑なに私の名前を普通には呼ばなかった景虎が、いきなり名前を呼んだという事はおかしい。

でも、今の反応を見ると、景虎は何がおかしいのか、わかっている。酔いすぎて、色々ごちゃ混ぜになっているみたいだった。

「まあ、それは置いとくとして。あんまり飲み過ぎんなよ、倒れられたら焦るから」

一体誰のせいでこんな初々しい反応をさせられたと思っているのかな。

そう思うとなんだかやられっぱなしの気がして釈然としない。いつもはこつちが殆ど一方的にしているし。

「大丈夫。もう前みたいいな事にはならないし……あ、でも景虎はそっちの方が嬉しいんじゃない？今ならお酒のせいにして襲えるわけだし」

いつも通りの笑みを浮かべ、私は景虎に言葉を投げかける。

ここからは私のターン。一瞬でも私を慌てさせたことを後悔させー。

「は？酒のせいになんかしらないっつーの。襲ったら普通に責任取る」

あ、あれー？なんで慌てないの？というか、なんで真面目に答えるの？

酔うと気が大きくなる？それにしてもなんだかいつも以上に冷静な気はするし、自分を大きく見せようとか、そういった風には見えない。さつきからお酒を飲む勢いが衰えていないのが心配だけれど。

「っーか、それ。誘ってるのか？言つとくけどな、俺だつて溜まるものは溜まるし、定期的にはー」

「はい、ストップ。景虎、そういう下品なのはダメ」

「自分は色仕掛けありの癖に良く言うぜ。……それじゃあ」

景虎は手に持っていたお酒を机の上に置くところこちらに来る。

「下品なのは無しにして、お望み通り襲ってやろうか？」

「あはは、景虎に出来るのー？やれるものならどうぞー」

なんだかんだ言っても、景虎は私に手を出したことがなかったの

で、少し小馬鹿にしたように言う。

いつもなら、ここで景虎は苦々しい表情で引くけれど……今日は違った。

「上等だ。今ので言質とったからな。後悔しても知らねえぞ」

景虎が私の肩に手を置く……え？

「は、え？ちよ、ちよつと待って景虎。今のは冗談で……」

「覚悟は良いな？言つとくが、手加減はしねえ。怖かったら目でも瞑ってろ」

景虎は本気だった。お酒の勢いとはいえ、本気で私を襲う気だった。

甘く見ていた。ここまでこつち方面には全くのヘタレだった景虎が、行動に移してくるなんて露ほども思っていなかった。

私が慌てている間にも、景虎と私の距離はどんどん縮まってく。

ここで一発ビンタでもすれば、景虎の行動は止まるかもしれない。投げとばすだけで組み伏せる事が出来るかもしれない。

けれど、今までの駆け引きで、私が実力行使で止めたら、それは私にとつての負けだ。

相手が勘違いしただけならまだ良い。でも、今回は売り言葉に買い言葉。景虎がヘタれるか、私が美味しく食べられるかの二つに一つだった。そしていつもは前者にもかかわらず、今回に限っては条件が違い、結果が変わった。勢いまで計算に入れていなかった私のミスだ。

そうしている間にも、景虎と私の顔の距離は数センチまで近寄る。目を逸らしちゃダメ。わかっているても、数秒後に来る私の初めてに身を強張らせる。

恥ずかしさのあまり、ついに私は目を瞑ってしまった。

……が、景虎が私の唇を奪うことはなかった。

内心で首を傾げていると、すぐに私を押し倒すように景虎の身体が倒れこんできた。

押し倒してきたわけじゃない。力が入っていなかったし、もたれか

かるように景虎は私に向かってきた。

「景虎？」

私が名前を呼んでも返事はなく、私の顔のすぐ隣からは寝息が聞こえてきた。

……どうやら、私を襲う前に潰れてしまったらしい。

意識が飛ぶくらい飲んでいたので、当然といえば当然。寧ろ、普通に会話できていたのが不思議なくらい。お酒の臭いも凄いし。

重たくのしかかる景虎を横にずらし、身体を起こそうとして……ふと思った。

……これはこのまま横で眠って、朝景虎に適当な事を言っておけば、さぞかし焦るのではと。

閃いた。これはやるしかない。

お風呂に入りたいところではあるけれど、このままやられっぱなしで一日を終えるのだけはどうにも気に入らないし、それなら景虎で遊んだ後、更にお風呂上がりにもまた遊べるという二段構えも出来る。

思い立ったが吉日。私は横で眠っている景虎に身を寄せる。

すると、景虎の腕がゆつくりと動き、私を優しく、包み込むように抱き締めた。

一瞬ドキリとしたものの、それが景虎が寝返りをうっただけだとわかってるので、すぐに冷静になる。

完全に密着した状態で伝わってくるのは景虎の心臓の鼓動と温もり。

この鼓動がとても私の心を落ち着かせる。そしてこの温もりが私を癒してくれる。

今まで、ずっと一人だった。完璧であるが故に孤高。けれど、それは偽りで、それを見抜けたとしても、誰も私の本性を批判しない。多くの人間が肯定してきた。敵対する者もいたけれど、相手にもならなかった。

肯定した者も、私についてくることなんて出来なかった。雪乃ちやんでさえ、私の辿ったレールを走るだけの劣化模造品でしかない。

結局、私は一人だった。景虎に出会うまでは。

決して景虎が人一倍優れていたわけではない。

運動神経には目を見張るものの、頭は平凡。ゲームに熱中する才女でしかない。

そんな景虎が私の傍に今もいるのは、ただ景虎が雪ノ下陽乃を、今までであった人間の中で誰よりも理解しようとしていただけ。知ろうとしていただけだった。

それは途中からではあったけれど、それでも今まで会ってきた人間誰もがしようとしなかった事を景虎はしてくれた。

誰も歩み寄ろうとしなかった私の心に、九条景虎は歩み寄ってくれた。偽りの関係であると理解しながら、いつかは終わる関係だとわかっていながら、自分の口では早く終わらせたいと宣いながら、景虎は理解しようとしてくれた。もう私自身にもわからない。本当の雪ノ下陽乃を。

それが酷く嬉しくて、楽しくて、面白いけれど難解で。

少し前までの私なら思わなかったようなことも、今となっては思ってしまう。

『本当の私はなんだったのか』と。

いつか、遠い日に埋もれていた記憶を思い出す。

日々完成されていく仮面をかぶりながら、その仮面を見破り、本当の私を、雪ノ下陽乃を見つけてくれる人間と出会う事を夢見ていた事を。

そして、自分が優れすぎているが故に、周りとの圧倒的な差に失望し、決して『私』を見つけてくれる人間はいないのだと悟った時を。

きつと私は……白馬の王子様でも探していたのかもしれない。

私を雪ノ下の呪縛から救ってくれる人間。

そんな人間はいないとわかりながら、私はそんな夢みたいな存在に縋っていたのかもしれない。

事実、白馬の王子様なんていなかった。

いたのは、ただ一人の青年。ゲームっぽく言うなら、村人その1。

魔王を倒す力なんてないし、弱いモンスターにすら殺されてしまうような存在。

けれど、それでいい。

例え白馬の王子様じゃなくても、魔王を倒せなくても。

九条景虎は私にとつての『本物』だから。

ーートクン、と胸が高鳴るのを感じた。

安心感を覚えながらも、鼓動は早さを増していく。

景虎に抱き締められていると言う事実が、私の胸を締め付ける。

気がつけば、私も景虎を抱き締めていた。

景虎の胸に耳を当てると、その優しい鼓動が聞こえてくる。ずっと傍にしていると伝えるように。

「……うん。私もずっと傍にいさせて欲しいな」

自然と口から零れた言葉は、まぎれもない本心。

どんな時でも、例え相手を利用する時でも使わない言葉だ。こんなことを言ったことは今まで一度たりとも無い。

だからこそ、これは私の、わからなくなってしまうた本当の私の言葉。

「……あ」

そこで気付いた。気付いてしまった。

空っぽだった私の心が満たされている事に。

ずっと頭の中をついて離れなかった悪夢を今しがたまで忘れていたことに。

私の中で今まで感じたことの無い感情が芽生えていることに。

それは散々私が踏みにじり、利用してきた感情だ。

理解出来ない心の中で吐き捨て、幻想だと決めつけていた想い。

私はー

「ごめん、景虎。私、好きになっちゃったかもしれない」

その瞬間、私は確かに恋に落ちてしまっている事を自覚した。

変化に気づかず、彼は少なからず戸惑いを見せる。

「……いつてーな」

俺は意識を起こすと、開口一番にそういった。

痛いのは当然頭。昨日の記憶が途中から途絶えているあたり、おそらく俺は酔いつぶれてしまったのだろう。身体を起こす事も億劫だ。

このまま二度寝してやろうか、そう考えたその時――。

「……んう……」

小さな声と共に何か俺の身体を締め付けた。

まさかと思い、そーっと目を開けると――。

俺に抱きつくようにして眠っている雪ノ下陽乃の姿がそこにはあつた。

……これは夢だ。夢に違いない。

なんだかんだ言つて、こんな無防備な姿をさらしたのは後にも先にもあの打ち上げの時だけだ。そしてあれは楽しかった故の雪ノ下陽乃の失敗。決して意図したものではない。そして雪ノ下陽乃に限つて、同じミスをするようなことはしないはずだ。

つまり今回のこれは夢だ。夢以外の何物かであるはずが……。

「ん……あ、景虎。おはよ」

寝ぼけ眼のまま、微笑みかけてくる雪ノ下陽乃。

ますます夢の可能性が増してきた。あの雪ノ下陽乃が、あんなに簡単に裏表もなければ、全方位に対して全く警戒心のない顔をするわけではない。朝に弱いにしたつて、その程度雪ノ下陽乃なら物ともしないはずだ。

……もう一回寝て起きたらいつも通りになるはずだ。夢の中で寝るなんておかしいことだが、夢の中で起きて、現実でも起きるなんてザラだ。俺はよくある。だから今回もこれに違いない。

「また寝るの？ 景虎、昨日一杯飲んじゃったもんね」

しかし、夢の雪ノ下陽乃は思いの外優しい。俺の願望か？ 確かに少しはマシになるようにお願いしてみたが、俺の初夢まで侵略してくるとか、マジで雪ノ下陽乃ばねえな。

「私お風呂に入ってくるから。おやすみ、景虎」

雪ノ下陽乃がそう言った後、俺の頬に何か触れ……つて、夢じゃない!?

「はあああああ!?!があ!?!」

驚いて、ガバツと勢い良く身体を起こすと同時に二日酔いに悶絶する。

しかし、それどころではない。いや、今はそれどころじゃない。

「ゆ、雪ノ下。お前さつき何を……」

「んー?何のこと?」

「いや、さつき俺の頬に……」

と、ここで気付いた。

ほっほーう。こいつさては俺を試そうとしているな。

さつきの頬に触れたのは、俺の想像しているものと違うもので、雪ノ下陽乃は俺が勘違いして慌てふためく姿を見て、楽しむ算段に違いない。だからこそ、今こいつは余裕綽々で聞き返してきているに違いない。

「……いや。何でもない」

「ふふっ、変なの」

くすりと笑って、雪ノ下陽乃は立ち上がるとそのまま居間を出て行く。

なんなんだ、いったい……?」

痛む頭を押さえながらも、とりあえず雪ノ下陽乃が風呂に入っている間、放置していた昨日の晩飯の片付けと換気をする事にした。

「うー、寒い」

身を削る思いで換気をしつつ、朝一番からゲームをしている。

昨日は一日中、ほぼゲームに費やしたので、今日はおそらく外出を強要されるに違いない。

外は寒いから嫌なんだけどなあ……と考えながらも、雪ノ下陽乃を考えるとなんの嫌が聞き届けられるはずもなし。覚悟は決めておこうと密かに決意する。

「さっむー！寒い！寒いよ、景虎ー！」

「うおっ!?……と」

全く気配を感じさせず、いつの間にか風呂から上がって帰ってきていた雪ノ下陽乃はものすごい勢いで、後ろから抱きついてきた。

一瞬、顔面から床にダイブしそうになったものの、今はボス戦なのでそんな事は出来ない。根性で体勢を立て直して、ゲームを続ける。

「なんで、窓全開なの？超寒いんだけど」

「匂いがかもって凄かったからな。換気しねえとな」

「それもそうだけど……お風呂上がりはこの仕打ちは酷くない？」

「じゃあ、炬燵にもぐつとけ」

「えー、それもなんか嫌」

なんか嫌って……相変わらず理不尽な奴め。

「はあ……わかったよ。これが終わったら窓閉めるから。それまで我慢しろ」

「しようがないなあ。その間はこれで我慢してあげる」

そういう雪ノ下陽乃は肩からではなく、俺の脇腹から手を通してきて、抱きついてきた。

「……何これ」

「寒いから、景虎が温めて？」

「いや、意味わかんねえよ……」

本当に意味がわかりません。どんな嫌がらせだ、これは。

背中に伝わる感觸のせいで、全く集中出来ず、俺にしてはありえない凡ミスを連発する。

三日オールしたって、初心者みたいなミスはしないのに。

「景虎ー？凡ミス多くない？」

「一体誰のせいだと……はあ」

最早ため息しかでなかった。窓閉めて欲しいのはわかるが、せめてクリアしてゲームを終わらせて欲しい。や、出来なくはないけど、集中力が散漫になる。

「つーか、よく考えたらお前が閉めればいいじゃん。そろそろ換気は十分だし」

「えー、離れたくないもん」

そう言っつて、より一層雪ノ下陽乃は腕に力を込める。そして俺の背中にはその柔らかい感触が更に伝わってきた。本当に良い体してんな、こいつ。マジで死角なさ過ぎない？

「寒いんじゃないのかよ」

「景虎がいるから大丈夫だもん。景虎つて温かいし」

それつて俺から温もりを奪つてるつて事なんです。どんな嫌がらせなんですかね。

一つため息を吐いてから、俺はゲームの電源を切つて立ち、窓を閉める。

臭いはもうない。半日放置の形になるから、残る可能性も考慮していたのだが、案外何とかなるらしい。

……それはともかくだ。

「……なんでまだ引つ付いてんの、お前」

「まだ寒いもん」

「そりゃ、今閉めたばっかり……はあ、もういいわ」

これ以上話してもループしそうだったのでもう諦めた。

なんでこんななボデイタッチが多いのかは知らんが、どうせこいつの事だ。何か裏があるに違いない。

「ハル。何かしたい事でもあるのか？」

「んー？あるといえばあるし、ないといえばないよー」

なんのこつちや、それは。

雪ノ下陽乃をして、随分と曖昧な返答が返ってきた。

いつものように裏を含んだ言い方でもなく、かといってどうでもいいというわけでもない。本当に俺に選択権を委ねているような、そんな

な言い方だ。

その雪ノ下陽乃らしくない態度は些かむず痒いものの、なんだかんだ言って、やらなきゃならない事である事に変わりはないだろうし、逆に曖昧な態度は気になるというものだ。具体的には何を企んでいるとか。

「なら言え。昨日はゲームに一日中、付き合わせちまったしな。あんまし無茶な要求でもない限り、お前の意思を尊重してやる」
「本当に？嘘じゃない？」

思いの外、食いついてきた。やはり適当に流せるようなものじゃない、雪ノ下陽乃にとつてそれなりに重要なことらしい。

「嘘じゃねえし、嘘ならわかるだろ。ほら、言ってみろ」

「わかった。じゃあ、デートしに行こっ♪」

「……………は？」

雪ノ下陽乃のデートに行こう発言から三十分後。

俺達二人はパルコにいた。

パルコというのはららぽーとと同様にデートの定番のお店で、日々派閥同士の争いが絶えない……もつとも、それはきのこたけのこ論争のようなもので、どちらかが意識して、相手を敵視しているという事実はない。

そんな場所にきたわけだが、例のごとく、唐突に行われたデートの目的は意外にも、雪ノ下陽乃が楽しむためのものではなかった。

「ねえねえ、景虎…こんなのどう？」

雪ノ下陽乃が指差したのは巨大な猫のぬいぐるみ。立たせれば五歳児の身長ぐらいはありそうなどもかくデカいぬいぐるみだ。まあ、

立たせる意味はないわけだが。

「それもいいと思うけどな。もうちよつと、手頃なやつにしねえと、出会った先ですぐ渡せねえだろ。常時携帯できるわけじゃねえし」

「それもそっか。雪乃ちゃん、喜ぶと思うんだけどなあ」

今の発言でわかる通り、今俺達はデートに来ているものの、その実雪ノ下雪乃ちゃんの誕生日プレゼントを買いに来ているのである。

雪ノ下陽乃が俺に言いたかったのは、雪乃ちゃんの誕生日プレゼントの買い物に付き合うこと。言い出し辛かったのは、完全に俺は関係がなかったからと言ったので、何を今更と一蹴してやった。ついでに何か俺もプレゼント買ってあげようかと物色している。

パンダのパンさんが超好きだと言うことと猫が超好きなのは雪ノ下陽乃経由で知っているものの、あの子の性格上、今だけの限定商品とか、つい先日出たばかりのものでもない限り、買っているか、あえて買っていないかの二択になりそうだ。

ネット通販で買うのも悪くはないと思ったのだが、それではどう頑張っても明日渡すのが不可能に近くなるから嫌なんだそうだ。渡せるなら誕生日の日に渡したいんだと。

なのでこうして来てみたわけだが……。

「これとかどうかな？猫なりきりセット」

「仮装パーティーじゃねえんだからよ……雪乃ちゃん、怒るぞ？」

「そんな事ないよ？雪乃ちゃんの事だから、きつと一人になってから鏡に向けて「にゃー」とか言っちゃうよ？」

「凄まじいギャップ萌えだな」

案外普通にデートをしているようにも見えなくはない。

その実態は妹への誕生日プレゼント探しになるわけだが、今までの中で一番まともそうな気がする。

服こそ、雪ノ下陽乃はいつもの超おしやれな服装ではなく、俺の貸している少しだけ大きいジャージではあるものの、目立たないという点に関して言えば申し分ない。すれ違った人が二度見するくらいのものだ。いつものように全員がガン見した後、俺に向けて殺意と嫉妬の籠った瞳を向ける事はない。

「景虎はどう思うにやー?」

「そうだな。まあ、お前がやるとギャップ萌えじゃなくて、あざとっていうのがわかった」

「そう言うと思った」

そう言つて、雪ノ下陽乃はその猫なりきりセットを戻す。

雪ノ下陽乃が語尾に「にやー」なんて付けると、大体の男はキュン死するかもしれないが、俺からしてみれば、あまりにも狙つてやりすぎ感が否めないもので、全然動じない。

「つーか、なんで妹ちゃんは猫飼わないの?」

「仕方ないよ、ペット禁止だから。飼えるなら今頃雪乃ちゃんのお家は猫カフェみたいになってると思うし」

それ、猫好きすぎるでしょうが。

しかしながら、好きなものが明確なのはプレゼントを贈る側としてはありがたい。地雷を踏み抜く事はまずないし、ある程度方向性は決まっている。

俺も俺で探さないといけないので、一度雪ノ下陽乃と離れて、その辺を見回っていると、その時猫のミトンが視界に入る。

何故やたらとこの辺りは狙ったように犬ではなく、猫押しなのかはわからないが、この辺にしとくか。

それに手を伸ばした時、不意に誰かの手が俺の手に重なった。

「あ、すみません!」

その手の主は勢いよく手を引っ込めるとすぐに頭を下げる。

「いや、謝んなくても……あ」

謝ってきた子の一步後ろ、そこにいたのはつい昨日初詣で会ったばかりの人物――比企谷くんだった。

ていうか、よくよく見ればこの頭を下げてきた子もガハマちゃんではなからうか。

「昨日ぶりだな、二人とも。もしかや……デートか?」

「へ?……ち、違……くはないと思います、けど……」

「その言い方には語弊がありますね。ただ買い物に付き合ってもらってるだけなんで」

慌てふためくガハマちゃんに即座に比企谷くんがフオローをいれるが……はて、男女二人で買物なんて飯を買いに行く時を除けば大体デートなんじゃないだろうか。

「あの、九条さんは一人なんですか？」

「いいや。二人にはとても残念かつ警告しなければいけない存在もあるよ」

「……雪ノ下さんもいるんですか？」

「まあね。俺一人でこんなところには来ないさ。見つかる前に早々に退散した方がいい。きつとろくな事にならないから。というか、しでかさないから」

「へえ……それは誰の事を言っているのかな？」

びくつと、俺達三人の肩が震え、比企谷くんとガハマちゃんの視線は俺の後方に注がれる。

恐る恐る振り向いてみると、そこには――。

「私だけ除け者にしてお喋りしてるかと思ったら……誰が残念かつ警告しなければいけない存在なの？ねえ、景虎？」

「い、いやあ……誰の事だっけ？」

横目で二人に視線を送ると、二人は即座に目を逸らした。ですよ、ね、「振ってくるなバカ！」って感じだよ。

「ふーん。シラを切るつもりなんだあ……そっか。じゃあー」

「ごめんなさい。ちよつと言い過ぎました」

何か怖い事を言い出す前に即謝罪。やたら笑顔なのが怖いですよ、雪ノ下さん。

「あははは、冗談冗談♪別に怒ってないから。イラツとしたけど」

「……？それって結局怒ってるような……」

「やめとけ、由比ヶ浜。そこは掘り下げるところじゃない」

賢明な判断だ、比企谷くん。雪ノ下陽乃は不機嫌になると色々手をつけられなくなるから、本人が冗談って言ってるうちに話題を別の方向に持っていけないと大変な事になる……俺が。

紆余曲折を経て、俺と雪ノ下陽乃、そして比企谷くんとガハマちゃん
はセンチテイ・そごう千葉店に来ることになった。

思いもよらぬダブルデートとなったわけだが、お互いに理由が理由
なだけに雪ノ下陽乃はガハマちゃんと、俺は比企谷くんと一緒にプレ
ゼントを見て回っていた。

しかし、紳士服のコーナーには行くわけにもいかず、レディースの
ものを取り扱うところにいるので、あまり離れて見るわけにもいかな
いわけで。おまけに俺達二人は揃いも揃って、全くと言っていいほど
それらの女性ものには知識がないということもある。

雪ノ下陽乃やガハマちゃんは談笑しながら、商品を手に取り、あれ
やこれやと話している。やはり女子へのプレゼントを渡すなら、彼女
や意中の相手でない限り、同性同士がいいに決まっている。

「……俺達いる意味あるのかね」

「由比ヶ浜も、雪ノ下さんも、こういうのには滅法強いと思いますし、
いる意味はあんまり無いんじゃないんですか。かといって、フェード
アウトするわけにもいきませんけど」

「まあ……怖いもんな」

出来ることなら聞いてやるって言っちゃったしな。流石にここで
帰るのだけは俺としても有言不実行となるので避けたい。特に無茶
苦茶言っていないだけに尚更。

「……なんか普通に買い物してますよね」

「?まあ、買い物だしな。何か引つかかったか?」

「いえ……今日は雪ノ下さんが大人しいというか、前会った時に比べ
たら全然別人に見えるというか。よくわからないんですけど。雪ノ
下さん、会った頃に比べたらかなり変わりましたよね」

俺に聞こえるだけの声で、比企谷くんはそう言った。

変わった……と言われてもいまいちピンと来ない。時々見せる素顔はともかくとして、今の雪ノ下陽乃はいつものような外面をつけているはずだ。いくら比企谷くんとはいえ、見てもいないのに俺達が生きてきたことを知っているわけではないだろう。

だから、比企谷くんの言っていることはそう言った部分ではないということだ。もっとわかりやすい。外面に混じった雪ノ下陽乃の變化が何処かにあるはずだ。

「やつぱりあれですかね。化物じみてると思ってても、結局は人の子ってことなんですかね」

「さあ？比企谷くんにとってハルがどんな人間に見えるかは知らないが、蓋を開けてみれば結構可愛いもんだ」

「……惚気話は聞きたくないですよ」

「そんなもんじゃない、と答えておく」

辟易したように言う比企谷くんに俺はそう返した。

普通のカップルでない俺達に惚気られるような話なんてない。出来ることは苦労話とか愚痴とか、大体そんな辺りだろう。意外性のある話も或いは出来るかもしれないが。

「ヒッキー！見て見てー！」

軽く雑談をしていると、ガハマちゃんが比企谷くんを呼ぶ。

その顔には眼鏡がかけられており、自慢げな様子で眼鏡をくいくいっとやっていた。

「ふふん。どう？頭良さそうに見える？」

「眼鏡＝頭良いの発想がもう相当頭悪いだろ」

「う、うるさい馬鹿」

拗ねたように言うと、ガハマちゃんはアイウェアと記されている棚をあれこれ手にとって物色する。

アイウェアって……普通に眼鏡でダメなのか。ブルーライトカットとか花粉対策とか視力矯正以外の使用が一般化されてきたとはいえ、なんでもカタカナにすりゃ良いってもんでもないだろうに。

……ああ、後、眼鏡を掛けるってなるとペルソナが出せるかもしれ

ない。とりあえず口癖はハイカラにしよう。

「景虎っ」

「あ？何だよ。俺は今重要なー」

呼ばれてそちらを向くと、雪ノ下陽乃もガハマちゃん同様に眼鏡を掛けていた。

赤く細いフレームの眼鏡。雪ノ下陽乃は視力は全然悪くなかった気がするので、おそらくブルーライトカットだろう。率直に言うとは合っているのだが、これには雪ノ下陽乃の容姿もさることながら、ピンポイントで自分に似合うものを引き当てるその感性にも思わず舌を捲く。流石としか言いようがない。

「どう？惚れた？」

俺の反応を見て、雪ノ下陽乃がニヤリと笑う。

いつもならアホかと返すところではあるものの、比企谷くんとガハマちゃんのいる手前、そう返せないのが現状であり、下手に疑問を持たれるわけにもいかない。

なので、俺はとりあえずこう返しておくことにした。

「ああ、そうだな。惚れ直した」

「……言葉が薄っぺらいよ、景虎。もっと、心の底から言ってくれないと」

嘘なんだから薄っぺらいのは仕方ないでしょうに。

しかし、比企谷くん辺りは察しが良さそうなので、こんな露骨だと感づかれる可能性もあるか……そういう意味では、もう少し感情を込めて言った方が良いのは確かかもしれない。

「惚れ直した云々はともかく、めっちゃ似合ってるぞ。プレゼントとは別にそれ買うか。ゲームするんなら、使える事には使えるし、パソコンも使うだろ」

「いいよ、別に。そんな事で視力落ちないし」

「じゃあ、前の誕生日プレゼント。これでイーブンだ。ちと遅いけどな」

「……私の誕生日、教えてたっけ？」

「七月七日。大学で騒いでたろ」

俺が言い当てると、雪ノ下陽乃は目を瞬かせた。どうやら俺が誕生日を知っていることもさることながら、半年前の事を覚えているのも意外だったらしい。

「よく覚えてたね」

「記憶力は良いんだよ。つーか、あんなに騒いでたら、普通忘れねえよ」

こいつ関連のことは大体覚えてはいるが、誕生日の時は矢鱈と取り巻きが騒いでいたのを覚えている。後、あの時は持ち合わせが少なかつたので一日中ヒヤヒヤしていたことも。

結局、あの日雪ノ下陽乃は俺と接触する事すらなかったので、あの後友人に訊かれた時は返答に困ったものだ。

雪ノ下陽乃の掛けていたものと全く同じ商品を取り、レジに持って行って会計をすませる。

「必要ないなら捨ててもいいぜ。これは俺の自己満足だしな。買った後はお前の自由だ」

俺は雪ノ下陽乃に今買ったばかりのそれを差し出した。

雪ノ下陽乃にプレゼントを渡したという事実こそ意味がある。例え、雪ノ下陽乃がそれを目の前で捨てようとも、別に問題はない。普通に傷つくだけで。

「本当にいいの?」

「もう買った。寧ろ受け取ってくれねえと困る」

「……ありがとう、景虎。大切にするから」

差し出したプレゼントを受け取った雪ノ下陽乃はそう言って微笑んだ。

常々思ってはいたことだが、裏も表もない、雪ノ下陽乃の笑顔というのは本当に見惚れる程に綺麗である。それこそ、いつものギヤツプもあり破壊力がヤバい。

「景虎? 顔赤いよ?」

「……赤くねえよ。別に照れてないし、なんとも思ってたねえ」

「私は何も言っていないけど……やっぱり照れてるんだ」

「違うつってんだろ。あれだ。この店の暖房が効き過ぎなんだ」

「じゃあ……そういうことになっておいてあげる♪」
軽くウインクをする雪ノ下陽乃。
何故だかわからなかったが、敗北感が半端なかった。

買い物を終え、しばらく歩きっぱなしだったため、休憩がてらカフェに入ることになった。

比企谷くんとガハマちゃんとはそこで別れても良かったのだが、雪ノ下陽乃が「一緒に」なんて言い出したので、四人でカフェに来ることに。

通された四人掛けの席は窓のすぐそばで、眼下には千葉駅を一望できる。雪ノ下陽乃とガハマちゃんに奥を譲り、どかっと雪ノ下陽乃の隣に腰を下ろし、窓の外を眺める。

モノレールを走っている姿を見ると、こうしてみると千葉は超発展しているように思える。モノレールの行方を目で追っていくと、はす向かいの席に座る人間と目が合った。あれは……隼人くんか？

「どうも、お久しぶりですね。九条さん……陽乃さんも」

雪ノ下陽乃の方を見て、隼人くんは苦笑する。

「あー、ごめんね。今回は」

「気にしてないよ。陽乃さんが気まぐれなのはいつもの事だけど……今回はそう悪い事でもなさそうだし」

「流石隼人。理解が早くて助かるよ」

「ただ、ちよっと空気が重かった事については辛かったんだけど」

「……やっぱり怒ってるかー」

雪ノ下陽乃はあちゃーといった風に額に手を当てて、溜息を吐いた。

まあ、あえて音信不通にしたって言つてたぐらいいだし、普通の親でも怒るのは当然だ。束縛の強い雪ノ下の母なら尚更な。

「隼人くん、奇遇だね。こんなところで」

「まあね。比企谷も、奇遇だな」

隼人くんの言葉に比企谷くんは一瞥をくれるだけで、特に何かを言うわけでもなかったが、隼人くんも比企谷くんが何かを言う事を期待していなかったらしく、苦笑するだけだった。

「それにしても、結衣達と陽乃さん達って珍しい組み合わせだな」

「さつきそこで会つてねー。ゆきのんのプレゼント選んでるんだー」

「雪ノ下さんの？」

「そ。やっぱり皆で考えた方が楽しいし、良いものが見つかるもんね」

ガハマちゃんの言葉に同意する形で雪ノ下陽乃が頷く。良いものが見つかるし、物がかぶらないで良いのはわかるが、プレゼントを考えるのに楽しいとかあるか？

「誕生日プレゼントか……陽乃さんから渡すの、久しぶりじゃないか？」

「そうなのか？ハル」

隼人くんの言葉が意外だったので、つい聞いてしまった。てつきりこいつの事だから、毎年恒例で何か渡しているとばかり思っていた。

「うん。基本的に私が渡す物って警戒して受け取ってくれないし」

「あー……成る程な」

ちよつとわかってしまった。

納得したように頷くと、ハルは頬を膨らませる。

「なに、その反応。なんで納得してるの」

「納得するだけの理由があるしな。妹ちゃんの気持ちは大いにわかる」

「むう……景虎はどっちの味方なのさ」

「被害者の味方だよ」

だって同類なもの。俺も雪ノ下陽乃と付き合う前が誕生日でよかったと常々思う。今年は不可避だが、それに関しては今から覚悟しておけば、余程の事がない限り、耐えられるはずだ。

「それよりも……うーん、お母さん近くにいいのかあ……隼人とも会っちゃったし、知らぬ存ぜぬで通すのは無理があるかあ……」

「この後に及んで、まだぶつちぎるつもりでいるとかどんだけ嫌なんだ」

「嫌だよ。挨拶回りなんて。それに、私は景虎と一緒にいたい。うちの事なんてどうでもいいの」

至って真剣な表情で、雪ノ下陽乃はそう述べた。

いつもならここであざとい笑顔を浮かべてくるものだが……今朝からなんか調子狂うな。

「こうなったら、雪乃ちゃんも巻きこ……呼ぼうかな。どうせ、今年もお誕生日祝いつて名前だけのものがあるわけだし」

「おい、それ絶対に雪乃ちゃん嫌なやつだろ。巻き込んでやるな、可哀想だろ」

「えー、だって雪乃ちゃんだけ逃げるなんてずるいよ。ね、比企谷くん」

「……だからって巻き込むのもどうかと思いますけど。それに呼んだところで雪ノ下は来ないんじゃないですかね」

「来るよ。比企谷くんがハマちゃんもいるし」

「俺はともかく、由比ヶ浜がいるからっていうのならわかりますよ」

「捻くれてるなあ、相変わらず」

比企谷くんの答えに雪ノ下陽乃は嘆息するが、これにも違和感を感じえない。

いつもならもつと追求するか、弄るところだが、雪ノ下陽乃はどうもいつもより一步退いた姿勢でいるような感じがする。さっきの隼人くんへの謝罪も、簡単なものだったが普段なら多分なかった。

何かを企んでいる、というにはあまりにも意図が読めなさすぎる。

部分的にも、全体的にも全く見えない。雪ノ下陽乃が何を考えているのか。

……少しカマをかけてみるか。

そう思って、雪ノ下陽乃を呼ぼうとしたその時だった。

「陽乃、こんなところにいたの……」

客の話し声や薄くかけられたBGMの中でもよく通る。聞くものの意識を惹きつけるような声。

それは思わず雪ノ下陽乃を連想させた。

そちらを向くと、そこにいたのは、艶やかな黒髪をまとめ上げ、落ち着いた雰囲気醸し出す着物姿の女性だった。

その取り澄ましたような様子には既視感を覚え、比企谷くんやガハマちゃんもまた、俺と同じようにそちらを見て、何かに気づいたような様子だった。

「お母さん……」

雪ノ下陽乃の眩きによって、俺の確信めいた考えは答えへとたどり着く。

そこにいたのは、紛れもなく、雪ノ下陽乃の母親だった。

村人は真のラスボスと邂逅する。

「陽乃。こんなところにいたの……」

「お母さん……」

いかにして、母に見つからずにかつ知らぬ存ぜぬを通してこの場を乗り切るか、そう考えていた矢先、私達の前に姿を現したのはその母だった。

こうなったら、もう遅い。

私がどうこう言ったところで、母には意味が無いだろう。昔から母はそういう人だった。

けれど、今そこは問題では無い。

というよりも、そもそも初めから母の事は問題ではない。

私にとって、母は強い存在ではあるものの、話が出来ないわけじゃない。お互いにとっての妥協点さえ見つけることができれば、そう難しいことではない。

ただ、私が恐れている事は別にある。

「驚いたわ。雪乃もそうだけど、まさか貴女までこんな事をするなんて」

こんな事、とは一体何を指しているのかは容易に想像がつく。母は昔からなんでも思い通りにしたがる人だったから。だからこそ、私は衝突を避けてきた。ろくなことにならないのは目に見えていたから。

「何処で何をしていたの？心配したのよ？貴女はよく出かけるけれど、行き先を告げなかった事はなかったから。連絡も取れないし……」

「ごめんね、お母さん。今回はこの人の家にいたから」

下手に策を弄しても、景虎のいる前じゃ、すぐに嘘だとばれてしまう。そうでなくても、母の事だから嘘でないかどうかなんてわかってしまうはずだ。

だから、正直に言う。後ろめたい事はないわけではないけど、言えない事でもないから。

「あら……？その方々は陽乃のお友達？」

方々、というのは比企谷くんやガハマちゃんの仕事も言っているのだらう。

「うん。彼が比企谷くんで、こっちがガハマちゃん」

指をさして、母に伝える。もつとも、私の、というよりは雪乃ちゃんのお友達だけど。私としてもお友達みたいなものだし、別にいいかな。

「それでこの人がー」

「どうも。九条景虎です」

何か引つかかるような事があつたのか、珍しく母が訝しむように眉根を寄せた。

けれど、すぐにそれよりも気になる事があると言わんばかりに、母は口を開いた。

「えーと、その九条さんの家にお邪魔していたのかしら？ 貴女だけで？」

「そう……なるね」

「若い男女が二人で寝食を共にするなんて……子どもならまだしも貴女ももう大人なのよ。節度を持ちなさい」

こればかりは怒られても仕方ない。一般的な家庭でも、これは怒つて当然の事だし。間違いが起る可能性があるわけではないのだから……実際に起りかけてたわけだし。

「確かに無用心ですよ。一人暮らしの男の家に来るなんて。間違いが起こつてからじゃ、笑えませんもんね」

母の言葉に便乗するように景虎が言う。これも正論だから、ぐうの音も出ない。逆の立場でも、私は無用心だと言い放つだらう。本当に愛し合つて、将来設計までしているような恋人ならまだしも、はたして普通の友人かどうかも怪しいような関係だ。いくら私が護身術を覚えていても、薬を盛られたりされればその限りではない。流石の私も匂いを誤魔化されれば、口にするまでわからない。そこまで人間を辞めてない。

「そうよ、陽乃。彼は恋人でもない、ただの異性の友人なのでしょう？ 同性ならともかく、そういつた事は慎みなさい。別にプライベートに

どうこう口を出すつもりはないけれど……今回のようなことがあるのであればそれも考えないといけませんね」

私が恐れていた事はこれだ。

今まで、雪ノ下の長女として振舞っていたら、母の言う事を聞いていればプライベートの大体のことは許された。母も大半は縛るけれど一から十まで全てを束縛するつもりはない。

けれど、今回のように目にあまりすぎるような行為なら、その限りじゃない。

誰でもない。雪ノ下に害が起こるかもしれないなら、母は更に束縛してくる。

それはわかっていた。だから、後回しにして妥協点を考える時間を欲した。

そして母は問うてきた。景虎は「ただの異性の友人か？」と。

今までそういった話はなかった私だ。いつもなら首を縦に振って、肯定していた。だから今回も母はそう断じたのだろうし、それは事実だ。

けれど、私は肯定したくはなかった。

例え事実でも、偽りだとしても。

私にとってこの歪な関係は、ようやく手に入れる事が出来た『本物』だから。

初めて、心の底から欲しいと思えた。壊したくないと思えた。

だから、私は真実を否定したい。肯定すれば失ってしまうから。

でも、景虎は肯定するだろう。

いつだって、煩わしいと言っていた景虎の事だ。この場で即座に否定すれば、関係は解消されるだろうし、以前のように私に振り回されない生活ができるだろう。

初めから、私と景虎には明確な意識の差があったのだから、私がどれだけ肯定しても、景虎自身が否定してしまえば全て終わり。無駄な足掻きだ。

……残念だなあ。せっかく、私にとって運命とも呼べる出会いがあったというのにー。

「いえ、俺は雪ノ下陽乃の恋人ですよ。お母さま」

……へ？

耳を疑うような言葉が景虎の口から飛び出し、私は思わず、景虎の方に振り返った。

呆氣にとられる私をよそに、景虎は続ける。

「クリスマスと一緒にいられなかったものですから、正直な話。俺の我儘に付き合ってもらっただけなんですよ。ですから、軽率だった、というのであれば俺からも謝罪させていただきます。健全な付き合いをしているつもりですが、まだお母さまからしてみれば、信用出来ないでしょう」

「……では。今回の事は陽乃だけの問題ではなく、貴方も関わっている」と？」

「でなければ、一泊する事を許可しませんよ。ただの異性の友人の家に泊めるなんて、色々とマズいでしょう?」

肩をすくめて、景虎はそう嘯いた。

「……陽乃。それは本当のこと?」

「う、うん」

大半が嘘であるけれど、その中には僅かの真実がある。

これが私だけなら貫き通せない嘘ではあった。けれど、景虎も貫くつもりなら、私も貫き通せる。

静寂が訪れ、景虎とお母さんは互いに視線をそらさずに相手を見やる。

それが何秒続いたのか、先に視線を外したのは母の方だった。

「……わかりました。今回の事については不問にします。外泊した事も、男女の関係を築いているのであれば、それを咎めるのはやめておきます……が、今回のように意図的に音信不通にするようなら、それも認めません。……それでよろしいかしら? 九条さん?」

「はい。陽乃には自分の方から言っておきます」

「陽乃。今日までは許します。今日中には必ず帰ってくるのよ」

お母さんに訊かれて、私は無言で頷き、去っていく母を見送るしかなかった。

そして母がカフェから出て行ったのを見届けて……私はゆっくりと景虎の方を向いた。

「……なんであんな事言ったの?」

あそこで本当の事を言えば、景虎は私から解放される。それは景虎が強く望んでいた事だし、今回はその絶好の機会だった。

なのに、なのに何故恋人だなんて言ったのだろう。私にはわからなかった。

「俺はな……俺からこの勝負を降りるつもりはねえよ。お前が始めた事なんだ。お前の手で終わらせねえと負けたみたいで腹立つんだよ。今までお前には色んなモンで負けてきたけどな。それでもこの勝負まで負けるつもりはさらさらねえよ」

隼人達が近くにいるからか、景虎は私にしかわからないような言い回しでそう言った。

「そんな理由で?」

「お前にとつちやそんな理由でも、俺にとつては重要だ。それにな……お前と別れたつてなつたら、俺は殺される可能性があるだろ。俺は死にたくねえんだ」

私にしか聞こえない声で言った言葉は以前から景虎が危惧していた事だった。

私と付き合って、大学の男子のほぼ全てを敵に回し、裏では闇討ちなどの計画を立てられていて、私と離れたらそれら全てが実行されるとの噂。聞いたところによると、その噂はかなり真実味を帯びているようで、そういう裏サークルまで出来ている始末。今度潰しておかないといけない。

「ま、まあ……それに、なんだ」

「?」

「お前といるのも、最近は……いや、やっぱり今の無しだ」

「そこまで言って無しにする? いいじゃん、全部言っちゃおうよ!」

「言いたくねえよ! 絶対に馬鹿にするだろ、お前!」

「馬鹿にはしないよ、茶化すだけで」

「大差ねえって事に気づけ、馬鹿」

そんな事はない。馬鹿にするのと茶化するのは大きく違う事がある。そこに悪意があるか否か。茶化す時は悪意なんてない。純粹に面白いから、楽しいから、煽っているようなものだ。馬鹿にしているのは見下していたりするから。そこには明確な悪意の差がある。

それに茶化ささないにしても、あそこまで言っておいて、やっぱり無しは普通に気になってしまう。

「ともかくだ。俺から白旗は絶対に振らん。お前が続行する気があるなら、何処まででもやってやるよ」

「ふーん……じゃあ、死ぬまでつて言ったら？」

「いきなりそこまで行くか……流石にそこまでは知らねえよ」

頭をガシガシとかいて、景虎はそっぽを向く。

わからない、という割に否定はしない事に少しだけ嬉しさを感じる。本当に景虎はツンデレさんだなあ。言ったら確実に怒るだろうけど。

「なーんか、白けちゃったね。ごめんねー、二人とも。微妙な場に巻き込んで」

「べ、別に大丈夫ですよ。やー、なんていうか、ゆきのんのお母さん超美人だったし、見れてラッキー、みたいなの！」

「俺も別に気にしてません」

言い方こそ違えど、二人とも本当に気にしてないらしい。ガハマちゃんに至っては無用なフォローまでしているけれど、それすらも本音のようだった。

「俺や隼人くんにはないのかよ」

「隼人はこういうのには慣れてるし、景虎は私の彼氏でしょ？なら迷惑かけてもいいんじゃない？というか、寧ろどんどんかけていくけど」

「やめろ。俺だったらなんでもしていいわけじゃねえって言ってんだろ」

「やーだよ。残念だけど、景虎は逃げるチャンスを逃したわけだから。これから覚悟しておいたほうがいいかもよ？」

「怖え……隼人くん。こういう時、どうしたらいいかわかる？」

「い、いやあ……俺に聞かれても困るというか……」

「モテるんだろ？経験豊富かと思っただけど？」

「隼人は交際経験ないよ。私と同じだから」

隼人は私と同じだ。いや、同じになろうとした、の方が正しいのかもしれない。けれど、こんな生き方は早々できたものじゃないし、はつきり言ってやめた方がいい。必ず後悔する事になる。

……もつとも、それはもう遅いかもかもしれないけれど。

「交際経験はともかく、陽乃さんと付き合うなら、やっぱり覚悟するか諦めるとか、そういうのが最善の策だと俺は思いますよ」

「……それはつまり打つ手なしって事じゃないのか」

「ご想像にお任せします」

「二人とも。後で覚悟しといて」

人の目の前でこの二人はなんて事を言うのだろうか。それでは私がるで血も涙ない外道みたいじゃん。私だって、ちゃんと限度は弁えているつもりだ。それが少し他の人よりも行き過ぎているかもしれないだけで。

「で、これからどうするんだ？」

「うーん。あんまりデートって気分じゃないし。今日はもうやめとこっか」

「まあ……俺は別に構わないけどな。お前がそれでいいんなら」

もしこのままデートを続けていて、面倒な人に会ったら、また空気がぶち壊されてしまう。母に関して言えば、身から出た錆だけど、それ以外は害虫だ。邪魔されると非常に不愉快。

「というわけで、比企谷くん、ガハマちゃん。雪乃ちゃんによろしくね。隼人、ファイト！」

ひらひらつと手を振って、二人に別れを告げ、隼人にはこれからも続くであろう恒例行事への参加にメールを送る。例え劣化模造品でも、これぐらいでは疲れはしないだろうけど、私がない事で更に加わる負担なんかも考慮してみれば、少しは同情してあげなくもない。

「さ。あったかい我が家に帰ろっか」

「お前のうちじゃねえよ……」

僅か二時間のデートを終え、帰ってきた我が家。

帰ってきてやることといえばゲーム。冬に外に出て遊ぶなんて小学生じみた事をする事はなく、以前よりもずっと低い気温という事もあって、雪ノ下陽乃でさえも外に出て何かしようとは言い出さなかった。

うん、言い出さなかったんですけどね？

「……お前さ。今日やたらと近くない？」

「気のせいじゃない？いつも結構近いよ。目に見える部分じゃ。なんならボディタッチも結構してるし」

「お前の場合、ボディタッチというか、完全に攻撃とかそういうやつだろ。それに近いつっても、ここまで引つ付いてねえ。何考えてんだ？」

「んー……実験？」

「何のだよ……」

笑顔で実験とか怖すぎるんだけど。絶対にろくな事じゃないだろ、それ。

「あ。後」

「？」

「これからはお前禁止。陽乃って呼んで」

「何故に？」

「熟年夫婦じゃないんだから。名前呼んでくれないとやだよ」

「それならハルでも良くないか？」

「いやーだ。名前が良い」

また気まぐれか……良くある事だし、今更気にもしないが……

「あー、わかった。……陽乃」

「よろしい」

満足げに雪ノ下陽乃は頷くと、更に身を寄せてくる。いや、本当になんなんですか、あなた。新しい遊びでも考案したんですか。

だとしたらこれはあまり俺の精神面において良くない遊びだ。相手が雪ノ下陽乃であっても……否、雪ノ下陽乃であるからこそ、こういう行為における破壊力は抜群なのである。もちろん、下手な気は起こさないし、勘違いなんてまずありえないのだが、それでも意味はある。

なんとか気にしないようにFPSゲームをしているのだが、いつもよりミスが多い上に少しばかり反応速度が落ちている気がする。これも全部、雪ノ下陽乃つてやつの仕事なんだ。

「あれ？ゲームやめちゃうの？」

あまり死にすぎるとゲーム内における俺の戦績が酷いことになってしまうのでやめる。それに、気にしないでおこうとゲームをしているたら、一つ疑問が浮かぶ事があった。

「そういえば、お前の……じゃねえな。陽乃のお袋。聞いてた話とちよいと違う気がするんだが。ひよつとして、あれも『外面』なのかな？」

カフェで雪ノ下陽乃の母と話した折、疑問に思った事はそれだった。

雪ノ下陽乃の話から、てつきり邪智暴虐の王すら生温いような人かと思っただが、思いの外まともだった。まあ、状況が状況だけにあれでゾツとするような部分が垣間見えたら問題過ぎるわけだが、それにしたって違和感をあまり感じなかった。

「んー、それなんだけどね。多分、景虎が予想外の事をしたからじゃないかな？」

「はあ？よくわからねえんだけど」

「ほら。景虎は私を恋人って言ったでしょ？」

「まあ、な」

確かに言った。

あの場、あの状況を乗り切るにはそれしかないと判断しての行いだ。もちろん、雪ノ下陽乃が否定すれば一貫の終わりだったが、結果として俺と雪ノ下陽乃は今もこうして関係を終わらせずに話をしてるのだから、あの行為は間一髪成功したといったところだろう。

「私って、モテるけど今まで誰とも付き合ったことないし、お見合い話みたいなのも全部蹴ってるの。凄くモテるんだけど」

「なんで二回言った」

「大事な事だから」

事実ですけど二回も言われると非モテ系としては、かなり腹立つんですよ。自慢してんのか、ぶん殴るぞってなる。いや、女の子は殴らないよ。少なくとも今の俺は。

「自分の知らないところで私が恋人を作ってるなんて露程にも思っ
てなかったんじゃないかな。だから、景虎が恋人だって言っ
て、お母さんも驚いてたし」

「……え？どの辺が？」

全然普通だったと思いますけど？全くわからないんですが。

「わからないのはしょうがないとして……やったね、景虎。これで景虎はお母さんに目をつけられ……認められたと思うよ」

「おい、今日をつけられたとか言いかけたよな？認められたって害虫認定されただけじゃないのか？」

「……」

「そこは否定しろよ」

「冗談。害虫認定はないから安心して」

くすりと笑って、雪ノ下陽乃はそう言ったが、ひよっとしたら合ってるかもしれない。

言ってる事が正しければ、雪ノ下陽乃は母からのお見合い話とかを片っ端から蹴っていて、母の意思に背いているという事になる。そして俺という恋人を作る事で更に反抗の意思を示しているようにも取れる。もしかしたら、この仮面カップルを始めたきっかけはそこにあるのかもしれないが、今それを聞く意味はないだろう。

「それよりもさ。一つ気になってる事があるんだけどさ」

「今度はなんだ」

「景虎の姓の九条ってー」

「知らん。俺には関係ない」

「私まだ何も言っていないんだけど……それ絶対に関係あるよね？」

「ねえつつてんだろ。それ以上言うなら叩きだすぞ」

少しばかりの苛立ちを込めて言う。

そう。今の俺には関係のない話だ。呼ばれたところで帰るつもりはないし、ぶっ倒れても知らんふりを通す。何の音沙汰もない辺り、あつちも俺がいなくても日常が回っている証拠だ。

ともあれ、やっちゃまったな。

雪ノ下陽乃の前で地雷を晒すというのは、踏んでくださいと言っているようなものだ。嬉々として、どんどん突っ込んでー

「あ……ごめん。地雷、踏み抜いちゃったね」

ーこなかった。

それどころか、目を伏せて、少しだけ申し訳なさそうに謝った。

らしくない。何時ものような演技というには全くあざとくないし、それ特有の狙ったかのような雰囲気がるで感じられない。そのせいで、こちらも少しやっちゃったかのように心に罪悪感が湧いてしまった。

「……悪い、言いすぎた。家族のことは掘り返されるのは好きじゃねえんだ。どうにも、折り合いが悪くてな」

「……仲悪いの？」

「悪くはねえさ。俺が一方的に煙たがってるだけ。ちよつとした反抗期ってやつだ」

悪くはなかったし、俺もあの出来事があるまでは普通に両親の事は好きだった。あの事件がきっかけで中学の途中から何年間もずっと反抗期だ。

「景虎も家族の事で苦労してるんだ」

「陽乃に比べれば可愛いもんだ。いや、比べるのもおこがましいレベルだな」

いや、本当に。

つーか、だからこそ言いたくない。雪ノ下陽乃には特に。馬鹿にされるを通り越して呆れられる可能性がものすごく高い。それだけあつけない理由なんだ。

しかし、雪ノ下陽乃が俺の姓に疑問を抱いたということは、雪ノ下の母も疑問を抱いたかもしれない。まあ、知られても痛くもかゆくもないんだが。

「問題はないけどな。とりあえず、家族の事は勘弁してくれ。面白がるのは結構だが、そいつだけはノツてやれねえよ」

「寧ろ、景虎がノつてくれた事なんてあつたっけ？」

「大体ノつてるだろ」

渋々とか嫌々とか、前に付くかもしれないし、やる気もないけど、雪ノ下陽乃の望んだ事には結果的に応えてはいる。ほら、後が怖いし。

「じゃあ……今から私がする事にもノつてくれる？」

「内容次第だな。あんまりふざけた事とか、実行不可能な事は無理だ」「だーいじょうぶつ。悪い事はしないから♪」

何故か唐突に陽気な声で言う雪ノ下陽乃に俺は思わず肩をびくつと震わせた。

今までのノリならこの後に待っているのはロクでもない事だった。そして失念していた。雪ノ下陽乃は嫌だと言ったら、頑としてそれを実行しようとする人間だという事を――

「景虎。私の婚約者になってくれない？」

「……………はあ？」

何言ってるんだ、こいつは。

あまりにも唐突に。

雪ノ下陽乃は訳のわからない事を口走った。

正気を疑いそうになった。いくら雪ノ下陽乃といえど、こんな訳のわからない冗談はぶっ混んできた事がない。なんならキスしようとするも言ったことがない。今日の寝起きのあれもキスしたと見せかけて、紛らわしい行為があつたが、それも俺が狼狽える様を見たかっただけだろう。

そして、今回のこれも俺を遊ぶためだけのおふざけなのだろう。そう高をくくつているというのに。

「そうすれば、いろいろと丸く収まるんだけど……どうかな？」

何故こいつはおどけた口調。何時もの表情で。

素の部分をさらけ出しているのだろうか。

どちらかわからない。

演技なのか、本気なのか。

こんなふざけた内容が本気であるはずがないのに。

雪ノ下陽乃を知ってしまったからか。はたまた、俺の心のどこかにそれを期待している心があったからか。

このふざけた言葉さえも、雪ノ下陽乃が本心を交え、そう訴えていると受け取ってしまう。

ごくりと生唾を飲み込み、雪ノ下陽乃と目を合わせることに数秒。

たったそれだけの時間でさえも、途方もなく思えてしまう。

「……なーんちゃって。どう？驚いた？」

その瞬間、張り詰めていた空気が一気に緩和した。

流石に俺も今回はがくりと肩を落として、息を吐く。

人を小馬鹿にする事にどこまで全力を費やしてるんだ、この女。

「相変わらず景虎はこの手の冗談には弱いね。初心なんだから♪」

「うるせえ。こちとらモテた事もなけりや、付き合った事もねえんだよ」

「そんな！私とは遊びだったの!？」

「いや、そうじゃねえだろ。寧ろ、俺が遊ばれてる側だからな？」

「それもそっか」

初心なのは仕方がない。元々男女交際の経験は零なのだから。モテない男子に思わせぶりな行動をするのはやめましょう。マジで勘違いする子がいるから。告白して、振られて、馬鹿にされるといふ才チまで待つてる。それを笑う畜生共はマジで許すまじ。

「冗談はさておいて。ここからが本題」

「なんだそりゃ」

悪ふざけに冗談とか本題とかあるのか。今初めて知ったわ。

「これからも彼氏続けてくれる？」

「あ？だから、辞めたら俺死ぬから」

「そういう損得感情抜きで、ね。私と一緒にいてくれるかって話」

またわけのわからない事を言ってくるな、こいつは。

確かに、今まで九条景虎は雪ノ下陽乃が作りだした勘違いの脅しで、絶対にその偽りの関係を終わらせられない立場にいたし、今でもそうだ。いくら俺が昔不良だったといっても、昔の話だし、そもそも俺より強い奴だって普通にいるだろう。

だが、それは正直に言つて建前のようなものだ。雪ノ下陽乃に弄られず、かつ馬鹿にされない事実。闇討ちとか抹殺計画とか、雪ノ下陽乃を好きな人間は好きであっても崇拜してはいないだろう。

うちの大学はそこまで脳内レベルの低い場所じゃない。事件を起こして、将来を捨ててもいいなんて輩は両手で数えられればいい方だろう。もつとも、雪ノ下陽乃が先導すれば話は別だが、それもない。なら、何故そこまでわかっていて、俺がこいつと一緒にいるのなんて考えるまでもない。そんなの、一つしかないだろう。

「くだらん事聞くなよ。そんなの初めから決まってるんだろ」

「やっぱり……そう、だよな」

「いいに決まってるんだろ。そんな事」

俺が何もかもわかった上でこんな関係を続けているのは、損得感情なんてなくてもいいからに決まっている。

「単に陽乃といるのが楽しいんだよ。暇なんてしねえし、時々胃は痛くなるけど。それでも今まで楽しくやれたのは、陽乃がいたからだつて俺は思うぜ。時々頭が痛くなるけど。だからな。損得感情抜きだとしても、俺は俺から陽乃と一緒にいる事はやめねえよ」

これが俺の答えだ。

雪ノ下陽乃という日常は基本的に刺激的だ。

それは怠惰に過ごす暇すらない、忙しい日かもしれないが、刺激があるという事は『つまらない』と感じる暇もないという事だ。そして、若い人間というものは常に刺激を求める。安寧を求め続けるのはごく一部の若者と四十過ぎたおじさんとかだ。少なくとも、俺は刺激が

ある方がずっといい。

そして雪ノ下陽乃との日常には常に刺激がつき回る。望もうが望むまいが、雪ノ下陽乃が怠惰を否定し、暇を拒絶し、愉悦を求める限り、俺の意思とは関係なく、当たり前前が遠ざかる。

だが、それがなんだというのだろうか。

誰だって楽しい事を求めるし、暇をするのは嫌だろう。何もしないでいたいなんて、それは人である事を放棄したいのと同義だ。

「俺は俺の意思で陽乃といたいって思ってるわけだが……それでなんか文句あるか？」

「文句なんてないよ……けど、ちょっと待って」

そう言うのと、雪ノ下陽乃はぶいっとそっぽを向いた。

「どうした？」

「ごめん。今、景虎の事直視できない」

「なんでだよ。なんかおかしいこと言ったか？」

直視されてもこっちも困るけど……そう言われると俺がとてつもなく気持ち悪い事を言ったのではないかと思ってしまう。

「おかしくは……ううん。やっぱりおかしいや」

「は？なんだよ、それ」

「だって普通付き合ってもない子にそんな事言わないでしょ。変だよ、景虎は」

「いや、変じゃねえよ。変なのはお前だからな？」

「お前じゃないでしょ、陽乃。それに景虎の方が変だから。私と一年近く一緒にいて、私の事色々知って、それでも変わらずにいられるなんて、景虎ぐらいいしくないよ。普通じゃない」

「それ自分で自分は普通じゃないって言ってるじゃないか？」

「そう言ってるの。私が普通だと思う？」

「普通じゃねえな」

挙げればきりが無いほどに雪ノ下陽乃には普通といえる要素がほぼない。やればできる子とでも言えればいいのだろうか。本当にやる気さえあればできない事なんてないのだろうか。

「だから、私が選んだ景虎も普通じゃないし、一緒にいてもいいとかい

うのも普通じゃない」

「そう言われると……否定できねえな」

雪ノ下陽乃に選ばれた時点で、俺は普通じゃないというのは悔しい事に大いに説得力がある。刺激を求める時点で、普通では満足できない。当然異常性を求め、お眼鏡にかなってしまつた俺は普通じゃない。

そしてこの関係を最終的に続けていく事を肯定した事も普通じゃない。

雪ノ下陽乃のように何か才能に溢れているわけでも、飛び抜けた容姿や頭脳を持つているわけでもないが、感性という点では雪ノ下陽乃と同じらしいという事を今の今になって思い知らされた。

「まあいいんじゃないか。片方だけならともかく、両方変なら問題ねえよ。釣り合い取れてんじゃないか……っ！か、耳真っ赤だけど、本当にどうした？風邪引いたのか？」

そっぽを向いてるから顔は見えないが、髪の毛のかかっている耳が真っ赤だった。なんだかんだ言つて、帰るときは寒いつて文句を垂れていたの、それで体調でも崩したのかもしれない。

「……なんでもないって」

「なんでもなくはないだろ。ほれ、こっち向け」

両手で雪ノ下陽乃の顔をはさみ、こちらに向ける。

俺が強制行動に出るとは思つてなかつたらしく、無抵抗でこちらを向いた。

「顔真っ赤じゃねえか。本当に大丈夫か？」

「~~~~っ!？」

バチンッ!

顔を覗きこみ、雪ノ下陽乃の顔がより一層赤みを帯びた瞬間、視界がスパークした。

結論から言うと、雪ノ下陽乃にビンタされたらしい。

………なんで？

類は友を呼ぶのは当然の事である

冬休みが明けて、一月の中旬頃。

私は喫茶店で一人、ある人を待っていた。

それは景虎じゃない。今日は景虎を除いて、最も私の友人と呼べる人を待っている。

約束の時間まであと数分。本でも読みながら待とうと思っていたけれど、これから話そうと思っている事を考えると、全然内容が頭に入ってきてそうにならないから、それも止める。

何をして暇を潰そうか、そう考えていたその時、私の待ち人が入店してきた。

周囲を見回し、私の存在を確認すると、こちらに向かって歩いてきた。

「……全く、どういう風の吹き回しか。お前から『相談がある』とはな。陽乃」

「私だって、相談したいことぐらいあるよ？ 決め付けはよくないなあ、静ちゃん」

「そうやって、君の暇つぶしに何度付き合わされたことか。あまりふざけた事を言うなら、私も帰るぞ。こう見えて、結構忙しいんだ」

椅子に腰を深くおろし、静ちゃんはうんざりしたように言う。

何回も私が適当な理由をつけて、暇つぶしに付き合わせてしまったことがここにきて、私の足を引っ張っているらしい。それでも断らないところが静ちゃんらしい。

「大丈夫。……今日は結構真面目な話だから」

私がそう言うと、静ちゃんは目を瞬かせた。

多分、私らしくないと思っているんだろう。

私だって、少し前までならこんな風に静ちゃんに真剣に相談なんてしなかったはずだ。

なのに、そう思ってしまったのは、やっぱり景虎のせいに違いない。「……驚いたな。どういう心境の変化だ？ 本当に『相談』があるのか

？」

「だからそう言ってるでしょー？静ちゃんてば、私の事を何だと思ってるの？」

私の問いに静ちゃんは答えない。静ちゃんが私の事をどう思ってくれていたのかは私もよく知っているし、何よりその話をしていると、話が逸れていきそうだったから、私もあえてそれを追求する事はしなかった。

「それで。相談というのはなんだ？よもや君に限って、進路や将来のことで相談を持ちかけてはこないだろう？」

「うん。それはどうにでもなるし。興味もないし」

進路や将来が興味もないっていうのは問題かもしれないけれど、それでも今の私にはどうでもいいことだった。

「あのね。景虎……えーと、静ちゃんには九条って言った方が伝わるかな？」

「ああ。その九条がどうした？まさか喧嘩をしたから仲直りの手伝いをしろ、なんて言う気ではないだろうな？」

「違うよ。喧嘩なんてするわけないじゃん」

お互いに引き際をわかっているから、喧嘩なんてまず起こらないし、そもそも景虎が本気で怒ったところなんて見たことない。前は地雷を踏んでしまつて、苛立たせてしまったけれど、それもすぐになりを潜めていた。

「では、なんだ？」

「私、景虎の事を好きになつちやつたみたい」

「……陽乃。惚気話がしたいなら、他所でしてこい。というか、私もそろそろ君だけは女性だとしても例外として殴ってもいいのではないかと思ひ始めたんだが？」

苛立った様子で静ちゃんが拳を強く握りしめる。

何故そう取られたのだろう、と思つて、私はうっかりしていたことに気付いた。

私達の関係は私達以外誰も知らない。

なら、静ちゃんは私と景虎が元から付き合っていると思つてるん

だ。だから、静ちゃんからしてみれば、私が惚気話をしているようにしか聞こえない。

「ごめん、静ちゃん。その前に説明しなきゃいけないことがあった」
じつりと睨んでくる静ちゃんに私は今日に至るまでの全てを説明する。

本当ならこんな面倒な事はしたくないけれど、私が静ちゃんに持ちかけた最初で最後の本気の相談だから。懇切丁寧に、全てを話した。

「……成る程。感じていた違和感はそれか」

「やっぱり静ちゃんは薄々気づいてたんだね」

「確証はなかった。ましてや、君の事だ。普通のカップルの定義で測れる筈もない……が、予想通りに普通ではなかったか」

静ちゃんは、いずれ気づくのではないかと思ってた。

なんだかんだ言っつて、景虎と出会う以前の私の一番の友達だから。私がどういう人間かもある程度理解してくれていたし、それも込みで付き合ってくれていた。

「しかし、なんとも君らしくないな。策士策に溺れるといったところか、陽乃」

「ううう、だってしょうがないでしょ。景虎が普通じゃないんだっつてば。いつも私の想定外の事ばかりするし、距離の詰め方が独特だし、いざつて時に全然行動が読めないんだもん」

「あの雪ノ下陽乃がか。初めて天敵と出会った挙句、見事に落とされたわけだ」

確かに景虎は私の天敵かもしれない。

普段の行動は読めても、いざという時の行動が予想外で、私を楽しませてくれたけど、それ以上に私の心の深い部分まで見透かされるようなことになってしまった。

その結果、私は景虎に好意のようなものを抱いてしまっている。何もかも見透かされつつある現状を嬉しいと感じてしまっている私がいる。漸く、雪ノ下陽乃を理解しようとしてくれていている人物に逢えた事に歓喜している私がいる。

「それで。君はどうしたいんだ？」

「そ、それはもちろん……ちゃんと恋人になりたい、けど……」

つい、私らしくない。口をモゴモゴとさせながら言ってしまう。

うう……やっぱり恥ずかしいなあ。

「ならば、さっさと告白すればいい。君が言い寄れば、九条も何かしらリアクションを返してくるはずだ」

「……多分信じないし、もし振られたら……」

考えるのも嫌になる。今の関係は私にとって、とても良いものだ。

景虎は家族を除いて、私にとっての唯一の『本物』だ。かけがえのない存在だ。

だから、例え関係は偽物だとしても、今のままで景虎のそばにいれるのなら、それでいい。

……あはは、そうやって考える自分に反吐がでる。

だってそれは、私が比企谷くんたちにぶつけた疑問そのものだ。本物を求めて、かけがえのないものを失うのなら、偽物でも今を過ごすという、最悪の選択肢。

つまらないと一蹴したあの時の私の言葉が、今になって返ってくるとは思わなかった。滑稽極まりない。

「怖い。ふっ……良い顔をするようになったな、陽乃」

「……静ちゃん、馬鹿にしてる？」

「いいや。作ったものじゃない。本当の意味で君も女の顔をするようになった。私は友人として、素直に嬉しく思う」

「……言ってることは年寄りくさいけどね」

「ははっ、なんとでもいいたまえ。今の君の言葉では、私の心に傷を与える事など出来んよ」

いつもなら、露骨に傷ついたような素振りを見せるのに、余裕たっぷりに静ちゃんは笑いを見せた。

初めて静ちゃんに対して敗北感を感じている気がする。なんだか納得いかない。

「さて……その乙女思考はともかく、告白しないならこれからどうするかだが……」

「しないわけじゃないの。ただ、失敗したら、一緒にいられなくなる

し、踏み出せないってどうか……」

「ふむ。では、正攻法かつ地道な作業ではあるが、好感度を上げていくしかないだろう」

「えー……なんか、こう、一気に好きになってくれそうな方法ない？」
「漫画じゃないんだ。そんな方法があるわけないだろう」

自分で言っておいてなんだけど、それはそうだ。

私が景虎を好きになるのに半年以上の時間をかけたように。

景虎もまた、私を好きになってくれるようにするには同じようにしなければいけない。

はたして、同じように時間をかければ好きになってくれるのかは定かではないけれど。だって、景虎のタイプからいえば、私はその対極に位置する人間なわけだし。

「あー……凄く辛いね。なんで皆はよく悩みもせずに告白なんて出来るの？」

「悩んでいないわけではないだろうさ。ただ、その想いの度合いが違うんだ。それは陽乃、君もよく知っているはずだ」

想いの度合いが違う。

確かに私に告白してきた人は総じて振ってきたけれど、その時のリアクションはそれぞれ異なっていた。

初めから振られることをわかっているような素振りの人もいれば、淡い期待にかけていたけどやっぱりダメだったと嘯く人、一世一代の賭けに敗れこの世の終わりだと崩れ落ちる人 e t c ……

今まではさして気にしていなかった事だけれど、思い返してみれば、静ちゃんの言う通り、想いの度合いが違う。

仮に私が今告白して振られたら……どうなるんだろう。みっともなく泣き崩れるのか、はたまた既にわかりきっている結果でビクともしないのか、どちらにしてもあまり喜ばしい事じゃない。

「まあいい。悩む事はそう悪い事ではないし、少なくとも一時の感情……と言えるほど、君の想いは軽くないのは確かだ。そこまで本気なら私も友人の恋を応援しようじゃないか」

「ありがと、静ちゃん。それで何をすればーあ」

思わず、間の抜けた声を上げてしまった。

というのも、偶々喫茶店に景虎と比較的よく一緒にいる（基本は私と一緒にいるから）お友達（名前忘れた）子が男友達二人と談笑しながら、入ってきたからだ。

……これはひよつとして……ううん、ひよつとしなくてもチャンスかもしれない。

「どうした、陽乃？」

「ちよつと待っててね、静ちゃん」

私は椅子から立ち上がり、スタスタとそのお友達がいる方向に向かっていく。

あちらはまだ私の存在に気付かず、談笑していたものの、残り一メートルとなったところで私の目的の子と話していた子が私の存在に気がついた。

「ゆ、雪ノ下さん!？」

「は?いや、なんで雪ノ下さんの名前が……うわっ!?雪ノ下さんだ!」「なんでこんなところに!？」

「時々、ここに来るんだ。今日は友達に悩み事があつて聞いてもらつてるの」

私が後ろに振り向くと、三人の視線も静ちゃんへと注がれる。

注目を集めている静ちゃんは特に気にした様子もなく、ひらひらとこちらに手を振るだけだった。

「うわっ、凄い美人な人だ。でも、なんか学生って感じじゃないよな」

「ちよい年上なんじゃね?まあ、流石雪ノ下さんの友達つてだけあるわ」

「……俺、惚れそう」

「確かに哲平のドストライクじゃね?あの人」

「オタクかどうか話して置いておいての話だけど」

静ちゃんを見た三人が口々に思い思いの事を話していく。

思った以上に大人気だね、静ちゃん。いつも、ああしてれば全然モテると思うのに。

因みに敢えて言わないのは、可哀想だけど面白そうだから♪

それと……名前は哲平くんか。

うん、良かった。本人から聞く前に知る事ができて。

「ねえ、ちょっと哲平くんに用があるんだけど……借りてもいいかな？」

私が入目遣いにそう尋ねると、哲平くんのお友達二人はぶんぶんと無言で頭を縦に振り、生け贄でも差し出すかのようにその背中を押しした。やっぱりほんの一握りを除けば、私のこの仮面は通用する。初めて恋を知って、果たしてどのレベルにまで通用するのかは知らないけれど、今はまだ自然にできるみたいだ。

「あー、あの、用ってなんですか？」

「うーん。ちょっとここじゃ話し辛いから、あっちで話さない？」

「は、はあ……」

とりあえず、といった感じに哲平くんは頭を縦に振ると、私の後をついてくる。

テーブルに着くと、私が静ちゃんの隣に、私と向かい合わせになるように哲平くんが座った。

「あの……話って、九条の事なんじゃないですか？」

おずおずといった風に尋ねてきた割には、哲平くんの問いは的確なものだった。

「そうだよ。なんでわかったの？」

首をかしげながら、問いかけると哲平くんは言う。

「いや、雪ノ下さんが俺に用があるなんて、九条関係の事でないとなり得ないでしょう。それに、俺の名前、覚えてないんじゃないですか？」

「どうしてそう思うの？」

「九条はともかく、他のやつは苗字じゃないですか。なのに、俺はいきなり名前だなんて、余程馴れ馴れしい奴か、苗字を覚えてなくて今聞いたばかりの名前を口にしたかのどっちなんじゃないかって」

「それも正解。私からも言わせてもらおうなら、流石は景虎の友達だね」

「まあ……あいつとは高校の頃からの付き合いですけど、それなりに友達だと思ってます」

高校の頃からの付き合い……ということは、高校時代の景虎のこと

を知るチャンスかもしれない。

本当なら色々聞こうと思っただけど、そつちを聞けば何かわかるかもしれない。好きなタイプも、もしかしたら違うかもしれないし。

「高校の頃の景虎ってどうだったの？」

「途中から編入してきたんですけど、あの頃の九条は……なんていうか、飢えた獣みたいな野郎でした。目つきはやばかったし、噂じゃ前の高校で暴力事件を起こしたからこつちに来たんじゃないかって言われてました」

「それって中学までの話じゃないの？」

素朴な疑問。

確か、景虎は自分が不良だったのは中学までの話で、それ以降はなりを潜めたと言っていたような気がする。

「一番荒れてたのはその時期らしいんですけど、編入して間も無い頃はそりやもうえげつなかったですよ。うちの生徒もビビりまくりで、誰も近づこうとすら思わなかった」

「じゃあ、なんで哲平くんは友達なのかな？」

「ああ……それは、まあなんといいですか。ゲーセンで遊んでる時に偶々他校の奴らに絡まれてるところを助けてもらって、それでその時同じゲームにハマってたんで、そこから意気投合したんすよ。ゲーオタ皆兄弟的な感じで。それからですかね、九条が徐々に周りに馴染もうとし始めたの」

そう語る哲平くんは、昔を懐かしむような表情だった。

一体、その時に何があつて、何が景虎を変えたのかはわからないし、知りたいけれど、それは訊いてはいけないのだと思った。

だって、景虎自身の口から、私に伝えられていないから。景虎が私には話したく無いと思っっていることだから、それを勝手に私が知るのには景虎への裏切りだと思った。

「って、言っても最初はすぐに手が出るんで、よくからかったりした時に頭にたんこぶ出来てたんすけど。今じゃ、もう見る影も無いって感じでしょう？」

「うん。そうだね」

そんな話なんて、信じられないくらいに景虎は優しい。ぶつきらばうだし、私と違って、オブラートに包まず毒を吐くけれど、それは景虎が自分に正直で、思った事を伝えてくれていて証拠だ。下手に気を遣ってこないだけ、いっそ清々しいくらい。

「あいつも雪ノ下さんと付き合い始めて、一層丸くなりましたよ。殆ど怒らなくなりましたし、いつも上機嫌だし」

「あ、あはは……それは良かったかな」

それはおそらく、私と一緒にや無いからだと思うなあ。

私といると気苦労が絶えない。頭とか胃が痛くなるって景虎も言っていたし、上機嫌なのは自由を取り戻しているからなんじゃないだろうか。

「それ以外にも、よく雪ノ下さんの話もしますよ。惚気話するなって、ぶん殴ってやりましたけど」

くつくつと笑いを噛み殺しながら、哲平くんはそう言った。

一体何の話をしているんだろう。興味半分、不安半分といったところだ。気になるけれど、その一步が踏み出せそうにない。

それを察したのか、はたまた話すつもりだったのか、哲平くんは続ける。

「九条ってあんなだから、雪ノ下さんに何を言ってるのか大体想像つきますけど、それでも九条は九条なりに雪ノ下さんのことを好きだっ
て思ってますよ」

「?どうしてそう思うの?」

私達は傍目から見れば、カップルらしい行動はとってはいるものの、景虎の態度は雑ではないけれど素っ気ない。実の話、友達から景虎と本当に好き合っているのかと訊かれたことも数度ある。

なのに、何故彼はそう言い切れるのだろう。

「九条のやつは、嫌ってたり、興味ない奴には本当に適当なんですよ。それこそ目も合わせてくれませんし」

「……それって、経験談?」

「そんなところですよ」

そう言った後、哲平くんは深く息を吐いて、肩を落とした。

「つたく、あーあ、羨ましいいつたらねえな。なんで毎回毎回俺ばかりこんな役回りさせられるかねえ。そろそろ、俺にもお鉢が回ってきてもいいと思うんだけどなあ」

思ったよりも結構苦勞しているらしい。

毎回と言っている辺り、景虎の事で哲平くんは色々と苦勞をかけさせられてるみたい。

……でも、その理屈で行くと、景虎って高校のときはそれなりにモテてたんじゃ……。

「ひよつとして、景虎って鈍感だったりする？」

「鈍感っていうよりは、興味ないんですよ。相手がどう思ってるかなんて。なのに、それが妙に女子にモテて……それで毎回俺が取り継ぐ羽目に……なのに、九条のやつはどう言っても通じないし……オブラートに包んで断る方の身にもなって欲しいですよ……」

……今の景虎からは想像も出来ないような話だ。

少し前に総武高校に景虎がいたら、なんて話をしたけれど、その時の景虎じゃ取り付く島もないかもしれない。話を聞くとか聞かない以前に『興味がない』っていうのはどうしようもない。景虎は初対面でも、私に多少なり違和感を感じていたと言っていたし、そうなる対人関係を築いていくという点では、比企谷くんと同等かそれ以上の難敵になるかも。

「まあ、雪ノ下さんは別でしょう。ちよつと普通のカップルとは違う感じもしますけど、お似合いだと思います」

「嬉しいこと言ってくれて、ありがとう。お礼と言ってはなんだけど、そんな哲平くんには静ちゃんを紹介してあげるよ」

「何故、そこで私の名前が出てくる。礼をするなら自分でどうにかできらるだろう」

「えー？多分、哲平くんには一番良いお礼だと思うんだけどなあ……さつきからチラチラ静ちゃんの方見てるし」

「また根も葉もない事を……哲平くんと言ったな。怒っても構わん。こんなふざけた事を言う奴には」

「い、いやあ……そ、その、全然嘘じゃないです……ね」

僅かに赤くなつた頬をかきながら、哲平くんはそつぽを向いた。

……そういえば、静ちゃんみたいなのがタイプな景虎のお友達がいるって言つてたけど……もしかしてこの子の事なのかな？

横目でチラチラと見ていたのは確かだったけど……これはいよいよ静ちゃんにも春が来たのかな？面白そ……じゃなかった。友達だし手を貸してあげなきゃ！

「良かったねー、哲平くん。静ちゃんは今絶賛彼氏募集中だから、立候補したら、チャンスあるかもよー？」

「え？マジっすか。じゃあ、立候補しますー！」

「待て待て。陽乃の言葉を真に受けなくてくれ。君とは一回りも違うんだぞ？」

「寧ろ大歓迎なんですが」

「え？」

「え？」

哲平くと静ちゃんは二人揃つて、間の抜けた声を上げた。静ちゃんは予想外の答えから、哲平くんは問題があるのかと首を傾げた。

「あはは、息びったり。お似合いなんじゃない？」

「からかうな、陽乃。笑い事じゃないぞ」

「いつもはあんなに早く結婚したいってー」

「わかつたわかつた！さっきの事は謝る。だからそれ以上は言うな！」

慌てふためく静ちゃん。うん、これがいつもどおりな感じがする。

私が静ちゃんに遊ばれるのなんて、面白くないし、おかしいもん。

「君もだ。本気にすると、後で痛い目を見るぞ」

「は、はは、なんとなくそんな気がします……」

ジロリと睨まれて、たじろぐ哲平くんだけど、ポケットから紙を取り出して、すらすらと何かを書き始める。

そしてそれを書き終えたとき、哲平くんは静ちゃんに向けて、差し出した。

「……これは何かね」

「俺の連絡先です。暇な時でいいんで、どっか遊びに行きましょーう」

「はあ……君は人の話を聞いていなかったのか？陽乃の冗談に付き合う必要はないんだぞ？」

「俺は本気です。静さんが良いなら、よろしくお願いします」

席を立って一礼した後、哲平くんはそのままお店を出て行ってしまった。……友達を置いて。

「行っちゃったねー。どう？言い寄られた感想は？」

「どうも何もあるものか。確かに私は結婚したい。だが、自分よりも一回り下の男に手を出そうとは思わん」

「いいじゃん。愛に年の差なんて関係ないよ」

「……えらくマトモな事を言ったかと思っただが、その顔は完全に愉しんでいるな」

「うん。景虎は友達も面白いなーって」

なかなか個性的。静ちゃんとセットでなら、一緒にいても全然退屈しなさそうだった。

「やれやれ……恋を知れば変わるものもあるかと思っただが、これではあまり大差はないな」

「まあねー」

伊達に何年も仮面を被り、演じ続けてきたわけじゃない。

例え、恋を知っても、根本的な部分は変わらないと思う。それは私の本性であり、本質だから。比企谷くんが捻くれていても優しいように、ガハマちゃんが空気を読んでいても困っているときはお節介を焼こうとするように、静ちゃんがなんだかんだ言っても面倒見がいいように。私だって変わらない。

けれど、その大差のない変化でも、私にとっては大きな転機だ。

普通の人が生涯に何人も人を愛するとして、私はどれだけの人を愛する事ができるだろう。

はたして、心の底から愛おしいと思える人間は……。

私は知りたい。景虎の事も、私自身の事も。

お互いに知って、理解して、共感して、反発してー。

どうなろうと構わない。色んな感情をぶつけ合って、本性を剥き出しあつて、何もかも曝け出したい。

もしかしたら、その先で景虎に幻滅されるかもしれないし、嫌われてしまうかもしれない。

けれど、だとしても、私は景虎と一緒にいたい。

その為にはなんだってしようだなんて思うのは、私が私である所以だからなのかな？

外の景色を眺めながら、私はそんな事を思っていた時、不意に携帯が震えた。

side out

「はあ……暇だ」

棚の整理をしながら、俺はそう呟いた。

今は絶賛バイト中なわけなのだが、今日は珍しくほぼお客さんがいない。まあ、元々盛況してるわけじゃないが。

忙しいのは困りものだが、暇すぎるのも時間の経過が遅すぎて怠い。

店長は『暇だから任せるわ。完徹でネットゲして眠いから』といって、裏の休憩室で爆睡している。それでいいのかと突っ込みたくなるものの、あの人にはゲーム関連の無理は通じるし、俺もそれに甘えているときもあるので文句は言わない。もともと、忙しくなってきたら叩き起こす所存ではある。

しかし、いくらなんでも暇すぎるな。

時間の貯蔵ができるなら、この暇な時間を全てゲームする時間にあてがうのだが……誰か作ってくれねえかな。多分、ものすごい需要があると思う。

と、その時、店の電話が鳴る。

うちの店は喫茶店なので予約してくる人間なんて滅多にない。

電話が来るとすれば、業者さん辺りだと思うんだが……。

いつもなら店長が電話対応しているからなあ……店長起こすのも可哀想だ。留守つてことにしておいて、後で電話をかけ直すとも言っておくか。

子機を手にとつて、通話ボタンを押す。

「お電話ありがとうございます。こちらー」

『もしもし、景虎!』

「うおっ!」

気を抜いていた時に突然受話器越しに大声が聞こえたので、反射的に電話を投げ捨てそうになったが、電話越しに聞こえた声と名前の呼び方に相手がすぐに誰かわかったため、すぐに電話に耳を当てる。

「お前、陽乃か?」

『うん、そうだよ』

やっぱり……なんでまたバイト中に掛けてくるんだよ。

「あのなあ、今日はバイトあるから六時くらいまで相手は出来ねえつて言つたらろ?」

『それは知ってるし、今回は私の用じゃないの!』

「わかつたわかつた。わかつたから電話口で大声出すな。耳がキーンってなるだろ」

こいつにしては珍しい。大声を出す事なんてほぼ無い。っーか、なんか妙に焦ってるように聞こえる。

「お前の用じゃないならなんなんだ。暇つぶし、なんて言うなよ」

『だから違うつてば。これは私もちよつと予想してなかつたというか、寧ろ当然といえれば当然な事が起きたの!』

「なんだそりゃ?」

雪ノ下陽乃をして、予想外とは何事だろうか。未来予知レベルに自分の関わったこと、面白そうだと判断したことへの反応の速さは異常だというのに。

『えーとね。落ち着いて聞いて欲しいんだけど、実は』

と、其処で電話が切れた。

何やってんだ、あいつと思っていたら、電話のバッテリーが切れらしい。充電器のコンセントがしっかり刺さってなかったせいで、全く充電出来ていなかったようだ。はあ……また何か雪ノ下陽乃に文句を言われそうだ。結局、何が言いたいのかも聞けずじまいだったし。

電話を改めて充電器に挿し、さっきまでと同じように柵の整理やら、掃除を再開しようとしたその時、入り口のベルが鳴った。

「いらっしや……っ？」

これである程度、暇が潰れるな。なんて考えながら、そちらを向くと、そこには予想外の人物が立っていた。

言葉を失う、俺の視線の先にいた人物。それは――。

「お久しぶり、といったほうがいいのかしら？ 九条さん」

雪ノ下母、その人だった。

必ずしもボスが立ち塞がるとは限らない

入ってきた客の顔を見て、俺は無意識に息を飲んだ。
何を隠そう、そこにいたのは少し前に会った雪ノ下陽乃の母、その人だからだ。

あの雪ノ下陽乃さえも下手に出る、雪ノ下陽乃よりもタチの悪いその母。

直接会話したのは数度で、会ったのも一度きり。

だからこそその恐怖がある。俺は雪ノ下陽乃の事以上に、その母の事は全く知らない。雪ノ下陽乃が口にしてきた事だけだ。そしてその情報だけで行くと、今俺一人で雪ノ下母と邂逅するのはマズい。先程の電話、雪ノ下陽乃の焦燥とこのタイミングでの登場は、つまり雪ノ下母が雪ノ下陽乃に俺のバイト先を伝え、そして現れたということだろう。

やっべ……超逃げたいんだけど。

そう思う心をなんとかねじ伏せ、完全接客モードで、知らんふりをして話しかける。

「いらっしやいませ。お一人様で宜しいですか？」

「ええ。他の者は外で待たせています。ここへ入店するのは私だけですよ」

「畏まりました。では、お席へご案内します」

「もし良ければ、あちらの窓際に座っても良いかしら？」

「はい」

予想外に、雪ノ下母は普通に俺と言葉をかわす。てつきり、雪ノ下陽乃の如く、来た瞬間に無理矢理お付きの人にでも連行されるのかと思つたら、そういうわけでは無いらしい。

窓際の席へと案内し、机上に置かれているメニュー表を開こうとした時、雪ノ下母の口が開かれる。

「九条さん。少しお時間をいただいても宜しいかしら」

……おかしい。

今、この人は少しの間だけ俺の時間をくれと問いかけてきているは

ずだ。

だというのに、何故それが疑問系ではなく、俺が肯定することを前提としているような、そんな有無を言わせないものに聞こえたのだろうか。

断るのはとても簡単だ。何せ、今日は俺と店長しかいない。シフト的にいないわけでは無いのだが、来ても後一時間後だ。それだけの時間があれば、雪ノ下陽乃はここに来るだろうし、その間に色々対応策を練られるはずだ。

よし、と思つて口を開きかけたその時、休憩室のある通路の方から誰か出てくるのが見えた。

そこにいたのは、本当なら一時間後に来るはずの今日のシフトメンバー。

なんでよりもよつて、今日はそんなに早く来ているのか。ひよつとしたら、店長が念の為と思つて声をかけた可能性もあるが……今の俺にとつてありがた迷惑だ。

「九条さん？」

「大丈夫……みたいです」

「そう。それは良かったわ」

にこりと微笑んでそう言う雪ノ下母。はたして何が良かったのか。言うまでもない。

まだ殆ど言葉を交わしていないのに、主導権を握られてしまつていた。流石は雪ノ下陽乃の母と言つたところだろうか。

取り敢えず、向かいの席に座るものの、ものすごく居心地が悪い。というか、辛い。

「さて………九条さん。私が貴方とこうして話す場を設けた意味はわかりますか？」

「……いえ。思い当たる節がありません」

これは本気だ。俺は雪ノ下母と話す理由として思い当たる節が見当たらない。いや、無くもないか。俺と雪ノ下陽乃の関係についてと仮定したのなら、見当はつく。

「そうですね。では、私の口から言わせてもらいます。貴方と陽乃の

事です」

まあ、その通りだろうなと内心で納得した。理由なんてそれぐらいのものだろう。

「貴方と陽乃。率直に言うところのような関係ですか？」

「それはまあ、以前も言いましたけど、恋びー」

「違いますね」

俺が言い切るよりも先に、雪ノ下母はそれを否定した。

息が詰まる、というのは今の俺のような状態を指すのだろうか。予想外の方向から、急所を穿たれ、俺は目を見開いた。

そして俺が言い訳する間も無く、雪ノ下母は捲し立てる。

「貴方と陽乃は、確かに第三者の目から見れば、仲の良い恋人同士に見えるかもしれませんが。多くの者は肯定するでしょう。ですが、私の目には、貴方達が恋人関係には映りませんでした……それが何故か、九条さんにはわかってらっしゃるかしら？」

「……そもそも、見る人間次第で見えてくるものは違うと思います。少なくとも、俺にはわかりません」

「模範的回答ですね。お教えしましょう。貴方も、陽乃も、お互いの想いが一方通行なのです。通じ合っているようで、決定的にずれている。それが今の貴方達。貴方が咄嗟に嘘を吐いた時、陽乃が驚いたのが良い証拠でしょう」

……雪ノ下母の言っていることは半分わかるが半分わからないと言ったところだ。

元々、俺達には利害関係というものがなかった。

雪ノ下陽乃に利用されるだけの存在であつたはずの俺は、この長い付き合いを通して、少しはマシになったかもしれない。

だが、そうだとしても、所詮俺は雪ノ下陽乃に寄ってくる男達を追っ払うための存在。それ以上それ以下でもないし、雪ノ下陽乃が飽きれば終わる。当然、意識の違いはあり、想いにも差や方向性の違いが見られる。

そして分からないというのは、どうにも雪ノ下母の言いたいことが少し違うような気もするということだ。

「……仮に俺が陽乃と恋人じゃなかったとして、その時はどうするつもりですか?」

「どうもしません。今まで通りの事を、今まで通りにするだけです」
その今まで通りつてのが、猛烈に気になるんですが。

「ただ、あの子は将来的に雪ノ下を背負っていく人間ですから、火遊びをしてもらっては困ります。あの子にとっては遊びでも、それが後々自らの首を絞めかねない事になりかねません」

「はあ」

成る程ね……まあ、そういう風にとられてもおかしくはないか。

理由がちと気に入らないが、それはそれ。雪ノ下のお家事情を俺は全く知らないの、口を挟めることじゃない。

「それに婚約者候補も何名かいます。生半可な気持ちで陽乃と一緒にいられては困るのです」

「まあ……確かに。でも、その婚約者とやらが嫌だから、俺みたいなのを必要とした可能性もあるんじゃないですかね」

雪ノ下陽乃は、そういった決められたものを享受するのが嫌な人間だ。自分にとってはさして重要ではない事に関しては譲ってきたのだろうが、将来添い遂げる相手くらいは自分で選びたいんだろう。だから、俺を使って時間稼ぎもしているのだと思うが……しかし、それはそれで本末顛倒なんじゃないのか?

「だとしても、何処の誰とも分からないような相手を選ばれるわけにはいかないでしょう?」

「……それはその辺のごく普通の中流家庭の人間だと困るって事ですか?」

「ええ。あの子は優秀な子です。相応しい相手を見つかる事が出来れば、輝かしい未来が待っているでしょう」

その相応しい相手っていうのは、家柄と能力だけの話なんじゃないのか。

何一つ、雪ノ下陽乃の意思が入り込む余地はないんじゃないのか。

確かに雪ノ下陽乃は優秀だ。

俺が出会ってきた人間の中で、誰よりも才能に溢れ、優れた容姿を

持つ、聡明な女性だ。

だが、それ故に決められたレールの上しか歩けないというのなら、それ程馬鹿げた話もない。可能性に溢れているはずのあいつが、誰でもない自らの親によって、その可能性を閉ざされているだなんて。

そんな未来は間違っている。

世間にとつて、雪ノ下にとつてはそれ程素晴らしい事はないのかもしれない。

雪ノ下陽乃がその才を十全に振るうのだから。間違っても、悪い方向には働かないはずだ。

だが、雪ノ下陽乃はどうなる。

そのままいけば、あいつの心に平穏なんてない。

何処にいても仮面を被り続けて、誰の前でも求められる人物を演じる。

そんな事をしてしまったら、雪ノ下陽乃は本当に自分を見失ってしまう。それじゃあ、殆ど人形と変わらない。ただ望まれるだけのモノを演じるだけの。

「……わかりました。前は騙してて、すみませんでした」

「いいえ。わかっていただければそれで」

「改めて、俺から陽乃に結婚を前提に交際をしてもらえるか訊いてきます」

「それはどういったおつもりですか？」

「どういうも何も、言葉の通りです。生半可な気持ちで駄目だっというのはよくわかりました。俺も腹を括ります。あいつが良いと言ってくれるなら、俺は何処へだっついていけますよ」

覚悟が足りていなかった。

そういうのなら、俺も人生丸ごと雪ノ下陽乃にくれてやる。

出会った頃の気持ちなんぞ、今はどうでもいい。そんなものは一月も経てば変わるといふものだ。

目を重ねていけば、もっと変わるはずだ。

少なくとも、今の俺にとつてはここで退いて、雪ノ下陽乃の心を失わせるくらいなら、俺の人生を捧げて、今の雪ノ下陽乃のままです。

てくれた方が遥かに良いという事だけだ。

「断られるかもしれないでしょう。今までの子は例外なくそうしてきました」

「それはいいですよ。陽乃の意思でなら、どういう選択をしようとも、俺はそれを受け入れます。その時は好かれるように努力するだけです」

一体何をどう努力すれば、雪ノ下陽乃に好かれるかなんてわからない。でも、今は比較的良好な関係を築けていると俺は思っている。勝手な勘違いかもしれないが、雪ノ下陽乃が時折見せる本当の顔は、俺に対して一定以上の信頼を置いてくれているからこそだと。

「ただ、陽乃の事を何も知らない、外面だけを見ただけであいつを評価する奴には絶対に負けるつもりはありませんし、負ける気がしません」

「では、九条さんは陽乃の事をどれだけ知っているのかしら？」

「なんでも……なんて、言えたら良いんですけど。俺も陽乃の事を知ってるのは少しだけです。あいつは自分の事を知られるの嫌がりますから」

そう。俺は雪ノ下陽乃の事を何も知らない。あと三ヶ月もすれば、一年も経つというのにあまりにも知らなさすぎる。

だが、それでも俺はその辺の奴よりも雪ノ下陽乃の事を知っている。

傍若無人で、自己中心的で、何よりも愉しさを優先し、その他の事なんてお構い無し。

けれど、自由きままに振る舞う中にも、脆く弱々しい一面があることも。ただ、演じる事で隠し、秘めていることも。案外愚痴が多いということも。割とつまらない事で怒りやすいことも。大好きな妹に少しだけ嫉妬している事も。本当の笑顔は俺ですら見惚れるほどに可愛いということも。

俺が数ヶ月もの間、雪ノ下陽乃の隣で見てきた事は、決して無意味なものじゃない。

雪ノ下陽乃が九条景虎を知っていくように、九条景虎も雪ノ下陽乃

を知っていく事ができた。

互いに踏み込もうとしたから、他の人間よりも互いの事を知った。理解しようとしたから、理解できることもあったし、出来ないこともあった。当然だ。俺も雪ノ下陽乃も人間なのだから、必ず食い違う部分もある。

それでも、俺は雪ノ下陽乃以上に、長く付き合っただけじゃない。それを他に知らない。

そういった意味も含めるのだとしたら、俺はー。

「……そうですか。貴方の意志は、私が思う以上に固いようですね」

「はい。お母様にどう言われようが、俺は陽乃に」

「では、早々にお願ひします。何事も早いに越した事はないでしょう」

「言われなくても……はい？」

「どうかしましたか？陽乃の元に向かうのではないのですか？」

「あの一、俺が言うのもなんですけど、止めないんですか？」

「ええ。止めませんよ。殿方が覚悟を決めて、ましてや親の前であれだけの啖呵を切ったのですから。その邪魔をするほど無粋な事はないでしょう」

……んん??

いや、言ってる事は悪い事じゃないとは思っただけだね。

なんていうか……さつきまでの流れだと完全に阻止して来そうな感じでしたよね。実際、俺がこのまま雪ノ下陽乃に会えば、適当に口裏合わせで乗り切ろうと画策する可能性もあるわけだし。

「ごめんなさい。ハーブティーをいただけないかしら」

雪ノ下母は俺にはなく、あえて後から来ていた従業員に注文を頼み、こちらに向き直ると、不思議そうな顔をする。

「なにか？」

「え、あ、いや……その、ですね」

さつきと雰囲気全然違いますか。

それをどうやって、遠回しに伝えようかと思いついてたが、それは雪ノ下母には伝わったらしく、口を手を当てて、くすりと笑った。「驚きましたか？」

「はあ……それはまあ」

「そう。それは良かったわ」

「え………何が？」

「九条さんだったら、私を見た途端に警戒するものだから、つい柄にも無いことをしてしまったわ」

全く話の流れが掴めないんですが………つまりどういう事だつてばよ。

「陽乃の言っていた通りの方で良かったわ。もし違ったら、それこそどうしたものかと考えていましたから」

「あの……お母様？さつきからどういう事ですか？俺に用があったんですよね？」

「ええ、そうですね」

「俺と陽乃が恋人関係じゃないのも知ってるんですよね？」

「ええ。もつとも、その点に関しては以前お会いした時にわかった事ですけれど」

すつと細められた目は『娘が親を謀るなんて百年早い』と言わんばかりだった。あの時、俺は俺でも驚くくらいに冷静で、それでいて至極当たり前のように振舞っていたつもりではあったが、それをこの人はすぐに嘘だと見抜いたらしい。流石雪ノ下陽乃の母である。

「ここに来たのはその嘘を見抜いていたから、別れさせに来たとかそういうのじゃないんですか？」

「もちろん、そのつもりでしたが……それは先程も言ったでしょう？生半可な気持ちで娘と交際しているというのは雪ノ下の家以前に私が許容しません。いくら見合いや男性からのアプローチに対する牽制だとしても、それでは後々困るのは陽乃自身なのですから」

「あの、なんか、すみませんでした」

「いえ、九条さんが頭を下げる必要はありません。言い出したのがどちらで、主導権を握っていたのもどちらであるのかは見当はついていきますから」

そういう雪ノ下母の背後の空間が一瞬歪んで見えた。もうやだ。雪ノ下って怖い。妹ちゃんを呼んでくれ。まだ一番マシだ。

「ですが、そうなってしまった一端も私達にあるわけですから、それについて陽乃に口を出すつもりは毛頭ありません。ただ、私が確かめたかったのは九条さん。貴方の意思です。もしも、無理矢理その関係を陽乃に強要されているのが確認出来たなら、それはこちらだけの問題で解決しません。他の第三者が関わってきますから、陽乃に辞めさせるつもりでした」

「……だから、あんな言い回しをして、俺の真意を聞いたかったって事ですか？」

「ええ。下手に問い詰めるよりも、九条さんが逃げられる合法的な理由を作り、それに乗ったなら、無理矢理偽の恋人関係を強要されたとわかりますから。最後の方は少し楽しかったのも事実ですけれどね」

……ダメだ。この人やっぱり雪ノ下陽乃の母親だ。最後の方楽しかったからやってただけだよ。デフォルトが妹ちゃんの方で時々雪ノ下陽乃になっちゃやう。それもなっちゃいけないタイミングで。

「ですが、貴方からの答えは、これから本当の關係にする事……つまり、貴方自身が陽乃との恋人關係を望んでいると解釈しました。……違いますか？」

「違くは……ないです」

ただ、始まりは雪ノ下母の言う通り、強要されたものだった。

それは別段伝えなくていい事であるが……もしかして、いや、もしかしなくても俺嵌められたんじゃないか？

雪ノ下母の用意した逃げ道というのは、俺にとってはとても素晴らしいものだった。雪ノ下陽乃に責められない、俺が被害者として終わらせる事のできる。謂わば戦いに負けて勝負に勝つというやつだ。あくまでも雪ノ下母の提案に便乗した形になるわけだから。それならそれで雪ノ下母も良かったんだろう。

けれど、俺はそれを拒んだし、それなら本物になると宣言したわけ
で。

「あれだけ男女交際を煩わしがっていた陽乃が、初めて私達よりも優先した方だから、さっきの言葉を聞いたときは安心しました」

そして覚悟を決めちゃったわけなんだ。雪ノ下母の思惑通りに。

「じゃあ、家柄とかの話は……」

「それは婿養子に来ていただければ、家柄なんて関係ありませんから」
それに、と雪ノ下母は付け足す。

「家柄、という点で言うのでしたら、貴方は不足ないはずですよ、九条さん」

「……そうですね」

無意識に、返す言葉への熱が失われていた。

やはり、この人は知っている。いや、何故知らないと断じていたのだろう。雪ノ下陽乃が偶々知らなかったから、その母も知らないかもしれないとそれに縋っていただけだ。

「お母様は……静羽は元気にしている?」

「……お袋の事を知ってるんですか?」

「知っているも何も、私と静羽は同窓生よ?」

……何だつて?」

この人とお袋が……同窓生!」

「……マジっすか」

「本当の事よ。あの頃はお互いに幼かった、とでも言えばいいのかしら。二人で色んなことをしてきたわ」

懐かしむように言っただけなのに、この雪ノ下母と俺のお袋。雪ノ下陽乃に等しい存在が二人いて、かつ何かをして回っていたというのなら、その学校もう世紀末なんじゃないですか。どう考えても、この人が雪乃ちゃんのような立ち位置でお袋を止めていたという図が想像出来ない。

「だから、本当の事を言うと、九条さん……いえ、景虎さんと会うのはお正月の時に三度目なのよ。生まれて間もない頃に一度。それと静羽のお父様……貴方の祖父にあたる人の還暦のお祝いの席でね」

爺さんの還暦祝い……ってなると、小学二年生ぐらいの時の話か。

確かにあのときは家族以外の人間が大勢いた。うちの爺さんは大地主……って程ではないが、それなりだったし、結構交友関係も広いとか言ってた気がする。高校時代はちよくちよく偉そうな人が来て

たし。

「二回目に会った時、貴方とある約束をしたのだけど、覚えているかしら？」

「……すみませんが、全く。爺さんの還暦祝いの時に誰がいたかも覚えてませんし……強いて言うなら、他にも何人か子どもがいたくらいで」

いくら祝い事と言っても、俺にはあまり関係なかったし、飯が旨かったなっていうのが一番。どうやって暇を潰そうかって思ってたのが二番目ぐらいに覚えてる事だ。うろ覚えで何人か他にも子どもがいたのを覚えている程度。それ以上は全く覚えていないし、雪ノ下母がその場にいたというのもしらない。

「そう……残念ね。私はすっかり覚えていたのよ？初対面で私に向けて『おばさん』って、言ったのは貴方ぐらいだったから」

「本当にすみませんでした！」

覚えていない。覚えていないが、子どもながらに俺はとんでもない発言を雪ノ下母に繰り出していらしい。

気にしてないように微笑んでいるんだが、何故だろう。プレッシャーが……。

これだけ若々しい見た目を維持しているということは数年前はもつと綺麗なはずだ。それなのにおばさんはない。いくら小学二年生でもお姉さんくらいは言えよ、昔の俺。

「そ、それで、その約束というのは……」

「それはー」

雪ノ下母が口を開きかけた時、着信音が鳴る。

俺ではなく、雪ノ下母のものらしい。バッグから携帯電話を取り出し、その場で数度言葉をかわすと、携帯電話を切った。

「あれだけ言っておいて、やはり心配だったのね」

「どうかしたんですか？」

「ごめんなさい。陽乃も来たようですから、私はこれで失礼します」

「陽乃が？何故？」

「それは本人に確認してみるといいわ」

外を見るように促され、そちらみると、そこには雪ノ下陽乃とそれをなんとか押さええている感じの雪ノ下の使用人というかボディガードみたいな人がいた。ここから見ても、雪ノ下陽乃のかつてないほどの焦りが伝わってくる。

「陽乃に何言っただんですか？」

「あら、特に何かを言っただけではないわよ。……ただ、あまりおいたが過ぎるようなら、私も見過ごせないと言っただような気はしますけれどね」

……それがあの焦ってる理由か？だとしたら、一体以前どんな説教の仕方をされたんだ。

ともかく、これ以上雪ノ下陽乃を心配させるわけにもいかないし、さっさと行くか。

未だ暇してるバイトの子に謝りを入れつつ、俺は店外に待つ雪ノ下陽乃の元に向かった。

「はあ……まさかあの時の冗談がこんな形で返ってくるなんてね。それに雪乃ではなく、陽乃だなんて……世の中何が起こるか、わからないものね。静羽」

店外に出た俺は、一直線に雪ノ下陽乃の元へ……向かう前にあちらが俺が出てきた事に気づいたらしい。雪ノ下陽乃はこちらに向けて駆けてきた。

「景虎っ！」

「おう。さっきの電話ぶり……とと」

飛び込むように抱きついてきた雪ノ下陽乃をなんとかバランスを崩さないように受け止める。

「大丈夫!?お母さんに何もされてない？」

「何もされてねえよ。お前は自分の母親の事をなんだと思ってるんだ」

「だって、お母さんが自分から会いに行くなんて言うから……絶対景虎に何かすると思ったんだもん」

「それですつ飛んできたのか?可愛いところもあるじゃねえか」

俺がそう言うと、雪ノ下陽乃は顔を真っ赤に紅潮させて、一步下がりを、鳩尾を殴ってきた。

ほうほう。今わかった事だが、どうやら素でやった事に対する茶化しには弱いらしい。そしてそれで恥ずかしそうにしているのも作つてる時よりずっと可愛いということもわかった。後、照れ隠しで鳩尾はやめような?普通に痛いから。

「ま、本当に陽乃のお母さんと話したただけだ。他には何もしてねえよ」

「じゃあ、話したって何を?」

「今までの事とか……後、これからの事とか。偽の恋人関係ってバレてみたいだしな」

「……そっか。そう、だよね……」

雪ノ下陽乃は視線を下に落とす。

以前の時に、バレている気はしていたんだろう。雪ノ下陽乃が母を『自分よりも怖い』と嘯いていたのは、自分が怖いと思っっていることの証左だ。それがどういった経緯からなのかはわからないものの、雪ノ下陽乃が、俺と雪ノ下母が話す事に焦り、こうしてこの場にまで現れたのは嬉しくもある。雪ノ下母も心配していたと言っていたし、それが本当なら存外雪ノ下陽乃は俺を普通の友人よりは少し上くらいには見てくれているかもしれない。

……なら、言うチャンスは今が良いのかもしれないな。

「それで、だな。陽乃。その事で一つ言っておきたい事があるんだが……聞きたいか？」

「……あんまり聞きたくないけど、いいよ。どうせ、いつかは聞かないといけない事だしさ」

あまり乗り気でない様子の雪ノ下陽乃を察するに、俺がこの関係を終わらせようとしているのをなんとなく感じ取ったんだろう。本当に聴く、鋭いやつだが、俺がしたいのはそれだけじゃない。

いつか、雪ノ下陽乃はいつた。

本物は何かと。

あの時、俺は持論を述べ、それらを踏まえて雪ノ下陽乃は俺を『本物』だと答えた。

だったら、俺にとっての『本物』はなんだ？

何ものにも代え難い。唯一にして、絶対のもの。

考えるまでもない。悩む必要なんて初めからない。

俺にとつての『本物』なんてものはもう手の中にあるんだから。

気苦労が絶えず、それと同じくらいに愉しさに溢れた日々。

文句を垂れながらも、適当にリスクリターンを吐き出しながらも、

俺が雪ノ下陽乃と一緒にいた理由。

ずっと勘違いだと、気のせいだと誤魔化し続けてきた。それだけはあり得ないと。

何故そう思っていたのか。そう思おうとしていたのかは今ようやくわかった。

どんなお題目を並べても、俺は雪ノ下陽乃との繋がりを断ちたくはなかったんだ。

雪ノ下陽乃は飽きれば捨てるかと先に俺に告げた。だから、俺はそうならないように気持ちを逸らし続けてきた。他でもない自分自身を。

だが、もういい。

偽物を続ける必要はない。俺が欲しいのはそんなものじゃないはずだ。

「陽乃。この中途半端で、ふざけた関係。俺は結構好きだったぜ」

「……………」

「でも、もう終わりだ。バレちまつたら、ただの三文芝居だ。この関係に何の意味もねえよ」

「……………」

雪ノ下陽乃は答えない。ただ俯いたまま、肩を震わせていた。

触れれば、脆く崩れてしまいそうなその姿を見て、ああ、と安心してしまう自分がいた。

雪ノ下陽乃はこんなにも弱く、儂い女性なのだと思われた事への嬉しさ、その姿を晒してくれた事への安心感。

だからこそ、踏みだせる。

これで強がりも何もなく、いつも通りに対応をされていたら、きっと俺はこの場でしようなどとは思わなかったはずだ。俺は周りが思うよりもよっぽどヘタレだから。

「陽乃。俺はお前が好きだ」

一方的に宣言したのち、俺は俯いた雪ノ下陽乃の顎を右手で上げて、その唇を奪った。

ようやく二人は本物になる

もう、終わりだと思っていた。

一番知られちゃいけない人に知られてしまったから。

景虎が逃げるための最高の口実を持って、お母さんが景虎に会いに行ったとわかって、なんとかその前に妨害しようとした。

景虎は煩わしく思っていたはずだ。今の関係は楽しいし、自分からやめることはないと言ったけれど、それでも私がかけてきた負担は大きいと言っていた。

だから、景虎が出てきた時、もう終わったと思っていた。

景虎が言いたいことがあると言った時、初めて何も喋らないで欲しいと、そう切に願った。

けれど、そう言ってしまうと感情に流されてしまいそうだったから、理性を総動員して、私は景虎の話聞くことにした。

景虎が話すたびに、心が壊れそうだった。

その一言一言が私達の関係を終わらせるための、破滅の唄に聞こえたから。

かろうじて涙をこらえたものの、体の震えがどうしても止まらな
い。

怖い。

私の心の中を埋め尽くしたのは、その感情だけ。

今までどれだけの人に恐怖を与えてきたのか、その報いだともい
うのか。

ただ、私は恐かった。

このまま、景虎と赤の他人になってしまうことが。

ただの友人としてさえも、いられなくなるのが。

ようやく見つけた私の『本物』を失ってしまうのが。

だからー。

「陽乃。俺はお前が好きだ」

これは完全に不意打ちだった。

気づけば、景虎の顔が目の前にあった。

なんで? どうして? と理解しようとしても、全く理解できない。かつてないほどに混乱している私をよそに、景虎の顔が離れた。

「これが俺の本心だ、陽乃。俺にとつての『本物』はお前しかいない。偽物じゃなくて、本当の恋人になってくれ」

真摯な表情で景虎は言い放った。

その言葉を理解するのに私は十数秒の時間を要した。

未だ嘗て、私がこんなにも単純な事を理解するのに時間がかかったことはないかもしれない。

そして、景虎が私の反応の無さに首を傾げた所で、私は言葉の意味を理解した。

理解したと同時に、私が押さえ込んでいた全部の感情が一気に押し寄せてきた。

「っ……おいおい! なんで無言で泣くんだよ!? 嫌なら嫌って言えば!」

「へ?」

景虎に言われて気づいた。

私の頬に伝う涙に。

それは服の袖で拭いても、全然止まらない。とめどなく、ただただ溢れ続けてくる。

「あ、あれ? なんで止まらないんだろ?」

「そこまで嫌だったのかよ……これでも一世一代の告白だったんだが、苦すぎるな。好かれてる、なんて思ってたのはやっぱり自惚れか」

景虎は頭をガシガシとかいて、落胆したように言う。

そんなつもりじゃなかった。

私が泣いているのは嫌だからじゃないと思う。

「悪い。さっきのは聞いてなかったことにー」

「待ってー!」

だから、なかったことになんてしないで。

「違うの。これは、嫌だから泣いてるんじゃないの」

「嫌じゃなかったらなんなんだ? 嬉し泣きってか?」

どこか自嘲気味なのは、私が景虎の気持ちに気付けなかったよう

に、景虎も私の気持ちに気づいてくれていないからなのだろう。

そうだった。私達は、出会いが、関係が歪であったから、理解しようとする気持ちと理解されたいと思う気持ちが決定的に噛み合っていなかった。だから、肝心なところが分かり合えていない。

だったら、伝えないといけない。

雪ノ下陽乃の本心を。私の本当の気持ちを。

「私も……私も景虎の事が好きだから。偽物じゃなくて、本当の恋人になりたいから……私で良ければ、彼女に……うん。一生パートナーとして傍にいさせてください」

涙声で、とても雪ノ下陽乃らしくない言葉を持って、私は景虎に伝える。

きつと景虎にしか伝わらない。

私の本心。

他の人が見ようとしなかったものを、景虎なら見てくれる。

「……それは承諾してくれたって事でいいんだな？」

「……うん。私の『本物』も景虎しかいないから」

漸く止まりそうな涙を拭きながら、私は言った。

すると、景虎は小さく息を吐いた。

「告白したつもりだが、答えがプロポーズってのはどういう事だ？」

「あははっ、鈍いなあ、景虎は。わかるでしょ？ここまでくれば」

「……わかってるよ。……俺も陽乃と一生一緒にいたい。結婚を前提に俺と付き合ってくれ」

「はい……喜んで！」

応えると同時に、私は景虎の胸に飛び込んだ。

なんだか、そのままいるとまた泣いてしまいそうだったから。

とりあえず、嬉しさをそのまま行動で表現する事で、涙が出そうになるのを堪え……られなかった。

「まだ泣いてんのか？本当に俺の事好きなのかよ？」

「嬉しすぎて涙止まんないよ……どうしよう、景虎あ……」

「いや、知らねーよ。慰めるのも苦手なのに、嬉し泣きとかどう対処すりゃいいんだ」

なんて言いながら、景虎はそっと私を抱きしめてくれる。

ああ、やつぱり落ち着く。

こうやって景虎の温もりに包まれていると、私の中で張り詰めていたものが、弛んでいく気がする。

……なので、正直言おうと気持ちとは対照的に余計に涙が止まらないんだけど、今は別にいいかな。片手で数えるほどしか泣いたことのない私がこんなに泣くなんて滅多にないだろうし、今のうちにいっぱい泣いておこう。

そうして、少しずつ頭の中に冷静さを取り戻し始めた頃、ふと景虎は言う。

「……なあ、陽乃。いきなりだけどな。良い知らせと悪い知らせがある。どっちから聞きたい」

「良い知らせから聞きたい」

「今度の休みに親父に会いに行こうと思ってる。それで陽乃の事を親父やお袋に紹介したいんだ。将来の嫁さんって事で」

「でも、景虎ってお父さんとはー」

「そこは気にしなくてもいいさ。親父が何を伝えたかったのか、今の俺にはよくわかる。いい加減、俺も大人にならねえとな」

景虎は景虎なりに、自分の過去に決着をつけるつもりみたいだ。

私から見れば、景虎は十分に大人な気がする。

取り繕う事で、演じる事で逃げ続けてきた私なんかよりもずっと。

景虎は否定するかもしれないけれど。

「悪い方は？」

「それなんだがな……ちよつと顔上げて周りを見てみる」

さつきと打って変わって、どこか歯切れの悪い景虎に言われるがまま、顔を上げて周囲を見回す。

私の目に映ったのは……私達を囲む大勢の見物客に、お母さんや付き人、静ちゃん、景虎のバイト先の人がこちらの様子を誰に憚る事もなく、見ていた。

「もしかして……」

「全部見られてたってわけだ」

かあつと顔が真っ赤になっていくのが自分でもわかった。

こんな恋愛漫画やドラマにありそうな展開を道のど真ん中でした事じゃない。それを見られた事については、別に気にしていない。

けれど、私とは何の接点もない人も含めて、多くの人間に雪ノ下陽乃の弱々しい姿を晒してしまった。

その事がとてつもなく恥ずかしい。所謂黒歴史というものなのかもしれない。

景虎に見せるのは構わないけど、それ以外の人にあんな姿を見せてしまったのは、私の人生史上最大の失態だ。

「まあ、包み隠さず、これで晴れて公認のカップルになれたっつーことで納得するしかねえな」

「景虎は恥ずかしくないの?」

「恥ずかしいに決まってるんだろ。……まあ、陽乃を改めて俺の彼女だって豪語出来るようになったから、お釣りが返ってくるけどよ」
「ッ!」

今度は別の意味で顔が真っ赤になった。

なんでさっきの今で、景虎はそんなことを言ってしまうんだろう。

今の私は自分の感情が隠せない。地獄から天国へと落として上げられたからだろうか、あまりの感情の変化に対応しきれず、今は思った事がすぐに顔に出てしまう。

そもそもどうやって演じていたのか、考えてもわからない。

「今まで見たことないくらいだらしない顔してるな」

「仕方ないじゃん。全部景虎のせいだもん。責任とってよね」

「おう。任せとけ」

いつものようなやり取りでも、返ってくる言葉が違うだけで嬉しきがある。たったそれだけのことなのに、頬が自然に緩んでしまう。

……これ直るのかなあ。流石にこんな状態で大学に行くのは嫌なんだけだ。

この姿は景虎の前だけにしたい。

九条景虎にだけ、本当の私を、雪ノ下陽乃を知っていて欲しいから。
……なーんちやって。

「またにやけてんぞ。壊れすぎだろ」

「じゃあ、景虎が直してよ。壊したのは景虎だよ?」

「そう言われると返す言葉もねえな……取り敢えずもう一回キスしたら、一周回って直るんじゃないかねえか?」

「無理。絶対今よりも壊れる」

それこそ二度と薄っぺらい仮面さえも作れなくなりそう。

それはほんの少しだけ困る。景虎相手には必要ないけれど、他の人間関係には面白おかしく過ごしていくためにも必要なものだから。完全に壊されるとまた一から作り直さないといけない。

つくづくなんでもできると自負してきたけれど、景虎と出会ってから、自分にもできないことがあるんだ、と実感させられる。

でも、その時に感じるのはどちらかといえば発見に対する嬉しさと驚きみたいなもの、後ほんの少しだけ感謝。

周囲の人間とは違うと思いき知らされてきた私が、それを知ることでも変わらなないと実感できるから。

私だって、普通の女の子が一番良い。

長所があつて、短所がある。

誰かを好きになつて、普通に恋をする。

ちよつとしたことで一喜一憂する。

そんな普通の女の子に憧れていた。

だから――。

「ねえ、景虎」

「どうした、陽乃」

「ありがとう」

「?どういたしました?」

私の突然のありがとうに景虎は首をかしげるけれど、それでいい。

私の望みは景虎が叶えてくれた。些細だけど、一番難しかった願い。

私は今日、本当の意味で、雪ノ下陽乃になれたような気がした。

side out

陽乃と交際を始めてから数日後。

俺は千葉を離れ、東京の方に来ていた。

いや、来ていたというよりは『帰って来た』の方が正しいか。元はと言えば、根っからの都会っ子。東京生まれの東京育ちだったわけだから。江戸っ子ってのとはちと違うわけだが。

「ここに来るのも、随分久しぶりだな」

俺の目の前に立っているのは、この都内で一際目立つ巨大な武家屋敷。

ビルが乱立している中でこのクソ目立つ武家屋敷こそ俺の実家。どんな物好き野郎だどつつこみたいところだが、その辺は一応家庭の事情ってやつなのだ。

どデカい門の横にあるインターホンを鳴らすと、数秒置いて、「どちら様ですか」と男の声が聞こえる。

「バカ息子が帰ってきた。親父はいるか？」

『……す、少し待ってください』

少しばかり困惑した様子の声が聞こえた後、一分と経たずに門が開かれる。

そして黒いスーツを着た男が数人、駆け足気味に出てきた。

「も、もしかして、若様……ですか？」

「久しぶり、島さん。ちょっと用事があつて帰つて来たんだ」

俺がそう言うのと、全員顔を見合わせた途端、こちらに駆け寄ってきた。

皆、涙を流しながら、バカみたいにはしゃいでいる。

大の男がなにやってんだと思う光景だが、うちは元々そう言うところ

ろだ。親父を慕って集まってる奴らばかりだから、特に何もしていない俺にさえも、情が厚い。出て行く時は寧ろこの人達を振り切る方が大変だった。

「わ、若……ついに、ついに家督を継がれる決心がついたのですね……！」

「まあ、そんなところ。親父はいる？」

「玄二様ですか？今は書齋におられますが……」

「そっか。じゃあ、ちよつと行ってくるわ」

「行ってくるって……玄二様に会いに行かれるおつもりですか!?殺されますよ!?!」

「それはマズいなあ。今死ぬと泣くつつーか、どんな手を使っても親父を殺しに行きそうな奴が一人いるから、骨の二、三本で許してもらわないと」

「いや、そんな適当な……」

「そうですよ!あの加減てものを知らない人ですから、マジでやばいですって、若!」

本当。俺が今死ぬと何しでかすかわからないからなあ……あいつ。痛いのは慣れてるとして、殺されるのは勘弁してほしい。

……しようがねえ。覚悟決めていくか。

「よし。死なないように頑張ってくる。着いて来ないでくれよ」

パンと両手で頬を叩き、足を書齋へ向ける。

ひと睨み効かせておいたので島さん達は着いて来ない。

もちろん、怖いからじゃなく、昔からの名残だ。

俺がそうする時は譲ってほしいという合図をそうして出す。

だから、あの人は着いて来ないし、これは俺がけじめをつけなきゃいけない事だ。着いてこられると寧ろ困る。

「変わってねえな。この家は」

渡り廊下を歩いている時、庭を見てみるが、俺が家を出た時とほとんど変わってない。

何時もなら人はもつといるはずなのだが、誰ともすれ違わないのは出払っているからだろうか。まあ、なんでもいい。

書齋の前に立って、深呼吸をする。

前の時は頬骨にヒビが入ったんだっけか。顔も腫れたもんだから
転校するのが少し遅れた。

ノックは……必要ねえな。

「邪魔するぜ、おや……うおっ!?!」

扉を開けると同時、ものすごい勢いで何かが飛んできて、後ろの壁
に刺さる……つてドスじゃねえか!?

「てめえ、クソ親父!何しやがる!」

「うるせえ!そこにでけえゴキブリがいるだろうが!てめえが入って
きたせいで壁に余計な穴が空いちまったじゃねえか!」

「普通に捕まえろや!どこの世界にゴキブリ殺すのにドスぶん投げる
阿呆がいるんだよ!」

「ここにいるだろ!てめえの目はビー玉か!」

「耄碌したおっさんに言われたかねえよ!」

このクソ親父……あの時から何も変わっちゃいなかった。

ゴキブリにびびるこのおっさんが俺の父親であり、関東を中心に活
動する極道の親分。つまりはヤクザなのである。

そして俺はその息子。若と呼ばれているのもそれが関係している。

俺が唯一陽乃についていた嘘。貫けていた嘘がこれだ。

何せ、ガキの頃から息を吐くようについていた嘘だ。真実味もあ
るってものだ。

ティッシュ越しにゴキブリを包んでゴミ箱に放り込み、パンパンと
手を叩く。

「いい加減克服しろよ。それで極道の親分か」

「ああん、無理なもんは無理なんだよ」

どかっと椅子に腰を下ろし、親父は煙草に火をつける。

「……で?なんで帰ってきた。二度とツラも拝みたくねえって言った
のはお前の方だったはずだぜ、虎」

「よく覚えてんじゃねえか」

まだ俺が中学の頃。

その頃の親父は同じくらしい規模の組と揉めていた。

揉めてたつていっても、盃を交わそうとしたのを親父が蹴った。なんでも違法薬物をお菓子なんかに混ぜ込んで売ろうとしていたからだそう。親父はカタギを巻き込むのが嫌いなタチでそこからちよつとした抗争に発展。

息子だった俺も巻き込まれた。

だが、その点については何も思っちゃいない。

あの頃の俺はむしろ親父に憧れていた。

嘘をついていたのは親父がそう言えと俺に教えただけで、何人もの屈強な男を連れ、誰からも慕われていた親父は俺の目指す男そのものだった。

だから、拉致られた時も、俺がどうなったところで親父がこいつらをぶちのめすと信じていたし、相手の交渉に乗らないと確信していた。

けど、違った。

親父は交渉に乗り、何千万と入ったアタツシユケースを渡し、剩え命令されて土下座までした

違う。俺の目指した、憧れた男はそんな情けない奴じゃない。

結局、親父が時間を稼いでる間に相手の組は全滅。そのあと、本格的に親父は関東一の勢力になったわけだが、俺はそんなことなんてどうでもよかった。

家から飛び出した日もそう。

口喧嘩した拳句、『何時までもくだらねえプライドばっか守ろうとしてるから、てめえはガキなんだよ、虎』なんて言われて殴りかかったら、そのまま殴り飛ばされた。なんだかんだ言っただけで俺に一度も手を上げなかった親父が初めて俺に手を上げた日でもある。

あの頃、その言葉の意味を全く理解できなかったし、簡単にプライドを捨てる情けない野郎になるくらいなら死んだほうがマシとさえ思っていた。

それも高校で少し、大学で大きく変わったわけだが。

「親父。俺からあんたに言いたいことは二つある。一つ目はあの時の事について謝る。ごめんさい。二つ目はやっぱり家業は継げねえ

わ

「……一つ目はわかったけどな。二つ目はどういうこつた？そのツラを見る限り、あの時とはちつとは考え方が変わったと思ってたが……俺の勘違いか？」

「勘違いじゃねえよ……なんつーか、昔のあんたと同じだ。命張つても護りたい奴が出来た。そうになったら家業は継げねえよ。わざわざ危険に晒したくねえ。ただ、それだけだ」

「はっ。大した理由もなく、家業を継がせろだの継ぎたくないだの言うようならぶつ飛ばしてやろうかと思ってたんだけどな。ガキだガキだと思つてたのは俺だけだったか……ちよいと目を離れたうちにいい顔するようになったじゃねえか」

灰皿に煙草を押し付けて、親父は立ち上がる。

「前にも言つたがな。俺は無理矢理させる気はねえよ。組としちや、落第点の答えだが、男なら満点の答えだ。護りてえモンがあるのにも自分から火の中に飛び込むこたねえからな」

「……俺から言つておいてなんだけだよ。良いのか？」

「お前がそういう可能性も考えて、後釜は考えてんだよ。そりゃあ、お前が継ぐのが一番良いけどな。やりたくねえならやらせる気はねえな。それとも、殴り合いがしたいのか？今時拳で語り合うなんてのは古いぞ？」

「したいわけねえだろ。文字通り骨が折れるっつーの」

良くて五本か……悪くて両手の指じや足りん。マジで死ぬかもしれん。

「煙草吸うか？」

「何未成年に煙草勧めてんだ。馬鹿親父」

「何言つてやがる。てめえが若いのに煙草買わせてたのは知ってんだ。今更年期氣にしてんじゃねえよ。不良息子」

確かにあの頃は酒も飲んでいたし、煙草も吸っていた。今思えばなんともしよぼい反抗ではあるが、中学生なんだから仕方ないか。

「駄目だって。そういうの嫌いなんだよ、あいつ」

酒は良いが、煙草は駄目っていうのが陽乃のお願いだ。

命令ではなくお願い。

なんとというか、むず痒くはあるが、あいつが最初にしてきたお願いは割と現実的だった。

「女なんざ興味ねえって言ってたあの虎がねえ……一体どんな嬢ちゃんだ」

「親父に分かりやすく言うなら……母さんに近い」

「はあ？ 静羽にだあ？」

親父は間の抜けた声をあげる。いや、まあそういう反応になるわな。

「また凄えのに目をつけたな」

「親父も姓は知ってると思うぜ。雪ノ下だしな」

途端、親父は噎せた。

因みにこういう反応になるのをわかってあえて、煙草の煙を肺に入れた瞬間に言った。

親父は噎せ返った後、顔を真っ赤にしたまま、大笑いし始めた。

これは予想外だ。てつきり何か聞いてくるかと思っただのに。

「はははは！ 雪ノ下の嬢ちゃんか！ なんだ、結局落ち着くところに収まったって感じじゃねえか」

「ああ、約束だっけ。お母様方が勝手にした」

「そうそう。珍しく静羽が悪酔いしてな。勝手に決めちゃった。まあ、俺としちゃべっぴんさんを嫁にもらうってんならそれで良いと思っただから賛成したわけだが」

「賛成してんのかよ……まあ、結局その通りになった以上なんとも言えねえけど」

「つか、なんか乗せられてるみたいで腹立つ……！」

「しっかし、人間どう成長するか、わかったもんじゃないな。あの大人しそうな子が静羽みたいになるなんてな」

「大人しそう？ 昔はそうだったのかよ？」

「俺が見たときは集団にいるよりも一人でいるほうを好むタイプに見えたな。まあガキの頃の話だし、あの時はまだ小学生にもなっただったところを考えると人見知りの方が合ってるかもな」

「へえ……あいつが。……って、ん？小学生にもなつてなかった？あの時は俺小学二年だったろ」

「ん？ああ、そうだな。やんちや盛りで手を焼かされたもんだ。それがどうした？」

「なんで小学生にもなつてねえんだよ。あいつと俺は同じ年だぜ？」

「はあ？何言つてやがる。同じ年なわけねえだろ。お前と雪乃ちゃん
が」

眉を顰めて言う親父に今度は俺が固まる番だった。

へ？雪乃ちゃん？なんでそこで雪ノ下妹の方が出てくるんだ？

「親父。約束のこと、もつと詳しく教えてくれるか？」

「詳しくって言われてもよ。俺も静羽から聞いたただけだ。雪ノ下の女とは親友だし、お互いに男と女が生まれたから、いつそ婚約者にするかかってな。ただ、上の方は実家を継ぐから嫁ぐわけにはいかねえし、こつちも婿入りするわけにもいかねえってんで、妹の雪乃ちゃんになったんだよ。もつとも、お前は二秒で振ったけどな。『本ばっかり読む奴は弱いから興味ない』ってな具合にな」

てめーはサイヤ人か。

と言いたいところだが、昔の俺なので何も言うまい。

あの頃の俺は……よく覚えていないが、強いとか弱いとかそういう事をやたらと気にしていたと思う。だから何でもかんでも勝たないと気が済まないし、順位はトップしか興味ない。あんな小さい自分が親父に近づくにはそれしかなかつたからだ。

しかし……はあ、雪乃ちゃんねえ。

初対面でも全然似てないって思ったのは、実は初対面じゃなかったからか？つーか、あつちはその時の事を覚えてんのかな。覚えられてたら、次会つた時ものすごく気まずいんだが。

「あのな、親父。誤解があるから先に言つとくが、俺と付き合つてるのは雪乃ちゃんじゃなくて、その姉貴の方だ。名前は陽乃つてんだがな。多分つーか、絶対あいつと結婚すると思うから。お袋に説明しといてくれ」

「成る程な。お前の性格上、その方が納得出来るぜ。俺は雪乃ちゃん

の、それもガキの頃の顔しか知らねえから、また暇が出来たら連れてこい。歓迎してやる」

「あんたがそれ言うのと全然良い意味に聞こえねえよ。……またな、親父」

「おう。女にうつつ抜かして、学業を疎かにしたらぶっ飛ばすからな」
「……本当、そういうところ、ちゃっかりしてんな」

元より、そんな事にはならないはずだ。陽乃がいる以上、成績は絶対に落ちないだろうし、落ちたら落ちたで陽乃の方が怒るだろう。つくづく独占欲の強い奴だが、自分のせいで、というのが気に入らないらしい。なお、今までの人間は陽乃曰く『勝手に勘違いして自滅しただけ』との事でカウント外なんだとか。

「さてと、そろそろ帰りますかね。あいつがうるさくなる頃だし」
携帯を見て、陽乃からの着信が数件あることに思わず苦笑してしまう。

行く前に『ボコられるかも』なんて言ったもんだから、余計に心配させちまったか。

このまま電話に出るのも良いが……やめとこう。帰ってからの方が面白そうだ。

携帯をポケットに突っ込み、俺は帰路に着いた。

……余談だが、後で超怒られた。割とマジで。

エピローグ

ジリリリリリ。

仕掛けていた目覚ましは鳴り響き、意識を深い闇から一気に現実へと引き上げる。

微睡みながらも、右手で……止めようとして、右腕が動かないことに気づいた。

というか、身体に布団とは別の重量感と柔らかさがある。

まだ覚醒しきっていない思考で考えていると、もぞもぞと布団の中の何かが動き、中から手が伸びてくる。

それは俺の顔の横を通過すると、けたたましく鳴り響く目覚ましのスイッチを叩き、そのまま手を引っ込めた。

ここで問題が一つ。

俺は一人暮らしである。当然、この家には俺以外の人間が存在していないし、いるとしたらそれはもう不法侵入者と幽霊の二択。後者に關して言えば、そもそも手で止める必要はないので、必然的に前者になるわけだが、その前者とて、ただの不法侵入者ならば、一緒のベッドに潜り込んで寝る道理はない。

そう。ただの不法侵入者なら。

「……陽乃。なんで俺のベッドにいるんだ」

おそらく、布団の中に潜り込んでいるであろう人物の名を呼び、動く左腕で、布団を軽くめくる。

俺の予想通り、というか最早こんな事をするのは一人しかいない人物は、何故かよりも寄って俺の冬用のパジャマを着て、布団に潜り込んできていた。

「……眩しい」

まだ寝惚けているのか、陽乃はぐいっと掛け布団を引っ張り、潜ろうとする。

その様子は無防備なことこの上ない。

「朝だぞ、起きろ」

「…後、二時間」

「長えよ。行きたいところあるんだろ」

意識が覚醒してきたおかげで思い出した。

今日は、陽乃が行きたいところがあると言い、途中で合流するのも煩わしいから泊まらせて、とお願いされたんだ。

俺としては理性の方が危ないので、どうしたものかと考えていたが、上目遣いをお願いされたのでもう受けるしかなかった。それに、やる事はやってしまっているわけだし。

陽乃との交際がスタートして三ヶ月。

それまでに俺達の間ではいろんな事があった。

まず、陽乃。

実家を出て、一人暮らしをしたいという名目で俺の家に突撃してきた。無論、その目論見は雪ノ下母にあつきり見抜かれていて、半日もしないうちに連行。どういった経緯からか、一人暮らしをしている雪乃ちゃんのところに住むようになった。もともと、陽乃は頻繁に泊まりに来るし、雪乃ちゃんの方にも事情はあつて、住んでいると言つていいのか、怪しいところだ。

そして、俺も思春期の男。同棲なんて色々困ることしかない。

おまけに陽乃は『いつでもどうぞ』みたいな感じで、よく俺をからかってきていた。

それが一月を越える辺りで限界が来て、俺も陽乃も大人の階段を登ってしまったのである。

いや、しょうがないじゃん。いつもの陽乃ならともかく、付き合い始めてから、陽乃はでれでれだし、しおらしくなった時のギャップがヤバイ。ちよつと前までなら誰お前ってレベル。

そんな感じに大きく変わった陽乃ではあるものの、普段から常にと訊かれればそうではない。

学校にいる時は今までのように仮面をつけている。

それは完成度という面で言えば、以前よりも遥かに劣るが、それでも周囲の人間にはあまり感じ取られない程の些細な変化だ。

何でまだ演じる必要があるのか、それを問うてみたらー。

『本当の私を知ってるのは景虎だけでいいもん』。
だそうだ。

そっか、といつも通り返したものの、正直言って顔が熱くなった。よくもまあ、そんな恥ずかしいことを言えるなって思いた。

その分、二人きりの時は仮面は全く被ってない。思った事は言うし、感情も顔に出やすい。特にプラスの嬉しいや楽しいといった感情はわかりやすいことこの上ない。

だからだろうか。

友人達から俺もよく笑うようになったと言われた。

昔はともかく、今はかなり笑っていると思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしく、最近になって漸く普通レベルなんだとか。何をもつて普通なのかは知らんが。

「……ちゅーしてくれたら、起きる」

それ、普通は俺が言う側の気がするんだが。

しかし、それは冗談ではないらしく、陽乃は顔をこちらに向けた。もちろん、目は瞑っている。眠いんだろうし、なんかこう……雰囲気的に。なんだかんだ言つて、哲平の読み通り、陽乃はピュアな面もある。雰囲気とかは大切にするんだそうだ。

因みに余程の理由がない限り、これを断ると拗ねる。その拗ねたのがまた可愛いんだが、時間的に遊んでいるとマズいので今日は普通に応じることにした。

左腕を腰に回し、陽乃のお望み通り、口づけを交わす。

最初の頃は恥ずかしかつたものの、二桁に乗ると慣れたものだ。羞恥心なんて微塵もない。その代わり、日々充足感だけは募っていく。

……ヤバイな、俺。陽乃に対して、よく変わったって言ってるが、俺も相当変わったな。ちよい前なら絶対にそんなことは思わなかった。完全にバカツプル思考になつてる。

十数秒して、顔を離すと、陽乃が目を開ける。

「えへへ、おはよ、景虎」

「ああ。おはよう、陽乃」

おまけにこんな嬉しそうな顔をされると、なんとも言えなくなる。

「ところで陽乃。出来れば早く俺の上から降りて欲しい。背中が痺れ切らせて大変な事になってるから」

後、右腕も。

陽乃は体重的に軽い方だが、それでも一般的な女性の平均体重で何時間も人の上に乗っていたら、痺れも切らす。背中なんてもう殆ど感覚ない。

「……やだ、って言ったら？」

「一週間、俺の家を出禁にする」

「じゃあ、降りる」

言うが早いのか、陽乃はすぐに俺の上から降りた。

俺も上半身を起こそうと試みるものの、やはり動かない。もう少しは寝転んだままの姿勢を要求されるようだ。

それを陽乃も察したのか、ひよいつとしゃがみこんで、俺の頬を突いてくる。

何がしたいのか。おそらくは深い意味なんてなく、単に突いてるだけなんだろうが、男相手にそれをやる意味があるのだろうか。逆ならわからなくもないが。

……と、その時、腹の虫が鳴いた。割と大きめに。

それを聞いた陽乃は一瞬思案するような素振りを見せて、何気なく言う。

「私食べる？」

「それだと腹は膨れない上に、今日は絶対家から出なくなるけどいいのか？」

「普通に朝ご飯作ってくるね」

真顔で返したら、とてとてとキッチンの方に歩いて行った。

もうその手の冗談は本気になってしまうので、俺にはあまり意味がない。もちろん陽乃にも。

……それにしただって、朝からこんな頭の緩い会話をしているなんて、一年前の俺は予想していただろうか。

そもそも、陽乃を好きになっっていることすらも想像できていなかったはずだ。あいつにはずっと利用されるだけの関係だと思っていた。

それがどういうわけか、こんな感じになっている。
きつと一年前の俺が知れば『洗脳でもされてんじやねえの?』と言
うに違いない。随分失礼な奴だな、俺。

それぐらい変わってしまったわけだが、これが存外に悪くないし、
充足感がある。

今日も今日で、俺の日常には陽乃の空気が渦巻いていた。

朝食を摂った後、俺達二人が向かったのはららぽーとだった。

そういえば、最近は来ていなかったな。なんて思っていると、着い
て早々に陽乃が辺りを見回し始める。

「?何やってんの?」

「んー?人探し」

どうやら待ち人がこの辺にいるらしい。

二人きりのデートじゃない、という事実になんて少しかショックを受け
ている俺がいる事に内心で苦笑する。

本当に、俺も陽乃の影響を強く受けているような気がする。共依存
とでも言えばいいのか。あまり宜しくない傾向かもしれないが、何せ
お互いに初恋である。少しぐらいは多めに見て欲しいところだ。

「あ、いたー!」

陽乃の言葉に俺も視線をそちらの方に向ける。

待ち人とはいえ、俺が知っている人間とは限らないのだが、こと今
回は俺の知っている人間だったようで……というか、比企谷くんと雪
乃ちゃんなんですが……?

「おい、陽乃。待ち人って……」

「そ。大好きな妹とその恋人さんです」

「へー……は？え、恋人？」

「さらっと流されたが、今陽乃はなんて言ったか。」

「あの二人が……恋人!？」

「いきなり呼び出して、何のつもりなのかしら？」

「俺が軽く混乱している内にこっちを見つけた比企谷くんと雪乃ちゃんが近づいてきて、開口一番、雪乃ちゃんが言い放つ。」

「ごめんねー、雪乃ちゃん。比企谷くんとデートするつもりだったのに邪魔しちゃって」

「ええ、全く。用があるのなら最低でも一ヶ月前には言っておいてほしいものね」

「多少なり苛立ちが込められた言葉ではあるものの、不思議とこの姉妹に感じていた距離感というか、切迫感が微塵も感じられない。」

「構い過ぎる姉に辟易する妹。」

「そういう風に表面上は見えていただけの二人が、表面上だけでなく、まさしくその通りに振舞っていた。」

「それで？用というのは何かしら？くだらない事なら、私はすぐに八幡とのデートに移行したいのだけど」

「比企谷くんを一瞥して、雪乃ちゃんは言う。」

「ごく自然に比企谷くんを下の名前で呼んでいる事になんだか妙な感動を覚えた。」

「なんだかんだ言って、比企谷くんは常に雪乃ちゃんに罵倒されているというか、貶められているような場面しか会ってなかったような気がするからだろうか。」

「雪乃ちゃんは早く比企谷くんととのデートに戻りたいんだ。それは好都合」

「？何が言いたいの？」

「眉根を擡めて、雪乃ちゃんが問うと、陽乃が言う。」

「今からダブルデートしよっ♪」

「「はあ？」」

「思わず陽乃以外の三人の声はハモった。」

それも仕方ないだろう。

友人同士ならともかくとして、二人は姉妹。しかも大の仲良しというにはちよつとばかり誇張され過ぎている上に相手は全然乗り気じゃない。

何言ってるんだ、と思っている内にも陽乃は続ける。

「ほら。もう一年ぐらい前になるのかな？私が比企谷くんと、雪乃ちゃんが景虎と出会ったのがこの場所だったでしょ？」

「そうね」

「その時に言ったでしょ？『雪乃ちゃんの彼氏なら相応しいかどうか見極める』って」

「……そんな事を言っていたような気もするわね。けれど、姉さんも八幡の人となりは知っているはずよ。今更見極めるような事でもないと思うのだけれど」

確かに。

ここで会った時から、陽乃は俺の知っているところでも知らないところでも比企谷くんにちよつかいをかけていたはずだし、それでどういふ人間かも理解していたはずだ。人を見抜くという点において、陽乃ほど長けた人間を俺は見た事がない。なら、今更見極める必要もなく、二人が交際している事を容認している時点で陽乃は比企谷くんを認めているんだろう。

「まあねー。でもね、お姉ちゃんとしては、少しだけ心配な事があるの」

「……何かしら？」

「ほら、比企谷くんの周りって不思議と女の子が集まるでしょ？いくら雪乃ちゃんが世界一可愛いって言っても、比企谷くんが目移りしないとは限らないでしょ」

「そんな事は……」

否定しかけて、雪乃ちゃんは顎に手を当てて考え出した。

え？何、比企谷くんってそんなにモテモテだったわけ？俺ガハマちゃんぐらいしか知らないんだけど。

「……そこはいつも通り即否定して欲しいんだが」

流石にその反応に比企谷くんも思うところがあつたらしい。

「そうしたいのは山々だけど、あなたの場合、実績があるでしょう?」

「……気のせいだろ」

あ、心当たりあるんだ。

「ね。だから、今日はダブルデートでそのところを見極めようかと思つて」

「……はあ。それは別に構わないけれど、私はその間どうすれば良いのかしら?」

「そこはほら。今日だけ特別に景虎を貸してあげるから。雪乃ちゃんも私の彼氏がどんな人か気になるでしょ?」

「いや、貸し出されても困るんだが」

「私も特に気になるわけではないのだけど……」

俺と雪乃ちゃんに共通の話題があるかと訊かれればそういうわけではないし、ともすれば陽乃のようにどんな相手でも社交的に接する事ができるかといえばそうではない。比企谷くんとセットならまだしも、雪乃ちゃんとセットになると無言の時間が長くなりそうだ。

「……まあいいわ。けれど、あまり長い時間八幡は貸し出すつもりはないわよ。見極めたと思つたら、すぐに私に返してちょうだい」

「もちろん。私も景虎の方がいいしねー」

俺たちの許可を得るまでもなく、姉妹の間で一時的な恋人交換が行われる事になった。

始まった恋人交換ダブルデートなわけだが、正直言つて、とても気まずい。

陽乃が比企谷くんにちよつかいを出すたびに、俺の隣を歩く雪乃ちゃんのフラストレーションが目に見えて溜まっているのがわかる。

俺はあれが遊びなのをわかっているし、雪乃ちゃんもわかっているだろうが、それでも割り切れていない部分があるのだろう。

そしてその隣を歩いている俺はハイパーに居心地が悪い。

「あ、あのさー」

「何？」

「い、いや、なんでもない、です……」

年下なのに思わず敬語になる程の威圧感が雪乃ちゃんにあった。こ、怖え……。

陽乃のような底知れぬ怖さでなく、直接的というか、こう視覚的に訴えてくるというか。何はともあれ、違う方向性だからか。

こういうのには慣れていたが、最近は無かったからなあ……。

「はあ。あなたって見かけによらず小心者なのね」

「見かけによらずって……俺がヤンキーみたいな言い方はやめてほしいな」

「見たまんまじゃない」

見たまんま……いや、確かに元ヤンっていうか、不良だった時期もあったけど。

そんなに俺って柄悪そうに見えるかね。

「もつとも……私にはそう見えるだけで、きっと姉さんには違って見えているのでしょね」

「雪乃ちゃん？」

「姉さんから全部聞いているわ。フェイクだったのよね」

「うん……まあ」

「おかしいと思ったのよ。姉さんが、あなたみたいな平々凡々な人間を選ぶとは思わなかったもの」

耳が痛い話だが、全くその通りだと言わざるをえない。俺もその自覚はあった。

俺は何か突出して出来たわけでもない。少しばかり腕っぷしが強いだけで、それも全盛期には劣る。あの頃なら喧嘩は誰にも負けないぐらいは言つてのけた。

今はガスが抜けたように平々凡々な人間だ。特筆すべきものはな

いと思う。せいぜい運動神経ぐらいか。

「けれど、私の勘違いね。平々凡々な人間なら、姉さんはあなたに興味を持たなかったでしょうし」

「いいや。俺はどこにでもいる凡人だよ。ま、他の人間とは少しだけ着眼点が違ったかもしれないけど。後、感性」

「良いことを教えてあげるわ。俗にあなたみたいな人の事を奇人または変人と呼ぶのよ?」

すごく良い笑顔で変人呼ばわりされた。

「まあ、姉さんもそういつた意味では奇人変人の類だから、気にやむことはないわ。類は友を呼ぶ、と言うでしょう?」

「……否定できない自分が悲しい」

自分でも自覚はあるし、陽乃にもおかしいと言われている以上、否定しようにも否定できない。

もっとも、そのズレてる感性のお蔭で今があるわけだから、思いの外、変人というのも悪くない。言葉のニュアンスや響き以外は。

それはそうと、雪乃ちゃんを人を罵倒してる時、凄くいい顔するな。水を得た魚のよう、とはまさにこの事だ。

「だから、姉さんがあなたの事を話したび、とても嬉しそうだったわ。初めて自分を理解してくれる人間に出会えたって」

陽乃の背中を見つめ、雪乃ちゃんは言う。

「私にも、その気持ちはわかるわ。八幡や結衣さんが居てくれたから……」

「前と比べてかなり素直になってるじゃないか。変わったんだな、君も」

「ツ……そういうところ、姉さんにそっくりよ。あなた」

ジロリと横目で睨まれた。

ほほう。陽乃と似ているか。昔はともかく、今はむしろ褒め言葉に近いな。

「全く……ゆくゆくはあなたの事を『義兄』と呼ばなければならぬと考えると、頭が痛くなるわ」

「随分俺の事を買ってくれてるんだな。結婚するのが俺かどうかなん

てわからないぞ？」

「馬鹿にしているのかしら？あなたが何かの間違いで死なない限り、確定事項よ。それぐらい、姉さんの態度と鬱陶しい惚気話を聞かされ続ければ容易に理解できるわ」

そう言つて、雪乃ちゃんは嘆息する。

一体、陽乃は雪乃ちゃんに何を話したのか。大学では仮面をつけているから惚気話はしないだろうし、惚気話なんて雪乃ちゃんか平塚さんぐらいのものだろうから、どれぐらい酷いのがいまいちピンとこない。

「……それでも、一応あなたには感謝しているわ。姉さんのことも、私達のこと」

「それってどういう……」

「そろそろ八幡を返してもらいにいくわ。彼も姉さんの相手に疲れている頃だろうから」

俺が追及する暇もなく、雪乃ちゃんは歩みを速めて、比企谷くんの隣に行った。

出会った頃に比べると、雪乃ちゃんも確かに変わった。

根本的な部分も含めて、今の方が活き活きとしているような気がするし、いつの間にか、陽乃への拒絶感や羨望が無くなっているように見えた。

比企谷くんやガハマちゃんのお蔭か、はたまた俺の知らないところで雪乃ちゃんと陽乃の間に何かあったのか。

気になるところであるものの、本人が話す気は無さそうなので、後ともう一人の方から話を聞いてみるしかない。それでダメなら潔く退くだけだ。

「ちえっ。折角比企谷くんで遊んでたのに、雪乃ちゃんに取り上げられちゃった」

拗ねたように頬を膨らませて、陽乃がこちらに歩いてきた。

こつちもこつちで根本はそこまで変わってないものの、今の方が活き活きとしている。まあ、窮屈そうなら初めから俺達は付き合っただけだ。

「後ろから見ても、比企谷くんが困ってるのがわかったんだが、何を話してたんだ？」

「うん？雪乃ちゃんとのいちやいちゃ高校生活はどうなのとか、私の事を『お義姉ちゃん』って呼んでいいよとか」

「……それだと俺は比企谷くんにも『義兄さん』って呼ばれる可能性があるのか」

「兄貴の方が景虎は呼ばれ慣れてるんじゃない？」

「いや、まあそうだけどよ……って、そうじゃねえよ」

「呼ばれてたんだ……」

どうやら陽乃は冗談で言っただけらしい。俺だって好きで呼ばれてたわけじゃない。なんかこう……成り行きで舎弟が勝手に出来ていただけだ。

「で、どうだった。比企谷くんはお眼鏡にかなったのか？」

「かなうも何も、私は初めから雪乃ちゃんには比企谷くんしかいないと思ってるよ？私には景虎しかいないのと同じように、ね」

「じゃあ、なんであんな事言っただ？」

「理由は三つ。比企谷くんの周りに色んな女の子がいるのは確認済みだからその事で、二つめは比企谷くんを久しぶりにからかいたくなつたから、三つめは雪乃ちゃんと景虎を話させたかったから」

「前半二つはともかく、三つめはどういう意味だ？」

「実は少し前に比企谷くん達はいざこざっていうか、色々あってね。その時に私が軽く助言をあげたというか、一石を投じたみたいなの」

「それ意味違うよな。一石を投じちゃいけないだろ」

「そうでもないよ。だからこそ、今の比企谷くん達があるわけだし」

そういうものなのか。

一体彼らがどんな問題に直面し、それを乗り越えたのかは俺にはわからないが、それを知っている陽乃がそういうのだから、今の比企谷くん達は前に進んでいるんだろう。

「……ん？待てよ。ガハマちゃんは怎么样了？あの子も奉仕部だし、比企谷くんの事好きだったろ？」

修羅場とは言わないまでもその辺に關しても何かしらあったはず

だ。何もなく、話がまとまったなんてことはないだろう。

「その辺の事は雪乃ちゃんも教えてくれなかったけど、多分二人の間で決め事でもしてたんじゃないかな？ 静ちゃんに様子を聞いても上手くやってるって言ってたし」

親友同士だから為せる事……か。

いや、親友同士でも恋愛事があったって、仲違いしてしまうなんてケースは世の中に腐るほどあるはずだ。

だから、この場合は親友同士というよりも、雪乃ちゃんやガハマちゃんが強かったんだろうな。でなければ、今まで通りに関係を築いていくなんてのは至難の技だ。

「それで？ 正直、一番気になってるのは陽乃が何をしたのか。って事なんだが」

「私？ うーん、特に何かをしたわけじゃないよ？ ただ、ちよつと面白くない事になってるみたいだし、雪乃ちゃんの悪い癖が出たから。逃げ道を潰して、真実を突きつけた……みたいなの？」

「え、えげつねえ事するな。お前……」

いくら本人達のためとはいえ、やり過ぎだろ、それ……。

「私はあくまで私だからね。それに私が優しい言葉をかけても意味ないもん」

「……そりやそうだ」

ギャップ云々の話ではなく、陽乃の人間性の問題だ。

比企谷くんや雪乃ちゃんには陽乃の暗黒面。仮面と本心の間くらのところが見えていたわけだが、その陽乃がいきなり彼等に優しく論じたところで猜疑心を募らせるだけで、何の意味もない。

なら、今まで通りに彼等の知る雪ノ下陽乃として振る舞い、変化を促す事を陽乃は選んだ。

結果として、彼等は前に進んだわけなのだから、その行動自体は色んな意味でいい方向に働いているんだろう。

「何を言っても、あの子達には借りがあるし。私にしては、結構気を遣ってたと思うよ？」

「借り？」

「うん。でも、もう返したから」

それ以上言うつもりはない、とばかりにそこで陽乃は話を切った。目的地であるららぽーと内にある映画館に着いたからということもあるが、そればかりは陽乃の中で留めておきたい事案らしい。そして訊かれたくない、というのなら俺は訊かない。

「ねー、何が観たい？」

映画館の前で足を止めた比企谷くんと雪乃ちゃんの前に回り込み、問いかけると、二人は別々の映画を指差す。

比企谷くんは……ぷ、プリキュア？

これには思わずっこけそうになったが、成る程。比企谷くんはプリキュアを信仰する人間らしい。

片や雪乃ちゃんはというとミステリーサスペンス。なんとも雪乃ちゃんらしいチョイスだ。

……しかし、何故だろう。ラストに行く前までに犯人が判明されちやいそうなんですが。

「はあ……二人とも。チョイスがダメダメだなあ。景虎は何がいい？」

「俺か？……まあ、強いて言うならあれだな」

俺が指差したのは今流行りのラブコメ。少女漫画を実写化した、テレビのCMでよく見かけるやつだ。

「さっすが、景虎。わかってるね」

「お、おう。まあな」

単に観たいものがなくて、消去法でこれになったとは口が裂けても言えまい。

映画の内容は至ってシンプル。というか、かなり在り来たりな展開

……ではなかった。

まず主人公の女の子。

幽霊が見える、という設定らしいのだが見えるというか除霊とかも出来るらしく、作中ではなんか悪霊に襲われていたイケメンをかつこよく助けていた。

これだけならまだ良いが、この主人公。やる事なす事イケメン過ぎる。

悪霊を素手でねじ伏せ、好意を寄せてくる男の子には『私といるとあなたが危ないから』と言ってさりげなく振り、傘を忘れた男の子には傘を投げ渡して、自分は雨の中を走って帰る。

あの……あなたヒロインですよ。なんてつつこみたかった。そして周りの男子。お前らなよなよし過ぎな。

チョイスミスったか、と思っていたら、どうやら陽乃は始めからこういう内容のものだとわかっていたらしい。隣で超笑ってた。比企谷くんは目が死んでた。雪乃ちゃんは時々俯いて肩を震わせてた。この姉妹、感性は近いらしい。笑いのツボがよくわからん。

今はちようど小腹も空いてきたということ。近くの喫茶店で軽めの昼食を摂りつつ、さっきの映画について批評会じみたものを行っている。

もつとも、それは簡単なもので、批評会とはいえ感想を述べているだけだ。

「最後は感動的だったねー」

「ええ。好意を寄せてきていた男の子が実は昔助けた猫が化けていた、というのはあり得ないけれど、良い話だったと思うわ」

「あはは、雪乃ちゃんてば、猫の回想シーン食い入るように見てたもんね」

「そ、それはストーリーの重要部分だったようだから、そこから後の展開を考察しようとしていただけで、それ以上それ以下ではないわ」

本当に猫好きだな。多分、そういう視点である作品を評価してくれる人間がいると監督は思っていないだろうが。

「二人はどうだった？ラストは良い感じだったと思うけど？」

「……まあ、途中までのぶっ飛び展開から最後は綺麗なラブコメに収束した事に監督の手腕を感じざる得なかった、ですね」

「確かに。終わってみれば普通にラブコメしてたな。ハッピーエンド……って言うにはちよつと違ったぐらいで」

最後は男の子が猫に戻り、主人公に拾われるところで終わった。定番のカップルが成立して、なんて事はなかったが、あれはあれで綺麗な終わり方の一つとも言える。

なので終わってみれば、それなりに良かった。

……最初は金返せと思っただけだな。

「そういや、この後どうするんだ？服でも見に行くか？」

今回、陽乃があえてノープランで行こうと言い出したため、さっきの映画然り、今日は行き当たりばったりのダブルデートという事になっっている。

俺は元々計画性があるかと訊かれれば、ゲームとかだけと答える人間なのでさして問題はないが、一応、三人は行きたいところがあるかもしれないので訊いてみる。

「うーん。それも良いけど……何か面白い事したいなあ」

面白い事……な。

そういえば、今日はまだ在り来たりな事しかしてないな。そりゃ陽乃が耐えられるわけないか。

しかし、面白い事とはいっても、そう簡単には……ん？

窓の外を見たとき、少し離れた柱にある張り紙の文字が目飛び込んでくる。

なになに……ペット、ショー。触れ合いつて書いてるな。

「あれなんかどうだ？ペットショーやるらしいぞ、参加するのが何かは知らねえけど」

「本当に？じゃあ、それにしよ。なんか珍しいのがあるかもしれないしー！」

「いや、流石にそんな珍生物みたいなのはいないと思うんですけど……」

陽乃の反応に、さりげなく比企谷くんがツツコミを入れる。まあ、

確かに陽乃のいうような珍しいのはいないと思う。いてもせいぜいリスとかフクロウとか辺りが関の山だろう。一般家庭で飼える動物なんて限られてくるしな。

「そうね。けれど、どうせこの後する事は決まっていけないのだし、行ってみる価値はあるのではないかしら」

「猫がいるかもしれないしねー」

「ツ……べ、別に関係ないわ。私はする事が決まっていけないなら、と言ってみただけで……」

「別に否定するような事じゃないと思うー」

「何か？」

「何でもない、です」

睨まれた。

目をそらして、比企谷くんを見ると、比企谷くんは肩を竦めるだけだった。そういう弄りは雪乃ちゃん的に好まないらしい。

「……それで、あとはあなただけよ、八幡」

「良いんじゃないやねえの？俺も服見て回るよりかはそっちの方が楽でいい」

「はあ……そういうところ、本当に変わらないわね」

呆れたようにため息を吐きつつも、雪乃ちゃんはどこか嬉しそうだった。

彼女は彼女なりに、比企谷くんの良さを感じているようで、それらを含めて、比企谷くんを愛しているのだろう。去年がどんな感じだったのか知っているだけに微笑ましく思う。

「景虎。なんだか、孫の成長を感じてるおじいちゃんみたいな顔してるよ」

「まだお前との子どもも見てねえのに、そりやねえだろ」

少しばかり気が早すぎるといふものだ。せめて『近所の子ども』ぐらいにしてほしい。いや、近所に子どもの姿なんてあんまり見ないけど。

「あ、あはは……ほんと、景虎って真顔でそういうのいうからタチ悪いよね……」

「あ？何が？」

「何でもないよ……姉妹揃って色んな意味で大変だね、雪乃ちゃん」

「遺憾だけれど、今回ばかりは同意せざるを得ないわね……」

「？」

もう一度。深く息を吐く雪ノ下姉妹に俺と比企谷くんは顔を見合わせて首をかしげるだけだった。

で、次にやってきたペットショーというのは、俺の予想通り、普通に犬や猫ばかりだった……なんてことはなく、寧ろ珍生物の巣窟だった。

ヨツユビハリネズミ、フクロモモンガ、エボシカメレオン、ナマケモノなどなど。金持ちの巣窟か、ここは。

犬や猫、ハムスターもいる事にはいるが、俺としてはなんでまたそんな珍しいのばっかいるのかわからないが、これはこれで良い経験であるし、陽乃的にも嬉しそうだった。

雪乃ちゃんは猫がいるから満足そうで、比企谷くんもそれを見て、どこことなく満足そうだ。

俺はというと、ちよつとハリネズミに興味があるので、触ってみたのだが、人間に慣れているのか、初めて触れる人間でも針を立てない。いや、本当に可愛いな。癒されるわ。

これ頭の上とかに乗せてみてえな。なんか、小動物って、頭の上に乗せたい衝動に駆られるんだよな。俺だけかもしれないけど。

「景虎って、小さい動物好きだよな」

「癒されるからな。見てみる、この人畜無害な表情、心が休ま……うおっ!?!」

「あはは、驚いた?」

振り向いたら、目の前に緑色の生物……つーか、カメレオンの顔面があつた。思わず、持っていたハリネズミを放り投げなかつた俺を褒めてほしい。多分、中学の時なら条件反射でぶん殴つてたな、カメレオンを。

「阿呆、心臓止まるかと思つたわ!」

「いえーい、大成功!あ、でも景虎が死んじゃうと私が困るからやめてね。多分、罪悪感と喪失感で後追いするから」

「笑顔で恐ろしい事言うなよ……」

重い。愛されるのは嬉しいが、陽乃にはそこはかたなくヤンデレの気質がある。おまけにその病みは俺だけに対してじゃないので、なおのこと。悪い気はしないが怖い。

「見て、八幡。あんなどころにあなたと瓜二つの子がいるわ」

「……いや、どうみてもあれナマケモノだよね?そもそも種族が違うよね?」

「そうかしら?あの微動だにしないところなんて、あなたそっくりだと思ふのだけれど」

「俺も出来るならあんな生活してみたいな。食う寝るだけだし」

「流石にそれは困るけれど、どうしてもというなら養つてあげてもいいわよ」

あの二人は二人ですごい会話してんな。恋人になつてからか、はたまた前からだったのかは知らないが、少なくとも言葉に棘はないし、さしずめ照れ隠しといった具合か。つーか、視線はナマケモノに向けても、猫を触る手は止まらないところにガチ勢っぽさを感じざるを得ない。

「そーいや、陽乃はカメレオンとかでも全然嫌がらないんだな」

「なんで?普通に可愛いでしょ?」

「可愛い……か?」

まじまじとカメレオンを見つめてみる。

うーん、いまいち可愛さがわからん。面白いつてのならまだ分かるんだが……っ!?

顔を近づけてみていたせいか、カメレオンに顔を舐められた。うへえ、なんかぬめつとして生温かくて気持ち悪いぞ。

「良かったね、景虎。この子は景虎の事好きみたいだよ?」

「マジか……俺はあんまり得意じゃねえんだが」

舐められたところを袖口で拭いていると、カメレオンを元いたところに戻し、今度は――。

「ん?そいつって」

「そ。私が苦手だった、フェレットちゃんです」

陽乃に抱きかかえられていたのはフェレット。

半年ぐらい前に克服できないかと触らせてみたのだが、もう完全に克服しているようだった。もふもふするどころか、頬ずりしている。

「あ、でも、この子雄だから、くんになるのかな?」

「その辺はどっちでもいいだろ。それより、普通に触れるようになってんだな」

「うん。景虎のお蔭で、ね?」

改まってそう言われると、ちよつとばかり恥ずかしい。あざとさがあるが無かろうが、こいつは普通以上に可愛いんだから余計にだ。

「あ、照れてる」

「うるせー。自分だって、顔赤いくせに」

「それはそれ。私は照れてるわけじゃないからいいの。ちよつと思いつ出して、嬉しいだけだから」

「っ……だから、そういうはずいのはやめろって」

マジで直視できなくなるからやめてほしい。

「えへへ、さっきの仕返し。どう?」

「俺は何もしてねえだろ……」

「してるもん。自覚がないだけで。それで高校の時は色んな子落としてたんでしょ?」

「?いや、落とすってそんな技術俺にはねえぞ」

「じゃあ、訊くけど高校のバレンタイン。チョコは何個もらったの?」

高校のバレンタイン?……確か。

「もらってないな」

「……………へ？」

「いやな。うちの高校。どういうわけか、二月十四日に高校受験してよ。その日は誰も学校に行かねえんだわ」

懐かしい。周りの奴らがよく抗議してたっけ。流石に生徒会を駆使しても、高校受験の日程までは変えられないから、前日とか後日に渡す奴が多かったっけ。

陽乃に説明すると、「あー納得いった」みたいな複雑な表情をしていた。いや、なんでだよ。別に俺は関係なかったし、全然嬉しかったんだけど。やっぱり女子は嫌なもんなのか？

「だから、前に陽乃に貰ったのが何気に人生初だな。めちやくちや美味かったし、言うことなしだ」

「……………ま、いつか。結果的にだけど、いないに越したことはないもんね」

「うちはヤンキーみたいなのは少なかったしな。俺みたいなのは基本避けられるんだよ。話しかけても逃げられるし」

「多分、それ怖いから逃げてるんじゃないと思うよ？女子に限っては」

「じゃあ他に何かあるんだよ」

「ノーコメント。景虎がそれに気づく必要はありません。ていうか、気づいちゃダメでーす」

「なんだそりゃ」

話しかけたら後ずさりして、こっちの顔も見ずに逃げるんだぞ。そののどこに怖い以外の要素があるんだよ。まあ、俺の校内での噂を考えると当たり前の反応だったから気にも留めなかったけども。

「まあまあ、それは置いておくとして、この子と一緒に写真撮ろうよ」

「いいのか？」

「フラッシュが無いなら大丈夫らしいよ。携帯のフラッシュ機能オフにすれば、問題ないんじゃない？」

「そうか。ちよい待てよ」

ポケットからスマートフォンを取り出して、カメラのフラッシュ機能を自動からオフにして、そのままカメラを起動させたままにしてお

く。

「で、誰に撮ってもらうんだ？自撮りつてやつにするのか？」

「それもいいけど、ここはほら。私達と一緒に来てる子達もいることだし。比企谷くん、ちよつと写真撮ってー」

名前を呼ばれると、一瞬びくりと背筋を震わせて、キョロキョロと周囲を見回した後、こちらに向き、自分を指差す。

それに陽乃が頷くと、肩を落とし、雪乃ちゃんに一言声をかけてこっちに歩いてきた。

「あの、大声で呼ぶのはやめて欲しいんですけど」

「えーっ、でもそうじゃないと聞こえないし、君無視しそっだし」

「無視はしませんよ……聞こえないふりはするかもしれませんが」

「それを人は無視してるっていうの。景虎とこの子と一緒に写真撮りたいから、比企谷くん撮って」

「……それは別に俺じゃなくても、その辺の人とか自撮りとかあるでしょう」

「何の為のダブルデートだと思ってるの？使えるものは最大限有効に使わないと。比企谷くん達も後で撮ってあげるから、先に私達を撮ってよ」

「……まあ、いいんですけど」

俺がスマートフォンを渡すと、比企谷くんはカメラのレンズをこちらに向けて、数歩下がる。

俺は特にポーズをとることなく、陽乃の隣に立っていると、陽乃がフェレットを俺の左肩に乗せ、左腕に抱きついてきた。柔らかい感触に挟まれつつも、俺の肩の辺りでふるふる震えているフェレットを見ていると、なんだか必死さが伝わってきて、それどころじゃない。飛び降りれない辺り、このフェレットはかなり命懸けの状況を強いられているということになる……陽乃に。

「いきますよ」

はい、チーズ。なんて比企谷くんは言わず、その一言だけで写真を撮る。

シャッター音が聞こえた後、比企谷くんがこちらに歩いてきて、画

面を見せてくれる。

……自分の顔を見てみると相変わらずの写真映りの悪さを感じる。昔から、ガン飛ばしてみたいだとか言われるんだよな。

「笑顔が足りてないよ、景虎」

「自覚はあるさ。まあ、俺らしいっつーことで勘弁な」

「それもそうだけど……」

むむむと写真を見て、唸る陽乃。なんだかんだ言っつて、二人だけで写真を撮るのはこれが初めてだっけな。だから二人とも笑顔が良い、つて事なのかもしれないが……笑おうとすると顔が引きつるんだよなあ。

「しようがないから今回は許してあげる。次の機会があつたら、無理矢理でも笑わせるからね」

「努力する。じゃあ、次は比企谷くん達だな。雪乃ちゃん呼んできなよ」

俺が言うと、比企谷くんは数巡迷うような素振りを見せたあと、雪乃ちゃんのところに行く。

彼女の肩を叩き、事情を説明していると、露骨に雪乃ちゃんが嫌そうな顔をしていた。まあ、陽乃がいるし、わからなくないが。からかわれるのは確定だからな。気の抜けている、というか、デレているところを見られたくはないのだろう。

猫を両手で抱き上げたまま、雪乃ちゃんはこちらに歩いてくると、距離にして三メートルぐらいのところまで止まる。

「さあ、早く撮りなさい。私は忙しいのだから」

嫌がってたのは、猫に癒されるのを邪魔されたからか……。そんな親の仇みみたいな目で見なくても。

「比企谷くん、雪乃ちゃんの隣にー」

「比企谷くんは雪乃ちゃんの後ろに回ってねー。で、後ろから抱きしめる感じに行こー！」

と、俺の指示をかき消すかのごとく、陽乃からの指示が飛んだ。

当然、比企谷くんは『何でだよ』みたいな顔をしているわけだが、雪乃ちゃんとしては早く猫を可愛がりたいのか、どちらでもいいから早

くしろと視線だけで比企谷くんを催促する。

結果、陽乃の希望通りの体勢となっていた……うわっ、こんな絶対人目が多いところで出来んぞ、俺なら。

案の定、比企谷くんも、雪乃ちゃんも頬が赤い。そして陽乃はぶるぶる肩を震わせている。いや、笑ってやるなよ、首謀者。

早く解放してあげたかったので、すぐにシャツターを切る。

写真が撮れたのがわかった二人はその格好をすぐにやめるもの、まだほんのり赤い。

これが若さか……まあ、歳はほとんど変わらないんだけどね。

「いいなあ、青春してるなあ、二人とも」

「そんな目でこっち見ても、俺は絶対にやってやらねえ」

チラチラ見てくる陽乃にそう言うと、拗ねたように頬を膨らませる。だが、絶対に嫌だ。公衆の面前で誰があんな事するか。

「……景虎の意地悪」

「なんとも言え。こんな公衆の面前じゃしねえよ」

「ちえ……あれ？じゃあ二人きりならしてくれるって事？」

「……知らねえよ」

その後も珍しいペットショーに続いて、服やアクセサリーを見に行ったり、ゲーセンで遊んだり、本屋に寄ったりと、世にも珍しいダブルデートを楽しんだ。

去年の出来事を再生するかのよう、陽乃が俺をランジェリーショップに引きずり込んだときは、店員さんが俺の事を覚えていたらしく、苦笑いしていたのが印象的だ。今回に関してはほっぴり出されはしなかったものの、「試着したの、見る？」なんて聞いてくるもんだ

から、居心地が悪いつてもものじゃない。

アクセサリーを見ていたときは気に入ったものが陽乃と雪乃ちやんで同じだった時は、姉妹なんだなと思わず笑ってしまい、雪乃ちゃんに睨まれた。それで陽乃が嬉しそうに抱きついたら一層鋭さが増した。喉に刃を突きつけられた感覚というのはきつとああいうの言うんだらう。

本屋じゃ、比企谷くんと一緒にラノベ談義に花を咲かせ、お互いにオススメのラノベを貸借りしようなんて事も決めた。これには雪ノ下姉妹はついてこれないらしく、呆れた様子で俺達を見ていた。見かけで判断するのは良くないと言ってみたものの、最強姉妹の前では俺や比企谷くんは無力らしく、五分くらいで論破された。

ゲーセンはゲーセンで俺も含め、負けず嫌いが集まっているために、シューティング、レース、格ゲー、音ゲーさらにはUFOキャッチャーと勝敗がつくもの全てを網羅し、ほそぼそとやっていた比企谷くんを尻目にかなり熱中していた。だが、そこはゲーマーの意地。最終的な勝率は俺が高かったの言うまでもない。切り上げるのに苦労した。

二人と別れる頃には時刻は七時過ぎをさしており、そろそろ腹が減ってくるから、晩飯でも買いに行くかな。と思い始めていた頃。

「ねえ、景虎。ちよつと寄り道していかない？」

その一言で、寄り道をする事になった。

そして、来たのは千葉の有名なデートスポット……ではなく、どこかの海岸。九十九里浜ってわけでもない。なんでこんなところに来たのかはわからないが、陽乃の気まぐれはいつもの事だ。

「今夜は月が綺麗ですね」

空を見上げて、陽乃がふとそんな事をつぶやく。

「どうしたんだ、急に？」

「知らない？夏目漱石」

「普通の小説とか読まねえからな……」

「だよ。ライトノベルだっけ？」

「まあ。で、そう言う時はなんて返事すりゃいい？」

「うーん。どうなんだろう、基本的に男の子がいう台詞だし……その場合、景虎が女の子の台詞を言わないといけないからいまいちカッコつかないと思うよ」

「そうか。で、それってどういう意味だ？」

「ん？『I love you』」

けろっとした表情で言い放った一言に一瞬間の抜けた表情をしてしまう。

「……お前って、言う時は余裕だよな」

「そこはほら、私だから。攻めは強いよ？」

「妙に説得力あるな」

押して押して押しまくれ、だしな。押してダメならぶち壊せのな。

まあ打たれ弱いっていつでも、そもそも当たらないし。的が小さすぎるから。

……だからこそ、的が当たった時のテンパリ具合はなかなか面白いけどな。

「僕は君に会うために生まれてきたのかもしれない」

「へ？」

「お前が有名な小説家の言葉を借りるなら、俺は有名なアニメの言葉を借りる。その方が俺らしいしな。使うタイミングは違うかもしれないけど、お前がそう言うなら、俺が言える事なんて大体こんな感じだ」

アニメ故か、陽乃の言う夏目漱石のそれと違い、言ってる事はかなり直接的だ。だが、含んだ物言いは好きじゃない。特に自分の思っている事を伝える時は尚更。

「知ってるか？攻めるのが得意なのは俺も同じなんだぜ？」

笑みを浮かべながら、陽乃の方を見やる。

一呼吸おいて、頬を紅潮させた陽乃はふいっとそっぽを向く。相変わらず照れてるところを見られるのは嫌いらしい。初々しいやつだ。それも可愛い。

「……知ってる。いつもやられてるから」

「いつもはやってねえよ。偶にだ偶に」

「ううん。いつもだよっ」

と、そっぽを向いていた陽乃が抱きついてくる。

顔は胸にうずめているから見えないものの、変わらず月明かりに照らされた耳は赤い。

こんな姿を見るたびに思う。

陽乃に出会った頃に抱いていた印象は、勘違いなんじゃないかと。でも、そうじゃない。あれも陽乃だし、こちらも陽乃だ。

違う点があるとすれば、陽乃自身の感情の強さとか、周囲の陽乃に対する意識だと思う。

誰かが踏み出せば、陽乃はもつと早くに自分を出せていたかもしれない。窮屈な想いをする事はなかったかもしれない。

……まあ、それが無かったおかげで今があると考えると、一概に周囲を否定する事はできないが。

「ねえ、景虎」

「なんー」

俺が問いかえす前に、陽乃に唇を塞がれる。

何の前触れもないキス。

触れるだけの、陽乃にしては随分珍しい。優しいもの。

「二つ訂正。私は私の言葉で伝えるよ」

「……おう」

「景虎。大好きっ！ずっと一緒にいよっ！」

満面の笑みで放たれた一言は、さっきの台詞よりもずっと心に響き渡る。

ああ、全く。

俺はどうしようもなく雪ノ下陽乃に惚れているらしい。

借りた言葉じゃなく、本人の言葉になるだけで、こんなにも満たされるのだから。

「言われなくてもずっといるっつーの」

照れ隠しに仰いだ夜空には、無数の星と満月が輝いていた。

魔王の玩具く高校編く

番外編：ズレた俺とおかしなアイツ（陽乃同級生ve
r）

「君、生徒会に入る気はない？」

開口一番にそう言われ、間の抜けた顔で腑抜けた声を出したのは、はたして何年ぶりだったか。

いや、多分生まれて初めてだったと思う。

俺、九条景虎の人生を振り返っても、これ程までに予測不可能な展開に巻き込まれたのは初めてだった。

ちよつと表には言えない職業を生業とする親父の元に生まれた俺は、幼い頃からの英才教育だったのか、はたまた単に親バカだったのか……前者だとかっこいいんだが、残念ながら後者だと思う。

兎にも角にも、親バカを拗らせまくった親父の影響で、その頃から裏の世界というものを認識していた。普通、親バカならそこから遠ざけるものだと思うんだが、親父としては生まれた瞬間からそっちの世界に俺が行くことを認識してたらしい。まあ、全くその通りなわけで俺の進路はもう決まっているも同然なわけだ。

とはいえ、将来が決まっているからって、勉強には手を抜かなかつた。今も昔も、トップが頭悪いんじや下の者に悪い。それが許されるのはそこらの不良ぐらいまでだ。

都内に居を構える俺は、当然都内有数の高校に行くとはばかり思っていたのだが、親父もお袋も一度は外に出てみるのもいいんじゃないかって事で、万が一の時に対応できるように爺さん達のいる千葉の総武高校に通うことになった。なんでも昔母さんもそこに通ってたって話だ。そこから親父とお袋の惚気話が始まった時は頭が痛かったけど。

本当なら国外の方が良かったんだが……やっぱり人種が変わると色んな奴がいるしな。俺としては、その高校生活で、色々身に付けた

いと思ってる。だから、人間関係なんかも大切にしつつ、俺なりにこの高校生活で得られるものは得ていくつもりだった。勉強するって言っても、何も授業だけじゃない。人から学ぶ事だってあるし、高校や大学はそののの意味合いも多分にある……と俺は勝手に思っている。

親父には色々仕込まれた。自慢じゃないが、腕っぷしは強いと自覚してるし、連れまわされた結果人を見る目はあると自負している。だから、まあ。

今こいつと初めて面と向かった時に感じたのは、とてつもない違和感だった。

今までも外と内の見せる感情に差があるやつは何人もいた。親父があえてそういう人間に俺を会わせていたのも知ってる。家業を継いだ時、コロツと騙されたのでは話にならないからだ。

だが、こいつ程のやつは見たことがない。

ここまで強烈に違和感を感じてるつてのに、それが自分の勘違いなんじゃないかって思うほどに馴染んでいる。今気づけたのも、多分声をかけられたからで、俺は今まで雪ノ下を見た事がないわけじゃない。顔を合わせるのが初めてであって、見るだけならいくらでも機会があった。それなのに気づいたのが今だった。

本心を隠してるはずなのに、それが虚ではなく、実だと思ってしまう程にこの女子は――雪ノ下陽乃は自分を偽る事に長けていた。いや、ここまで来るとその偽りも真実と言える。

こりや、あれだな。意識してないと相手の術中に嵌ってるつてやつだな。警戒しとかねえと。美人局じゃないが、知らんうちに乗せられるかもしれない。

「あー……と。雪ノ下だったよな。急にどうした？」

さつきも言った通り、俺と雪ノ下自身は全く面識がない。

雪ノ下は校内で知らない人間がいけないほどの人気者で、アイドルのような存在だと言われているが、対して俺は目立たないよう極力目立つ行動は避けてきた。ただでさえ、中学時代は目立っていた部類だし、身長もそれなりにデカい。部活に勧誘されるのが煩わしかった事

もあつた。だから知らないやつは知らないわけだ。もつとも、全校生徒を覚えているとも噂される雪ノ下の事だ。俺に話しかけてきたのに俺を知らないって事はないんだろう。噂とはいえ、本当に全校生徒の顔も名前も普通に覚えてそんな奴だ。

因みにその噂というのは、どれも雪ノ下を褒め称えるようなものばかり。容姿や性格、頭脳や運動神経。どの話をとつても、男女どちらの性別でも、雪ノ下を誹謗中傷するようなものは聞いた事がない。

「言葉の通り。九条くんを我が生徒会に勧誘にしているの」

あつけらかんと言いつつ雪ノ下に、俺はふと疑問を抱いた。

「生徒会に勧誘って……確か先週終わったよな、生徒会選挙」

十月末にあつた生徒会選挙。

俺は家庭の事情で参加できなかったが、なんでも圧倒的多数で雪ノ下が生徒会長に就任。その瞬間から様々な校則、通称『雪ノ下ルール』と呼ばれるものが作られている。それらは横暴でもなく、内容は生徒にも教師にも受け入れられるようなもので、かつその生徒や教師を問わない人望からか、殆ど総武高校の支配者的な位置付けに近い具合だ。だからこそそのネーミングなのだが。

そして生徒会選挙といえば、当然雪ノ下以外も他の役職に就任している人がいるわけで。ただの役員だって、無闇矢鱈に増やしていいわけじゃない。そんな事をしていたら、生徒会の規模が大変な事になる。とはいえ、確か雪ノ下が役員の席を意図的に一つだけ空席にしたなんて話を人伝に聞いたような気がするんだが……。

「そうだよ。だから、勧誘。終わってなかったら立候補してつてお願いするから」

「成る程。それは一理ある」

今誘うには勧誘しか手段がないわけだ。次誘うとなると、来年の生徒会選挙までお預けになるしな。それまで待てつて話なんだが、雪ノ下はそれが待てないからこうして勧誘してくるんだろう。

まあ、今ばったり鉢合わせたばっかなんだけどな。

この総武高校には、普通科と国際教養科つー二つの学科に分かれている。俺は普通科。国際教養科はどうにも女子の比率が高いつて

んで、学力的には問題はないが、あえて普通科にした。それでもつてこの雪ノ下は国際教養科。よほどの事がなけりや、面識がないのは当然だし、こうして鉢合わせるつても、またかなり珍しい。たまたま職員室によってなきや、こうはならなかった。

で、初めて言葉を交わした途端に生徒会に勧誘つてのは、どういう事なんだろうか。

「一応勧誘の理由を聞いていいか？」

「君が他の人と違う気がしたから。初めて会つた相手にそこまで警戒されたのは私も初めてだし」

……どういうわけか、俺の警戒は雪ノ下に伝わっていたらしい。これでもバレないように、心にセーフティーをかけているようなものだったんだが、それさえも雪ノ下に見抜かれた。人を見る事に長けているのは雪ノ下も同じつてわけか。

「どう？理由になつてない？」

ふふん、と自信ありげというか、挑発的な笑みを浮かべてくる雪ノ下。

そう見えるのは、俺が雪ノ下を友達が言うところの『理想の彼女』というところからかけ離れていると感じたからなのかもしれない。あいつらが言っている通りの人間なら、そもそもこんな予測不能な事はしてこないだろうし、理由ももつとマトモはずだ。

「いや、十分な理由だと思つぜ。俺も、お前みたいなタイプは初めて会つた」

だが、それは嫌じゃない。寧ろ好感がもてる。

予測不能つて事は、少なくとも退屈なんてしない。何より俺の予想できない人間なら、俺にはないものを幾つも持つてるだろう。得られるものがあるのに越した事はない。

「じゃあ承諾してくれたつて事でいいのかな？」

「おう」

と、そんな初会話かつ割と軽いノリで俺が生徒会に入ったのが、かれこれ一ヶ月前の話だった。

雪ノ下政権の生徒会は、それこそ本当に一つの企業と言えた。

無駄な人員がない。一芸に秀でるところではない。役職持ちでないものでさえも、与えられた仕事を完璧に全うしている。普通の企業だって、ここまで無駄のないところは少ないだろう。人手が足りていないのと、無駄がないのは大きく違うわけだな。

おまけに指示を出す側の雪ノ下も、その人間が最高の力を発揮できるようなものを選んで仕事を与えている。上も下も、どこにも無駄がなかった。

かといって、社畜よろしく心を殺して仕事をしているなんて事はない。普通に楽しそうで、辛そうな素振りは微塵も見えない。お喋りなんでものは当たり前、それどころ生徒会室ないだけなら、色々持ち込み有りだそうで、持ち出さない事を条件に私物が結構持ち込まれている。

……これ、俺必要ないんじゃないの。と思ったのは昨日今日の話じゃない。目下、雪ノ下の補佐という立ち位置でいるものの、俺が雪ノ下の補佐として仕事を出来ている試しがない。何かやる事あんだろ、と浅はかな考えをしていた俺自身が恨めしい。寧ろ、研修でもしてる気分だった。副会長っていう肩書きで書類整理なんかをやらされてるんだが、俺の手元に来る頃には大体まとまってる。だから一応チェックの後、別の事をしてる雪ノ下に代わって判を押すだけだ。「ちーっす。……って、今日は一番乗りか」

放課後に特にする事もなく、いつものように生徒会室に来た俺は、経費で落とされているインスタントコーヒーを淹れて、椅子に腰を下ろした。

基本的に生徒会室は閉められていない。

もちろん、完全下校時刻になると閉めるんだが、大体朝登校した役員の誰かが荷物を置いたりするのに使ったりするからだ。それにこ

こは進学校。盗みを働こうとする輩もそうはいない。中学生や底辺校と違って、自制心つてのは人一倍あるし、リスクリターンを考えた上でなお実行に移そうとする奴はいない。

「しっかし、同じ一年生とは思えねえな」

俺は一人そうごちる。

上級生相手にも物怖じしないところもそうだが、その上級生も雪ノ下をちゃんと生徒会長として扱っている。年下を相手にしている風でもないところを見るに、敬っているという事だろう。まあ、雪ノ下みたいな相手を舐めるなんてまず出来ないと思うが。

一応雪ノ下が唯一指名した人間だという事で、俺も一応は年下扱いされていないものの、雪ノ下とは訳が違う。こっちは一応。あつちは本気だ。まあ、俺が現時点で特に何かをしたわけじゃないっていうのも多々あるが、それ以上に学園のアイドルが唯一指名した人間ということで、少なからず目の敵にされている節はある。なんていうか、刺々しい。

その辺は俺も気にしてないし、理解できる部分が多々あるので、何も言わず甘んじて受け入れている。これも忍耐力を鍛えている俺はどうって事はない。

と、その時。生徒会室の扉が開かれる。

入ってきたのは一つ上の男の先輩。名前は………森下って言うたか。野球部と掛け持ちで生徒会に入っている強者だ。勉強もそこそこ頑張りながら、部活と生徒会をする。その頑張りは尊敬に値するというものだ。

「ここにいたのか。九条、ちよつと顔貸してくれるか」

「顔貸すって……カツアゲじゃないんすから」

先輩の言い方に苦笑しつつ、俺は立ち上がる。

荷物は置いて、先輩の後ろをついていく。遅れたら雪ノ下辺りに何か言われそうだが、その時は用事があったとでも言っておけば、なんとかなるだろ。流石にそこまで融通の効かん奴でもないだろうし。

特に話す事もなかったので、無言のまま歩いて着いたのは体育館裏。

これじゃ本当にカツアゲにしか見えねえな、と思っていたら、俺達が来た後から数人の男子グループがやってきた。あれ、これ本当にカツアゲ？進学校で？すっげー、レアな体験だな。

感慨深いな、なんて場違いな事を考えていたら、俺を連れてきた先輩がいつの間にかいなくなっていた。そしてオレを囲む男子グループ。おそらくは先輩だろう。構図的にはアレだ。カツアゲよりもリンチ食らいそうな感じ。

「先輩方？何かご用で？」

「お前が最近雪ノ下さんに目をかけてもらって調子に乗ってる一年坊主か？」

「どういう解釈でそうなるんスカ……まあ、スカウトされたっていうんなら合ってますけど」

何故雪ノ下だけさん付けなのかは最早考えもしない。つーか、考えなくてもわかる。先輩にさん付けさせる雪ノ下パネエ。女子だからって理由じゃない辺りが特に。

「二年生の癖に調子に乗ってる痛い目見んぞ？」

「ご忠告ありがとうございます。でも、俺も生徒会に入ってみたものの、自分の無力さに嘆いているところでして。調子に乗ってる暇なんてないですよ」

「てめ、おちよくつてんのか、ゴルア！」

何故か胸倉を掴まれた。

おかしい。昔みたいに挑発したんならまだしも、俺は事実を述べただけだ。現時点で、俺が生徒会で調子に乗れる要素なんてどこにもない。雪ノ下は優秀な人間のみを選んで生徒会に属させているが、俺はまだ何も出来ていない。

「ま、まあまあ。落ち着いてください、先輩。確かに雪ノ下は俺を指名したかもしれません。でも、俺は新参者。調子になんて乗れるわけー」

「呼び捨てにしてんじゃねえよー」

先輩が拳を振りかぶった。どうやら、逆鱗に触れたらしい。これも全く持って意味がわからない。俺が一体何をしたというのだろうか。

雪ノ下を呼び捨てにしたから殴られた、凄い理由だ。これ程理不尽な事がこんな進学校にも存在するのか。それともビビらせるだけのつもりが、俺の態度を見てキレるに至ったのか。つーか、先輩。

「いくらなんでも殴るのはマズイっすよ。停学になったら進路がめちゃくちゃになるんすから」

顔面に迫った拳を左手で軽く受け止める。結果的に煽った形になるんなら、俺にも多少なり非はある。流石に殴られたのを転けただけ、なんて言えないしな。あの嘘って本当に通じないんだよな。ソースは俺。

「後、一応この手も離してもらえますか？誰かに見られるとマズイと思うんで」

できるだけ、そーと俺の胸倉を掴んでいた手を外して、乱れた服装を整える。

「じゃあ、俺はこれで。先輩方のお気持ちはわからんでもないんすけど、くれぐれも暴力には出ない方が良いッスよ」

そう言つて俺はその場から去っていく。うん、我ながら良い場の収め方だ。最近雪ノ下を見て、人身掌握術を学び始めたが、早くもそれがー。

「二年生の癖に舐めてんじゃねええ！」

ー活かされてませんでした。それどころか臨界点を突破してらっしやる。あ、あれ？

頭に血が上って、もう後のことはどうでも良いって形相だ。殴った後に損をするのは先輩の方だつていうのに。怒りが理性を完全に上回ってるな。……怒らせたの俺だけだ。

正直な話、場を収めるのはめっちゃくちゃ簡単なんだけど……暴力はマズイよな。

「よつと」

先輩の拳を軽くかわして、足をかける。

つまずいて転けたところで、顔に拳をドーン！

「……なんちゃって。やめてくださいよ、先輩。進学か就職か知りませんが、進路が白紙になった拳句、目が覚めたら病院、なんてのは

嫌でしょう?」

寸前で拳を止めて、先輩にそう言うと、状況が理解できていないような、間の抜けた表情で何度か頷いた。

ふう……危ない危ない。寸止めのつもりが微妙に殴りそうになった。なにせ、今まで寸止めどころか殴り抜く事しかしてなかった。親父も『二度と喧嘩売りたいと思わねえようにボコボコにしてやれ』って言うってたし、手加減なんてものは教えられてねえもんな。

今度こそ、その場から去って行く……が、その途中で俺は足を止めた。

「……見てるなら、さっさと助けてもらいたかったんだがな。雪ノ下」
体育館裏から出てすぐ、角の物陰に声をかける。

はたから見れば頭がおかしいというか、厨二病のそれに見えるが、それは誰にもいない場合に限られる。

ひよっこりと何食わぬ顔で出てきたのは、どこか楽しそうな雰囲気
の雪ノ下。その様子から察するに、最初から俺達のやりとりを見ていたらしい。

「かつこいいねー。まるで映画みたいだったよ」

「馬鹿言え。映画は魅せる為にやってるんだよ。俺のアレは潰す為にやってるんだ」

「でも、君は止めたよ」

「生憎暴力は禁止されてるし、俺がこの学校の生徒をやめる時は卒業する時って決めてるんだよ。ちよつと難癖つけられたぐらいで暴力事件なんて起こさねえよ」

もしも仮にお咎めなしで、それでいて難癖つけられた理由が理由なら、ひよつとしたら殴ってたかもしれないしな。ま、理由はそれぞれ違ってことだな。

俺が歩き出すと、それに合わせて雪ノ下も俺の隣を歩き出す。どうやら話をこれだけで終わらせる気はなかったらしい。

「それより、お前が出てくりや、止まってたと思うぜ」

「えー。そんなの面倒くさいからしたくないし、見たたほうが面白そうじゃない?」

「……絶対そうだと思ってたが、いい性格してるぜ。お前」
がくりと肩を落とす。

雪ノ下の本質の片鱗を見た気がするが、なかなか良い性格してる。もうこいつが焚きつけたんじゃねえかと思うレベル。まあ、そうじゃないのは先輩見りや一発で分かったが。

「それに、私が止めに行ってた方が余計にこじれたと思うけど？だから、分かっているのに呼ばなかったんでしょ？」

「そりや……まあな」

やっぱりバレてたか。

正直、絶対見てる奴がいるのはわかった。こう、視線を感じたつーか、基本的に他の人間がいないか確認するのが癖になってるからな。流石に雪ノ下かまでは断定できなかったが。

「しかし、どうするよ。生徒会長？どうにも俺のご指名は他の生徒に不興を買ってるみたいだぜ」

「別に。どうもしないけど？」

「どうもしないって……そりやマズイだろ。一応生徒からの支持で選ばれた人間なんだからよ。意思是汲み取ってやるべきじゃねえの？」

「具体的には？」

「そうだな……まあ、例えば俺をただの役員にするとか」

いくら雪ノ下が生徒から多大な支持を得ていたとしても、それが絶対的かどうかと問われればそうではない。どれだけ揺るぎのないものだとしても、崩れ去る時はほんの一瞬、かつつまらない理由であったりするのだ。特に学校の生徒会長なんていうのは、学校の殆どが半ば人気投票じみている。つまり友達が多く、好かれてる奴が生徒会長になりやすいということだ。有能、無能は関係ない。

その中でも雪ノ下は有能すぎる人種ではあるが、その人気も、行動次第では減少するし、敵も作ることになるだろう。圧倒的カリスマを有している雪ノ下でも、それが無条件で人を従える力になるわけじゃない。

「正直、俺も得るものがあるし面白そうとか言うふざけた理由でお前の勧誘を受けたレベルだしな。副会長だろうが役員だろうが関係な

いつつーか……あれだ。俺はお前が見れりやそれでいい」

俺としては、立場つてのは割とどうでもよく、雪ノ下政権の下に生徒会がどう動き、学校に変化をもたらすのか、その一点が気になる。それは雪ノ下がどういった人間なのかなんとなくわかってしまうから、理解できているわけじゃないが、少なくとも雪ノ下は大多数の人間が思うほどいい奴じゃないだろう。だが、それは俺以外の人間も知っているやつがいて、それを含めて雪ノ下陽乃という人間に信仰に近い尊敬ないし恋慕を抱く輩もいる。それがカリスマだということなら、俺にはないものだ。

それは狙って身につけられるものじゃないが、それでも俺はこいつの作る学校を見ていれば、何かを得られそうな気がする。ここに来なければ得られなかった何かを。

だから、俺は副会長だろうが役員だろうがどっちでもいいんだ。そりやまあ、雪ノ下に近い位置にいる方がより良い位置で楽しめる事は確かなんだが……。

「合格」

「……………は？何が？」

「良いよ、九条くん。やっぱり君が副会長で」

何をどう思ったのか、雪ノ下はパチパチと手を叩きながら、笑顔でそう言った。

「九条くん。私はね、周りの人間がどう思うとか、何を言うとか関係ないの。私がやりたいからするんだから、間違っても祭り上げられたから応えるなんてわけじゃないの。支持してくれるならそれなりに頑張ってはあげるけど、それもついだ。第一は私が楽しいか楽しくないか。後は二の次だよ」

雪ノ下の発言は割とんでもないものだった。

生徒会長に立候補して任命されたが、生徒や先生の事はどうでも良く、自分を第一にして、この学校を変革ないし、盛り上げていくと言っている。しかも、それはあくまで副産物のようなものだ。

かつて、ここまで自分勝手かつ自由奔放な理由で生徒会長になったやつがいるのだろうか。もう、漫画のキャラもびつくりの我の強さで

ある。

「……とんでもねえ理由だな」

「それ君が言う？面白そうだからって私の誘いを受けたのに？」

「……そーういや、俺も同類だったな」

とんでもないやつの下にはとんでもないやつがつく。

流石に雪ノ下ほど、俺はぶっ飛んでるわけじゃないが、どうやら俺は少なからず雪ノ下と通ずるものがあるらしい……おそらく、それは感性が大変に一般人とずれてるって事なんだろうけどな。

「でも、それぐらいじゃないとね。私が指名したからって、変に気負いして、全く使い物にならないじゃ、必要ないもん。その点、九条くんは気負いしてる風は全然しないし、さっきみたいな事になっても自分で対処できるし、何より私が面白そうだと思うたから、副会長は九条くんしかいないよ」

微妙に褒められてるんだか、褒められてないんだかわからないが、そこまで言われたら応えるしかねえよな。多分、雪ノ下が俺を指名した理由は最後のが一番で、後のものは全部後付けっつーか、指名した後に分かった事なんだろうが、それでも雪ノ下が俺を指名してくれるのなら、とりあえず俺も周りの意見やら空気は無視して、俺のやりたいうようにやらせてもらおうとしますかね。

「これから似たような事はあるだろうけど、頑張つてね」

「あれぐらいなら大した事ねえよ。俺を絞めたいなら、最低十人は用意しねえとな」

「……もしかして不良？」

「なんでそこで格闘技してるのかって、聞いてこないところにお前の感性のズレを感じた気がするが、残念ながら正解だ。ま、『元』つてのが付くけどな」

それに元は元でも、テストの点数も授業態度も完璧。家庭の事情以外は無遅刻無欠席の皆勤だし、基本的に校則は守っていた。単に売られた喧嘩は相手に殴らせてから正当防衛で叩きのめし、自分の中学の生徒が絡まれてたら助けるって事をしていただけ。なので、結果的に不良という枠組みのはずが生徒や先生から恐れられたり、目をつけ

られたり、なんて事はなかった。

「へえ、見た目通り過ぎて、なんだか意外」

「そうか……おい、待て。見た目通り過ぎてってどういうこった。俺のどこが不良っぽいんだよ？」

一瞬間き流しかけたが、それだけは聞き捨てならなかった。俺みたいな善良な市民を捕まえて、一体どこが不良っぽいっていう気だ。

「目つきとか口調とか雰囲気とか？」

「……やべえ。どれも全部否定できねえ……」

ズレた解答かと思っただけの確すぎて、俺は顔を引きたらせるだけだった。

ちよこつとIF編

番外編：今日もうちの後輩は性格が悪い（陽乃年下ver）

「あゝ、どうすつかなあ……」

パイプ椅子に座り、足を机の上に乗せて組み、深く溜息を吐いた。冬と呼ばれる期間も折り返し地点を過ぎ、より一層寒さが増し増しになる今日この頃。

俺こと九条景虎は孤独の学校を満喫させられていた。

別に俺はしたくねえ。さっさと家に帰り、炬燵に潜ってゲームとかしたいに決まってる。

それが出来ないのは偏に俺が『生徒会長』という大変名誉あり、かつ非常に面倒くさい役割をさせられているからである。

もちろん、俺がなりたくてなったわけじゃねえし、なんなら生徒会に立候補する気などさらさらなかった。いや、それどころか選挙日当日まで俺は自分が立候補してる事に気づいていなかった。

忘れていたとかではない。そんな大層な天然具合は発揮してないし、それは天然どころの騒ぎじゃない。立候補したんなら、やる気があるんだろ。忘れんなよって怒られる。

では、何故俺が生徒会長なんか立候補し、剩え就任する羽目になったのか。それはというと……。

「失礼しまーす！あ、会長。不景気ツラ下げてどうしたんですか？」

すぱーん、と勢いよく扉を開けて入ってきたのは、俺をこの地位に祭り上げた全ての元凶。雪ノ下陽乃だ。

品行方正、才色兼備、眉目秀麗、頭脳明晰、文武両道etc…。

完璧超人という言葉がこの世で最も相応しい人間であり、人の上に立つ事を決められている人間だ。

そんな雪ノ下陽乃と出会ったのは高二の春。

『超絶美少女新人生現る！』との題名が描かれた校内新聞を見て、興味

本位で見に行った時の事だった。

入学して間もないというのに、雪ノ下陽乃の人気は絶大だった。三年も二年も教室の入り口から覗き見したり、呼んできてもらったりして話しかけるといいう行為に出る始末で、雪ノ下つてのも大変だな。ぐらいいの感じだった。

どんなものかだけを見に来た俺は、そそくさと退散しようとしたその時に不意に雪ノ下と目があった。

その瞬間に、形容しがたいものを感じた。深い泥に沈んでいくような、仄暗い何かを感じ、俺は思わず、びくりと肩を震わせてしまった。今考えても、なかなかの変人だったと思う。

逃げるようにその場を離れた俺だったが……その後からだ。雪ノ下陽乃に付きまとわれるようになったのは。

よくもまあ、毎日来るなど言わんばかりに教室に来る。屋上に逃げた日にはクラスメイトに訴えかけて、学級裁判が起きた。完全無罪なのに有罪になった時は民主主義の横暴さを理解した。

その結果。学校にいる時はほぼ四六時中一緒にいる羽目になったのだが、その都度わかる事があった。

雪ノ下陽乃の一見完成されたように見えるものは確かに能力だが、人格的な部分は『万人ウケする為の』外面だということ。その実、いたずらとかちよつかいをかけるのが好きで気まぐれであることがわかり、雪ノ下陽乃といえるだけで神経をかなり使ったと言える。なんでご機嫌取りみたいなことするかって？そんなもん簡単だ。クラスに味方がいないからな。

そうして周囲を固められたものの、俺自身は決して雪ノ下陽乃に心を許したわけではなかった。

いや、寧ろより警戒していた。それに関しては雪ノ下も気づいていただろう。

だからこそその突然の行動だったのかもしれない。

俺を生徒会長なんてものをぶち込んだのは。

土壇場で生徒会長に立候補していることに気づいた俺は、すぐさま先生のところに行つて事情を説明された。要約すると『九条先輩が生

徒会長に立候補したいらしいので、私が応援演説を頼まれました」という俺の与り知らないところで雪ノ下が周囲に吹き込んでいたらしい。

当然、俺はそんな事を知らない。すぐに取り消そうとしてみたものの、先生が『お前を慕って、立候補してくれたんだから出るだけ出てみたらどうだ』と言われ、やむなく参加。結果として生徒会長になるに至った。

もう頭が痛い。出るだけ出てみるかで納得した俺を殴りたい。よくよく考えればわかることだ。雪ノ下が応援演説をしている時点で、当選必至という事を。

そこからはまあ……御察しの通りというやつだろう。

なつた以上、余程の理由がない限り辞めるとはできない。

俺はこの総武高校生徒会長として、やりたくもない事を一年間やらされる事になった。

それだけならまだいい。一年間、惰性になるがやってやる。

俺が文句を言いたいのは別のところにある。

「なんでいるんだよ……お前生徒会の人間じゃねえだろ……」

勝手に生徒会長に立候補させたやつが、よりにもよって生徒会役員ですらないという事だ！

ふざけてるとしか言いようがない。なんでこいつは一般生徒なんだよ！お前も生徒会やれや！役職持ちじゃなくていいから！

「いや、だってほら。私って、九条先輩の輝かしい経歴の立役者ですし。後、生徒会のマスコット……的なの？」

「誰が立役者だ誰が。人に面倒ごと押し付けた挙句とんずらしたかと思ったら、客ヅラして邪魔しに来てるだけだろ」

「邪魔だなんて酷いこと言わないでくださいよ。私がいたら暇なんてしないですよ？」

「暇はしないが、忙しけりやいいってもんじゃねえんだよ。つーか、敬語抜けてんぞ、一年生」

この雪ノ下。年上には基本的に敬語なくせに、どうにも俺と話してるときだけ敬語が抜ける時がある。気を許してるって事なのか、はたまた

た嘗められてるのか。友達だと思われてる……って事はないだろう。よくて暇つぶし要員ぐらいか。

「文句言いながら、ちゃんと紅茶淹れてくれるんですよー」

「お前が毎度毎度『喉渴きましたー』とかなんとか言うから癖になってんだよ」

てきぱきと、勝手に雪ノ下が持ち込んだカップにインスタントの紅茶を作って、注ぐ。こいつのせいで生徒会役員以外の人間が来ると、殆ど無意識のうちに紅茶を用意するという癖がついてしまった。まあ、そのせいか、俺を見てびびる人間も多少なり気を許してくれるわけだが。

「今日は九条先輩だけですか？」

「まあな。掃除は昨日したし、今日やる事ついたら、まとめた資料の再確認だけなんだが……その時に余った予算があるのがわかってな。その使い道を適当に考えとくぐらいでな」

生徒会つっても、毎日毎日集まって何かをやるわけではない。そんなにする事なんてねえし、やる事がない日は俺を含め、各々の日々を過ごしている。

先週から昨日にかけては年度末が近いって事もあり、三月の頭にある卒業式の準備やらに被らないようにする為にも、なるだけ早くやっておくかとの事で色々やった。

しかし、どうも手違いかミスがあったらしく、微妙に予算が余っちゃまったってわけだ。

余るに越した事はねえが、そうなるのと減らされる可能性もあるわけだし、今回たまたま余っただけでいざ減らしてみれば、足りなくなつたなんてのはお世辞にも笑えない。来年度には体育祭や文化祭もあるし。

「意外に真面目ですよ。そんな顔をして」

「おい。人を見かけで判断すんな。つーか、真面目にやらねえと結局俺が怒られるんだよ、生徒会長だから」

「トップは大変ですね」

「誰のせいでこんな事になったと思ってやがる……」

苛立ちを込めて言うものの、雪ノ下は大して気にする素振りを見せず、机にぐでつともたれかかる。まあ、こいつに皮肉や嫌味は通用しねえもんな。その癖本人のものは絶大だが。

「それで？その予算っていうのはどれぐらい余ってるんです？」

「何か特別な事ができるほど余っちゃいねえよ」

「何か適当に足りないものでも買い揃えればいいんじゃないですか？」

「それも考えたんだがな。どうも、それ込みで余ってるっぽい」

「じゃあ、お菓子買しましょう」

「お前はどんな高級菓子買うつもりだよ……つか、自分が欲しいからって経費で落とそうとしてんじゃねえよ……」

「あ、わかっちゃう？」

「当たり前だろ……後、また敬語抜けてんぞ」

雪ノ下が来る前と同じようにパイプ椅子に腰を下ろす。

どうしたもんか……やっぱ俺だけで考えるより他の役員にも考えてもらったほうがいいか……。え？雪ノ下？いや、論外。自分が楽しくないと全然やる気ねえから。

「そういや、なんでお前家帰らねえの？」

「それはもちろん。九条先輩に会いたかったからですよ♪」

きやるーん、と言わんばかりにいつも以上に猫撫で声全開で雪ノ下は言う。はいはい、可愛い可愛い。

「狙いすぎだ、馬鹿。それが通用すんのはお前を『生徒会に出入りする可愛く健気な先輩を慕う後輩』って勘違いしてる奴らだけだっつーの」

「やっぱり？でも、九条先輩に会いに来たのは本当ですよ？特にする事も無かったので、一緒に遊ぼうかと思って」

「そんなこったろうと思っただぜ」

もう納得。暇つぶし以外でここに来るって事はねえだろうな。それどころか、それ以外の理由で来たってのを聞いた事がねえ。

「友達と遊べばいいじゃねえか。お前に限って、ぼっちなんてことはねえだろ」

「九条先輩も友達ですよ?」

にぱつと笑ってそんな事を口にする雪ノ下。いやいや。俺がいつお前と友達になったんだっつーの。どう足掻いても先輩後輩の關係の域を出ないだろ。

「なんでだよ。友達以外の關係への改善を要求する」

「……じゃあ、恋人?」

「意味不明すぎるわ……」

なんで『じゃあ』が恋人になるんだよ。お前の中では友達よりも恋人の方が重要度が下回ってんのか。凄え価値観してるぞ。

「えー……もしかしたらあるかもしれないよ?私、九条先輩の事は普通に好きですもん。なんだかんだで甘やかしてくれるし。全然デレデレしないし」

「そりゃ、お前の本性知ってたらな。デレデレしねえよ。甘やかしてはねえ。そりゃ強制させてんだよ、お前が。それにな、お前と恋人になったらただの男避けかつどこでも暇つぶし要員になる未来しか見えねえよ」

なんとなく、そんな気がした。俺の平穩が害され、雪ノ下に振り回される日々が。そしてその被害者たちの尻拭いを俺がさせられてるような気が……うつ、頭が。

しかし、雪ノ下はわざとらしく頬を膨らませ、こちらを非難するような視線を送ってくる。

「そんな事しないもん。普通に甘えたりしますよ、多分」

「多分って言ってる時点でありえねえな」

「そんな事ないですつてば。お願いされたらハグくらいは許しましょう」

「……お前って意外すぎるくらいピュアなところあるよな」

こればかりは作ってないというか、雪ノ下は狙ったような言動をする割に本気でガードが固い。全然ボディータッチもするし、男心を弄ぶ癖に少女漫画かっつくくらいにガードがガチガチに固められている。それはその外面を抜きにしてもだ。まあ、普通にいいことだとは思うし、俺が唯一雪ノ下をからかう事ができる内容でもあるのでいいんだ

が。

「あ、今の私の事馬鹿にした？九条先輩の癖に？」

「癖には余計だ馬鹿。寧ろ褒めてんだよ。口先だけでもハグまでしか許さないお前のピュアなところは女としてはいいんじゃないやねえの。やるじゃねえか、素でも作っても騙せて」

「……九条先輩って、何気に酷くないですか？こんな可愛い後輩捕まえて」

「酷くねえよ。日頃されてることに比べればな」

第一、見た目しか可愛くない後輩は必要ねえの。俺にひたすら迷惑かけてくるような自分第一で動いてる人間の完成系みたいなやつは尚更。

「むう………私だって、その気になればキスぐらいできるもん」

「ほお………出来るもんならやってみな。有言実行がモットーなんだろう、学校の人気者さん？」

つつても、ここに雪ノ下の恋人はいないわけだし、かといって好きな人間もない。ハグならまだしも、流石にキスに関して言えばすぐに見れたもんじゃ………ん？

ちよんちよん、と雪ノ下に肩をつつかれ、そちらを見る。

「……その………ちよつと、立ってくださると………ありがたいというか………さつきと立てといますか………」

ややうつむき気味の様相で、ぽしよぽしよと雪ノ下は言う。さつきから敬語とタメ口が混同してんな、こいつ。まあ、今に始まったことじゃねえし、仕方ねえから立つか。

「立ったぞ。で？なんだよ」

「顔の角度は下に、あ、後目は瞑ってくれた方が気まずさも無くていい………かな？」

「？おう。わかった」

何もわかってません。何もわからずにやらされるのも今に始まった事ではない。だが、目を閉じなければいけないので、もしかしたら驚かせる系の悪戯でも仕掛けてくるのかもしれない。

一瞬、ぐいつと襟を引っ張られる。

俺は突然のことに半ば反射的に後ろに仰け反る……が、引つ張られると仰け反るといふ真反対の行為でバランスを崩して、後ろに倒れた。パイプ椅子の方に倒れなかったのは奇跡だ。机の方にもな。

「痛ってえ……お前何やって」

抗議をしようと目をあけると、すぐそこには雪ノ下の顔があつた。目と鼻の先、少しでも動けば触れてしまいそうな程の距離で雪ノ下は静止していた。

「九条先輩……」

ほんのりと頬を赤く染め、雪ノ下の僅かに潤んだ瞳が俺の目と交差する。

……なんだこれ。どんなラブコメ展開だよ。

ちよつといい匂いするし、そんな初々しい反応されると、例え嘘だとわかっていても、ドキドキするんですが。そして何故か顔を背けるのはマズい気がするのは何故だ。

無言で視線を交わすこと数秒。

一層雪ノ下の顔に赤みが差し、ゆつくりと目を閉じたその時。

「ちーっす、九条。用事終わったかー」

ガラガラツと扉が開かれ、入ってきたのは声から察するに今日遊ぶ約束をしていた友達の一人だ。つーか、完全に忘れてた……！

「雪ノ下、ちよつと伏せてろ……！」

この状態を見られるのはマズい。

ただでさえ、『デキてるんじゃないか』とありえない噂が広がってるつてのに。もしこんなところ見られたら、確実にアウトだ。

ほぼ密着状態だった距離を抱き寄せて、辛うじて死角になっている長机に身を隠す。頼むから、探そうとしてくれるなよ……！割と捨て身で隠れてるんだからよ！

「あつれ？あいつ生徒会室にいるつて言ってたよな……職員室にでも行ったのか？」

！
そういう事にしておいてくれ！つーか、とつとどっか行ってくれ

「……ま、いつか。多分すぐに帰ってくるだろうし。探しに行くの面

倒だし、待……ん？」

俺の祈りとか願いは全く通じず、そいつはこっちに歩いてきて………目があつた。

「な、な、な………」

「よ、よう」

「お、おま、お前………それ雪ノ下さん………だよな？」

「待て、勘違いするな！早まるな！これは断じて事故であつて、お前が思つてるようなやましい事はー」

「一人で済ませるなんて珍しく殊勝なこと言つてると思つたら、連れ込んでいちゃいちゃしやがって！死んじまえ、ちくしょー！」

説得虚しく、そいつは悔し涙を流して走り去ってしまった。

お、終わった………言い訳のしようがないシーンを見られちゃった。

「最悪だ………これ、明日から学校来れねえぞ………」

「どういう意味です、それ………」

「………言葉通りなんだが？」

深く考えるでもなく、明日から俺が何と言われるか想像に難くない。元からグレー扱いだつたわけだから、これで完全に黒。駄目だこりや。

「無理矢理に抱いたのに？」

「おい、その言い方語弊があり過ぎるだろ。聞く人間によりや俺性犯罪者扱いだぞ」

「きゃー、襲われるー」

「棒読みすぎてツツコむ気にもならねえよ………」

さつきまでの言い知れない緊張感は何処へやら。空気が先程のようになんてなつたものへと戻っていた。

しかし………これ本当にどうすりゃいいよ。俺の命日明日じゃねえの？

「つーか、そろそろどけよ」

「えー、まさかこんな弱い女の子を捕まえて、『重い』なんていうつもりじゃないですよね？」

「いや、それはねえけどさ………色々、困るつーか………」

見てくれがいいってことは、その体つきも尋常ではないってこと。こいつ顔もスタイルも抜群だからな、ちくしょう。乗つかられてるとこう……本当に困る。

雪ノ下はきよとんと首を傾げたものの、すぐにその意味を理解したらしい。にやにやと実に底意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「何が、どう、困るんですか〜?」

体をより一層押し付けてくる雪ノ下。ああ、くそつ。柔らかいのが当たってんだけど。男だから嬉しいけど、雪ノ下だって考えるとその嬉しさが微妙に腹立つんですけど!

「ちつ……わかったよ。俺の負けだ。だからどけ」

はあ、と溜息を吐き、そう告げるものの、雪ノ下はなおも体を密着させたままだった。

「え〜?何のことかわからないなあ」

「調子乗んな、馬鹿」

「あうつ」

びしつとデコピンをかますと、雪ノ下は小さく悲鳴を上げる。あうつ、ってなんだ。悲鳴まであざといぞこいつ。

「痛いんですけど……普通、女の子にデコピンとかする?」

「お前が調子に乗るからだ。拳骨じゃなかっただけありがたく思え」

「流石に九条先輩の拳骨は女の子にするものじゃないと思いますけど……」

立ち上がって額をさすりながら、文句を垂れる雪ノ下を一蹴し、軽く服を払う。

因みに俺の拳骨。どういうわけか、周りの奴らには罰ゲームの一つとして認識されている。なんでも『身長が三センチぐらい物理的に縮む』と言われている。んなわけあるか。どんな威力だ。

……なんか、こいつといると本当に精神的に疲れるな。

ただでさえ、余った予算はどうしたもんかと考えてたつてのに、それとは別の悩み事を増やされちゃったわけだから、尚更。明日から全面警戒で学校生活送らねえといけないんだけど。

……よし。決めた。今日は帰る。もう余った予算の使い道はみん

なで相談。それがいい。

「つーわけで、外に出ろ。雪ノ下」

「何がどういうわけですか？」

「帰るんだよ。疲れたし、考える気も起きねえから明日全員集めて適当に予算の使い道決める」

生徒会室の隅に置いてあった鞆を持ち、その上に置いてあった鍵を掴み取る。

雪ノ下はというと、カップを持って、ぱたぱたと生徒会室の外に出た。多分、洗いに行ったんだろう。てつきり『水冷たいし、洗って下さいよ』ぐらいは言われるかと思ってたが、今日はそういう気分だったのか？

そんな事を思いつつ、雪ノ下を待つ。

ぶつちやけ雪ノ下の鞆を外に出して、戸締りしたいところなんだが、そうなるかとカップの方が中に置けなくなる。あいつの私物だし、どうでもいいんだけど。文句言われるの嫌だし。

少し待つと雪ノ下が帰ってきて、元々置いてあった場所（勝手に雪ノ下が決めた）に置いた後、こつちに向かって、少し駆け足で寄ってきて……俺の頬に伸ばしてきた両手を掴んだ。

「……何やろうとしてんだ」

「いや、手が冷たくなったので、九条先輩のほつぺた温かそうだし、あつためてもらおうと」

「ぶぎけんな。俺のほつぺたの方が冷たくなんだろ」

「むう……じゃあ、手で譲歩してあげます。九条先輩って手もあつたかいし」

「なんで俺が譲歩されてる側なんだよ……まあ、そっちの方がマシなことにはマシだけだよ」

断ると背中に手を突っ込まれたりしそうなので、仕方なく手を差し出すと、ひんやりとした柔らかい手に包まれる。つーか、冷た過ぎるだろ。

「さっさと帰るぞ。どうせ、今日も送ってけとか言うんだろ」

「話が早くて助かります」

「生憎と学習能力は高いもんでな」

「うー、寒」

「雪まで降り始めましたよ……」

凍えるような寒さに身をぶるりと震わせ、しんしんと降る雪を恨めしげに見やる。

千葉は雪自体さして降らないと聞いていたし、去年も今年も滅多に降らなかったが……何故よりにもよって今日降る。しかも帰りに合わせて。

こんな中、俺が雪ノ下の手を温めるために手を握る必要も効果もなく、手袋をはめ、マフラーを巻き、防寒着として持つてきていたコートを着るといふ大体完璧な防御で寒空の下を歩いていた。

雪ノ下はというと、俺同様に手袋、マフラー、コートの三つで防御を固めてはいるものの、スカートであるため、足はとても寒そうだ。この寒さでニーソックスなんてモノは焼け石に水。かといって、ジャージを履くなんて選択肢はおしゃれ優先型の女子にあるわけもなし。俺にはいまいち機能よりも見た目を重視する人間の感性が理解できないが、特に人に迷惑をかけているわけでもないのです、そこにはつつこまない。

「九条先輩。寒い」

「そうだな」

「そうだな……じゃないですよ。『俺があつたためてやるよ』ぐらいは言ってくださいよ」

「やだよ。寧ろ俺があつたためて欲しいんだけど」

純然たる事実。つーか、本音。雪ノ下をあつたためる前に俺があつたためて欲しい。防寒対策をしていても、雪が降ってりゃ、まあ寒い。

だって雪降ってるし。

「はあ……変なところで女々しいんだから」

「うるせえ。自然現象の前には俺達人間は無力なんだよ」

対策は出来ても撃退なんてできるはずもない。だからこそ人間は天災を恐れるというものだ。まあ、寒さに関しては天災でもなんでもないし、それどころか俺の横にいるこいつの方が天災っぽい気がするんだが。抗えない脅威って辺りが。

と、その時不意に雪ノ下がこちらに寄ってくる。

ギリギリどころか、ほとんど密着状態。雪ノ下の肩が時折、俺の二の腕の辺りに当たる。

「……今度はなんだよ」

「寒いなら固まればあつたかくなるかなー、的なの？」

「普通に歩きづれえから。また暇つぶしに嫌がらせしてきてんのかと思っただ」

「しませんよ。九条先輩は私の事を何だと思ってるの？」

「……………面倒くさい後輩」

「それだけ考えた上でそこに落ち着いたんだ……」

言葉を選んでも、結局行き着いたのは大体そんなところだった。雪ノ下は面倒くさい。大体何をするにしても怠い。出来れば誰かに投げたい。けど、それはそれで俺が逃げたみたいで気に食わないので絶対に言わない。雪ノ下の方が諦めるまで、俺は諦めない。

「はあ……まあ、いつか。そんなこと言ってくるのは九条先輩ぐらいだし。なんだかんだ言っても、面倒見てくださいし」

俺が目を離したら、お前好き勝手やるだろ。後で事態の收拾に回るのが俺だぞ。なら、最初から取り返しがつかなくならないように見張るのが妥当だろ。

そう言っただけでやりたいところだが、これを言うと、俺の見えないところで何かをしでかす気がする。つか、やりやがった。前科持ちだ。「ところで九条先輩。そろそろバレンタインが近いですね」

「そういや、そうだな。つってもまだ日はあると思うし、俺は関係ねえけど」

「へ？なんでですか？」

雪ノ下にしては、珍しく素でそんな事を聞いてきた。いや、普通に考えなくてもわかるだろ……それとも何？世の中にはバレンタインと無縁の男子がいるはずがないとでも思ってたんの、こいつ。

「モテないからだよ。それぐらい気づくだろう」

「またまたあ。九条先輩がモテないわけないじゃないですか」

「なんでだよ。現に告白された事はねえし、去年一応チョコもらったけど『義理だからー』って念押しされるぐらいだぞ？」

「……あー、それはなんとというか、ご愁傷様です………お相手の方が」

「いや、そこは俺だろ」

全力で本命の可能性を絶たれたせいで、淡い希望すら抱かなかつた。もう三人目ぐらいから『あー、はいはい。義理なんだろ義理』ともう投げやりだった。

「因みにその『義理チョコ』は何個ほど？」

「何個だったっけか………十個ぐらい？返すのすっげー面倒くさかった」

「意外。本命じゃないから返さないかと思ってましたけど……」

「義理でも一応な。貰いもんだし、返した方がいいだろ」

あつちも雪ノ下と同じ考えだったのか、返した時は喜ばれたな。おかげで三月に出る新作ゲームを翌月に見送る事になって、涙ながらの購入だったから、俺としては喜んでもらえて何よりだったけど。

「そういうところ、義理堅いですよね。九条先輩は」

「まあ、うちは義理と人情を大切にしないきややっていけない家業だしな。俺もそういうものは大切にしていんだよ」

だから、どれだけ見え透いた下心があっても、一応俺に対して何かしら贈り物をされるようならお返しはするし、助けてもらったら助け返す。幸いにも、うちの高校は不良っぽいやつはいないので、俺に貸しを作って喧嘩の助っ人やらせようなんてやつはいない。中学の時は何回かやらされたもんだが、それは地元での話。ここに来てからはもうない。

と、雪ノ下は一瞬顎に手を当てて、思案する素振りを見せてから、無言で自分を指差す。

「どうやら『自分はどうかなのか?』と聞きたいらしい。

俺も俺で、少し考えてみる。

この面倒くさい後輩に対し、義理や人情といったものが存在するか否か。

理由不明のまま生徒会長に祭り上げ、自分は部外者として出入りし、仕事中でも関係なく構ってくる。最近一人暮らしを始めたところで帰り道が同じになり、通学さえも時々被るし、休みの日なんかには二週間に一回ぐらいのペースで連れ回される。

「まあ……そうだな。だいたい面倒くせえけど、お前もアレだ。一応可愛い後輩だしな。頼られたら助けるし、借りは返す。だから本気で困ったら迷わず俺のところに来ていいぜ。暇つぶし以外で」

「……………最後のが無かったら、口説き文句としては完璧だったのに」
ぽんぽんと頭を撫でてやると、もによもによと雪ノ下がマフラーに顔を埋めて呟く。断片的にしか聞き取れなかったが、どうせ『かつこつけすぎ』とかそういうのだろう。心なしか顔が赤いが、大丈夫か? 早めに帰らねえと流石にこいつでも風邪引きそうだな。

「……………ほん。それはそうと、九条先輩。今年のバレンタイン。日頃の感……暇つぶしのお礼を兼ねて、九条先輩にもあげようかと思ってるんだけど、甘いのと苦いのどっちがいい、ですか?」

気を取り直すように一つ咳払いをして、雪ノ下が問いかけてくる。「ちよつと苦いぐらいがいいな。後、普通に日頃の感謝って言えねえのか、お前」

「それはまあ……感謝よりもお礼の方が合ってるかと」

「……………そう言われれば、そんな気がしなくもねえな」

まあ、バレンタインのシステムを考えるとそっちの方が合ってるよ
うな気がしなくもないが、理由が『暇つぶしの』とつくのは如何なもの
だろうか。普通に日頃のお礼じゃ駄目なのか?

そこから会話が一旦途切れ、無言の時間に入る。

俺と雪ノ下との間では特に珍しくない。大体は話題提供者が雪ノ

下なのだが、その代わりに雪ノ下が一度黙ってしまうと会話が途切れる。もちろん、俺からも話題提供をする事もあるが、今は特にならない。ただ、無言の時間が続く。

しかし、これもそこまで悪いものではない。別段気まずいわけではないし、気を使う必要性もない。俺と雪ノ下だから、といえはなんだかカップルのように聞こえなくもないが、決してそういう意味ではない。気兼ねしないいい間柄。特別親しいわけでもないが、気を許せない相手でもないということだ。実に微妙な立ち位置である。

そうして歩いていくうちに、別れの時間が近づいてきた。

と言っても、単に分かれ道に入るだけの話だ。別に俺と雪ノ下の家が隣同士にあるわけでもないしな。暗かったら送っていくが、今日はまだ日が沈んでない。ましてや、合気道を嗜んでいる雪ノ下なら、悪漢の一人ぐらい瞬殺だろう。

「じゃあな。気をつけて帰れよ」

「はい。九条先輩も悪漢に間違われないように気をつけて帰ってくださいね」

「どんな気をつけ方だよ」

相変わらず一言多い事で。俺はそんなにヤンキーみたいな顔も格好もしてないし、かといって変質者っぽくもないっつーのに。

つつても、ここで言い返したらまた話が長くなりそうなので、俺はあえてその言葉を心の中に留め、足を自分の家に向け、雪ノ下も同様に自分の家の方にー。

どんっ。

いきなり背中に誰かが飛びついてきた。

いや、誰なのかなんて火を見るよりも明らかなんだけどな。

「なんだよ」

「いえ。そういえば一つだけ、言い忘れていたことがあったので」

「はあ？」

「ー?!バレンタイン。楽しみにしててくださいいねっ♪」

「っ?!?!」

ふと耳元で呟かれた言葉に思わず、俺は振り返るものの、既に雪ノ

下は俺から離れていて、いつも通りの笑顔でこちらに手を振るだけだった。

……全く。

この後輩はどこまで男心を揺さぶるのに長けているのか。

俺じや無かったら、絶対に期待してるぞ。今の一言は確実に勘違いを引き寄せる要因になる。しかし、それをわかってやっているのだからチが悪い。

まあ、俺はこう見えても人を見るっつーことには一日の長があるわけだし？雪ノ下の本心と建前ぐらい余裕でとまでは言わないが、ある程度わかる。

………わかるんだが。

「さっきのアレは反則だろ。せめて義理だから、ぐらいは言えっつーの」

ものの見事に惑わされていた。

今日も、うちの後輩は性格が悪い。

だから私の先輩は優しくくない

「雪ノ下あああ！出てこ！おおおいい！」

大声で私の名前を呼びながら廊下を駆け回るのは、一つ上の先輩で現在の総武高校生徒会長の九条景虎先輩。

私を唯一特別扱いしない人で、今もちよつと悪戯をして、追いかけて回されていたりする。多分、こんな事をしてくるのはあの人だけで、毎回それが少しだけ嬉しくてちよつかいを出してしまう。

私と九条先輩の出会いが特別でもなんでもなかった。

入学して間もない頃から、私はとにかく目立っていた。

自分で言うのもなんだけど、頭は良いし、運動もできる。見た目もアイドル顔負けで何年もかけて作った外用の顔は誰にも見抜かれるはずがないくらいに完璧で、男には好かれるけどなんてことはなく、男女問わず人気を集めていた。

正直な話、それは小学校の頃からそうで、そこには絶対的な自信があったし、見抜けないのも当然だと、私は思っていた。意図的に見せなければ、気づくような人なんていないと。

だから、私は九条先輩を見たときに酷く驚いたのを自分でも覚えてる。

私を見た瞬間に、まるで見てはいけないものでも見てしまったかのようなリアクションを取って、その場からそそくさと離れていく。

決して目が合って照れ臭いから、なんて甘い感じのものじゃない。

普通に振舞っていたのに、私は完璧にとまでは言わないまでも、仮面の下にある私を見られた。

私には何の落ち度もない。どれだけ人気を集め、多くの人から好奇の目に晒されても、気疲れなんてしないし、ずっと維持できる自信がある。

だから、私が九条先輩に感じたのは……まず嬉しさだった。

退屈しそうな生活に、突然舞い込んだ幸運。

私はその日から、九条先輩の教室に足繁く通う事にした。まずは、九条先輩がどんな人間なのかを知るために。人からの情報ではなく、

私の目と耳で得た情報で。

初めて教室に行った日は、早々に全力警戒モードで私を見ていて、その反応に私はより一層嬉しきさを感じてしまった。

わかるんだ、この人には。

理由はどうであれ、私という人間がどんなモノなのかを。

その日からずっと一緒だった。

ご飯を食べる時は一緒。休み時間も階層が一つ違うだけだから突撃し、逃げた時はクラスの人たちに働きかけて、逃げられないように空気を作った。数の暴力とか、人を味方につけるのは私にとっては朝飯前。アイドル扱いを受けている私に少しでも好かれようと無茶な事以外は大体聞いてくれる。

九条先輩も、最初は逃げたり面倒くさがったりしていたのに、途中から待ち構えるようになった。それは可愛い後輩を待つ姿勢じゃないけれど、逃げる事を諦めてくれたのは楽で良かったし、あの人のやりとりはとても新鮮だった。

だから、あまり人目を憚らずに行動を起こしてしまう。

先輩はどれだけ怒っても決して突き放さないし、かといって私を甘やかしたりするわけでも、まして好意を抱いてくれてくれるわけでもない。それはわかってはいるし、隠すのが上手いのかと一度カマをかけてみたら真顔で『頭大丈夫か？』って言われた。多分、私の人生である屈辱を浴びせられる事なんてもうない。なので、その後でちゃんと悪戯の度合いを上げたりもした。

そんな私達の関係を言葉で表すのは簡単そうで難しい。

でも、第三者の視点にいるクラスメイトや他の先輩方の中では確立しているらしく、この光景を見るたびに呆れたような、それでいて微笑ましいものを見るかのような視線を送ってくる。私はそれを計算して行っているわけじゃないけれど、これはこれで都合なので、その通りに振る舞う。

……九条先輩の声もそろそろ聞こえなくなってきた。

そーっと、教室から顔を出して、周囲を確認ー。

「捕まえたぜ、雪ノ下」

しようとしたら、力任せに服の襟を掴まれ、引つ張りだされた。私を相手にこんな力技に訴えてくるのは、やはり一人しかいない。

「あ、あれー？いたんですか、九条先輩？声が聞こえなくなったと思っただんで、てつきり帰ったのかと……」

「そう思わせるのが俺の作戦だ。毎度毎度同じ手は食わねえよ」

「流石は九条先輩。惚れ惚れしますね！」

「逃げるために口先だけで褒めてんじゃねえ。今日という今日は、お前にはきつちり今までの分を働いて返してもらわねえとな」

凶悪な笑みを浮かべていう九条先輩。因みにこれが本人的には威嚇するつもりもなく、普通の笑顔らしい。相変わらず怖い。もつと普通に、自然に笑えないのかなと思う。

「そんな……体で返せなんて……九条先輩鬼畜過ぎます」

多分、普通に生徒会の仕事を手伝って意味なんだろうけど、私は面倒だからしたくない。あそこに行くのは遊びに行く時だけだから。

「おい、やめろ。語弊のある言い方すんな。普通に手伝えよ」

「前もあんなに乱暴にしたのに……」

九条先輩ってば、私が優秀なのをいい事にこき使おうとするから、何が何でも手伝いたくない。

「だから、やめろつつつてんだろ。周りの俺を見る目が凄いいことになつてんだろうが」

確かに周りの九条先輩を見る目が、まるで犯罪者を見るかのようなものになっていた。これも割といつもの事。別にみんな本気にしてるわけじゃない。九条先輩は見た目はちよつとアレだし、言葉遣いも悪いけれど、基本的に良い人だと九条先輩のクラスメイトはいつていたし、それが作っているものじゃないのは私も知っている。

裏表がない、なんて事はないんだと思う。そんな人間は世の中にいない事は私もよく知っている。人間は打算的で利己的な生き物だし、損得感情で動く。ロボットと違うとするならそこに喜怒哀楽の感情があるかないかぐらい。ただ、九条先輩の場合はどうも違うみたい。頭は良いのに、打算も何も抜きにして、『筋が通るか否か』にかかっている。まるで一世代前の不良や極道のようなだった。

そんな性格だからか、この人は密かにモテる。男女関わらず。本人は全く気付いていないけど、生徒会長になれたのは私が応援演説をした事もあるかもしれないけれど、元々ごく一部を除いては好まれる性格をしているから、好かれている。

おそらく、私もー。

「おい、雪ノ下。人の話聞いてんのか」

「へ？」

「呆けた声出すなよ。そら、行くぞ」

そう言つて、九条先輩は手を離れた。逃げようと思えば逃げられるけど、その時は割と容赦ない罰が待っている。一回逃げようとした時があつたけど、その時はすぐに捕まって、拳骨が落ちてきた。あれは本当に痛かつた。その時はしばらくうずくまっていた。

駆け足で九条先輩の横につく。

最初の頃は一步距離をあけられたりしていた。今は普通に横を歩いていられる。流石に抱きついたりしたら、嫌がられるけど、無理矢理剥がされる事はないので、多分嫌われてはいないと思う。この人は、いまいち掴めないところがあるから、よくはわからないけど……。

そう考えるとなんだか釈然としない。

私は九条先輩を困らせる立場ではあるけれど、九条先輩に悩ませられる立場ではないはずだ。そういうのは私の性に合わない。

「というわけで、この辺りで一つ。私と九条先輩の立ち位置をはつきりさせておいた方がいいかもしれませんね」

「はあ？いや、もうはつきりしてんだろ。俺先輩で、お前後輩。それ以上何があるよ」

「あります。大有りですよ。私の性格考えてみて。今の関係はおかしいと思わない？」

「わけわかんねえ……っーか、タメ口やめろ。敬語使えよ、後輩」

そういうわけで急遽予定を変更し、私達は生徒会の仕事を他の役員さんに全投げして、制服デートを敢行する事にした。

九条先輩は何気に真面目で律儀なので、仕事が終わってからと言っていたけれど、他の役員さんは私の意図を察してくれたのか、笑顔で許可を出してくれた。その代わりにこの制服デートで何があったのかを話さないといけなくなったわけだけれど。

「別にいいじゃないですか。今はほら、学校の外ですし。デートですよ？」

「公私は分けろってか？……まあ、一理なくはないんだが……」

顎に手を当てて、九条先輩は考え込んだ。

私としては別に公私を分けてという意味で言っただけでもないんだけど……別にいいかな。敬語じゃない方がまた一歩近づいた気がするし。

「……わかったよ。ただ、学校じゃ敬語使えよ。学校でも普通にタメ口だと絶対に勘繰られるからな」

「えー、私じゃ不満なの？こんな可愛い女の子。そうそういないと思うけど」

「てめえで言うか……否定はできねえけどよ」

自分の容姿には自信がある。妹の雪乃ちゃんはともかくとして、その辺の子には負けない自信が私にはある。人の好みはそれぞれなので、絶対に万人を振り向かせられるとまでは言えないけれど、大抵の人なら振り向かせられる。

「で、何処に行くんだ？言い出したんだから、候補はあるんだろ？」

「えーと……カラオケ、ゲームセンター、ボウリングとか、その他諸々」
「見事に遊んでばっかだな」

「それはもちろん。映画とかだとそれでお終いになっちゃおうし」
休日にデートするならそれでいいけれど、今は放課後にデート。時間にあまり猶予はない。近場で済ませようとしたら、大体これぐらいになる。

「雪ノ下はどれがいいんだ？」

「うーん……九条先輩の歌を聞いてみたいっていうのもあるけど、一緒にボウリングもしてみたいし……よし、両方にしよう！」

「全然悩まねえな」

「ほら、悩むだけ時間が無駄だから。両方二時間ぐらいに分けたら大丈夫」

一人暮らしじゃないと出来なかった事だ。いくら今日は少し学校が終わるのが早かったと言っても、私の家は門限が厳しい。というよりも、お母さんが厳しい。本当に色んな意味で。

だから、高校生のうちに二人で男の人と遊びに行くのなんて絶対に許さないだろうし、七時を超えたら血眼になって探しに来るかもしれない。親バカ……で済むならどれほどよかったか。

「時間も限られてるし、さっさと行くぞ。雪ノ下」

「あ、ストップ。九条先輩」

歩き出した九条先輩を呼び止め、私はその腕を取り、手を握り、指を絡める。

「……何？」

「デートだから。恋人繋ぎ……的なの？」

「的なじゃねえよ、馬鹿野郎……」

私が笑顔で言うと、九条先輩はそっぽを向いた。ちよつと耳が赤いのが照れてる証拠。よし、開始からすぐに私が一歩リードしている感じになった。やっぱりこうでない。年上だから、という理由で精神的優位に立たれるのは実に私らしくない。

それに……嫌がられてない事は、ちよつとだけ嬉しい。

はたして、この光景を見て、何人の人が私達をカップルだと勘違い

するだろう。兄妹とは絶対に思わないだろうし、ひよつとしたら従兄弟かと勘違いする人はいるかもしれない。

でも、大体の人は高校生カップルと勘違い……しないかもしれない。

九条先輩の顔がちよつとアレだった。

嫌がってはいないけど、うんざりしている。というか、目が急速に死んできている。

おそらく、これを総武高校の生徒に見られたら、煽られるからだろう。前にその光景を見たら、九条先輩の顔は死んでいた。因みに原因は私だけだ。

この顔を見たら、きつと後輩に振り回されている先輩という真実にあつさりと気づく人はいるかも。

「まあまあ。そんな顔しないで、九条先輩♪きつと悪いようにはならないと思うから」

「……そりゃな。お前にとってはならねえんじゃねえの」

「ほいっつと」

大きく振りかぶって、ボウリングボールを投げる。

きつちりポケットに。寸分のブレもなく、進んでいき、全てのピンを倒す。

よし、これで七回連続ストライク。久しぶりだったから、出来るか分からなかったけれど、流石私。感覚は忘れていなかったみたい。

「七回連続ストライクとか……何お前。ボウリングマスターか何か？」

「マスターじゃないよ。偶々偶々♪」

「その割に気分がいい事で。一緒にさせられてる俺の身にもなつてくれ」

がくりと肩を落とす九条先輩。

別に九条先輩が下手というわけじゃない。寧ろ、それなりに出来る方なんじゃないかと思う。単に私と一緒にしてるから、いまいちなように見えるだけで。

もつとも、九条先輩が肩を落としてるのは、他のお客さんが私達を見て、『彼女にボコボコにされている彼氏』と憐れみの視線が送られてくる事だろう。全員がそういうわけじゃないけど、それが時々というのが、尚の事、九条先輩にダメージを与えていた。

「どうする？・別のにする？・卓球とか」

「いや、いい。いくらお前がボウリングマスターつっても、一方的にやられてるだけじゃ俺の気が済まん。時間いっぱいまでやるぞ」

「それは別にいいけど……」

この人、気づいてるのかな。

私がミスしないって事は、引き分けはあつても勝ちはないって事なんだけど……。

ま、いつか。別に今回はゲームの勝敗は大して関係ー。

「なんかあつたほうが面白いな……よし。じゃあ、勝つたほうが負けたほうに命令できるってのはどうだ」

「乗った」

ーなくはなかった。

これは負けられない。

一度ゲームをリセットして、新しくゲームを始める。

なんといつても、あの九条先輩に命令できるわけなんだから。

基本的に私のやることなす事ノリノリだったり嫌々だったり気分こそ様々であるけど、付き合ってくれる。流石に人に迷惑をかけるような事は止められるけど、そんな九条先輩に何でも命令……あれ？これ、する意味あるの？

ボウリングボールを投げる瞬間、そんな事が脳裏をよぎった為に、

手元が狂い、ボウリングボールは全てのピンを倒し切る事ができず、三本残してしまった。

「おっ、どうした。雪ノ下。賭け事になると手元が狂うのか？」

私がミスした事でやや安心した感じの九条先輩に私は言う。

「九条先輩。何でも命令できるっていうのは、際限なくって事ですか？」

「ん？いや、流石に際限なくはねえな。まあ、人様に迷惑かけなきやいいけどな」

「そこに九条先輩は含まれる？」

「いいや。それ含んでたら賭けにならねえし」

確かにそれはそうだ。

賭けをしている相手の事も考えてあげるのは、白けてしまう。九条先輩が言っていることはもつともだ。

……けど、うん。

余計に勝たなくてはいけなくなってしまった。

つまり、九条先輩相手に収まるなら本当にどんなお願いでもしているという事になる。そして、私としては今日の目的を鑑みても、それ以上の報酬は必要ない。

踵を返し、倒し損ねたピンをさくつと倒す。これでスぺア。始まってすぐにミスをしたのはらしくなかったけど、大丈夫。ここからはさっきのようなミスはない。

「次は俺の番だな」

意気揚々と立ち上がった九条先輩は私の投げたものよりも二回りほど大きいボウリングボールを持ち、綺麗なフォームでボウリングボールを投げる。

軌道も悪くない。これはストライクかな……と思っていたけれど。

「……マジか」

「はー、これはまた綺麗に残ったね」

絶妙に両端だけが残ってしまった。

倒す方法がないわけではないけど……流石に無理と思う。

案の定、九条先輩は無理だと判断して片方だけ倒しに……あ、外

した。

「……一応聞くけど、本当に賭けする？」

「お、男が一回言い出した事を取り下げられっか」

そういう割に声が引き攣っていた。男の人って本当に大変だなんて時々思う。女と違って、意地とか矜持とかが色んなものについて回ってくる。もちろん、女にそれがないわけじゃないけど、こういう場でも取り下げもマイナスになる事はない。

「まあ、別に私はいいんだけど。どんな命令しよつかなく♪」

鼻歌交じりに、私は二投目に臨んだ。

結果、当然のごとく、私は圧勝した。

スコアが開くたびに静かに絶望し、悟っていく九条先輩の様子がとても面白くて、リベンジのたびに九条先輩の表情が死んでいった。

その後に行ったカラオケですぐにテンションがハイになったものの、それも終わってみれば、普段のテンションに元通りになった。

因みに九条先輩は意外とラブソングの選曲が多かった。てつきりロックとかが好きだと思っていたけど、曲の半分くらいがラブソングだったと思う。これが普通の男子なら遠回しにアプローチしてきてるんだろうなあと感じるけど、九条先輩は無自覚かつ歌いたいから歌うだけなので、全く勘違いできる要素もない。なので、そこに関しては茶化しても全然堪えてくれない。おまけに採点したら、すつごく点数良かったし。

でも、気を遣わないという点に関しては、九条先輩がこういう人で良かったと思う。九条先輩は私の事を全然気を遣ってないとか、人の事を考えてないとか言うけど、人の事を考えてなかったら、そもそも

私の周りは凄いいことになってたと思う。修羅場なんて言葉じゃ足りないくらい。

だから、この人という時間は一人でいる時と変わらないくらいに心が休まる。

……ていっても、一体どういう解釈をされるかわからないけど。きつと『いや、俺にも気遣えよ。年上だぞ。先輩だぞ。もつと敬え』なんて。これでも九条先輩の事は敬っている。私にもない物をこの人は持っているから。

「今日は楽しかった。九条先輩はどうだった？」

「……まあ、ぼちぼちな。当初予定してなかった精神的疲労と遊んだ事によるストレス発散でとんとんってとこだな」

「……あの、今回割と私大人しかったと思うんですけど」

思わず、素でそう返してしまった。

いつもならともかく、今回はかなり大人しかったと思う。だって、全然振り回してないし。寧ろ、精神的疲労は九条先輩の自滅が原因なんじゃ……。

「ああ。確かに今回は大人しかった。なんならずと大人しい方が良いに決まってるんだが、逆に大人しすぎて何か企んでるんじゃないかって気が気がじゃなかった」

「だって、普通に楽しかったんですから。っていうか、大人しくても疲れるって、もう私どうすれば良いんですか」

わざわざ九条先輩の前まで猫をかぶると言うか、求められるがままを振舞うのは私は嫌だ。かといって、今日のような日に楽しい空気を自らぶち壊していく趣味もない。私がそういう事をするのは、そっちの方が面白いからか、私が楽しくない時だけ。そのどちらにも当てはまらない今日の日にはそんなことをする必要はない。

私の問いかけに、九条先輩はガシガシと居心地が悪そうに頭をかけた後、顔をそらして、ぼつりと言う。

「だからまあ……いつも通りの方がしっくり来るっつーだけだ」

「九条先輩」

「……なんだよ」

「照れてます?」

「照れてねーよ」

「じゃあ、こつち向いてください」

「断る。今日寝違えて、首痛えから」

その言い訳はとても無理がある。さつきまでこつちに普通に向いてたし。

でも、これはこれで悪くない。照れる九条先輩と、それを見る私。こういう構図は他の男子が相手なら、割とよくある事だけど、九条先輩相手ともなると、滅多に見られない光景だ。私と九条先輩の関係は一見私優位の関係に見えて、その実対等か或いは九条先輩の方が有利だったりする。それを、九条先輩当人は全く知らないし、それどころか知ってるのは私ぐらいだと思うけど、こうして私が優位な立ち位置にいられるのは、それはそれで気分が良い。別に万人を従えたいとか、誰も私の上に立たせたくないとまでは言わないけど、やっぱりこの方がしつくり来る。

「別に良いんですけどねー。九条先輩のそういうところ、私は好きですよ」

「うっせ。俺はお前のそういうところが嫌いだっつーの」

「えー? どういうところですかー?」

「猫撫で声がうぜえ……っーか、話し方元に戻ってんぞ」

「あ、そうですね」

「そうですね、じゃねえよ。素でも全然喋れるじゃねえか。どこのどいつだ。気を許したら敬語が抜けるなんて虚言を吐いたやつは」

「さあ? 誰でしょう」

白々しくそう言い切った。

別に相手に気を許しても、敬語は普通に使えるし、タメ口にもなる。私が両方を九条先輩に使っているのは、一応他の人と分けているというアピールのつもりなんだけど、どうにもこの人は別の意味に捉えている節がある。この人の欠点というか、最終防壁というか、兎にも角にも、その勘違いを超えない限り、この人には何も伝わらない。

……ここから九条先輩と別れるところまで数分。

ちよつとカマをかけてみるのもありかもしれない。どんな空気になつても、別れてしまえば、明日の朝にはリセットされてしまつていく。

「ところで、九条先輩は好きな人とかいるんですか？」

「あ？なんだよ、いきなり」

突然の質問に、九条先輩は眉根を寄せて、あからさまに訝しむような視線をぶつけてきた。それは仕方のない事だ。確かにあまりにも突然すぎる。

けど、私はここで引き下がらない。

「いえ。今日は私とデートしてくれましたけど、気になる異性とかはいないのかなーと。一応それでしたら、今後は誘うの控えますけど」
言つておいてなんだけど、もちろん控えるつもりは全くない。

「好きな人、ねえ。正直よくわからねえな」

「はい？」

「いや、なんつーかき。ちよつと愛とかそういうのがイマイチよくわからなくてよ」

……単純な質問のはずなのに、何故か哲学的な答えが返ってきた。

あ、あれー？別にそういうものかわからないってどういう事？
なあ。愛がどういうものかわからないってどういう事？

と、言いたいところだけど、それはわからなくはない。私も大体九条先輩と似たような感じだったわけだし。寧ろ、九条先輩よりも酷かったかもしれない。

「簡単に考えていいんですよ。例えば、この人といると気が楽だなあとか、楽しいなあとか。他の人といるときと少し違って、その人だけは特別な感じ、みたいな」

「特別な感じ……成る程な。それなら、一人心当たりがある」

「そうですか。では、どうぞ」

やっぱりいるのか、なんて思いながら投げかけた質問に、九条先輩はただ一言。

「お前かな」

こちらに指を差して、答えた。

「……………はい?」

「いや、だからお前」

二度言われて、ようやく自分という事を理解した。喜びかけて、そこではたと気づく。

多分この人。私の伝えたかった特別と全然違う意味に解釈してる。

そう思うと、一瞬で冷静になれた。ああ、やっぱり九条先輩は九条先輩だなあ。

「はいはい、わかってますよー。あれですよ?特別手のかかる後輩だー、とか言いたいんですけどよね」

「まあ、それもあるがな」

「?」

「お前といると疲れる分には疲れるが確かに楽しい。全然気兼ねなくて済むし、俺の交友関係を女子の中で絞るなら、まあ一番お前という方がいいな。肩凝らねえし。だから総合的に見ると、その特別な感じに当てはまるのはお前だ。雪ノ下」

「……………」

全然勘違いしてなかった。

この人は、勘違いしなかった上で、正しく理解した上で、この人は真顔で、なんでもないように、涼しい顔をして、こんな事を言ってるんだ……………!

かああ、と顔が熱くなるのが自分でもよくわかる。面と向かって、裏表なくこんな事を言ってくる人だとは思っていなかった。

変な空気にならないのはこの人がこんな風だからだけど、その分、言われている私の方は恥ずかしさが尋常じゃない。

「どうした?雪ノ下?顔赤いが、なんかマズイこと言ったか?」

言いました。とんでもないことを。

そう言いたかったけど、それはそれで負けた気がするので、顔を伏せて頭を横に振った。

ていうか、なんでこの人涼しい顔してるの?この人、本当にどんなメンタルしてるの?

「それならいいけどな。だから、ある程度自重してくれりや、こういうのも全然良いぜ。まあ、お前にその特別なやつがいなけりやだけだな」

くしゃくしゃとぶつきらぼうな手つきが、私の頭を撫でる。

こんなことをしてくるのもこの人だけだ。でも、これはあんまり嬉しくない。相手の方が年上だからか、なんだか妹扱いされているような気がする。

けど、こうやって頭を撫でてくれるのは、それなりに私に気を許してくれてるんだと考えると嬉しいような。なんとも言えない。

少しの間、なされるがままになってみると、九条先輩の手が頭から離れ、そろそろ別れるところまで来たと気付いた。

「……また明日、ですな」

「おう。じゃあな」

そう言って、いつものように私達は別れる。

こうして別れるのも随分と慣れたものだ。お母さんの反対を押し切って、わざわざ一人暮らしを始めてから、ずっとこうやって朝誰よりも早くに九条先輩に会って、一番最後に別れる。

いつも私が他愛ない話をして、それを九条先輩が聞く。

無言になるときは基本ない。あるとすれば、決まってあの人が私の予想外の返答をしてくるときだけだ。

……そういえば、以前バレンタインの時も似たようなやり取りをしたことがあったっけ。

あのときは考えに考えた末に『面倒くさい後輩』と言われたのを覚えてる。それから少しだけ時間が経ったけど、あの人の中で私の存在は変わっているのだろうか。

振り返ってみても、あの人の背中が見えるだけで答えは返ってこない。ここでまた後ろから抱きついて、その答えを聞けば、この悩みは解消されるのだろうか。それともまた変に勘違いされるだけなのだろうか。

……それさえもわからない。

悩みは悩みを伝播させるだけで、結局行動を起こしても起こさなく

ても、ループしていくだけ。

後にも先にも、きつとこんな簡単なことに悩み続けるのは今だけで、こんな事をさせるのもあの人以外にいないんだろう。
全クー。

「……………優しくないなあ、先輩は」